

平成18年度
神戸市埋蔵文化財年報



2009

神戸市教育委員会

平成18年度
神戸市埋蔵文化財年報

2008

神戸市教育委員会

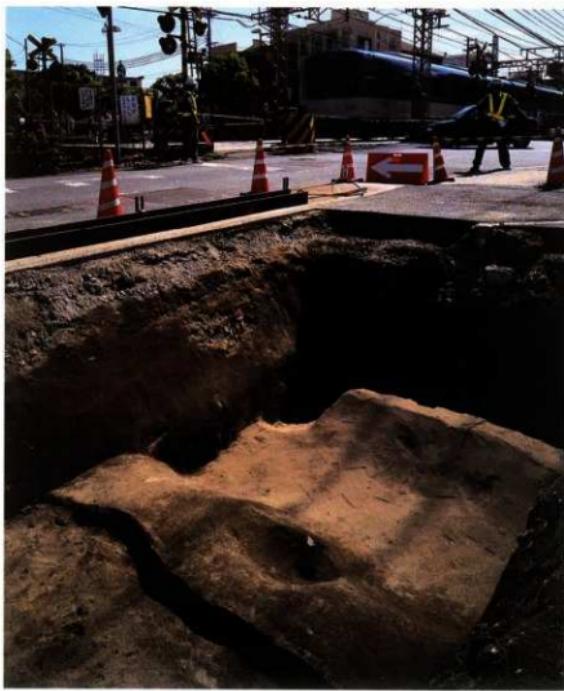


fig. 1 北青木遺跡銅鐸出土全景



fig. 2 北青木遺跡銅鐸出土狀況



fig. 3 北齊木銅鐸 A面



fig. 4 北齊木銅鐸側面



fig. 5 北齊木銅鐸 B面



fig. 6 北齊木銅鐸側面



fig. 7 御影郷古酒蔵群第4次調査区

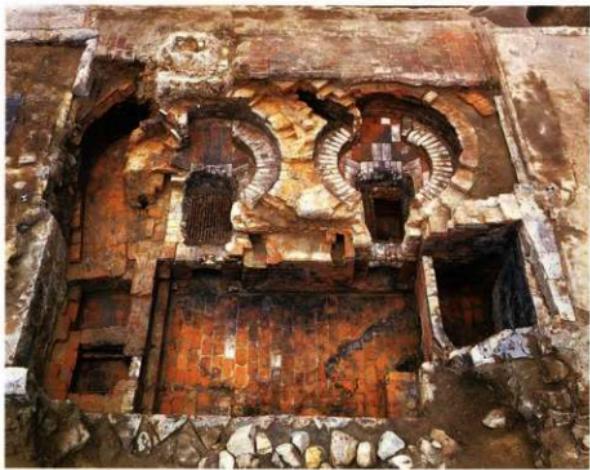


fig. 8 西郷古酒蔵群第5次調査 金場1



fig. 9 住吉宮町遺跡第42次調査 古墳葺石



fig. 10 長田野田遺跡第3次-2-1区調査 SE01

序

神戸市では、開発に伴い消滅してしまう遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を、これまでに数多く実施してきました。人類共通の記憶を取り戻す作業として発掘調査を行い、知り得たことを市民に伝え、将来に伝えるために収蔵しています。失われた歴史の断片は、発掘調査の張り合わせにより、解明されております。そのため、小さな開発であろうとも発掘調査を行う必要があります。これらの小さな発掘調査も、大きな成果につながるものと考えております。

近年、震災復興に伴う大規模調査が減り、規模の小さな開発が多くなる傾向にあります。本年報に掲載いたしました発掘調査の概要は、平成18年度に神戸市教育委員会が実施したすべての調査成果を、市民の皆様に還元すべく作成いたしました。この冊子から、地下に刻まれた郷土の歴史に興味を抱き、埋蔵文化財への理解を深めていただくことができれば幸いです。

最後に、発掘調査および本年報を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成18年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関する発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

檀上重光	前 神戸女子短期大学教授
工楽普通	大阪府立狭山池博物館館長
和田晴吾	立命館人学文学部教授

教育委員会事務局

教　育　長	小川雄三
社会教育部長	大谷幸正
参事（文化財課長事務取扱）	柏木一孝
主幹（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	丸山潔
事務担当学芸員	谷正俊　佐伯二郎
	井尻格　関野豊
埋蔵文化財調査係長	丹治康明
文化・財課主任	安田滋
事務担当学芸員	前田佳久　阿部敬生
調査担当学芸員	黒田恭正　須藤宏　富山直人
	内藤俊哉　橋詰清孝　浅谷誠吾
	石島三和　阿部功　中村大介
	中谷正　平田朋子
主幹（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	渡辺仲行
	西岡誠司　池田毅　川上厚志

神戸市体育協会

会　　長	家治川 豊
副会長（専務理事事務取扱）	水田祐次
常務理事	碩弘四郎
総務課長	横関勇
総務課主任（兼務）	山本雅和
調査担当学芸員	東吉代秀　斎木巖　藤井太郎

2. 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。調査範囲が広域な遺跡や目標となるものが入らない地点の遺跡の位置図については、キャプションに縮尺を表記している。

40頁のfig. 57は、明治18年の仮製陸測図2万分の1を1万分の1に拡大使用した。

3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、1. 平成18年度事業の概要1～6については千種 浩が執筆し、1-7については渡辺伸行が執筆した。また、平成18年度神戸市埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図と調査地点位置図については丸山 潔が作成した。編集については、千種の指導のもとに川上厚志が行った。

4. 種図写真の撮影、遺構図のトレースは、各調査担当者が行った。

5. 卷頭カラー1～6は、丸山が撮影を行い、7～10については各調査担当者が撮影を行った。

6. 表紙写真是北脇木遺跡第5次調査（本文23頁）出土の銅鐸で、撮影は丸山が行った。裏表紙写真是御藏遺跡第59次調査（本文142頁）出土の人形土製品である。撮影は牛嶋氏の指導の下、杉本氏（西大寺フォト）が行った。

7. 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。

目 次

序 例言

I. 平成18年度 事業の概要	1	日下部遺跡(駅舎改修)	121
平成18年度 埋蔵文化財発掘調査 対	9	日下部遺跡(共同住宅)	122
平成18年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図	13	22. 中道跡 第32次調査	123
		第33次調査	124
		第34次調査	125
		第35次調査	126
		第36次調査	127
		第37次調査	131
II. 平成18年度の発掘調査		23. 野瀬遺跡 第6次調査	133
1. 深江北町遺跡 第10次調査	17	24. 五幡町遺跡 第12次調査	137
第11次調査	20	25. 御蔵遺跡 第58次調査	139
2. 北古木遺跡 第5次調査	23	第59次調査	142
3. 网木北遺跡 第7次調査	33	第60次調査	147
第8次調査	34	第61次調査	149
4. 住吉川上流域 大糸場水車群確認調査	35	第62次調査	152
5. 住吉宮町遺跡 第42次調査	41	第63次調査	153
第43次調査	45	26. 水呑遺跡 第28次調査	157
第44次調査	47	27. 大橋町遺跡 第2次調査	163
6. 郡家遺跡 第81次調査	51	28. 二葉町遺跡 第20次調査	165
第82次調査	55	29. 松野遺跡 第40次調査	167
7. 御影郡古酒蔵群 第4次調査	57	30. 長田野田遺跡 第2次調査	169
8. 錦原遺跡 第25次調査	61	第3次調査	171
9. 郡賀遺跡 第19次調査	63	31. 戎町遺跡 第65次調査	181
10. 西郷古酒蔵群/大石東遺跡 第4次調査	65	32. 大町町遺跡 第13次調査	183
西郷古酒蔵群 第5次調査	67	33. 太山寺遺跡	187
11. 西求女塚古墳 第16次調査	69	34. 伊川谷町潤和 所在確認調査	191
12. 岩原北町遺跡 第2次調査	71	35. 新方遺跡 第46次調査	193
13. U巣遺跡 第29次調査	75	36. 嘉町遺跡 第1次調査	195
14. 雲井遺跡 第24次調査	77	37. 今津遺跡 第18次調査	197
第25次調査	78	38. 高津橋岡遺跡 第8次調査	199
第26次調査	82	39. 出合遺跡 第35次調査	201
15. 花隈城跡 第3次調査	83	第36次調査	210
第4次調査	86	40. 玉津川中遺跡 第32次調査	211
16. 花隈城向城跡 第1次調査	87	41. 日輪寺遺跡 第9次調査	213
17. 元町遺跡 第5次調査	89	42. 福中城跡 第3次調査	215
18. 桜・荒田町遺跡 第38次調査	91		
19. 上沢遺跡 第53次調査	97		
第54次調査	101		
20. 兵庫津遺跡 第40次調査	105		
第41次調査	107		
第42次調査	110		
第43次調査	112		
第44次調査	113		
21. 日下部遺跡(雨水幹線)	119		
		III. 平成18年度の遺物整理・保存科学調査	
		1. 生田遺跡 第4次調査の遺物整理	219
		2. 保存科学調査・作業の概要	237

挿図目次

fig. 1	北青木遺跡銅鐸出土全貌(巻頭カラー)		fig. 46	八幡場・平場1平面図	36
fig. 2	北百木遺跡銅鐸出土状況(巻頭カラー)		fig. 47	平場1 滾盞検出状況(写真)	37
fig. 3	北青木銅鐸A面(巻頭カラー)		fig. 48	平場1 滾盞背後の石垣(写真)	37
fig. 4	北青木銅鐸側面(巻頭カラー)		fig. 49	平場1 滾盞内部(写真)	37
fig. 5	北青木銅鐸B面(巻頭カラー)		fig. 50	平場1 滾盞南側暗渠排水口(写真)	37
fig. 6	北青木銅鐸側面(巻頭カラー)		fig. 51	平場2 滾盞検出状況(写真)	37
fig. 7	御影郷古酒蔵群第4次調査区(巻頭カラー)		fig. 52	滾盞背後の石垣(写真)	37
fig. 8	西御郷古酒蔵群第5次調査 釜塁1(巻頭カラー)		fig. 53	八幡場・平場2平面図	38
fig. 9	住吉町遺跡第42次調査 墓地實地(巻頭カラー)		fig. 54	平場3 滾盞検出状況(写真)	38
fig. 10	長田野遺跡第3次 - 2 - 1 区調査 SED1(巻頭カラー)		fig. 55	平場3 滾盞背後の石垣(写真)	38
fig. 11	夏の企画展「神戸考古学BEST50」(写真)	8	fig. 56	八幡場・平場3平面図	39
fig. 12	山張学校講座:「上書き作り(写真)	8	fig. 57	明治18年地形図	40
fig. 13	親子で体験考古学講座:「桶割り(写真)	8	fig. 58	住吉町遺跡調査位置図	41
fig. 14	大歳山まつり(写真)	8	fig. 59	古墳西周溝断面図(写真)	42
fig. 15	冬の企画展「昔のくらし・昭和のくらし」(写真)	8	fig. 60	第1遺構面全景(写真)	42
fig. 16	その道の達人に学ぶ「堅穴住居を作る」(写真)	8	fig. 61	第1遺構面平面図	43
fig. 17	平成18年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図	13	fig. 62	出土遺物実測図	43
fig. 18	調査地点位置図(1)・(2)	14	fig. 63	第2遺構面平面図	44
fig. 19	調査地点位置図(3)・(4)	15	fig. 64	土層断面図	45
fig. 20	調査地点位置図(5)・(6)	16	fig. 65	第1遺構面平面図	45
fig. 21	深江北町遺跡調査位置図	17	fig. 66	第2遺構面平面図	46
fig. 22	土層断面図	18	fig. 67	出土遺物実測図	46
fig. 23	I区遺構面平面図	18	fig. 68	土層断面図	47
fig. 24	II区遺構面平面図	19	fig. 69	1号培塿検出状況(写真)	48
fig. 25	III区遺構面平面図	19	fig. 70	2号培塿検出状況(写真)	48
fig. 26	上層断面図	20	fig. 71	第1遺構面平面図・断面図	49
fig. 27	第1・2遺構面平面図	21	fig. 72	第2遺構面平面図	50
fig. 28	出土遺物実測図	22	fig. 73	郡家遺跡調査位置図	51
fig. 29	北青木遺跡調査位置図	23	fig. 74	土層断面図	52
fig. 30	土層断面図	24	fig. 75	S K18平面図・断面図	52
fig. 31	S K10銅鐸出土状況平面図	24	fig. 76	第1遺構面平面図	53
fig. 32	S K10銅鐸出土状況(写真)	24	fig. 77	第1遺構面全景(写真)	53
fig. 33	北青木銅鐸実測図	25	fig. 78	第2遺構面全景(写真)	53
fig. 34	1~3区遺構面平面図	26	fig. 79	第2遺構面平面図	54
fig. 35	北青木遺跡第3次調査出土舌状銅製品実測図	28	fig. 80	堅穴住居平面図・断面図	55
fig. 36	北青木銅鐸底部内面(写真)	28	fig. 81	調査区全景(写真)	55
fig. 37	北青木銅鐸縦部上面(写真)	28	fig. 82	堅穴住居完掘状況(写真)	55
fig. 38	S T 02出土土器実測図	29	fig. 83	遺構面平面図	56
fig. 39	山上遺物実測図1	30	fig. 84	山上遺物実測図	56
fig. 40	出土遺物実測図2	31	fig. 85	御影郷古酒蔵群調査位置図	57
fig. 41	山上遺物実測図3	32	fig. 86	第1期酒蔵平面図	58
fig. 42	岡本北遺跡調査位置図	33	fig. 87	第2期酒蔵平面図	59
fig. 43	調査区配置図	33	fig. 88	第3期酒蔵平面図	59
fig. 44	遺構面平面図・土層断面図	34	fig. 89	第3期酒蔵全景(写真)	60
fig. 45	住吉川上流域水車群調査位置図	35	fig. 90	第3期槽場検出状況(写真)	60

挿図目次

fig. 91 篠原遺跡調査地位図	61	fig. 136 調査区配図	89
fig. 92 土層断面図	61	fig. 137 十層断面図	90
fig. 93 遺構面平面図	62	fig. 138 桜・荒出町遺跡調査地位図	91
fig. 94 山上遺物実測図	62	fig. 139 十層断面図	91
fig. 95 都賀遺跡調査地位図	63	fig. 140 遺構面平面図	92
fig. 96 上層断面図	64	fig. 141 1 トレンチ全景(写真)	93
fig. 97 遺構面平面図	64	fig. 142 3 トレンチ全景(写真)	93
fig. 98 西郷古酒器群・人石東遺跡調査地位図	65	fig. 143 SK10出土七輪文土器実測図	94
fig. 99 近世及び近代遺構面平面図	66	fig. 144 SK10山上石器実測図	95
fig. 100 奈良時代及び平安時代遺構面平面図	66	fig. 145 2 トレンチ全景(写真)	95
fig. 101 近世水路(写真)	67	fig. 146 SK10土層断面(写真)	95
fig. 102 近世水路(写真)	67	fig. 147 1 洞遺跡調査地位図	97
fig. 103 石垣A平面図・立面図	68	fig. 148 十層断面図	98
fig. 104 石垣B平面図・立面図	68	fig. 149 第1遺構面平面図	98
fig. 105 西求女塚古墳調査地位図	69	fig. 150 第2遺構面平面図	100
fig. 106 遺構面平面図・断面図	70	fig. 151 土層断面図	101
fig. 107 岩原北町遺跡調査地位図	71	fig. 152 SD 0 1 桁列検出状況(写真)	102
fig. 108 土層断面図	72	fig. 153 遺構面平面図	103
fig. 109 出上遺物実測図	72	fig. 154 兵庫津遺跡調査地位図	105
fig. 110 遺構面平面図・SR-1断面図	73	fig. 155 上層断面図	106
fig. 111 SR-1断面(写真)	74	fig. 156 第1遺構面平面図	106
fig. 112 遺構面全景(写真)	74	fig. 157 SE 0 1 平面図・断面図	107
fig. 113 日暮遺跡調査地位図	75	fig. 158 調査区配図	108
fig. 114 調査区配図	75	fig. 159 土層断面図	109
fig. 115 東調査区遺構面平面図	76	fig. 160 七層断面図	110
fig. 116 西調査区遺構面平面図	76	fig. 161 第1～7 遺構面平面図	111
fig. 117 穂井遺跡調査地位図	77	fig. 162 遺構面平面図・断面図	112
fig. 118 遺構面平面図	77	fig. 163 第1 遺構面平面図	113
fig. 119 第1遺構面平面図	78	fig. 164 第2 遺構面平面図	114
fig. 120 第2遺構面平面図	79	fig. 165 第3 遺構面平面図	116
fig. 121 繩文時代遺構面全体図	80	fig. 166 第4 遺構面平面図	117
fig. 122 繩文時代集石土坑4平面図・断面図	80	fig. 167 第5 遺構面平面図	118
fig. 123 繩文土器実測図	81	fig. 168 日下部遺跡調査地位図	119
fig. 124 十層断面図	82	fig. 169 遺構面平面図・断面図	120
fig. 125 遺構面平面図	82	fig. 170 上層断面図	121
fig. 126 花隈城跡調査地位図	83	fig. 171 遺構面平面図	121
fig. 127 東半部遺構面平面図	84	fig. 172 遺構面平面図・断面図	122
fig. 128 西半部遺構面平面図	84	fig. 173 中遺跡調査地位図	123
fig. 129 出土瓦実測図	85	fig. 174 遺構面平面図・断面図	124
fig. 130 上層断面図	86	fig. 175 遺構面平面図	124
fig. 131 遺構面平面図	86	fig. 176 遺構面平面図	125
fig. 132 花隈城向城跡調査地位図	87	fig. 177 出土遺物実測図	125
fig. 133 遺構面平面図	88	fig. 178 遺構面平面図・断面図	126
fig. 134 SD 0 1 断面図	88	fig. 179 遺構面平面図・断面図	126
fig. 135 元町遺跡調査地位図	89	fig. 180 遺構面平面図	127

挿 図 目 次

fig. 181 遺構面全景(写真)	127
fig. 182 S B 0 2 全景(写真)	127
fig. 183 S B 0 2 遺構平面図・断面図	128
fig. 184 第31~34・36調査遺構平面合成図	129
fig. 185 出土遺物実測図 1	130
fig. 186 山土遺物実測図 2	131
fig. 187 遺構面平而図・断面図・S E 0 1 断面図	132
fig. 188 野瀬遺跡調査地位置図	133
fig. 189 東半部遺構面平面図	134
fig. 190 S X 0 1 遺構面平面図・断面図	135
fig. 191 五番町遺跡調査地位置図	137
fig. 192 上層断面図	137
fig. 193 南半部遺構面平而図	138
fig. 194 御蔵遺跡調査地位置図	139
fig. 195 土層断面図	140
fig. 196 遺構面平而図	141
fig. 197 土層断面図	142
fig. 198 第1~4 遺構面平面図	143
fig. 199 第5・7 遺構面平而図	144
fig. 200 和同御塚の土痕跡(写真)	144
fig. 201 出土遺物実測図 1	145
fig. 202 出土遺物実測図 2	146
fig. 203 土層断面図	147
fig. 204 遺構面平而図	148
fig. 205 土層断面図	149
fig. 206 第1 遺構面平面図	150
fig. 207 第2 遺構面平面図	151
fig. 208 第3 遺構面平面図	151
fig. 209 土層断面図	152
fig. 210 遺構面平而図	153
fig. 211 土層断面図	154
fig. 212 第1 遺構面平面図	154
fig. 213 第3 遺構面平而図	156
fig. 214 水笠遺跡調査地位置図	157
fig. 215 上層断面図	158
fig. 216 1区遺構面平而図	158
fig. 217 上層断面図	159
fig. 218 2区遺構面平而図	160
fig. 219 3区遺構面平面図・断面図	161
fig. 220 4区遺構面平而図・断面図	162
fig. 221 大橋町遺跡調査地位置図	163
fig. 222 遺構面平而図	164
fig. 223 二葉町遺跡調査地位置図	165
fig. 224 遺構面平而図	166
fig. 225 遺構面平而図	166
fig. 226 松野遺跡調査地位置図	167
fig. 227 土層断面図	168
fig. 228 遺構面平而図	168
fig. 229 長田野田遺跡調査地位置図	169
fig. 230 遺構面平而図・断面図	170
fig. 231 上層断面図	171
fig. 232 3次~2 2区全景(写真)	172
fig. 233 3次~2 1区全景(写真)	172
fig. 234 遺構面平而図	173
fig. 235 S E 0 1・0 2・0 3 平面図・断面図	174
fig. 236 S E 0 1 完掘状況(写真)	175
fig. 237 S E 0 1 断ち割り断面(写真)	175
fig. 238 遺構面平而図・S E 0 3出土箇所草文軒平及拓影	176
fig. 239 S E 0 3・0 4・0 5 平面図・断面図	177
fig. 240 S E 0 3・0 4・0 5 完掘状況(写真)	178
fig. 241 S T 0 1・0 2 上層礫検出状況(写真)	178
fig. 242 S T 0 1・0 2 遺構面平而図	178
fig. 243 第2・3次調査区合成図	180
fig. 244 戸町遺跡調査地位置図	181
fig. 245 土層断面図	181
fig. 246 遺構面平而図	182
fig. 247 大町田遺跡調査地位置図	183
fig. 248 土層断面図	183
fig. 249 第1 遺構面滑り痕(写真)	184
fig. 250 第1 遺構面平而図	184
fig. 251 第2 遺構面 S D 2 0 1 (写真)	185
fig. 252 第2 遺構面平而図	185
fig. 253 太山寺遺跡調査地位置図	187
fig. 254 遺構面平而図・断面図	188
fig. 255 S K 0 1 遺構面平而図・断面図	189
fig. 256 調査区全景(写真)	190
fig. 257 潤和所在確認調査地位置図	191
fig. 258 レンチ配置図	192
fig. 259 上層断面図	192
fig. 260 新方遺跡調査地位置図	193
fig. 261 遺構面平而図・断面図	194
fig. 262 聰町遺跡調査地位置図	195
fig. 263 遺構面平而図・断面図	196
fig. 264 出土遺物実測図	196
fig. 265 今津遺跡調査地位置図	197
fig. 266 第1 遺構面平而図	198
fig. 267 第2 遺構面平而図	198
fig. 268 高津橋岡遺跡調査地位置図	199
fig. 269 土層断面図	199
fig. 270 遺構面平而図	200

挿図目次

- | | | | |
|-----------------------------|-----|----------------------------------|-----|
| fig. 271 出合遺跡第35次トレンチ配置図 | 201 | fig. 303 土山遺物実測図 | 222 |
| fig. 272 第1造構面平面図 | 202 | fig. 304 木材(1) | 225 |
| fig. 273 第2造構面平面図 | 202 | fig. 305 木材(2) | 226 |
| fig. 274 土層断面図 | 203 | fig. 306 木材(3) | 227 |
| fig. 275 土層断面図 | 204 | fig. 307 木材(4) | 228 |
| fig. 276 第1造構面平面図 | 204 | fig. 308 造構切り取り作業(北青木遺跡)(写真) | 237 |
| fig. 277 第2造構面平面図 | 204 | fig. 309 発泡ウレタンフォームによる枠包(写真) | 237 |
| fig. 278 第2造構面平面図 | 205 | fig. 310 吊り上げ作業(写真) | 237 |
| fig. 279 造構面平面図・断面図 | 205 | fig. 311 室内での詳細調査(写真) | 237 |
| fig. 280 造構面平面図・断面図 | 206 | fig. 312 北青木遺跡埋納造構表面土層剥ぎ取り作業(写真) | 238 |
| fig. 281 造構面平面図・断面図 | 207 | fig. 313 F R Pによる裏打ち作業(写真) | 238 |
| fig. 282 造構面平面図 | 208 | fig. 314 土壌強化剤(OH100)散布作業(写真) | 238 |
| fig. 283 土層断面図 | 209 | fig. 315 埋納造構立体剥ぎ取り完成状況(写真) | 238 |
| fig. 284 出合遺跡第36次調査地位置図 | 210 | fig. 316 X線透視画像(北青木銅鐸)(写真) | 239 |
| fig. 285 造構面平面図 | 210 | fig. 317 3 Dイメージ画像(北青木銅鐸)(写真) | 239 |
| fig. 286 玉津山中遺跡調査地位置図 | 211 | fig. 318 鉄製品保存処理前(八幡神社 8号墳)(写真) | 240 |
| fig. 287 造構面平面図 | 212 | fig. 319 鉄製品保存処理後(八幡神社 8号墳)(写真) | 240 |
| fig. 288 日輪寺遺跡調査地位置図 | 213 | fig. 320 耳環1(写真) | 241 |
| fig. 289 造構面平面図 | 214 | fig. 321 耳環1 端部処理状況(写真) | 241 |
| fig. 290 福中城跡調査地位図 | 215 | fig. 322 耳環1 環体の蛍光X線スペクトル(1-1) | 241 |
| fig. 291 土層断面図 | 216 | fig. 323 耳環1 箔の蛍光X線スペクトル(1-2) | 241 |
| fig. 292 造構面平面図 | 216 | fig. 324 耳環2(写真) | 241 |
| fig. 293 S D 0 2 完掘状況(写真) | 217 | fig. 325 耳環2 表面状況(写真) | 241 |
| fig. 294 S E 0 2 造構面平面図・断面図 | 217 | fig. 326 耳環2 環体の蛍光X線スペクトル(2-1) | 241 |
| fig. 295 S E 0 2 井戸検出状況(写真) | 217 | fig. 327 耳環2 箔の蛍光X線スペクトル(2-2) | 241 |
| fig. 296 S E 0 2 最下段断面(写真) | 217 | fig. 328 耳環3(写真) | 242 |
| fig. 297 出土遺物実測図 | 218 | fig. 329 耳環3 表面残存状況(写真) | 242 |
| fig. 298 生田遺跡調査地位置図 | 219 | fig. 330 耳環3 環体の蛍光X線スペクトル(3-1) | 242 |
| fig. 299 出土遺物実測図 | 220 | fig. 331 耳環3 金色部分の蛍光X線スペクトル(3-2) | 242 |
| fig. 300 奈良時代～中世の主な造構 | 220 | fig. 332 耳環4(写真) | 242 |
| fig. 301 S E 3 2 0 1 出土木製品 | 221 | fig. 333 耳環4 白色粒子残存状況(写真) | 242 |
| fig. 302 古墳時代後期の主な造構 | 222 | fig. 334 耳環4 環体の蛍光X線スペクトル(4-1) | 242 |
| | | fig. 335 耳環4 白色部分の蛍光X線スペクトル(4-2) | 242 |

表目次

表 1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧	1	表 15 平成18年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧	12
表 2 発掘調査面積	1	表 16 出合遺跡トレンチ面積・面積表	201
表 3 発掘調査面積別件数	1	表 17 木製品・建築部材の樹種同定結果	223
表 4 企画展示一覧	4	表 18 炭化材の樹種同定結果	224
表 5 親子で体験考古学講座	5	表 19 木製品・建築部材の器種別種類構成	224
表 6 考古学を学ぶ	5	表 20 石材鑑定結果(1)	230
表 7 出張講座	6	表 21 石材鑑定結果(2)	231
表 8 学校出張講座	6	表 22 石材鑑定結果(3)	232
表 9 学校出張展示	7	表 23 出土石器の石材組成	232
表 10 地域展示	7	表 24 遺物別石材組成	233
表 11 地域行事	8	表 25 平成18年度出土金属製品	243
表 12 平成18年度埋蔵文化財発掘調査一覧(1)	9	表 26 平成18年度出土木製品	243
表 13 平成18年度埋蔵文化財発掘調査一覧(2)	10	表 27 平成18年度自然科学分析委託	243
表 14 平成18年度埋蔵文化財発掘調査一覧(3)	11		

I. 平成18年度 事業の概要

1. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、開発面積の大小に関わらず、文化財保護法に基づく届出・通知（文化財保護法第93条・第94条）が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を指示している。

平成11年度以降は、建築確認申請に伴う事前届出制度（『神戸市民の住環境をまもりそだてる条例』）における事前届出書の閲覧を実施し、埋蔵文化財発掘届出書の提出および土木工事等についての文化財の取り扱いの指導を徹底してきた。

平成18年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、786件（前年度711件）であり、昨年度と比較して約10%の増となってている。このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が749件であった。

また、開発行為事前審査188件（前年度135件）、試掘調査依頼245件（前年度231件）ともに件数では昨年度に比して微増傾向が認められる。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届（保護法93・94条関係）	786件
	i 民間の事業に伴う発掘届（93条）	749件
	ii 公共の事業に伴う発掘通知（94条）	37件
	iii 発掘届・発見通知（92条）	0件
2	発掘調査の報告（99条）	62件
3	開発行為事前審査等各種申請	188件
4	公認調査依頼書（埋蔵文化財所在の有無の確認依頼・調査件数）	175件
5	試掘調査（依頼件数）	245件
6	発掘調査（大規模確認調査も含む）	76件
7	i 民間事業に伴う発掘調査	62件
	ii 公共事業に伴う発掘調査	12件
	iii 園場整備事業に伴う発掘調査	2件
8	工事立会	72件
	整理作業（復興調査整理作業を含む）	7件

表2 発掘調査面積

	民間関連事業	公共関連事業	合計
調査面積	14,183	8,222	22,405
延べ調査面積	25,750	8,757	34,507

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	調査面積	件数
100m ²	26件	1,001～2,000m ²	5件
101～300m ²	24件	2,001～5,000m ²	2件
301～500m ²	9件	5,001m ² 以上	1件
501～1,000m ²	6件	合 計	73件

2. 刊行物一覧

平成18年度に刊行した埋蔵文化財関係の刊行物は下記のとおりの4冊である。

『平成16年度 神戸市埋蔵文化財年報』	価額 1,500円
『生田遺跡 第4次調査発掘調査概要』	価額 500円
『西郷古酒蔵群/大石東遺跡 第4次調査 発掘調査報告書』	非売品
『神戸市埋蔵文化財分布図』	価額 500円

3. 発掘調査事業 平成18年度に実施した発掘調査事業は73件で、それに要した経費（出土品整理・保存処理を含む）の総額は、352,303千円であった。これらの内訳は、

開発事業に伴う本発掘調査	73件	331,654千円
試掘・調査	245件	20,649千円

国庫補助事業 文化財保護法の規程と国の補助事業の採択基準により採択を受けたものについて、調査事業と保存処理事業を実施している。埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業は、事業費76,500千円であった。

このうち、脆弱遺物の恒久的な保存を目的として白山瓢塚古墳の金属器等、八幡神社古墳群8号墳出土の鉄製品、青銅製品や兵庫津遺跡第21次調査出土の銅製品、鉄製品、端谷城跡第5次調査出土の鉄製胴丸などの保存処理を実施した。

また、復興調査整理として、平成10年度に調査を実施した兵庫津遺跡や平成16年度に調査を実施した兵庫松本遺跡、石峯寺跡の出土遺物の整理を行った。

市内発掘調査 発掘調査件数は昨年度（71件）と比較すると、引き続き微増傾向にある。全般的な傾向からみると、景気の回復の兆しを受けて、中小規模の民間開発の活発化が影響しているものと考えられる。

発掘調査面積は22405m²（延べ34507m²）で、このうち民間関連事業によるものが14183m²（延べ25750m²）と約割強を占めている。面積別でみると、300m²以下の件数が50件と7割弱を占めており、小規模の面積の調査が増加している傾向が指摘できる。

震災復興土地区画整理事業地内の区画街路に伴う調査は完結してきており、個人住宅・共同住宅等に伴う調査が引き続き実施されている。また、市街地再開発事業に伴う調査は、昨年度から引き続き、二葉町遺跡や大橋町遺跡などの調査が実施され、奈良時代後半～平安時代の水溜遺構や平安末～鎌倉時代の掘立柱建物などが確認された。

また、六甲山系グリーンベルト整備事業に先立って、住吉川上流域水車群の八幡場の水車確認調査も実施した。滝壺・暗渠などの施設が確認できたが、保存目的の調査であったため、完掘には至らず遺物の出土はなかった。石積みなどの特徴は少なくとも近代までは遡るものと考えられ、今後の調査によって水車群による生産構造が明らかにできるものと考えられる。

さらに、市内の各地では個人住宅を含む民間開発事業に伴い、さまざまな遺跡の発掘調査を実施した。

4. 史跡名勝天然記念物

国史跡の追加指定

平成18年1月25日付けで文化庁長官あて申請を行った、国史跡五色塚（千壺）古墳小壺古墳の追加指定について、平成18年5月19日付けで文化審議会から答申を受け、平成18年7月28日付け官報号外第174号 文部科学省告示第118号で史跡の追加指定を受けた（指定面積 45,778.81m²）

国史跡の指定

明石藩舞子台場跡は、幕末に外国からの脅威に備え、対岸の淡路市徳島藩松帆台場・

松帆塗と連携して、明石海峡への外國船の進入を挾撃するために、舞子海岸に築造された半星形棱堡式の台場跡である。勝麟太郎（海舟）の設計で、幕府の命を受けた明石藩によって築造された。

平成15・16年度に実施した4回にわたる発掘調査の結果、両翼70m、高さ約6mに及ぶ半星形棱堡式の台場跡の石垣で、現在残っているものは本末の台場跡の下層部分であることも判った。文献や古写真によると、花崗岩による總石造であったことも窺え、国内では類例のない台場跡である。

平成18年11月17日付けで文化審議会から答申を受けた明石藩舞子台場跡は、平成19年2月6日付け官報号外第22号 文部科学省告示第5号で史跡の指定を受けた（指定面積4,353.96m²）。

国指定記念物（名勝）の指定

再度公園は、昭和12年（1937）に開設された森林・人造池を中心とする都市公園である。幕末の開港以来、市街地の拡大に伴って建築資材や薪炭材の需要が高まり、六甲山は樹木の乱伐によって次第に荒廃していった。そのため、明治35年（1902）から再度山を含む約600haの山域において、石垣の造成により植林地が拓かれ、風致林を含め多様な樹種の下に緑化事業が開始された。その後、都市生活における衛生環境の改善のために上水道を確保し、土砂災害を防止することが必要となつたため、貯水池として修法ヶ原に池が整備され、現在の内度公園の祖形が形成された。

再度山を中心とする植林地は、六甲山域において最初の緑化事業が行われた記念的な意義を持ち、昭和49年（1974）開催の国際植生学会での提唱により、神戸市が「永久植生保存地」として適切な管理に努めてきた。

また、公園の北半部を占める神戸外国人墓地は、市街地に所在した2か所の外国人墓地が飽和状態となつたことから、昭和12年（1937）より新たに公園墓地として造成が開始されたものである。

都市公園としてのみならず、六甲山山域における最初の植生再生地や居留外国人の墓園としても、その公園史上の価値、芸術上または觀賞上の価値はともに高い。

平成18年11月17日付けで文化審議会から答申を受けた再度公園・再度山永久植生保存地・神戸外国人墓地は、平成19年2月6日付け官報号外第22号 文部科学省告示第6号で名勝の指定を受けた（指定面積 436,217.55m²）。

あわせて、同日付けで登録記念物「再度公園及び再度山永久植生保存地」の登録が抹消された。

県指定天然記念物

兵庫県指定文化財である灘区所在の神前の大クスについて、兵庫県の補助事業により3年計画の保存修理事業を行つてゐる。2年目にあたる平成18年度は、主枝の折損防止支柱工事及びインジェクションによる土壤改良、根系ガン対策を行つた。

市指定天然記念物

神戸市指定文化財である東灘区所在の鷺ノ森のケヤキについて、神戸市文化財保護条例に基づく補助事業として3年計画の保存修理事業を行つてゐる。2年目にあたる平成18年度は、折損・倒木防止のためのワイヤー支柱を2か所設置し、風害等に備えた。

5. 地域連携事業

淡河町自治協議会・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターとの連携事業の取り組みとして、淡河歴史セミナーを共催して行った。8月27日に(財)元興寺文化財研究所嘱託研究員 坂本亮太氏「中世の石峯寺と周辺の村々」(参加者56名)、平成19年2月25日に竹林寺本堂の解体修理中間報告をテーマに教育委員会文化財課の山口英正「発掘調査から解った竹林寺」、村井正範「解体調査から解った竹林寺」(参加者約30名)の講演がそれぞれ行われた。

神戸市文書館において、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの協力により、新修神戸市史歴史編「古代・中世」調査成果中間報告展示会「中世石峯寺の古文書と出土品」が12月2日から11日まで開催された。新たに発見された古文書や石峯寺子院の発掘調査出土品などを展示了。

6. 普及啓発

市内遺跡の発掘調査によって出土した遺物や各種記録は、すべて埋蔵文化財センターに於いて保管されており、それらを活かした普及・啓発活動の拠点となっている。平成18年度は3本の目標を設定した。①学校との連携を強化すること。②地域団体との連携を強め、地域住民に親しまれる施設とすること。③他の博物館施設との連携を強化すること。以上の目標設定の下、各事業を行った。

これらの取組みの結果、平成18年度の年間入館者数は、36,228人となり、対前年度12.6%増であった。また出張講座・出張展示・講演会など館外事業の利用者は18,642人で、全利用者合計は54,870人となり、前年度に比べ39%の増となった。

i 企画展示

展示内容	開催期間	開館日数	入館者数
こども考古学入門	4月11日～6月11日	60	11,368
神戸考古学BEST50	7月22日～9月3日	38	3,353
第5回・神戸市小学校社会科作品展 「埋蔵文化財センター賞受賞作品展」	9月23日～10月11日	8	1,916
西神ニュータウン内の遺跡II・北吉木綱 錆報	10月21日～12月10日	43	2,894
講演会：石野博信氏「弥生の戦争～そして卑弥呼は生まれたへ大阪湾地域を中心として～」	11月26日	—	83
昭和のくらし・昔のくらし	1月24日～3月11日	40	6,563
合計		189	26,177

学校教育と連携した「昭和のくらし・昔のくらし」展を新たに開催した。期間中6,563人の見学者が訪れ、冬季にも拘わらず、多数の見学者で賑わった。職員手作りの昭和の居間・台所のセットが人気を博した。

ii 講 座

学校週休2日制に伴い、平成6年度から開催している「親子で体験考古学講座」は、人気講座の一つである。特に夏休み期間中に開催する土器や勾玉を作る講座は、毎回150名前後の参加者がある。新規の講座メニューとしてはガラス玉つくりを開催した。

	月 日	講 席 名	大 人	子 供	合 計
1	5月27日	「石包」をつくろう	30	34	64
2	6月10日		12	18	30
3	7月22日	親子で『赤米作りに挑戦しよう』	6	69	75
4	10月14日		8	14	22
5	7月8日	火おこし器をつくろう	31	44	75
6	7月29日	土器・埴輪をつくろう	106	65	171
7	8月5日	勾玉をつくろう(第1回)	72	115	187
8	8月9日	上器づくり教室(三木市青山公民館)	41	23	67
9	8月19日	古代の編み方で携帯ストラップをつくろう	35	27	62
10	8月24日	アンギンストラップ教室(三木市青山公民館)	3	20	23
11	8月26日	勾玉をつくろう(第2回)	69	108	177
12	8月31日	「石包」作り(玉津南・東垂水公民館)	18	38	56
13	9月2日	勾玉づくり(星の子子ども会)	16	33	49
14	11月5日	勾玉づくり(関西国際大学)	9	0	9
15	11月12日	勾玉づくり(寝屋川市立第5小学校子供会)	5	29	34
16	11月18日	シルバーカレッジ(土器作り)	26	0	26
17	12月2日・17日	シルバーカレッジ(土器焼き)	52	0	52
18	1月11日	勾玉づくり(ボイスカウト神戸58団)	9	21	33
19	3月2日	勾玉づくり(神戸国際中学校)	4	65	69
20	3月24日	ガラス玉をつくろう	16	33	49
21	2月17日	縄文土器をつくろう	形成	8	8
22	3月3日		焼成	6	6
23	3月17日	古代のアクセサリー(勾玉づくり)	7	—	7
		合 計	592	759	1,351

iii 講演会 考古学を学ぶ

月 日	講演名	参加者数	月 日	講演名	参加者数		
1	10月28日	考古学入門	36	4	2月24日	神戸の山城と甲冑	29
2	11月25日	神戸の遺跡	36	5	3月9日	神戸の遺跡探訪	32
3	12月16日	神戸の古墳と青銅鏡	35		合 計	168	

iv 出張講座・展示

出張考古学講座・展示など館外事業は69回を数え、17年度の41回に比べ大幅に増加した。学校への出張考古学講座・展示は51校で、17年度の31校を遥かに上回った。また各地の地域行事では、埋蔵文化財センターについての紹介と地域の文化財のパネル写真を展示し、講演依頼にも積極的に対応した。また文化財保護条例制定10年を記念したNHK神戸放送局の公開セミナーにも協力した。18年度は垂水区制施行60年にあたり、それを記念して垂水区役所庁舎で、「たるみ今昔展」を開催し、丘色塚古墳山土埴輪や垂水区内の文化財のパネル展示を行った。わずか12日間の会期ではあったが、2,859人が見学に訪れた。

	月 日	出張講座・講演会	参加者数		月 日	山張講座・講演会	参加者数
1	5月26日	あじさい市民大学講演会	100	8	11月12日	神出まつり(上器焼き)	38
2	6月24日	おもしろ科学館クラブ (青少年科学館)	30	9	11月12日	キャンバススクエア(勾玉づくり)	27
3	7月26日	勾玉づくり(東垂水公民館)	31	10	11月25日	北別府講演会	50
4	7月27日	勾玉づくり(玉川南公民館)	27	11	1月25日	西神ロータリークラブ講演会	25
5	8月3日	勾玉づくり(葺合公民館)	22	12	1月28日	NHK公開セミナー講演会	180
6	9月23日	すまいの大学	50	13	2月10日	青少協西神中央支部講演会	54
7	10月15日	神出まつり(土器作り)	80	14	2月16日 3月15日	西区地域学講演会 西区地域学バースツアー	112 76
						合計	902

学校出張考古学講座

学校名	講座名	実施日	参加者数	学校名	講座名	実施日	参加者数
1 道場小学校	土器	4月17日	47	20 八多小学校	勾玉	5月19日	28
2 御藤小学校	勾玉	4月18日	22	21 兵庫大開小学校	勾玉	5月22日	116
3 向洋小学校	土器	4月19日	76	22 ひよどり台小学校	上器	5月23日	74
4 本山第三小学校	勾玉	4月21日	126	23 鹿の子台小学校	土器	5月25日	231
5 出合小学校	勾玉	4月25日	87	24 太山寺小学校	勾玉	5月26日	15
6 淡河小学校	土器	4月27日	12	25 狩場台小学校	土器	5月26日	45
7 花山小学校	土器	5月1日	82	26 摩耶小学校	貫頭衣	5月29日	63
8 星和台小学校	土器	5月1日	58	27 北五葉小学校	土器	5月30日	99
9 長坂小学校	勾玉	5月2日	180	28 西舞子小学校	勾玉	5月31日	79
10 浜山小学校	土器	5月10日	36	29 横谷小学校	勾玉	6月1日	26
11 長田南小学校	勾玉	5月11日	35	30 長田小学校	勾玉	6月2日	66
12 小部小学校	勾玉	5月12日	116	31 花谷小学校	土器	6月6日	157
13 なぎさ小学校	勾玉	5月12日	80	32 唐櫻小学校	勾玉	6月7日	95
14 春口野小学校	土器	5月15日	53	33 東須磨小学校	勾玉	6月8日	76
15 横尾小学校	勾玉	5月16日	62	34 竜が台小学校	勾玉	6月8日	44
16 板宿小学校	勾玉	5月16日	72	35 高羽小学校	土器	6月14日	143
17 澪小学校	勾玉	5月17日	46	36 好徳小学校	貫頭衣	6月20日	18
18 桂木小学校	勾玉	5月18日	146	37 箕谷小学校	勾玉	10月5日	96
19 鈴蘭台小学校	勾玉	5月18日	75			合計	2,882

出張展示

小学校を対象に、学校が所在する地域の考古遺物を展示するもので、展示に際しては、6年生を中心に行なった。

なお、さんちか花時計ギャラリーおよび西神中央駅のプレンティー広場において、埋蔵文化財センターの周知を図るための展示を実施した。

学校出張展示

学校名	展示期間	展示解説	学校名	展示期間	展示解説
1 乙木小学校	5月9日～5月16日	5月11日 130	8 長坂小学校	5月31日～6月9日	6月7日 180
2 春日野小学校	5月9日～5月16日	5月11日 53	9 長岡小学校	6月9日～6月20日	6月16日 66
3 福田小学校	5月16日～5月23日	5月22日 126	10 伊川谷小学校	6月9日～6月20日	6月15日 203
4 なぎさ小学校	5月16日～5月23日	5月18日 80	11 東須磨小学校	6月20日～6月30日	6月27日 76
5 瀧小学校	5月23日～5月31日	5月30日 46	12 行瀬小学校	6月20日～6月30日	6月29日 185
6 鹿の子台小学校	5月23日～5月31日	5月24日 231	13 南落合小学校	6月30日～7月7日	7月5日 141
7 木山第三小学校	5月31日～6月9日	6月8日 126	14 宮川小学校	11月17日～12月5日 12月1日	11月25日 61
					合計 1,704

地域展示

展示場所	展示期間	参加者数	展示場所	展示期間	参加者数
1 西区民センター	5月20日～5月24日	—	3 西神インダストリアルパーク(フェア)	8月24日	380
2 こうべまちづくり会館	8月17日～8月30日	3,913	4 垂水区役所(垂水区跡岸)	11月1日～11月12日	2,859

作品展

昨年度から神戸市小学校教育研究会社会科部との連携事業として、夏季休暇中の自由課題の作品から埋蔵文化財センター賞を選定し、埋蔵文化財センターにおいて展示する「埋蔵文化財センター賞受賞作品展」を開催した。会期中は、作品作成者の小学生とその家族でにぎわった。

▼大歳山

11月の文化財保護強調月間に、昭和49年度から実施している大歳山遺跡の復元整穴建物公開の発展した催しで、現在は「おおとし山まつり」として定着している。大歳山遺跡公園において、周辺住民を対象に土器・勾玉作りや土器製塙などを行うもので、この事業の開催にあたっては、垂水区まちづくり推進課と舞子ふれあいのまちづくり協議会の協力を得ている。

月 日	名 称	参加者数
5/20	第23回 みどりと太陽のまつり	621
7/22	第2回 平野町明石川ふれあいまつり	1,000
9/9	第13回 檜谷川まつり	2,500
11/4	大歳山まつり	1,146
	合 計	5,267

神戸の文化財Ⅱの開催

神戸市文化財保護条例10周年を記念して、市立博物館で特別展「神戸の文化財Ⅱ－神戸市指定文化財を中心としに－」を平成19年1月20日から2月25日まで開催した。詳細は展示図録を参照下さい。



夏の企画展「神戸考古学BEST50」



出張学校講座：土器作り



親子で体験考古学講座：稲刈り



大歳山まつり



冬の企画展「昔のくらし・昭和のくらし」



その道の達人に学ぶ「豊穴住居を作る」

表5 平成18年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表(1)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査認可番号	調査面積 総面積面積	着手期間	調査内容	調査実績
1	酒井上郷遺跡 酒井城跡	東海市酒井町1丁目 ~5丁目	名古屋市教育委員会	前田生久、 弓削功	165㎡ 165㎡	18.07.07 ~ 18.07.28	半坡期を主とする層・上式・下式・落ち込みなどを確認。	下水合流管敷設
2	酒井北遺跡 酒井山城跡	東海市酒井町1丁目 ~5丁目	神戸市教育委員会	須藤宏	300㎡	18.07.05 ~ 18.07.26	平安時代の住居用窓や軒腰などの痕跡を確認。	丸山住宅 (廃止候補事業)
3	北木遺跡 北木城跡	名古屋市名西区北木 1丁目~2丁目5丁目	神戸市教育委員会	東吉武・中 八木大・中川正 久・須藤宏	455㎡	18.08.30 ~ 18.09.18	複数の住居(後奈良時代の建物)、古式・中式・後奈良時代の墓等を確認。	ガス・電気・水道
4	北木遺跡 北木城跡	名古屋市名西区北木1丁目 ~2丁目5丁目	神戸市教育委員会	東吉武・中 八木大・中川正 久・須藤宏	220㎡ 220㎡	18.08.30 ~ 18.09.18	住居の構造の違い、後奈良時代の墓等、古式・中式の墓の建立と変遷、後奈良時代の窓等を確認。	ガス・電気・水道
5	酒井北遺跡 酒井山城跡	東海市酒井町4丁目 5丁目	神戸市教育委員会	高山尚人	110㎡	18.08.10 ~ 18.08.22	丁度遺跡の位置について複数の説があるも、古式の墓地を確認し、差ししない一部を調査したところである。	高山住宅 (廃止候補事業)
6	高木北遺跡 高木城跡	東海市高木町4丁目 5丁目	名古屋市教育委員会	高山尚人	85㎡	19.09.09 ~ 19.09.15	平安~鎌倉の落ち込み、墳丘を確認。	個人住宅 (廃止候補事業)
7	佐喜川上郷城 佐喜川本山城跡	名古屋市本山町1丁目 ~4丁目	神戸市教育委員会	井川勝	240㎡ 240㎡	19.01.15 ~ 19.01.22	近世~近代の水堀小屋の輪郭確認、平場、土塁を3ヶ所を確認。	井川住宅 (廃止候補事業)
8	佐喜南城跡 佐喜南城跡	名古屋市名西区佐喜 1丁目~2丁目	名古屋市教育委員会	寺山洋人	180㎡ 360㎡	18.06.12 ~ 18.06.04	古墳復原の方針・陪塚立植物、奈良時代のヒットなどを確認。	井川住宅
9	佐喜南城跡 佐喜南城跡	名古屋市名西区佐喜 2丁目~3丁目	名古屋市教育委員会	須藤宏	60㎡ 120㎡	18.06.16 ~ 18.08.30	古式の構造、古墳復原の焼付柱を確認。	井川住宅 (廃止候補事業)
10	佐喜南城跡 佐喜南城跡	名古屋市名西区佐喜 5丁目~5丁目3丁目 5丁目4丁目	名古屋市教育委員会	寺山洋人	70㎡ 70㎡	19.03.05 ~ 19.03.39	平安時代後期の方墳2基、石垣1基、落ち込み1基を確認。	井川住宅 (廃止候補事業)
11	志村遺跡 志村城跡	東海市志村町1丁目 ~2丁目	神戸市教育委員会	河野祐	240㎡	18.06.25 ~ 18.07.04	古墳後期の大型方墳・土被・ヒット、平安時代の落ち込みなどを確認。SKCから西門町周辺500点以上。	井川住宅 (廃止候補事業)
12	志村遺跡 志村城跡	東海市志村町1丁目 ~2丁目	神戸市教育委員会	河野祐	400㎡	18.09.05 ~ 18.11.05	古墳構造の確認、古墳後期の式部作糞・側立耕種物、水良~平安の火葬を確認。	井川住宅
13	朝日御所跡 朝日御所跡	東海市朝日町1丁目 ~2丁目	神戸市教育委員会	橋本浩季	115㎡	18.09.05 ~ 18.11.30	江戸後期~近世に亘る施設の遺構を確認。	共同住宅
14	朝日御所跡 朝日御所跡	東海市朝日町1丁目 ~2丁目	神戸市教育委員会	橋本浩季	50㎡ 50㎡	18.08.07 ~ 18.08.10	基礎工事の跡跡や地盤のひびき。後生・奈良時代の土器・柱穴・壁等を確認。	個人住宅 (廃止候補事業)
15	和泉遺跡 和泉城跡	海陽町和泉5丁目105 5丁目106	神戸市教育委員会	橋本浩季	150㎡ 150㎡	19.01.09 ~ 19.03.19	後生・奈良の遺物が点在を確認。遺構確認できず。	共同住宅
16	人見遺跡 人見古墳群 人見古墳群	海陽町人見町1丁目 4丁目5丁目	神戸市教育委員会	橋本浩季	2700㎡	18.06.15 ~ 18.08.29	古式~平安の盛り塗・土被・立柱・柱・壁・瓦・瓦刀の古式水槽、瓦戸・土被・古式の古式水槽、瓦戸・土被・古式の古式水槽を確認。	高田住宅
17	内浦古墳群 内浦古墳群	内浦新町1丁目 内浦新町	神戸市教育委員会	高山尚人	28㎡	18.11.28 ~ 18.12.21	明治初期の石壇を確認。	内浦住宅
18	内浦古墳群 内浦古墳群	内浦新町1丁目 内浦新町	神戸市教育委員会	高山尚人	80㎡	19.01.10 ~ 19.01.19	骨生・土被の遺物が点在を確認。遺構確認できず。	高田住宅
19	石井北遺跡 石井北遺跡	海陽町石井町1丁目 2丁目	神戸市教育委員会	阿部知史・ 須藤宏	180㎡	18.06.19 ~ 18.07.07	古墳後期の洗浄1条と特製土器の内塙1条・上塙を確認。	共同住宅 (廃止候補事業)
20	日高遺跡 日高遺跡	内浦新町1丁目 内浦新町	神戸市教育委員会	渡篠英司	23㎡ 23㎡	18.09.04 ~ 18.09.06	第2次水道の洗浄槽。便室・土被の上塙・ヒットを確認。	共同住宅
21	富士遺跡 富士遺跡	小牧町尾島5丁目317 5丁目318	神戸市教育委員会	高山尚人	80㎡	18.10.20 ~ 18.11.10	舞台手附の青2色を確認。	個人住宅 (廃止候補事業)
22	芦井遺跡 芦井遺跡	小牧町尾島5丁目318 5丁目319	神戸市教育委員会	高山尚人	200㎡	18.12.06 ~ 18.12.07	豊臣時代(1573年)の文政期の洗浄槽・下塙は神社・寺社・大川河川、水生植物の土被・落ち込みを確認。	共同住宅 (廃止候補事業)
23	芦井遺跡 芦井遺跡	小牧町尾島5丁目318 5丁目319	神戸市教育委員会	中谷正	45㎡ 45㎡	19.01.28 ~ 19.03.30	古式時代後期の落ち込みを、萬・十式・ヒットなどを確認。	はな住宅 (廃止候補事業)
24	万葉城跡 万葉城跡	中央区万葉町3丁目2	神戸市教育委員会	山口亮正	30㎡	18.01.01 ~ 18.06.02	10世紀後半の小規模な落ち込みを確認。古墳後期の土被・土壌の火葬を確認。	共同住宅
25	丹波城跡 丹波城跡	中央区下山手町4丁目 1丁目3-17	神戸市教育委員会	山口亮正	30㎡	18.04.12 ~ 18.05.31	古式時代後期の落・落ち込みを確認。	寺田豪 (廃止候補事業)
26	丹波城跡 丹波城跡	中央区下山手町4丁目 1丁目3-17	神戸市教育委員会	山口亮正	30㎡	18.04.12 ~ 18.05.31	古式時代後期の落・落ち込みを確認。	寺田豪 (廃止候補事業)
27	丹波城跡 丹波城跡	中央区下山手町4丁目 1丁目3-17	神戸市教育委員会	山口亮正	30㎡	18.04.17 ~ 18.05.17	落・落ち込みを確認。	寺田豪 (廃止候補事業)
28	丹波城跡 丹波城跡	中央区下山手町4丁目 1丁目3-17	神戸市教育委員会	山口亮正	30㎡	18.04.17 ~ 18.05.17	落・落ち込みを確認。	寺田豪 (廃止候補事業)
29	足守遺跡 足守遺跡	中央区足守町3丁目19 3丁目19	神戸市教育委員会	高谷精英	16㎡	19.03.06 ~ 19.03.09	城郭部分のみの調査。中田から直轄の遺物出土標を確認。	共同住宅

表6 平成18年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（2）

No.	調査名	所在地	調査主体	調査担当者	調査期間	調査範囲	調査内容	保管状況
28	新・北町通 跡地発掘調査	長岡市西河原町121 2号の里、5-13の一部	新潟市教育委員会	森吉誠也	60坪 60坪	18.04.20～ 18.05.05	古墳時代の土塁、古墳後期の土塁・柱穴、縄文時代の暮ら込みなどを確認。	保存 補助申請書
29	上沼通跡 跡地発掘調査	長岡市上沼町105-18	市・市教育委員会	酒井進吾	45坪 80坪	18.06.05～ 18.06.31	弥生時代後期・古墳時代後期～奈良時代、縄文時代の土塁・柱穴などを確認。	個人所有 (国庫補助申請)
30	一ノ瀬通跡 跡地発掘調査	長岡市下沼町1-3 6、19、20、21	市・小教育委員会	森谷恭豊	200坪 200坪	18.10.10～ 18.12.25	古墳時代の堅土仕事場・土塁・柱穴・ビット跡などを確認。	共同作業
31	馬場通跡 跡地発掘調査	長岡市水沢町3丁18-1 馬場の里の周辺	西日本教育委員会	浜田裕哉	42坪 84坪	18.07.11～ 18.07.27	江戸中期の土塁、戸戸張戸～幕末の石垣跡等を確認。	個人所有 (国庫補助申請)
32	長岡通跡 跡地発掘調査	長岡市西門町10番	新潟市教育委員会	柳原洋介	40坪 40坪	18.07.14～ 18.07.24	墓地跡部分の調査。市内と吉田の遺物分布を確認。	共同作業 (国庫補助申請)
33	長岡通跡 跡地発掘調査	長岡市西門町12-12	市・市教育委員会	鈴木邦祐	445坪 260坪	18.08.28～ 18.11.28	十数～ビット跡等の中世～近世の土器の遺物群と北東方向に輪形墓跡群が見つかり、土坑を伴う瓦の埋設部を発見。	共同作業
34	長岡通跡 跡地発掘調査	長岡市東光町元子町7 1号	市・小教育委員会	酒井進吾	50坪 45坪	18.09.25～ 18.09.26	近世の石垣・落ち込み、近代以前の石垣を確認。	共同作業 (国庫補助申請)
35	長岡通跡 跡地発掘調査	長岡市本町1-5	新潟市教育委員会	山谷吉	250坪 150坪	18.10.25～ 18.12.25	堀型遺構の柱戸門のうちの1基の表面面を確認。	共同作業
36	八幡神社古墳	長岡市坂井町富山字北1 73-16、54-9、33-6、 23-5、15-2、15-1	新潟市教育委員会	石崎・森田・ 伊藤・阿部	1000m ² 1000m ²	18.01.10～ 18.04.16	昭和初期から大正時代初期を含めた過去の盗掘跡。土器・瓦・柱穴・土塁・柱穴跡等が見つかり、うら波波跡の巷筋跡などは、尚存の複数の瓦・瓦蓋等が出土。	地元公認 地元公認
37	下平塩跡	新潟市北区塩町塩	新潟市体育協会	喜多太郎	90坪 90坪	18.07.11～ 18.07.14	弥生時代後期の柱穴・土坑・落ち込みなどを確認。	個人所有
38	下平塩跡	北区江見町口三郷字 島根2-1222-4	新潟市教育委員会	阿部透	77坪 77坪	18.12.04～ 18.12.07	時期未詳の土器・柱穴・ビットを確認。	共同作業
39	下平塩跡	長岡市下平塩町2920-1 10番地、11番地、12番地 13番地、14番地、15番地	新潟市教育委員会	鈴木邦祐	270坪 270坪	18.12.20～ 19.01.11	中世の土器・瓦を確認。	個人所有 (国庫補助申請)
40	中野通 跡地発掘調査	長岡市中野町1-1 1号、2号、3号、4号、5号、6号、7号、8号、9号、10号、11号、12号、13号、14号、15号、16号、17号、18号、19号、20号、21号、22号、23号、24号、25号、26号、27号、28号、29号、30号、31号、32号、33号、34号、35号、36号、37号、38号、39号、40号、41号、42号、43号、44号、45号、46号、47号、48号、49号、50号、51号、52号、53号、54号、55号、56号、57号、58号、59号、60号、61号、62号、63号、64号、65号、66号、67号、68号、69号、70号、71号、72号、73号、74号、75号、76号、77号、78号、79号、80号、81号、82号、83号、84号、85号、86号、87号、88号、89号、90号、91号、92号、93号、94号、95号、96号、97号、98号、99号、100号、101号、102号、103号、104号、105号、106号、107号、108号、109号、110号、111号、112号、113号、114号、115号、116号、117号、118号、119号、120号、121号、122号、123号、124号、125号、126号、127号、128号、129号、130号、131号、132号、133号、134号、135号、136号、137号、138号、139号、140号、141号、142号、143号、144号、145号、146号、147号、148号、149号、150号、151号、152号、153号、154号、155号、156号、157号、158号、159号、160号、161号、162号、163号、164号、165号、166号、167号、168号、169号、170号、171号、172号、173号、174号、175号、176号、177号、178号、179号、180号、181号、182号、183号、184号、185号、186号、187号、188号、189号、190号、191号、192号、193号、194号、195号、196号、197号、198号、199号、200号、201号、202号、203号、204号、205号、206号、207号、208号、209号、210号、211号、212号、213号、214号、215号、216号、217号、218号、219号、220号、221号、222号、223号、224号、225号、226号、227号、228号、229号、230号、231号、232号、233号、234号、235号、236号、237号、238号、239号、240号、241号、242号、243号、244号、245号、246号、247号、248号、249号、250号、251号、252号、253号、254号、255号、256号、257号、258号、259号、260号、261号、262号、263号、264号、265号、266号、267号、268号、269号、270号、271号、272号、273号、274号、275号、276号、277号、278号、279号、280号、281号、282号、283号、284号、285号、286号、287号、288号、289号、290号、291号、292号、293号、294号、295号、296号、297号、298号、299号、300号、310号、320号、330号、340号、350号、360号、370号、380号、390号、400号、410号、420号、430号、440号、450号、460号、470号、480号、490号、500号、510号、520号、530号、540号、550号、560号、570号、580号、590号、600号、610号、620号、630号、640号、650号、660号、670号、680号、690号、700号、710号、720号、730号、740号、750号、760号、770号、780号、790号、800号、810号、820号、830号、840号、850号、860号、870号、880号、890号、900号、910号、920号、930号、940号、950号、960号、970号、980号、990号、1000号、1010号、1020号、1030号、1040号、1050号、1060号、1070号、1080号、1090号、1100号、1110号、1120号、1130号、1140号、1150号、1160号、1170号、1180号、1190号、1200号、1210号、1220号、1230号、1240号、1250号、1260号、1270号、1280号、1290号、1300号、1310号、1320号、1330号、1340号、1350号、1360号、1370号、1380号、1390号、1400号、1410号、1420号、1430号、1440号、1450号、1460号、1470号、1480号、1490号、1500号、1510号、1520号、1530号、1540号、1550号、1560号、1570号、1580号、1590号、1600号、1610号、1620号、1630号、1640号、1650号、1660号、1670号、1680号、1690号、1700号、1710号、1720号、1730号、1740号、1750号、1760号、1770号、1780号、1790号、1800号、1810号、1820号、1830号、1840号、1850号、1860号、1870号、1880号、1890号、1900号、1910号、1920号、1930号、1940号、1950号、1960号、1970号、1980号、1990号、2000号、2010号、2020号、2030号、2040号、2050号、2060号、2070号、2080号、2090号、2100号、2110号、2120号、2130号、2140号、2150号、2160号、2170号、2180号、2190号、2200号、2210号、2220号、2230号、2240号、2250号、2260号、2270号、2280号、2290号、2300号、2310号、2320号、2330号、2340号、2350号、2360号、2370号、2380号、2390号、2400号、2410号、2420号、2430号、2440号、2450号、2460号、2470号、2480号、2490号、2500号、2510号、2520号、2530号、2540号、2550号、2560号、2570号、2580号、2590号、2600号、2610号、2620号、2630号、2640号、2650号、2660号、2670号、2680号、2690号、2700号、2710号、2720号、2730号、2740号、2750号、2760号、2770号、2780号、2790号、2800号、2810号、2820号、2830号、2840号、2850号、2860号、2870号、2880号、2890号、2900号、2910号、2920号、2930号、2940号、2950号、2960号、2970号、2980号、2990号、3000号、3100号、3200号、3300号、3400号、3500号、3600号、3700号、3800号、3900号、4000号、4100号、4200号、4300号、4400号、4500号、4600号、4700号、4800号、4900号、5000号、5100号、5200号、5300号、5400号、5500号、5600号、5700号、5800号、5900号、6000号、6100号、6200号、6300号、6400号、6500号、6600号、6700号、6800号、6900号、7000号、7100号、7200号、7300号、7400号、7500号、7600号、7700号、7800号、7900号、8000号、8100号、8200号、8300号、8400号、8500号、8600号、8700号、8800号、8900号、9000号、9100号、9200号、9300号、9400号、9500号、9600号、9700号、9800号、9900号、10000号、10100号、10200号、10300号、10400号、10500号、10600号、10700号、10800号、10900号、11000号、11100号、11200号、11300号、11400号、11500号、11600号、11700号、11800号、11900号、12000号、12100号、12200号、12300号、12400号、12500号、12600号、12700号、12800号、12900号、13000号、13100号、13200号、13300号、13400号、13500号、13600号、13700号、13800号、13900号、14000号、14100号、14200号、14300号、14400号、14500号、14600号、14700号、14800号、14900号、15000号、15100号、15200号、15300号、15400号、15500号、15600号、15700号、15800号、15900号、16000号、16100号、16200号、16300号、16400号、16500号、16600号、16700号、16800号、16900号、17000号、17100号、17200号、17300号、17400号、17500号、17600号、17700号、17800号、17900号、18000号、18100号、18200号、18300号、18400号、18500号、18600号、18700号、18800号、18900号、19000号、19100号、19200号、19300号、19400号、19500号、19600号、19700号、19800号、19900号、20000号、20100号、20200号、20300号、20400号、20500号、20600号、20700号、20800号、20900号、21000号、21100号、21200号、21300号、21400号、21500号、21600号、21700号、21800号、21900号、22000号、22100号、22200号、22300号、22400号、22500号、22600号、22700号、22800号、22900号、23000号、23100号、23200号、23300号、23400号、23500号、23600号、23700号、23800号、23900号、24000号、24100号、24200号、24300号、24400号、24500号、24600号、24700号、24800号、24900号、25000号、25100号、25200号、25300号、25400号、25500号、25600号、25700号、25800号、25900号、26000号、26100号、26200号、26300号、26400号、26500号、26600号、26700号、26800号、26900号、27000号、27100号、27200号、27300号、27400号、27500号、27600号、27700号、27800号、27900号、28000号、28100号、28200号、28300号、28400号、28500号、28600号、28700号、28800号、28900号、29000号、29100号、29200号、29300号、29400号、29500号、29600号、29700号、29800号、29900号、30000号、31000号、32000号、33000号、34000号、35000号、36000号、37000号、38000号、39000号、40000号、41000号、42000号、43000号、44000号、45000号、46000号、47000号、48000号、49000号、50000号、51000号、52000号、53000号、54000号、55000号、56000号、57000号、58000号、59000号、60000号、61000号、62000号、63000号、64000号、65000号、66000号、67000号、68000号、69000号、70000号、71000号、72000号、73000号、74000号、75000号、76000号、77000号、78000号、79000号、80000号、81000号、82000号、83000号、84000号、85000号、86000号、87000号、88000号、89000号、90000号、91000号、92000号、93000号、94000号、95000号、96000号、97000号、98000号、99000号、100000号、101000号、102000号、103000号、104000号、105000号、106000号、107000号、108000号、109000号、110000号、111000号、112000号、113000号、114000号、115000号、116000号、117000号、118000号、119000号、120000号、121000号、122000号、123000号、124000号、125000号、126000号、127000号、128000号、129000号、130000号、131000号、132000号、133000号、134000号、135000号、136000号、137000号、138000号、139000号、140000号、141000号、142000号、143000号、144000号、145000号、146000号、147000号、148000号、149000号、150000号、151000号、152000号、153000号、154000号、155000号、156000号、157000号、158000号、159000号、160000号、161000号、162000号、163000号、164000号、165000号、166000号、167000号、168000号、169000号、170000号、171000号、172000号、173000号、174000号、175000号、176000号、177000号、178000号、179000号、180000号、181000号、182000号、183000号、184000号、185000号、186000号、187000号、188000号、189000号、190000号、191000号、192000号、193000号、194000号、195000号、196000号、197000号、198000号、199000号、200000号、201000号、202000号、203000号、204000号、205000号、206000号、207000号、208000号、209000号、210000号、211000号、212000号、213000号、214000号、215000号、216000号、217000号、218000号、219000号、220000号、221000号、222000号、223000号、224000号、225000号、226000号、227000号、228000号、229000号、230000号、231000号、232000号、233000号、234000号、235000号、236000号、237000号、238000号、239000号、240000号、241000号、242000号、243000号、244000号、245000号、246000号、247000号、248000号、249000号、250000号、251000号、252000号、253000号、254000号、255000号、256000号、257000号、258000号、259000号、260000号、261000号、262000号、263000号、264000号、265000号、266000号、267000号、268000号、269000号、270000号、271000号、272000号、273000号、274000号、275000号、276000号、277000号、278000号、279000号、280000号、281000号、282000号、283000号、284000号、285000号、286000号、287000号、288000号、289000号、290000号、291000号、292000号、293000号、294000号、295000号、296000号、297000号、298000号、299000号、300000号、310000号、320000号、330000号、340000号、350000号、360000号、370000号、380000号、390000号、400000号、410000号、420000号、430000号、440000号、450000号、460000号、470000号、480000号、490000号、500000号、510000号、520000号、530000号、540000号、550000号、560000号、570000号、580000号、590000号、600000号、610000号、620000号、630000号、640000号、650000号、660000号、670000号、680000号、690000号、700000号、710000号、720000号、730000号、740000号、750000号、760000号、770000号、780000号、790000号、800000号、810000号、820000号、830000号、840000号、850000号、860000号、870000号、880000号、890000号、900000号、910000号、920000号、930000号、940000号、950000号、960000号、970000号、980000号、990000号、1000000号、1010000号、1020000号、1030000号、1040000号、1050000号、1060000号、1070000号、1080000号、1090000号、1100000号、1110000号、1120000号、1130000号、1140000号、1150000号、1160000号、1170000号、1180000号、1190000号、1200000号、1210000号、1220000号、1230000号、1240000号、1250000号、1260000号、1270000号、1280000号、1290000号、1300000号、1310000号、1320000号、1330000号、1340000号、1350000号、1360000号、1370000号、1380000号、1390000号、1400000号、1410000号、1420000号、1430000号、1440000号、1450000号、1460000号、1470000号、1480000号、1490000号、1500000号、1510000号、1520000号、1530000号、1540000号、1550000号、1560000号、1570000号、1580000号、1590000号、1600000号、1610000号、1620000号、1630000号、1640000号、1650000号、1660000号、1670000号、1680000号、1690000号、1700000号、1710000号、1720000号、1730000号、1740000号、1750000号、1760000号、1770000号、1780000号、1790000号、1800000号、1810000号、1820000号、1830000号、1840000号、1850000号、1860000号、1870000号、1880000号、1890000号、1900000号、1910000号、1920000号、1930000号、1940000号、1950000号、1960000号、1970000号、1980000号、1990000号、2000000号、2010000号、2020000号、2030000号、2040000号、2050000号、2060000号、2070000号、2080000号、2090000号、2100000号、2110000号、2120000号、2130000号、2140000号、2150000号、2160000号、2170000号、2180000号、2190000号、2200000号、2210000号、2220000号、2230000号、2240000号、2250000号、2260000号、2270000号、2280000号、2290000号、2300000号、2310000号、2320000号、2330000号、2340000号、2350000号、2360000号、2370000号、2380000号、2390000号、2400000号、2410000号、2420000号、2430000号、2440000号、2450000号、2460000号、2470000号、2480000号、2490000号、2500000号、2510000号、2520000号、2530000号、2540000号、2550000号、2560000号、2570000号、2580000号、2590000号、2600000号、2610000号、2620000号、2630000号、2640000号、2650000号、2660000号、2670000号、2680000号、2690000号、2700000号、2710000号、2720000号、2730000号、2740000号、2750000号、2760000号、2770000号、2780000号、2790000号、2800000号、2810000号、2820000号、2830000号、2840000号、2850000号、2860000号、2870000号、2880000号、2890000号、2900000号、2910000号、2920000号、2930000号、2940000号、2950000号、2960000号、2970000号、2980000号、2990000号、3000000号、3100000号、3200000号、3300000号、3400000号、3500000号、3600000号、3700000号、3800000号、3900000号、4000000号、4100000号、4200000号、4300000号、4400000号、4500000号、4600000号、4700000号、4800000号、4900000号、5000000号、5100000号、5200000号、5300000号、5400000号、5500000号、5600000号、5700000号、5800000号、5900000号、6000000号、6100000号、6200000号、6300000号、6400000号、6500000号、6600000号、6700000号、6800000号、6900000号、7000000号、7100000号、7200000号、7300000号、7400000号、7500000号、7600000号、7700000号、7800000号、7900000号、8000000号、8100000号、8200000号、8300000号、8400000号、8500000号、8600000号、8700000号、8800000号、8900000号、9000000号、9100000号、9200000号、9300000号、9400000号、9500000号、9600000号、9700000号、9800000号、9900000号、10000000号、10100000号、10200000号、10300000号、10400000号、10500000号、10600000号、10700000号、10800000号、10900000号、11000000号、11100000号、11200000号、11300000号、11400000号、11500000号、1						

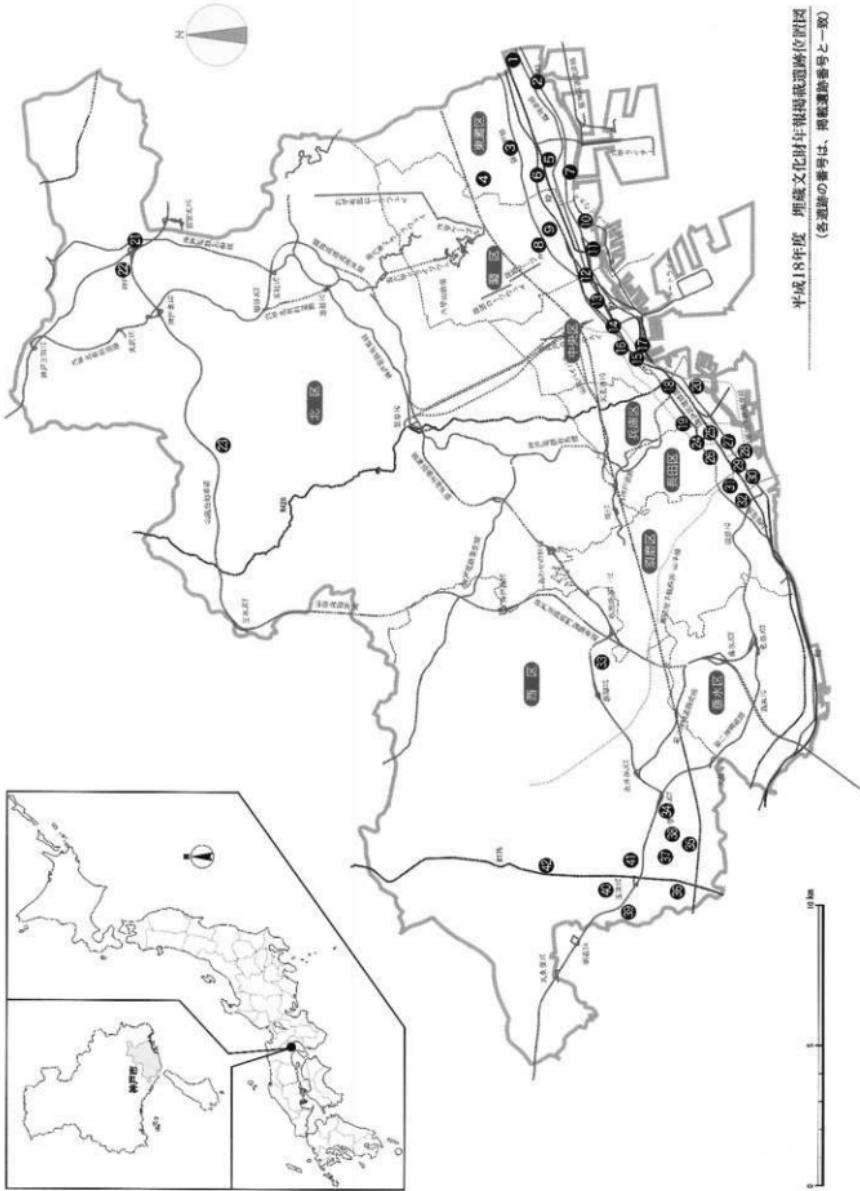
表7 平成18年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（3）

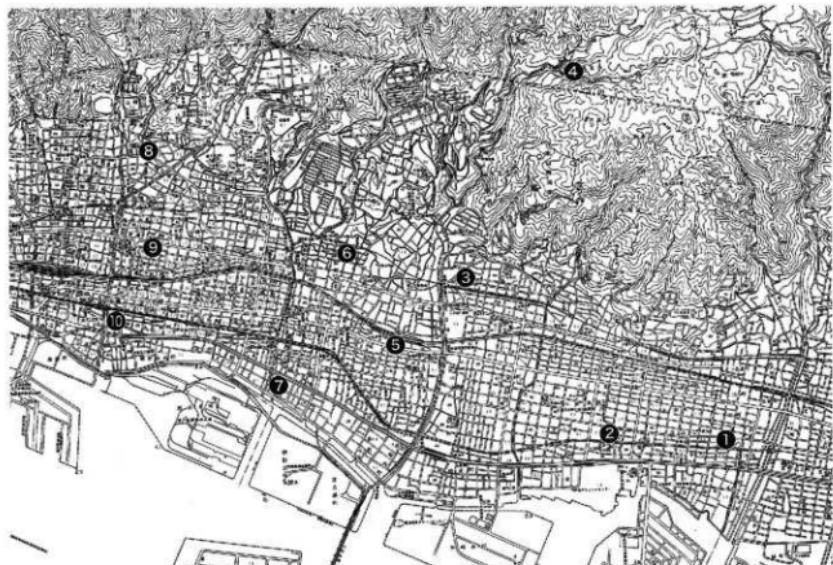
No.	追跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延床面積	調査期間	調査内容	担当担当
53	水立跡跡 跡地跡地	青川市長田区水立基 地1丁目	神戸市林野協会	藤井太郎	145m ² 185m ²	18.10.17～ 18.12.27	弥生後期の高・柱穴、古墳時代後期の新立柱跡などを確認。	医歴整理
56	大原山山頂 跡地跡地	博多区長原区役所町 1丁目	神戸市林野協会	阿部卓生・ 藤井太郎	150m ² 180m ²	18.01.17～ 18.06.24	有生後期の溝・ピット、古墳後期の溝、廻食溝やのれり、土塁、 落ち込みなどを確認。	市街地開拓史
57	二輪山山頂 跡地跡地	神戸市長田区久保町 6丁目	神戸市林野協会	白石代表	510m ² 510m ²	18.02.25～ 18.07.19	平安後期～鎌倉前期の水路の遺構、溝などを確認。	市街地開拓史
58	二輪山山頂 跡地跡地	神戸市長田区久保町 6丁目 6-2/a/65-2	神戸市林野協会	白石代表	830m ² 212m ²	18.05.15～ 18.11.10	平安後期～鎌倉初期の埋立地跡物、井戸・柱穴・溝、木棺墓など を確認。奈良時代の上埴も確認。	下塙行駒所 （日赤耕作跡）
59	長原山山頂跡 跡地跡地	兵庫県伊丹市長原町 6丁目 6-1-1	神戸市教委委員会	中谷正	912m ² 912m ²	18.05.21～ 18.08.21	平安代～鎌倉時代の柱跡地跡物、廻食・溝・ピットを確認。	小学校
60	成村跡跡 跡地跡地	尼崎市大入田町4丁目1 番	神戸市教委委員会	酒井誠吾	200m ² 200m ²	18.11.07～ 18.11.28	春生時代中期～後期の溝路を確認。	共同住宅
61	大山山山頂跡 跡地跡地	須磨区大山1丁目1番26 第1次跡地	神戸市教委委員会	茂谷武哉	35m ² 110m ²	18.10.05～ 18.10.25	奈良～平安の方舟跡穴、土壇・古・中世の墓溝などを確認。	事務所
62	太山寺跡跡 跡地跡地	芦屋市西山4丁目4番 第1次跡地	神戸市教委委員会	藤井太郎	118m ² 118m ²	18.01.05～ 19.01.24	古墳時代中期～後世の上塚・落ち込みを確認。古墳時代後期 の埴輪出土。	太山寺
63	御用邸跡 跡地跡地	西宮市伊川谷町和宇 櫻尾丘	神戸市教委委員会	植松達也	362m ² 360m ²	18.12.22～ 2.3.33.01 22-01-29	奈良時代後期1550年、京丹波内高森町の東西方向の丘陵地の 埴輪門門前。落ち込み・溝・柱穴などを確認。	土地整理組 （西宮市助役室）
64	新川跡跡 跡地跡地	西宮市新川1丁目1番1-2 13-1-1007-1306-2 13-13-1-1008-2-1032-5	神戸市教委委員会	植松達也	60m ² 59m ²	18.12.13～ 18.12.20	春生後期の遺跡や西側の溝路を確認。	新川
65	櫛山跡跡 跡地跡地	西宮市櫛山1丁目1番1-2	神戸市教委委員会	酒井慶宏	50m ² 50m ²	18.09.05～ 18.09.15	古墳時代後期の深い落ち込み、古代～中世の溝を確認。	ムジゴクスヌ クジオ （神戸特勤事務室）
66	今宿跡跡 跡地跡地	西宮市今宿1丁目1番1-2 1-3-1-1007-2-1032-5	神戸市教委委員会	安川裕	127m ² 162m ²	18.03.21～ 18.09.06	第1トレンシイは段階式溝、第2トレンシイでは南北中隔梁上の上 落溝とも溝・溝・溝などを確認。	宅地造成 （西宮市助役室）
67	高津園跡跡 跡地跡地	西宮市高津園町高津 園1-1-1007-1-1031-1 1-1-1008-2-1032-5	神戸市教委委員会	吉川豊	90m ² 90m ²	18.06.06～ 18.06.18	環濠跡跡の上に、奈良時代の上塚・落ち込み・ピットなどを 確認。	高津園
68	御用邸跡 跡地跡地	西宮市舞町山680番地	神戸市林野協会	酒井誠・藤 井太郎・桂 久人	128m ² 162m ²	18.11.01～ 18.09.30	沖積台地に構築した施設跡に立地する奈良後期の溝・ピット・ 廻食溝などの上塚・柱穴などを確認。	若谷地区整備 （西宮市助役室）
69	出合跡跡 跡地跡地	芦屋市山手町出合町 2-1-1007-2-1032-5	神戸市教委委員会	藤井太郎	170m ² 170m ²	18.02.25～ 18.03.26	發生時代と推定できる溝・廻食・溝などを確認。	芦屋地区整備 （西宮市助役室）
70	口吉瀬跡 跡地跡地	西区三原台5丁目1404 号1-606番1-1号1	神戸市教委委員会	藤川透人	40m ² 40m ²	18.11.13～ 18.11.16	平安～鎌倉の水路跡を確認。	尾道山城 （西宮市助役室）
71	五津川小瀬跡 跡地跡地	門戸窓下3丁目12- 8号	神戸市教委委員会	辻原敏	110m ² 110m ²	18.08.16～ 18.08.25	廻食跡部分の遺構。奈良後期～古墳時代の溝・ピット・落ち込み・ 廻食などを確認。	御印園
72	口吉瀬跡 跡地跡地	西区玉津町7-1丁番 1号1-1005-3	神戸市教委委員会	植藤宏	300m ² 300m ²	18.04.05～ 18.05.15	多くの次生段丘の西側に接する。古代後期～古墳時代初期の 廻食跡跡物・土塁・柱穴などを探査。	緑地化工
73	宝山城跡 跡地跡地	兵庫市西芦屋町下 新井町1-1番1	神戸市教委委員会	酒井玄	380m ² 380m ²	18.01.01～ 18.04.25	室町時代の溝・上塚・井戸などを確認。	別館
					32,405.5m ²			
					34,607.5m ²			

表8 平成18年度 埋蔵文化財出土遺物整理 一覧表

No.	遺跡名	発着点	属性主体	担当担当者	調査日付 年月日付	調査内容	取扱い
A	生田遺跡 第4次調査	神戸市立教育委員会 西日本支所	中野寺・竹 岡・今かわ	0m 0m	19.01.21～ 19.03.29	出土...遺物整理、報告書作成	貯蔵即開示
B	造光堂山土器 埋蔵文化財	神戸市立教育委員会	中村大介	0m 0m	19.01.01～ 19.12.01	出土陶器の整理整頓	市立博物館委託 保管
C	八幡寺上・下地 群1号・2号・3号 遺物層の記述	神戸市立教育委員会	中村大介	0m 0m	19.01.01～ 19.03.30	8号地盤上全表面(洗面器・瓦・瓦礫)等の確認	即開示即手取
D	兵庫県立森林山 土器埋蔵文化財	神戸市立教育委員会	中村大介	0m 0m	19.01.01～ 19.03.30	兵庫県立森林山土器埋蔵文化財(洗面器・瓦・瓦礫)の確認	即開示即手取
E	白木原町古墳 石器埋蔵文化財 整理	神戸市立教育委員会	中村大介 中村大介 中村大介	0m 0m 0m	19.01.01～ 19.03.30	精耕治元作業、道駆実行作業、清掃、遺物整理作業、遺物専用袋等 の確認など	即開示即手取
F	猪名川河口土 器埋蔵文化財	神戸市立教育委員会	中村大介	0m 0m	19.01.01～ 19.03.30	猪名川河口土器埋蔵文化財の洗面器・瓦等の整理	即開示即手取
G	辰洞廻古墳	神戸市立教育委員会	安田四・竹 岡・今かわ 中村大介	20m 0m 0m	19.04.01～ 19.03.30	辰洞廻古墳内の遺物整理、云母追加層(H10)、瓦等の追跡(H10)、瓦等の回収(H10)	即開示即手取

平成18年度 周辺文化財・保存環境監視点分布図
(各施設の番号は、押誠遺跡番号と一緒に)

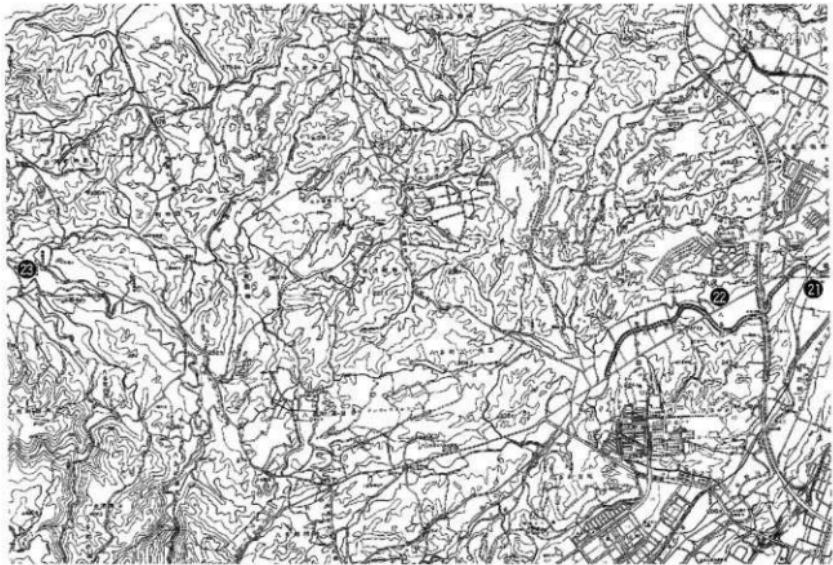




調査地点位置図 (1) 1/50,000



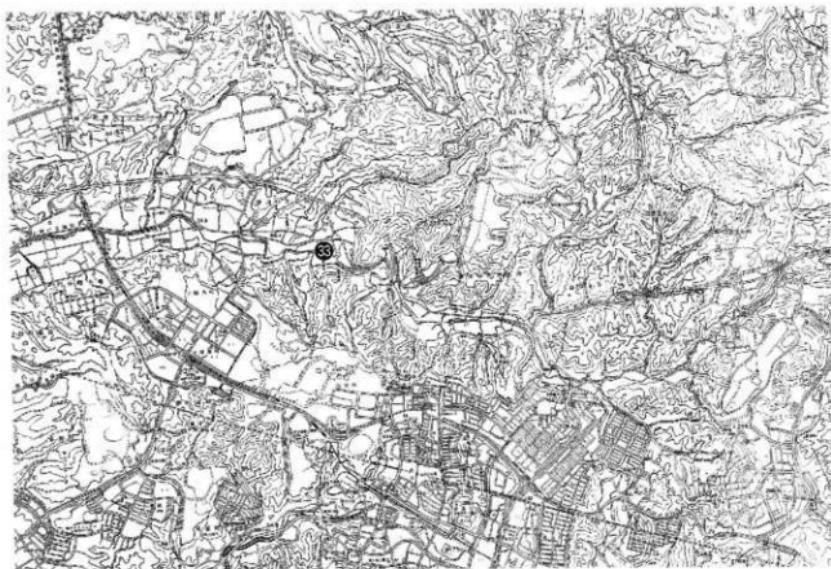
調査地点位置図 (2) 1/50,000



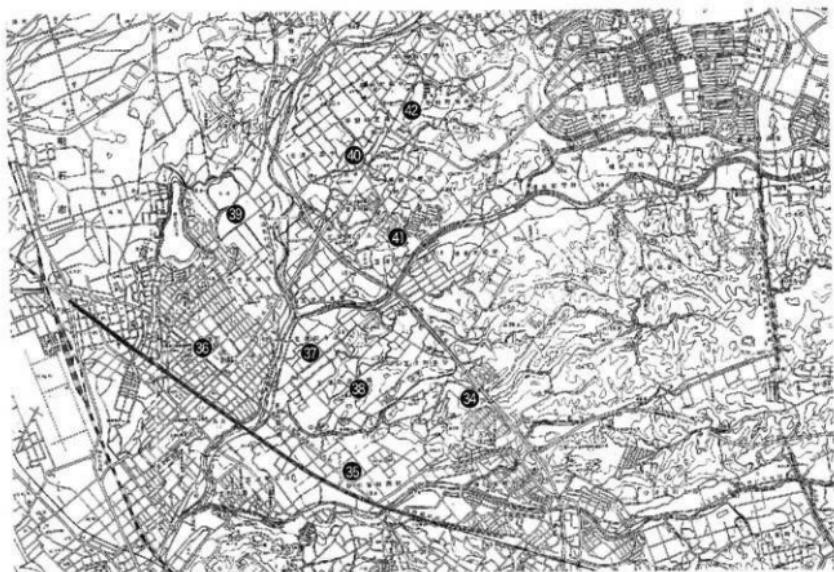
調査地点位置図（3）1/50,000



調査地点位置図（4）1/50,000



調査地点位置図(5) 1/50,000



調査地点位置図(6) 1/50,000

II. 平成18年度の発掘調査

1. 深江北町遺跡

深江北町遺跡は六甲山南麓、東の芦屋川と西の高橋川にはさまれる沖積地に立地する。当遺跡は神戸市の南東端にあたり、北に隣接する芦屋市域の津知遺跡とは遺跡の年代・性格等が共通している。

深江北町遺跡は、昭和59年に実施した試掘調査によってその存在が確認され、これまでに10次にわたって発掘調査が実施されている。

当遺跡の所在する東灘区はかつての摂津国西部にあたり、六甲山南麓の狭い平地ではあるものの、海路としての瀬戸内海に面し、また陸路として山陽道の通る交通の要衝であった。深江という地名も港となる入り江を示すと考えられる。

深江北町遺跡におけるこれまでの発掘調査により、弥生時代中期の遺物、弥生時代後期から古墳時代前期の墓域、奈良時代から平安時代の前期の官衙関連遺構、中世の集落などが確認され、とりわけ律令期の遺構・遺物には顕著なものがある。「駅」と記される墨書き器の出土などから古代山陽道の芦屋駅の所在地が当地であると推定されている。



fig. 21 深江北町遺跡
調査地位置図
(S = 1 : 5,000)

1. 第10次調査

調査概要

当調査は阪神電鉄の高架化による合流管移設工事に伴うものである。

調査は排水溝の敷設範囲で実施した。街区によって、西から1~3区として設定した。

基本土層

調査地の基本土層は地表面から0.30m~0.35m前後までが、盛土・旧耕土・床土層で、その下層に遺物包含層である灰色細砂（東側では暗灰色細砂・暗灰色シルト）が堆積し、この下層の黄灰色細砂の上面で遺構面を検出している。

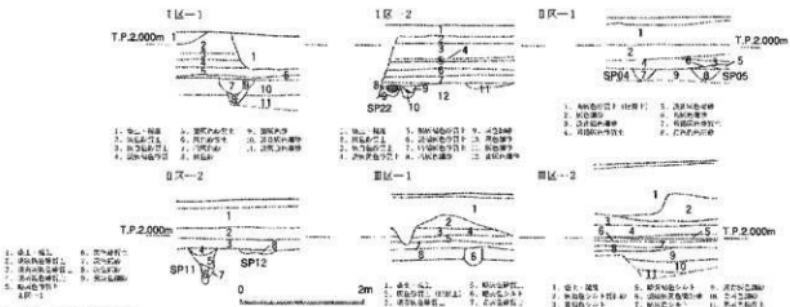


fig. 22 土層断面図

I 四
清

長さ61.5mの調査区で、西側に位置する。溝3条、上坑5基、ピット24基を検出した。溝は東西及び南北方向(SD01)、北西から南東方向 (SD02・03) のものが存在する。SD01は幅1.5m前後、検出面からの深さは45cm前後である。SD02、03は幅80cm前後、検出面からの深さはSD02が20cm前後、SD03は5cm前後である。

十一

土坑は、すべて調査区外へと続くものであり、全体を検出できたものはなかった。検出できた部分から直徑0.75m~1.8m前後の規模の土坑であると考えられる。検出面からの深さは10~30cmである。

二二四

ピットは直径20cm、最大で長径95cm、短径60cmの規模であり、検出面からの深さは10cm～40cm前後である。SP18には人頭大の石が数個入れられている状況が検出された。軟弱な地盤なため、柱を補強するものとも考えられる。SP23からは螺旋状の墨書きのある須恵器片が出土した。

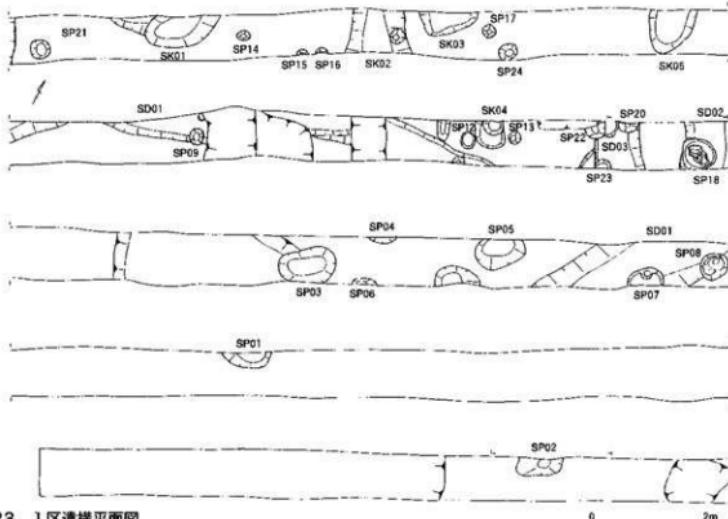


fig. 23 1区遺構平面図

- II 区** 溝 1条、土坑 2基、ピット 22基、落ち込み 1ヶ所を検出した。
溝 調査区の東端付近で検出した幅90cm前後、検出面からの深さ15 cm前後の、北西から南東方向の溝である。
- 土坑** 調査区の西半で検出した。SK01は南北が調査区外へと続く、直徑95cm前後の上坑と考えられる。検出面からの深さは10cmである。SK02は南北が調査区外へと続き、攪乱により切られれているが1.5m前後の直徑と考えられる。検出面からの深さは20cmである。
- ピット** ピットは直徑10cm～直徑85cm前後である。検出面からの深さは、10cm前後～61cmであった。SP10からは3本の柱材が検出された。中央の1本に対して東側の1本は中央寄りに傾いており、軟弱な地盤で柱材の補強を図ったものと考えられる。
- 落ち込み** 調査区の西端付近で検出した落ち込みで、南北両側共、調査区外へと続く。幅1.7m前後、検出面からの深さ15cmである。

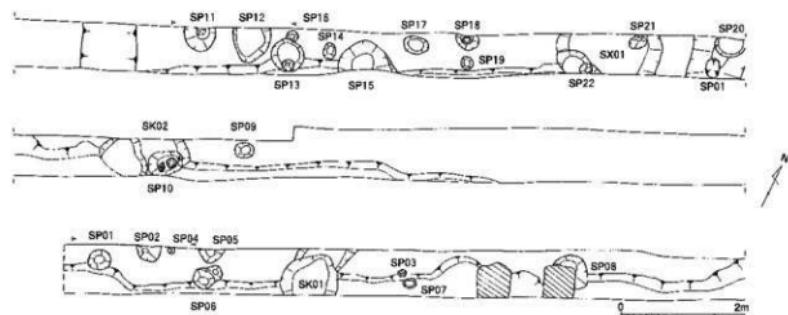


fig. 24 II区遺構面平面図

- III 区** 長さ65mの調査区で、東に位置する。東半部では土坑1基、ピット7基を検出した。
土坑 調査区西半で検出した落ち込みで、南北両側共、調査区外へと続く。幅1.2m前後、検出面からの深さは30cm前後である。
- ピット** ピットは直徑25cm～直徑45cmである。検出面からの深さは20cm～35cmである。
 東半部は東へ緩やかに下がり湿地状の様相を呈しており、遺構は確認されなかった。

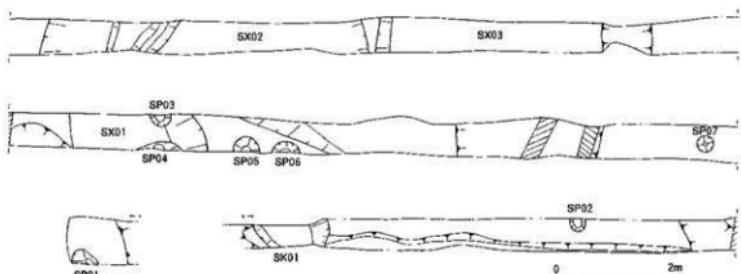


fig. 25 III区遺構面平面図

古路の掘削部分の限られた範囲での調査であったが、多くの遺構を検出することができた。特にⅠ区西半からⅡ区にかけては遺構が多く、周辺地においても、遺構の分布が濃密であることが示唆される。出土遺物の大半は微細な破片であり、詳細な時期の検討は困難であるが、奈良時代～中世のものが含まれており、概ね平安時代を中心とするものと考えられる。Ⅲ区の東半部は湿地状に緩やかに下がってゆく状況が確認され、微高地から湿地へと続くものと考えられる。

2. 第11次調査

調査の概要

共同住宅建設工事に先立つもので、工事によって遺跡の破壊される部分について調査を行った。その結果、4面ないし5面の遺構面が確認され、古墳時代から中世の土器類、水田・土坑・柱穴・溝・流路などの遺構が検出された。

第1遺構面

洪水砂3c層に覆われる遺構面である。水田区画3枚ないし4枚が検出された。10cmほどの段差で南の水田ほど低くなる。北の区画が直線的であるのに対し、最南の段は弧を描く不整形なものとなっており、これについては水田の段ではない可能性が考えられる。幅の確認できる中央の水田では、南北11mほどを測る。水田段の方向は北側のものでN-60°-E、南側でN-63°-Eである。4a層・5a層上面には円形の踏あとあるいは生痕と考えられる歪みが多数残る。

水田耕土（4a層・5a層・5a-2層）から出土した遺物は古墳時代から平安時代後期のものであり、この水田の時代も平安時代後期あるいはそれ以降のものと推定される。

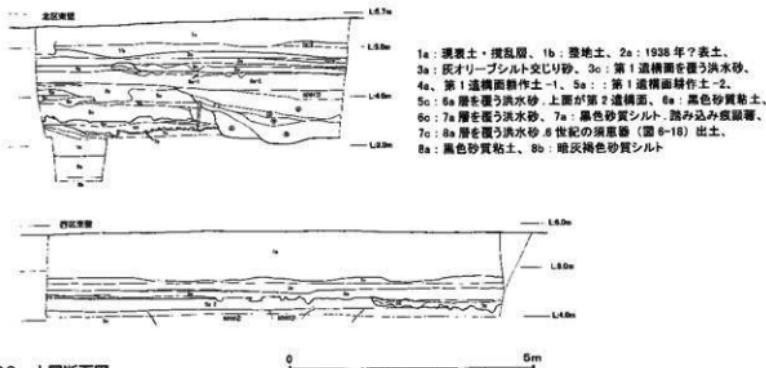


fig. 26 土層断面図

第2遺構面 5a-2層下面で検出される平安時代までの遺構面。溝・流路・土坑・柱穴などが検出された。

SD01 幅約1.5m・遺構検出面からの深さ約1.1mを測る直線状の溝である。N-62°-Wにのびる。当地における街路の方向はN-23°-Wであり、この溝はこの方位とも合致しない。東岸はホゾ穴のある柱材・板材を護岸材として利用し、杭で押さえている。埋上からは

古墳時代から平安時代の土器等が多数出土した。

SD02

幅3.0m～3.5mを測り、蛇行する流路である。この遺構は工事影響範囲までの調査であることから最上位のみの掘削に留まり、完掘していないため、深さについては確認できていない。プランについても検出時に見えた形状であり、埋没土の確認しやすい部分でラインを求めた可能性もある。

第3遺構面以下

工事により杭の打ち込まれる部分に限って、下層の確認を行った。調査区の北東隅での観察によれば5層以下に3層の土壤化した土層（6a層・7a層・8a層）が確認された。ただし湧水が多いため面的な遺構確認はできず、上層断面による確認に留まる。

6a層上面では田起こし状の上層の乱れ、7a層では踏み込み跡が多数確認された。そして8a層を覆う洪沢砂7c層から古墳時代後期の須恵器の坏身などが出土している。6a層・7a層は古墳時代後期から律令期の間の水田耕作土と思われる。8a層についても遺構面となる可能性が高い。

これ以下の土層については湧水のため確認ができなかったが、上層の遺構から古墳時代後期よりも古い遺物が出土しており、これ以下についても遺構面の存在する可能性を考えることができる。

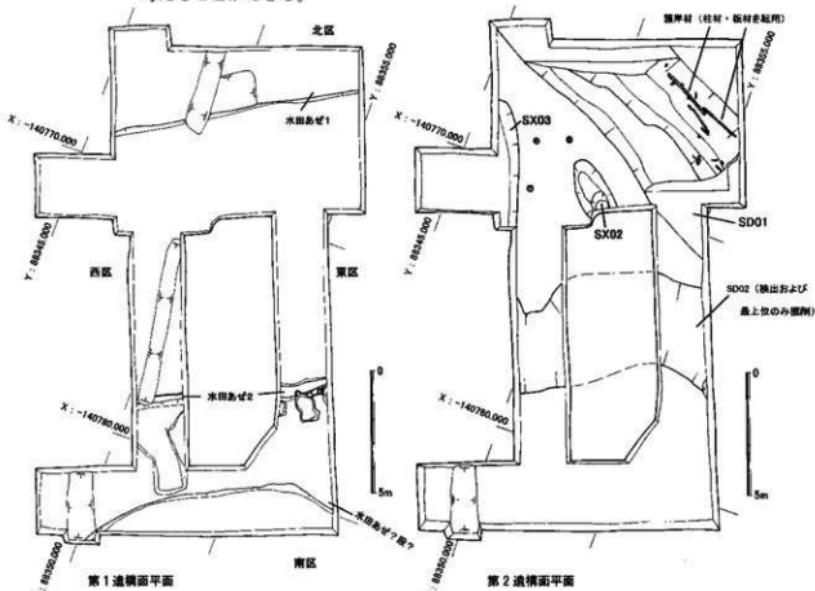


fig. 27 第1・2遺構面平面図

まとめ

律令期の遺構面では柱軸用材や板材などで護岸される幅約5mの溝やほぼ同じ幅の溝などが検出された。両溝は同一面で検出されるがその方向が異なる。これらは古代における上地区画の変遷を示す資料になる可能性がある。

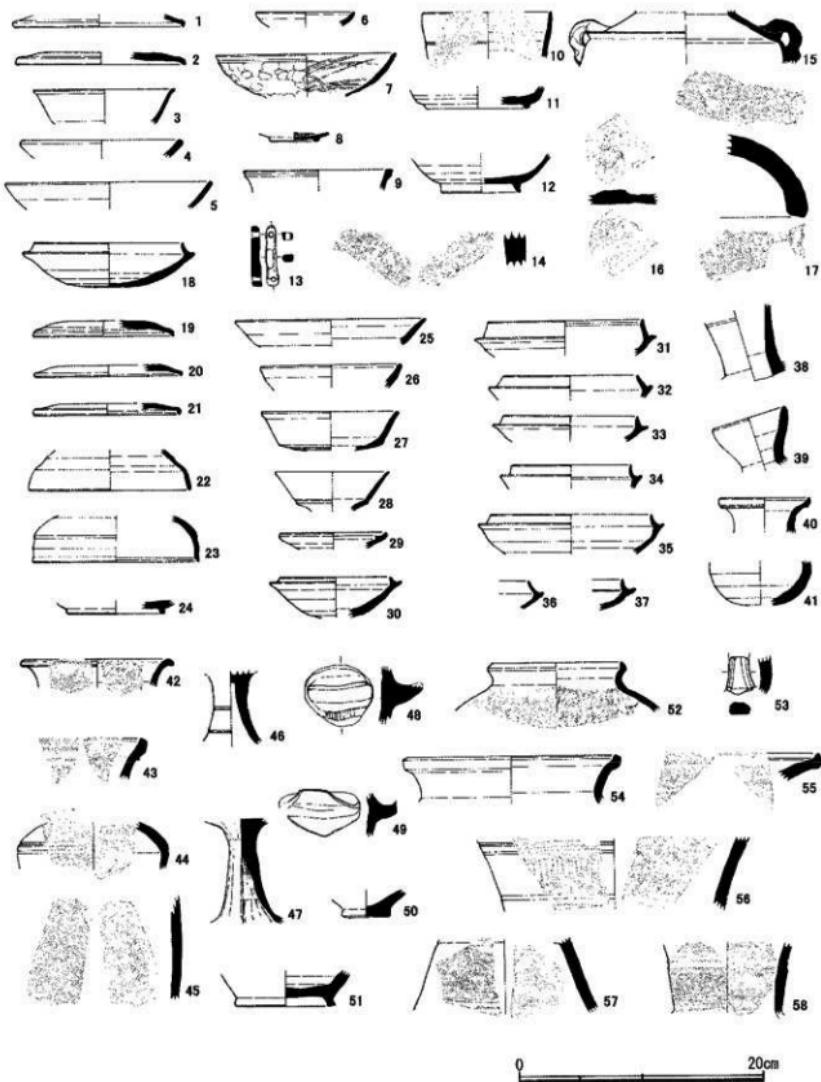


fig. 28 出土遺物実測図

出土遺物

1 ~ 17 : 5層、18 : 7層、19 ~ 58 : SD01出土

(6・13・26・47 ~ 50 : 土師器、7・8 : 瓦器、16・17 : 瓦、その他 : 須恵器)

2. 北青木遺跡 第5次調査

北青木遺跡は、六甲山南麓の海岸部の砂堆上に立地する集落遺跡で、これまで県営住宅や市営住宅の建設に伴い4次の発掘調査が実施され、今回の調査は第5次にある。これまでの調査では縄文時代晚期の土器や弥生時代前期中頃の集落が確認され、縄文時代から弥生時代への移り変わりを考える上で重要な資料を提供している。また、奈良・平安時代から中世に至るまでの土器も出土しており、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになっている。

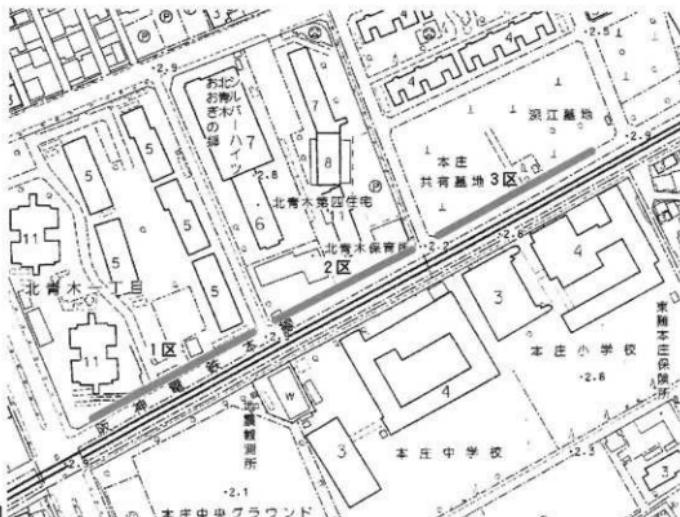


fig. 29 北青木遺跡
調査地位置図

調査の概要

今回の調査は、阪神電鉄の高架工事に関する下水管の移設工事に伴うもので、工事により埋蔵文化財が破壊される範囲について調査を実施した。調査区が狭長なため、西から1区・2区・3区と分け、さらに歩行者用通路確保のため、各調査区を分割するかたちで掘削・調査を実施した。

調査地は近・現代の擾乱が著しく、また、近代以前の削平を受けている場所もあり、遺跡の遺存状況はよいとはいえない。

基本層序

基本層序は、1a層：現表土・擾乱土・盛土、1c層：褐色細砂（洪水砂）、2a層：暗灰色細砂（IH耕土）、3a層：暗褐色細砂（弥生時代～中世の遺物包含層）、3c層：黄灰色細砂である。3c層上面で弥生時代の土坑・溝・流路、奈良・平安時代～中世の池・掘立柱建物・柱穴などの遺構を検出した。

出土遺物には、縄文時代晚期の土器、弥生時代後期の土器、古墳時代～飛鳥時代の須恵器、奈良・平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器、中世の須恵器・土師器などがある。このなかで特筆すべきは、土坑から銅鐸1点が出土していることである。

銅鐸は、搅乱・盛土・旧耕土層を重機で除去し、遺構面を精査し、調査区西端部分で検出した溝を掘削中、溝の肩で確認された。現地表下約80cm（標高約1.5m）の地点である。

現地は調査範囲が狭小であり、遺構・遺物のより詳細な調査を実施するため、銅鐸をその周辺土壤ごと現地から切り取り、埋蔵文化財センターへ搬入し、安定した状況での調査と検討を行った。

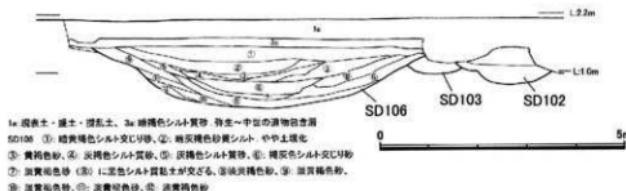


fig. 30 土層断面図

弥生時代の遺構 銅鐸埋納坑・壺棺墓・溝などが検出されている。

SK150

銅鐸埋納坑。1区西端において長径約30cm×深さ15cmのプラン不整楕円形の土坑として検出された（3次埋納坑）。埋納坑SK50の西側は、弥生時代後期以降の溝、東側は近代以降の溝によって削られる。この土坑中に、鍔を上下に立てて鉗を東に向けた状態の銅鐸が埋置される。検出時の状態のまま切り取り、室内における発掘調査を行った。その結果、プランとしては個々を識別できなかったが、上層断面の観察によって、3回の埋め戻しが行われたことを確認した。この土坑の土層埋没の過程復元をすると3次埋納坑以前、少なくとも2回土坑掘削が行われていることを確認した（1・2次埋納坑：長径115cm、短径72cmの不整楕円形プラン、深さ36cm）。そしてこの土坑底面から銅鐸の鉗部分の破片が出土した。

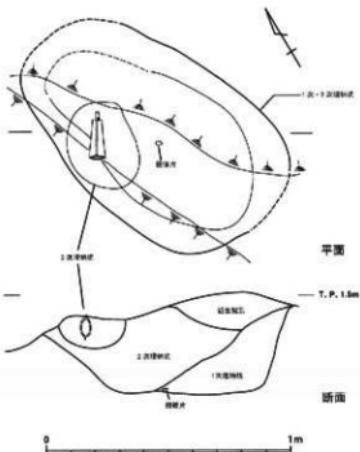


fig. 31 S K10銅鐸出土状況平面図



fig. 32 S K10銅鐸出土状況

銅 鐸 3次埋納坑から出土。弥生時代中期のものと考えられる扁平鉢式新段階の四区製造
棒文銅鐘。鉢の上部が欠損し残存高は192mm。本来の器高は210mmほどと推定される。
舌の存在は確認できなかった。

銅鐘鉢 1次埋納坑の底面から出土。最大長21mm
をはかる鉢部分の破片。
銅鐘本体の欠損部分と
直接接合せず、確実に
同一個体であるのかは
現状で確認できないが、
質感は良く類似してお
り、同一個体である可
能性が高い。

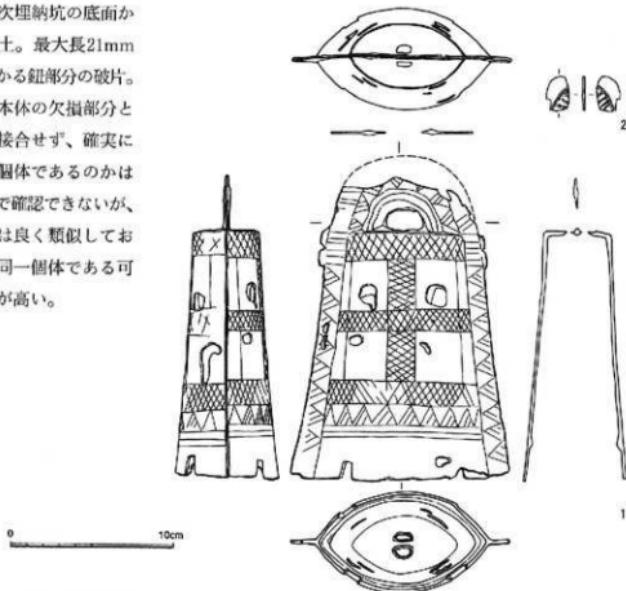


fig. 33 北青木銅鐘実測図

SK102 1区中央東寄りで検出された弥生時代後期後半の壺棺墓。プラン直径約60cm。口縁部を打ち欠いた壺を身とし、鉢を蓋とする壺棺が埋納される。口縁の打ち欠きにより頸部突帯の半分が欠損する。欠損=開口部の大きさは16cm×13cmである。

SK301 3区中央西寄りで検出された弥生時代後期後半の壺棺墓。短径約40cm×長径約60cm。口縁部および肩部の一部を打ち欠いた壺を身とし、壺を縦に半截し重ねたものを蓋とする壺棺が埋納される。身壺の欠損=開口部の大きさは16cm×21cmである。

SK204 2区東寄りで検出された土坑。ほぼ完形の弥生時代中期の壺が横転した状態で底面から出土している。

SD304 3区東寄りで検出された溝。弥生中期のほぼ完形の壺と水差形土器が出土している。
3区ではこのほかにも6条の溝を検出している。幅約1m～6m・深さ20cm～70cmをはかり、壙上に弥生時代中期の土器を含む。南北方向の溝がほとんどであるが、これに直交する方向のものも存在する。

流路101 幅3.5m～5.5m・造構面からの深さ約50cmをはかる流路。北西から南東に流れる。埋土の底付近から绳文時代晚期の土器が、埋土の中層から弥生時代後期の土器が出土した。

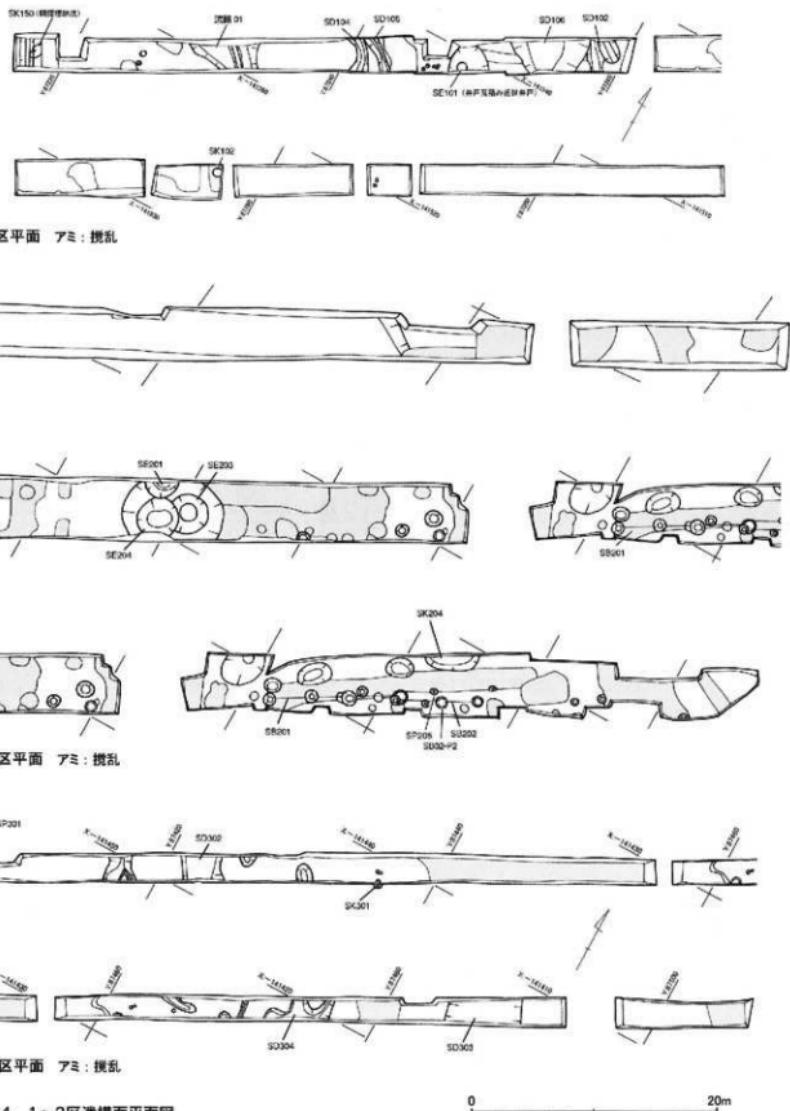


fig. 34 1~3区遺構面平面図

古代・中世の遺構 堀立柱建物・池・柱穴などが検出されている。出土遺物は小破片が多い。古代～中世のものと判断される。

SB201・202 2区東寄りで検出された堀立柱建物。SB01は東西列1列のみ3間分、SB02は東西列1列のみ2間分が確認された。両者は切り合い関係にあり、SB02のはうが新しい。

遺構面からの深さは両者ともに5～20cmほどであり、後世の削平をかなり受けていることが確認できる。

SD106 1区中央部で検出した溝。最大幅約7.0m、遺構面からの深さ約1.3mを測る。埋土は水底に堆積したもので、埋上の上層から中世の須恵器・土師器、下層から平安時代の土師器、「て」字状口縁皿が出土した。埋没の最終段階に近い時期に西岸付近に躰がまとめて捨てられる(SX101)。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

中世以降の遺構 井戸・溝等が検出されている。1区中央西寄りで検出されたSE101(井戸)は互積みのものである。2区中央で検出されたSE201～203のうち201・203は板材を桶状に組む井戸枠が確認されている。近世の遺構と考えられる。

8.まとめ 今回の調査地は狭長で、その上、2区で検出された堀立柱建物柱穴の遺存状況が深さ5～20cmほどと浅いことに示されるように、後世の削平をかなり受けていることから、調査としては悪い条件のものであったが、これまでの調査と同様、縄文時代晚期から中世までの遺構・遺物が確認され、特に弥生時代の部分において多大な成果を上げることができた。

3区で確認された溝は直交するものがあり、方形に近い遺物が出土するなど、これらが方形周溝墓の溝である可能性をうかがわせる。3区のSK31、1区のSK02など壺棺墓の存在もここが墓域であることを示している。そうみれば2区で検出されたSK24なども方形周溝墓の溝である可能性がある。当地は海岸沿いの砂堆上に営まれた弥生集落の墓域であると考えられる。調査地の南は当時の海岸と考えられ、調査区以北に集落の居住域および耕作地の存在することが推定される。

隣接する弥生時代の遺跡としては、本遺跡の北に本山遺跡が、高橋川・要玄寺川の流下する深江を挟んで本遺跡の東に深江北町遺跡と津知遺跡がある。津知遺跡はその立地も北青木遺跡と共通する。同時に存在するこれらの遺跡間の関係も今後解明していくなければならない。

銅鐸については、本例を加え、神戸市東部付近における弥生時代青銅器の出土は8箇所になる。特に当遺跡周辺では、北青木・本山・生駒・森・堂ノ上の銅鐸、保久良神社の銅戈など、それぞれの距離が1km内外と特に集中し、その密度の高さが注目される。

かつては集落の背後となる丘陵部での発見が多かったが、本山例と今回の北青木例によって、西宮市津門例のような平地における出土例が例外的なものではないということが確かになった。また、東城における銅鐸の埋納は、奈良県大福遺跡・愛知県朝日遺跡などで確認されており、これも新例が追加されることになる。

しかし、いずれの例にしろ、銅鐸が埋納されるのは境界域からの出土ということで、その状況は共通している。山麓あるいは山中から出土した例はムラ背後の山中であり、平地での山例である本山例は本山遺跡の集落域の海側線辺、流路跡が交錯するような

湿地に近い部分での出土であり、北青木例は当時の海岸線に面した砂堆上、ムラの縁辺にあたる墓域の一角である。

北青木銅鐸は鈴を上下にする横位で埋納されており、扁平紐式の段階に通有のものといえる。最終的な埋納坑の大きさが銅鐸埋納のための土坑の標準的な大きさと考えてよいならば、古いほうの土坑は長径115cm、短径72cmの不整椭円形プランであり、土層断面で確認できた2回以外にも、土坑の掘削が行われている可能性が推測できるだろう。

SK50から出土した銅鐸と鉢が同一個体であると認められるならば、銅鐸本体と鉢破片が時期を異にする埋納坑から出土したことは、同一の場所において、銅鐸が埋められて掘り出され、さらに埋められるという行為が複数回行われたことを示すと考えられるわけで、きわめて興味深い。

なお、銅鐸内から舌は出土しなかったが、これに関連して注目されるのが第3次調査で出土した長さ51mmの銅製舌である。これは遺物包含層からの出土であり、時期の判定ができなかったため、あるいは銅鐸舌か？という報告がなされていたものである。

fig. 35 北青木遺跡第3次調査出土舌状銅製品実測図

銅製の銅鐸舌はこれまでに5例ないし6例が確認されているが、この銅製舌はその形状、また、ベルとして使用した痕跡である摩滅などの状況にこれらと共通するものがある。石製・銅製をあわせた舌の集成を行った服部信博氏によれば、銅鐸の舌は「概ね5～7cm程度のグループと10～13cmのグループの二つに区分」できるということで、本例が銅鐸舌であれば小さいほうのグループに属するものとなる。

今回の調査により、同一地点での複数回の埋納という行為を確認できた。銅鐸の多数埋納と単数埋納は、その対象となる境界自体が相違している可能性が指摘されている。祭器の性格についてそれを一つに限定することに無理があるが、ムラ境界における銅鐸の単数埋納の実際を示す重要な事例として、本例を位置づけることができるだろう。



fig. 36 北青木銅鐸底部内面

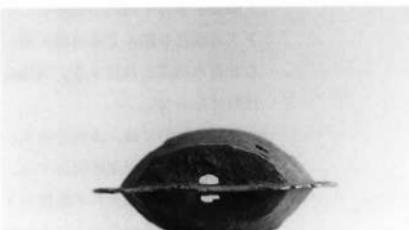


fig. 37 北青木銅鐸紐部上面

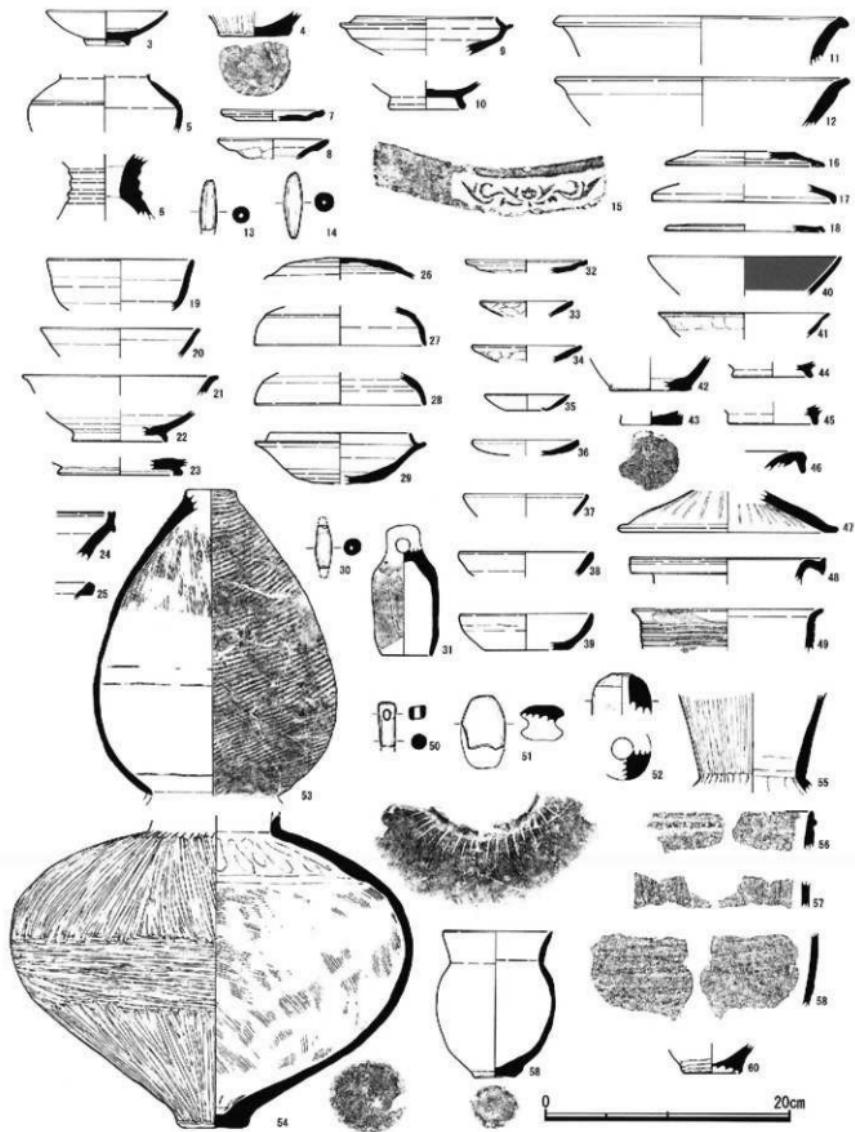
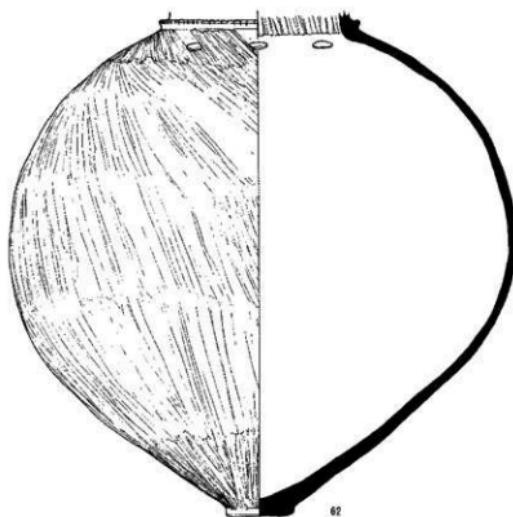
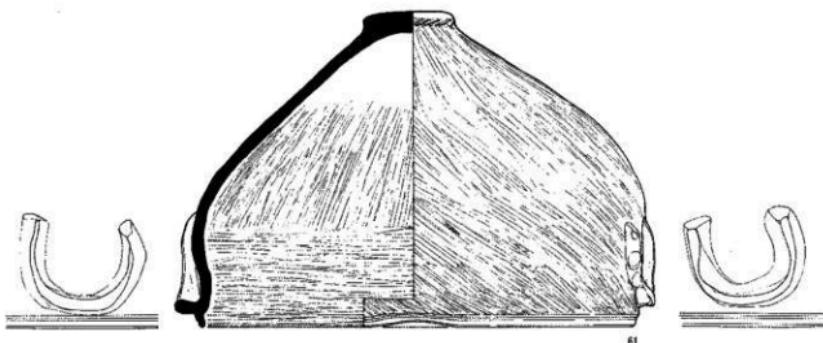


fig. 38 出土遺物実測図 1
 3・4 : 1層、5~12 : 1区3層、13・14 : SD102、15 : SE101、16~52 : SD106、53~54 : SK301、
 55~60 : 流路101 (3 : 肥前磁器、4・6・46~49・53~55・59・60 : 弥生土器、5・9~12・
 16~29・31・42 : 須恵器、7~8・13~14・30・32~41(40 : 内黒)・43~45・50~52 : 土師器、
 15 : 瓦、56~58 : 縹文土器)



0 20cm

fig. 39 出土遺物実測図 2 61・62 : SK102 (弥生土器)

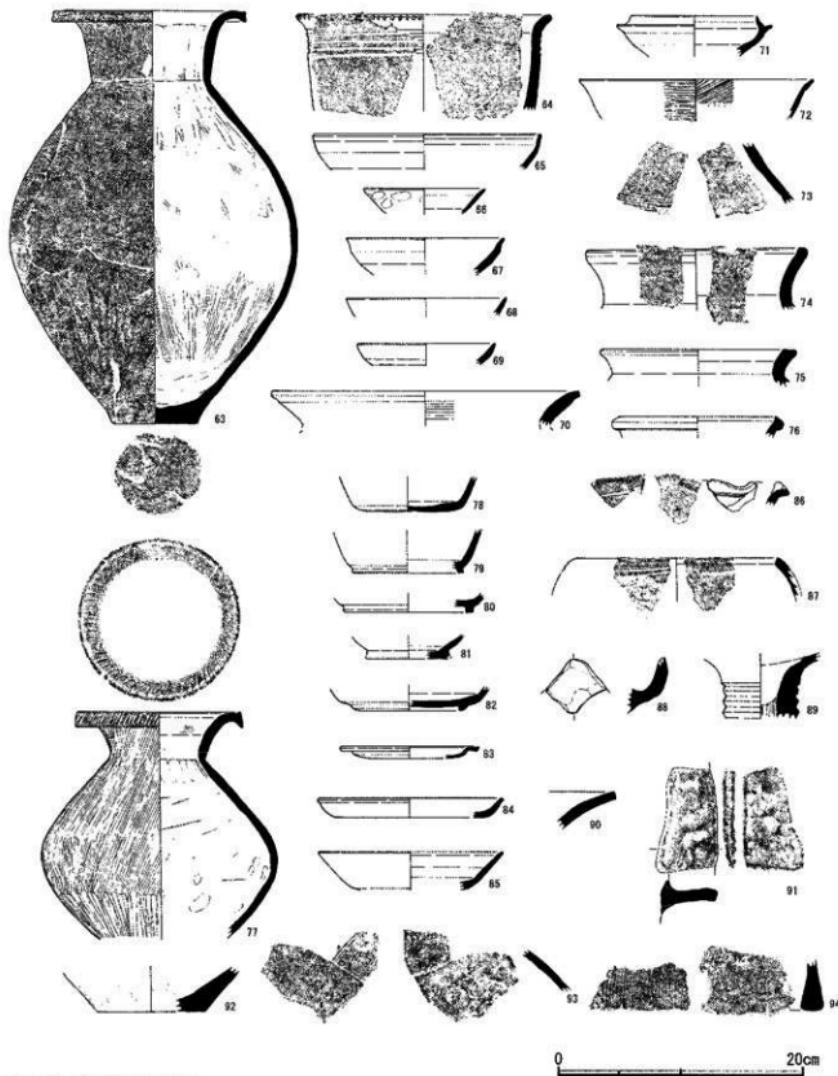


fig. 40 出土遺物実測図 3

63 : SK204、64 : 2区2層、65-66 : SE201、67 : SE202、68 : SB202、69-70 : SP238、71 : SX201、
72 : SP222、73 : 3区1層、74~94 : 3区3層 (63・64・73・77・86・87・89・92・93 : 弥生土器、
65~70・72・83-84・88・90・91・94 : 土師器、71・74~76、78~82・85 : 須惠器)

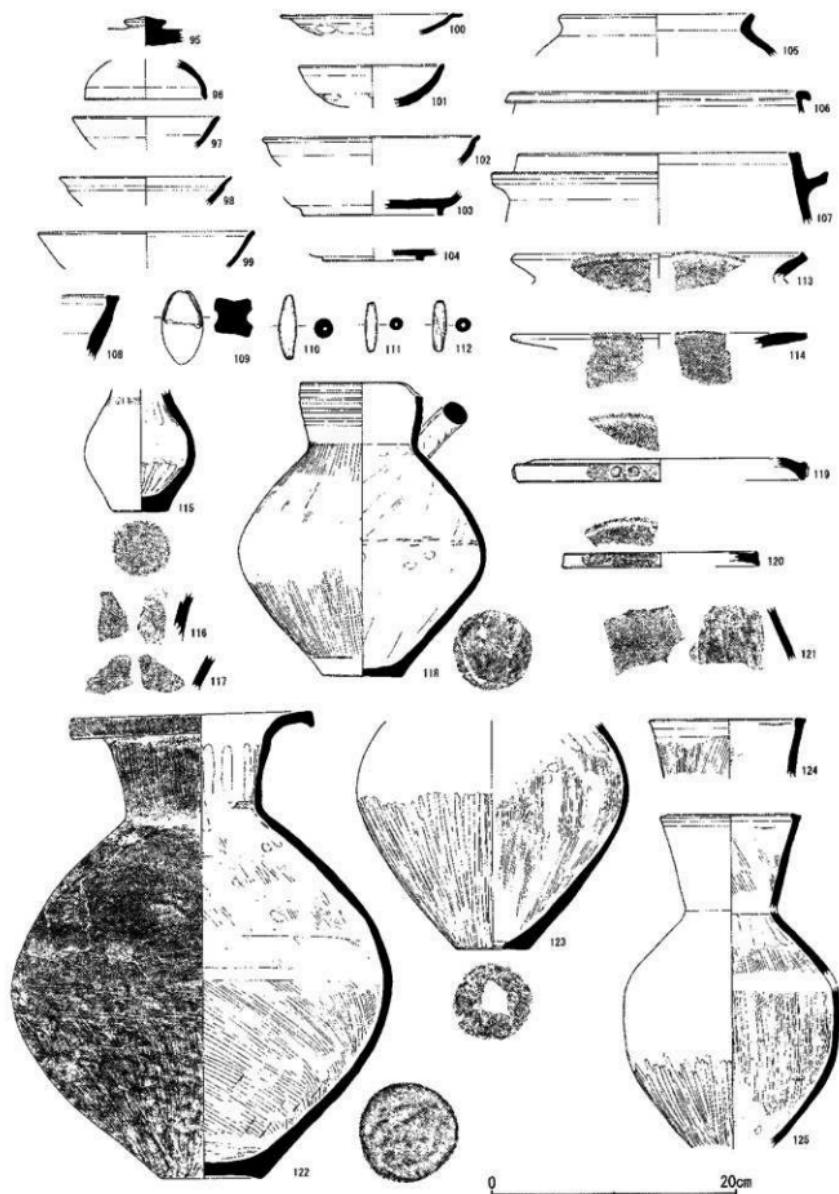


fig. 41 出土遺物実測図 4

95~110 : SD302、111・112 : SD303、113 : SP301、114 : SP302、115 : SP303、116~125 : SD304

(95~99・103・104・106・108 : 須恵器、100~102・105・107・109~114 : 土師器、115~125 : 旁生土器)

3. 岡本北遺跡

岡本北遺跡は、六甲山系東半南麓の扇状地に位置している。遺跡は平成元年に集合住宅新築に伴う第1次調査が実施されて以来、過去6回の調査が実施されている。これまでの調査結果より、弥生時代末から古墳時代初頭と鎌倉時代の複合遺跡であることが明らかとなっている。特に、第1次・2次調査では当該期の竪穴住居や掘立柱建物が多く確認されており、広い範囲に集落が形成されていたと考えられる。

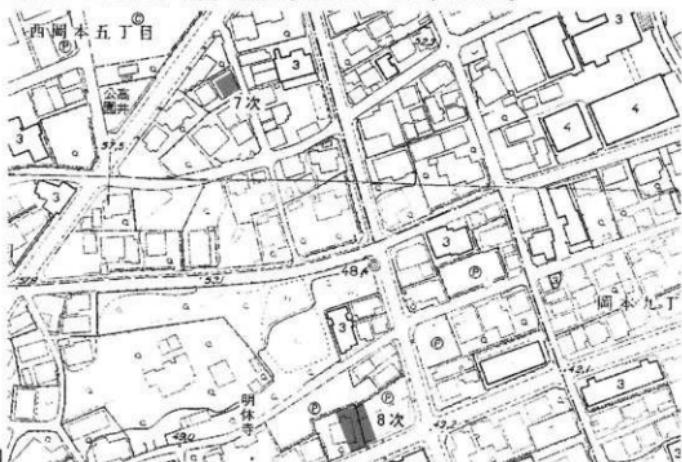


fig. 42 岡本北遺跡
調査地位置図

1. 第7次調査

調査概要

分譲住宅建設に伴い、遺跡が損壊される部分についてのみ、発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序は、第1層は、盛土・整地層で、10~20cmの厚さで広がっている。第2層は、耕作に伴う上層（耕土・床土）で、段差を付けて造成を行っているため、土層の状況は一定しないが、5~30cmを測る。第3層は、灰~黄色系のシルトから砂層で、弥生時代から古墳時代にかけての遺物を含む。第4層は10~20cmの厚みをもつ暗黒褐色シルトで、弥生時代末の上器を多量に含んでいる。

遺構と遺物

遺物包含層の時期から、弥生時代末の遺構面である。

影響深度まで掘削し、包含層を一部掘り下げたが、部分的な調査に留まり、遺構等は確認できていない。

まとめ

今回の調査で弥生時代末の包含層を確認し、土器の出土をみたが、擾乱等の影響もあり、ほとんどの調査対象区域内で、影響深度以下に包含層が存在しており、調査の概要は明らかにできていない。

大部分が未調査で地下保存となっている。

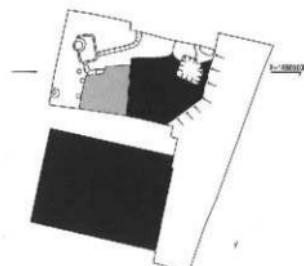


fig. 43 調査区配置図

2. 第8次調査

調査概要

住宅建設に伴い、遺跡の破壊される部分についてのみ、発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序は、第1・2層は、第7次調査地と同様であるが、第3層は、灰～黄色系のシルトから砂層で、中世の遺物を含む。第4層は10～20cmの厚みをもつ暗褐色シルトで中世から平安時代の土器を含んでいる。

遺構と遺物

当初、試掘調査の結果をうけて、弥生時代の可能性を考えたが、包含層並びに、遺構内から平安時代の土器が出土していることから、平安時代の遺構と考えられる。埋土は、人為的に埋められたようなブロック状を呈しており、そのブロック状の客土内に弥生土器が含まれている。

南から北へ浅く落ち込む遺構を確認した。上記のとおり、埋土の状況から、人為的に埋められたものと考えられる。この遺構は、切り合い関係があり、東西方向の落ち込みが、南北方向の流路状の遺構に切られている。流路状の遺構は、出土遺物から、中世以降と考えられるが、出土遺物に乏しく、正確な時期は特定できていない。

まとめ

今回の調査地では、平安時代から中世にかけての遺構が確認された。しかしながら、大半が調査区外に伸びており、出土遺物にも乏しく、遺構の性格は不明とせざるを得ない。

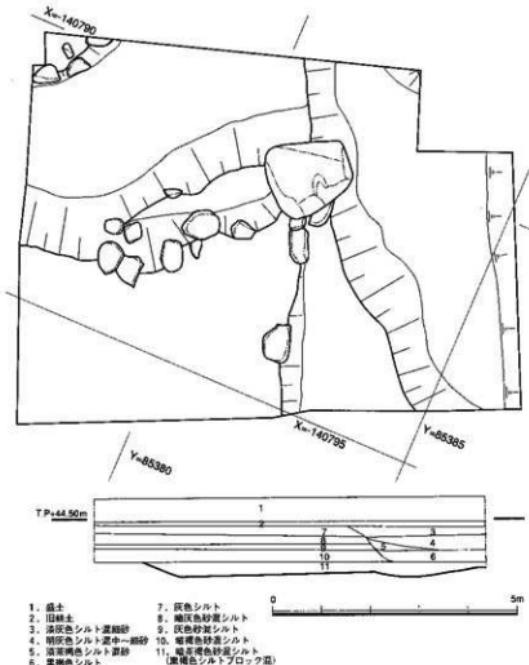


fig. 44 遺構面平面図・土層断面図

4. 住吉川上流域水車群 八輪場水車群確認調査

国土交通省六甲砂防事務所の六甲山系グリーンベルト整備事業の一環である「芳山の森づくり」事業に伴い、昨年度に引き続き八輪場の水車小屋跡地において植樹作業が実施されることとなった。そのため近世に稼動していたと考えられる水車の構築時期を明らかにするとともに、記録のための測量作業と写真撮影を実施した。

六甲南麓の水車は、元禄時代末から宝永年間に東灘区野寄地域に造られた6辆の水車が最初といわれている。享保年間には、住吉川流域の水車群の数も飛躍的に増え、西側の都賀川、味泥川水系にも造られている。水車の利用用途は、夏には菜種から菜種油、綿実から綿実油を搾る「搾油用水車（油車）」と酒造りに欠かせない精米のための「米搾き水車（米車）」の2種類がある。

水車の導入は、製油業と酒造業に製品の品質向上と飛躍的な生産力の発展をもたらしている。天明年間の水車の数は、芦屋11、三条2、田辺5、岡本10、野寄15、住吉36、横屋6、郡家3の計88辆を数えるまでにいたっている。そのうち油車が48辆、米車は40辆であった。特に住吉川水系は上流で、東谷川と西谷川に分かれているため、上流域で水車が立地する割合が多い。そして住吉川は多くの水量を誇り、内容と数において他地域より群を抜いていた。

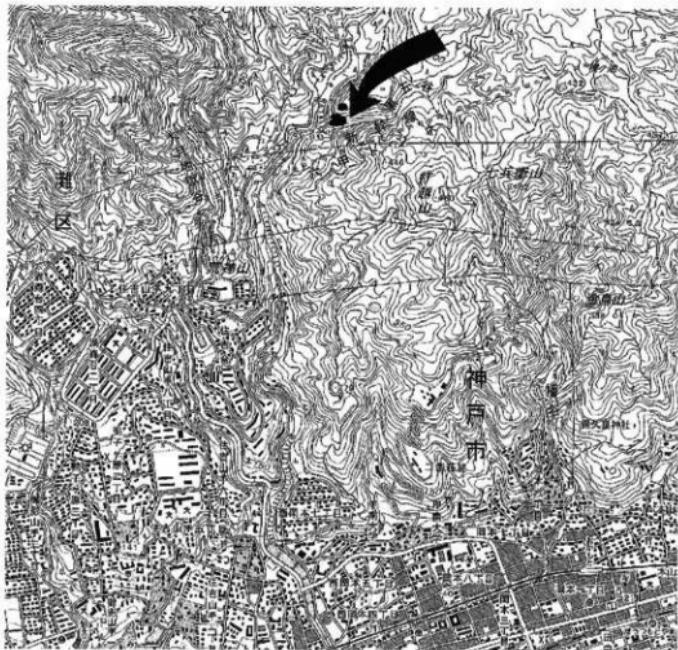


fig. 45 八輪場水車群調査地位置図 ($S = 1:25,000$)

調査概要

水車業を構成するものとして、主に水車（シャク）と淹壺（水を落として水車を回転させるところ）がある。今回、調査は時間の制約もあり、主たる目的は淹壺の規模と敷地内での位置、そして最後の水車小屋の範囲確認であった。また、近世に営まれた水車小屋の詳細については確認できていない。

八幡場

平場1

淹壺は、平場の中央部で地表に開口し、花崗岩がほぼ垂直に積まれ構築されている。

近年の改修により淹壺上部には厚み50cm幅でコンクリートが打たれていて、構築当時の面影はなくなっている。南北方向に築かれた淹壺の規模は長さ6.5m、幅96cm、深さ3m以上（石積み6段）の短冊形である。なお、淹壺の規模から推測すると、水車の規模は直徑6m以上となる。淹壺の底部には土砂が堆積しているため、床の構造は判らなかった。そして、排水は南端に設けられた暗渠を通り用水路に流れ、下段の水車に放流する構造になっている。

この水車の回転軸受けは、近年の改修によりコンクリート製に変えられていて当時の構造については判らなかった。ただ、両脇には石臼1基とその台座2基が正座していて、作業工程を推測できるものになっている。

建物

淹壺を挟んで両側にトレーナー（1～6トレーナー）を設定して調査を行った。その結果、モルタル張りの床面と建物（小屋）のモルタル基礎と石基礎を確認した。水車が稼動していた時の最後の建物で、東側に12.2m×10mの建物が1棟、西側には2.7m×7.5mの建物が1棟を確認している。ただ、これ以前の建物は確認できておらず、近世段階でどのような構造であったかは判らなかった。また、床面覆土の中からは、「寛永通宝」の銭貨が出土している。

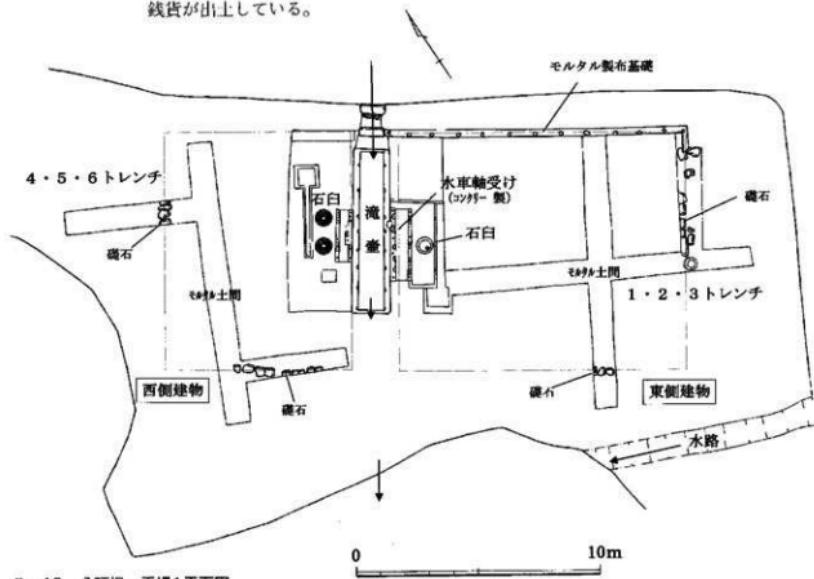


fig. 46 八幡場・平場1平面図



fig. 47 平場1 滞壺検出状況



fig. 48 平場1 滞壺背後の石垣



fig. 49 平場1 滞壺内部



fig. 50 平場1 滞壺南側暗渠排水口

八幡場

平場1の上段にある平地で、南北40m、東西15mの広さをもつ。南北、東西方向にト

平場2

レンチ（1～3トレンチ）を設定して調査した結果、従前建物により著しく擾乱を受けている、コンクリート塊や瓦割れ片が大量に投棄されている状態で検出した。そのため、水車小屋の構造や規模を確認できなかった。

滯壺

平場のやや西寄りで確認した滯壺は、内部に近年まで使われていた家屋の廃材や瓦が大量に投棄されていて、上段の石積みが數石転落した状態で検出した。東西方向に築かれた滯壺の規模は、長さ6.7m、幅90cmの短冊形である。ただ、底部まで掘削を行っていないため深さについては判らない。使われた水は暗渠を通り真下の平場1の水車に排水している。



fig. 51 平場2 滞壺検出状況



fig. 52 平場2 滞壺背後の石垣

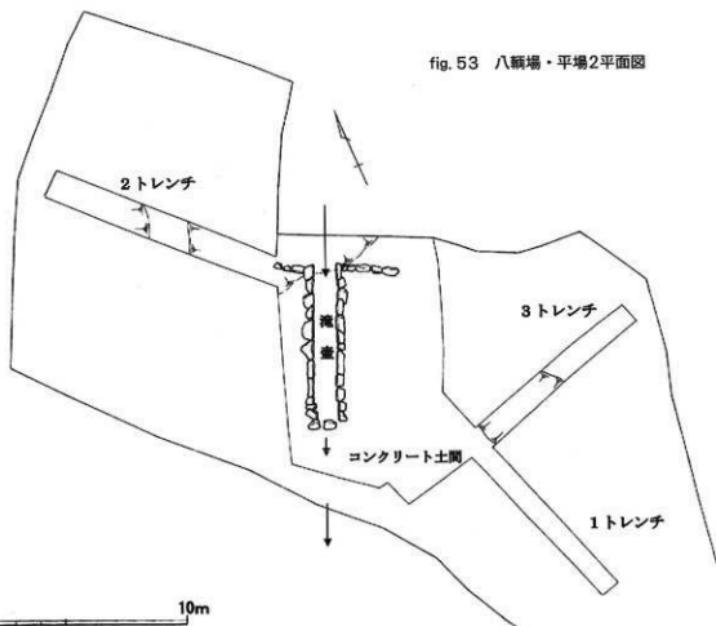


fig. 53 八輪場・平場2平面図

八輪場

平場3

住吉川上流の最上段にある水車小屋跡である。330m程上方の堰堤付近から取水し、用水路を通り、水車に流れ込み廻していたと考えられる。平場2の上段にある平場3は、南北45m、東西15mの広さをもつ。平成8年頃までこの場所に住んでいた飯田氏による建物は平屋で、水車小屋は、昭和13年の水害で倒壊したと証言している。

滝壺

平場の北端にある滝壺は、最上段の石が露出した状態で埋もれていた。東西方向に築かれた滝壺の規模は、長さ6.8m、幅90cmの短冊形である。深さについては、内部を調査していないため判らない。水車の回転軸の受部はコンクリート製で、以前の面影をとどめていない。また、平成8年に敷地が国有地に移管した際に、既存の建物を解体し滝壺内に家屋の廃材を投棄した（平場2の建物も同様）という証言を得ている。



fig. 54 平場3 滝壺検出状況



fig. 55 平場3 滝壺背後の石垣

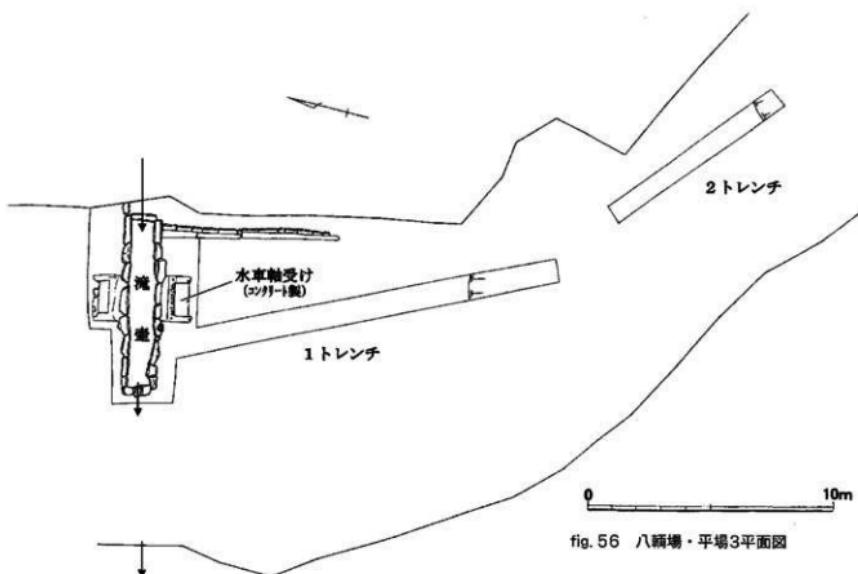


fig. 56 八幡場・平場3平面図

まとめ

江戸時代に発展した水車産業は、明治時代以降、石油燃料の普及とともに榨油業を圧迫し、大正時代にはいると発動機の普及により精米業も衰退していった。もっとも打撃的であったのが、昭和13年の大水害で、住吉川流域の水車群にも甚大な被害を与え、ほとんど壊滅したと言われている。八幡場の水車もその例外ではなく、聞き取り調査でも、その時期に廃業していたと聞いている。そして、六甲山南麓で最後に稼動していた水車は住吉川上流の西谷川の焼ヶ原にあったが、昭和54年に焼失してしまっている。

『住吉村誌（昭和21年）』によると、八幡場には「長谷車」・「山勝車」・「木新車」・「線香車」・「白鶴車」・「山勝車」・「山若車」・「下駄屋車」の8箇所の水車小屋があり、今回調査を行ったのはそのうちの3箇所ということになる。住吉川沿いには、四幡場、五幡場、八幡場・・・というように水車小屋のあった場所をそのように呼び慣らしているが、これは稼動している水車の数を表しているとされている。

六甲山南麓の水車は、川水路から流れた水が「天懸け」と呼ばれる木樋から落ちて水車を廻していた。そして、水車の動力源を使って歯車を廻し、臼を搗いたり、廻していたようである。

今回の調査では、最近の水車小屋の状態を確認したが、調査の目的は水車の構築時期と構造を明らかにすることであった。しかし、保存目的の意味合いもあり、滝壺の石積みの裏込めに使われた土砂からの遺物の混入の確認はできなかった。また、滝壺内部からも時期を特定できる遺物の出土はなかった。ただ、石積みの積み方などから築かれた時代は、江戸時代後半まで遡ると推定される。

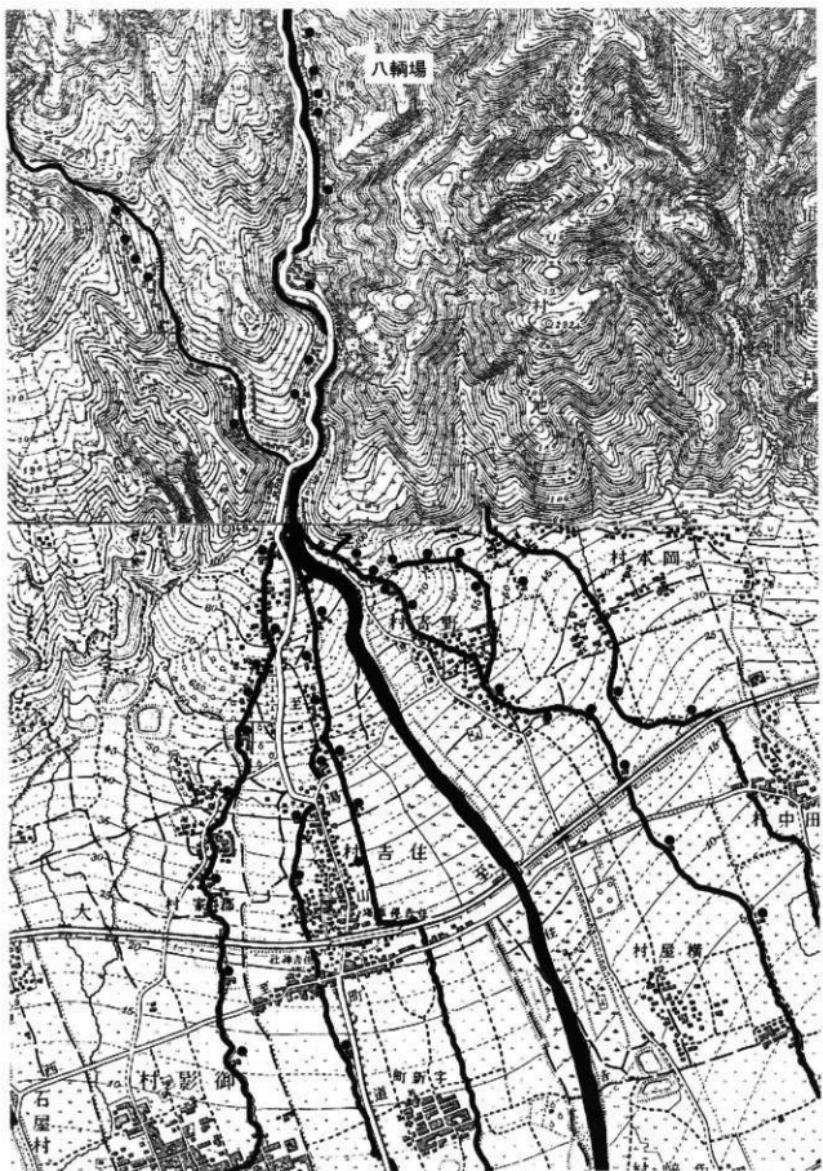


fig. 57 明治18年地形図 ($S = 1 : 10,000$) ●は水車

5. 住吉宮町遺跡

住吉宮町遺跡は弥生時代～中世にかけての遺跡で、とりわけ古墳時代後期には大小の古墳が群集して築かれたことが解っている。昭和60年度に共同住宅建設に伴い調査がはじめて実施され、これまでに40回以上の調査を実施してきた。これまでの調査で、JR住吉駅の付近と住吉幼稚園の周辺に古墳群が存在することが判明しており、特にJR住吉駅の北側には坊ヶ塚古墳という前方後円墳が、また駅の南側には住吉東古墳という帆立貝式古墳が存在しており、古墳群の中の盟主的な古墳が存在することが判明した。

一方国道2号線を境にその南側では古墳ではなく、弥生時代中期～平安時代の建物や、安土桃山時代の採石址などが発見されている。昭和63年の第11次調査では、主に平安時代の掘立柱建物、古墳時代後期の竪穴住居、弥生時代中期～古墳時代初頭の竪穴住居・河道を検出した。また、平成17年度の40次調査でも、採石址、古墳時代の竪穴住居を確認している。



fig. 58 住吉宮町遺跡調査位置図

1. 第42次調査

調査概要

当該地において共同住宅建設が計画され、試掘調査を行った結果、古墳の溝が検出され、埴輪片が出土したため、事業地全面について発掘調査を実施した。

基本土層

50cmほどの盛土の下に灰色のシルトから細砂系の堆積土（層厚10cm～40cm）があり、これが包含層となる。奈良時代～古墳時代にかけての土器が出土している。この下層が奈良時代～古墳時代にかけての造構面となる。この面で奈良時代の掘立柱建物と方墳を検出した。その下層の15cmほどの灰白色シルト層には弥生時代の土器が含まれており、弥生時代の包含層となる。この層の下層で、弥生時代の土坑を検出している。

検出遺構

第1造構面

第1造構面では、古墳時代と奈良時代の2時期の造構を同時に検出した。

奈良時代の造構としては、ピットを数個検出したのみで、建物として、まとまるような形とはならなかった。

調査区南東にて、4間×3間以上の掘立柱建物を確認した。柱掘形は直径40cm前後で、深さ50cmを測る。出土遺物からみて、6世紀末と思われる。

調査区北にて方墳を検出した。1辺9m以上、周溝底からの高さ1mを測る。古墳の墳丘斜面には葺石があり、当初は墳丘自体ももう少し高かったと考えられる。

この古墳の西側に周溝を切り込む形でもう1基の古墳を確認した。この古墳は西に隣接する調査区で以前に確認された古墳の東側の周溝の一部を兼ねていたと考えられる。

この2基の古墳には前後関係があり、周溝の断面観察の上からは、今回新たに確認した古墳の周溝がやや埋没し始めた時期にこの古墳の周溝を切って作られたのが西側の古墳と考えられる。西側の調査区においても他の古墳の周溝を切る形で作られており、古墳の時期としても一番新しい時期が想定される。

今回新たに検出した古墳から出土した遺物は、埴輪片と須恵器、滑石製紡錘車である。周溝に供獻土器等は認められなかった。遺物に乏しくこの古墳の時期を決定することは困難であるが、おそらく5世紀後半から末にかけての時期と考えられる。



fig. 59 古墳西周溝断面図



fig. 60 第1造構面全景

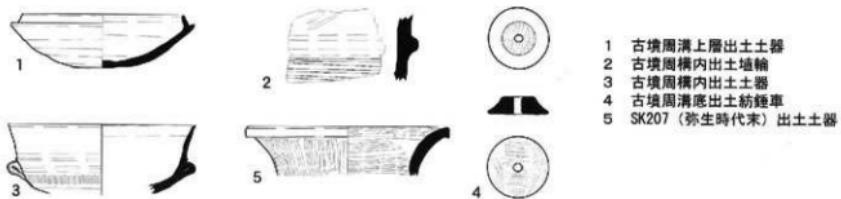


fig. 62 出土遺物実測図

第2遺構面

弥生時代の包含層中には多くの弥生時代末の土器が含まれており、この下層において、遺構を検出した。

遺構は明確なものに乏しく、確実な遺構としては、上坑のみであった。土坑は調査区東にあり、その大半は隣接する地区にあるため、詳細な形状は不明である。

規模は、幅3.2m、深さ25cmを測る。埋土は、黄灰色シルトで、埋土上部で、土器がまとまって出土した。時期としては、弥生時代末と考えられる。

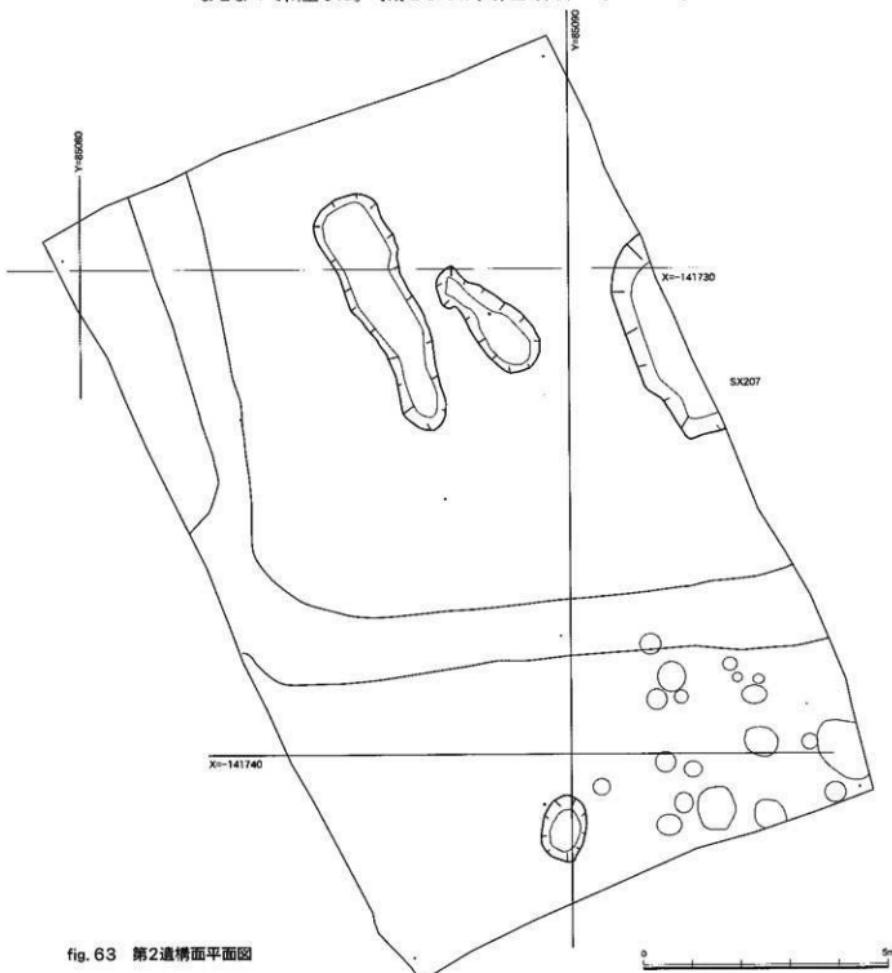


fig. 63 第2遺構面平面図

まとめ

今回の調査では、古墳を検出したことは大きな成果といえよう。また、隣接する地区で確認されていた古墳の規模が確定することができた。

2. 第43次調査

共同住宅建設によって遺跡の破壊される部分について調査を行った。ただし計画地の大半は過去の擾乱を受け遺跡が遺存せず、敷地南西部のみ遺跡が残るという状態であった。

狭い範囲の調査ではあったが、調査の結果、遺構面を2面確認し、第1遺構面からは古墳時代後期の竪穴住居1棟(SB01)が、第2遺構面からは弥生時代末ないし古墳時代初めの溝(SD01・02)などが確認されている。

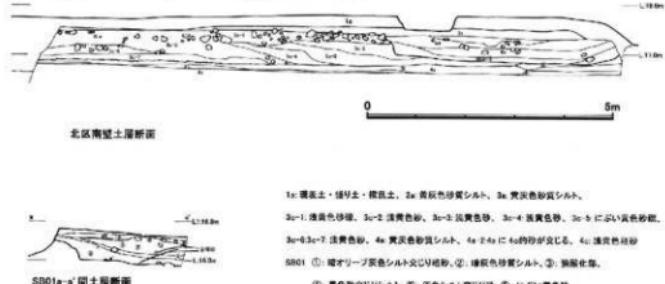


fig. 64 土層断面図

SB01

第1遺構面で検出された東西辺約5.0m、南北辺4.9m以上（南辺が調査区外）を測る方形の竪穴住居である。柱穴は確認できなかった。床面上で確認される上器のほか、住居の埋没過程でその凹みに投棄された土器類も多く出土している。出土遺物から古墳時代後期の住居であると判断される。また、埋土が黒色に近いため、地震による噴砂が明瞭に確認できた。

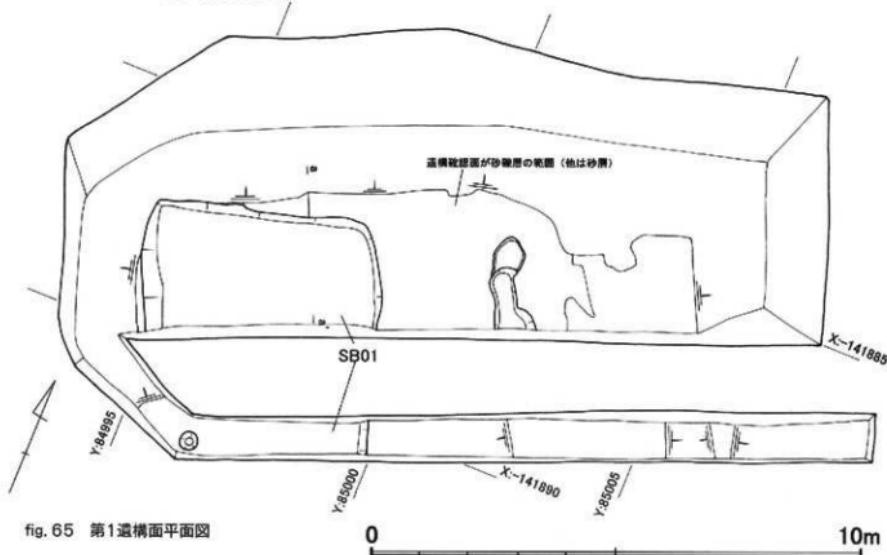


fig. 65 第1遺構面平面図

SD01

・02

第2造構面を覆う洪水砂2c層は東の住吉川方向からの堆積である。この中には甕など
弥生時代末ころの遺物が含まれる。この下層で検出された溝がSD01・02である。造構
内からの出土遺物はないが、上層の遺物から弥生時代末ないし古墳時代前半の遺構であ
ると判断される。

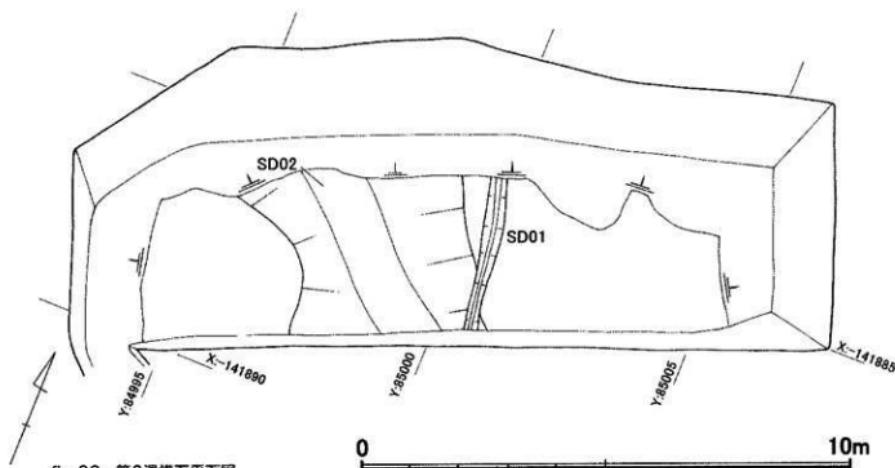


fig. 66 第2造構面平面図

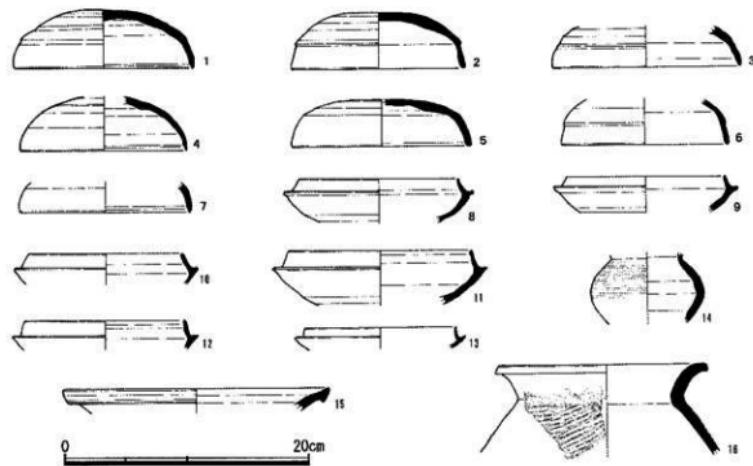


fig. 67 出土遺物実測図

1~15 : SB01、16 : 3c層 (1~15 : 須恵器、16 : 弥生土器)

3. 第44次調査

平成9年度に実施された調査地に近接している。その時の調査では、平安時代から中世の造構面と、弥生時代から古墳時代の造構面が検出され、特に6基の方墳が検出されていることから、今回の調査地でも古墳の検出が予想された。

調査概要

今回の調査地は既存の基礎による削平により、計画予定地の南西部の一部について調査を行なった。

基本層序

先述通り上層は事業者による掘削のため、詳細な堆積状況は曖昧であるが、先に実施した試掘調査の成果などを参考にする。現地表面から1.9m付近までは洪水層が分厚く堆積し、その下層に耕作土が確認された。その耕作土の下層にも時期不明の洪水砂が堆積し、その下層に耕作土・旧耕作土・茶褐色砂質土（平安時代遺物包含層）が検出され、さらにその下層に古墳が確認された。なお、旧耕作土からは平安時代後半～鎌倉時代初頭の須恵器などが出土した。なお、古墳検出面の高さはT.P.23.3～22.8mを測る。

古墳の上層土の暗灰色シルト質細砂には弥生上器と考えられる上器片が少量出土している。さらにその下層は暗灰色粘質土・灰黄色断続砂～細砂を薄く間層に挟み、茶灰色シルト質細砂（灰黄色粗砂～細砂含む）、さらに下には茶灰色～黄灰色粗砂～極細砂が厚く堆積する。灰黄色極細砂～細砂以下には遺物は確認されていない。

また、遺物包含層上面・周溝埋土の洪水砂・古墳下層に明瞭な埴砂の痕跡が数多く確認されている。

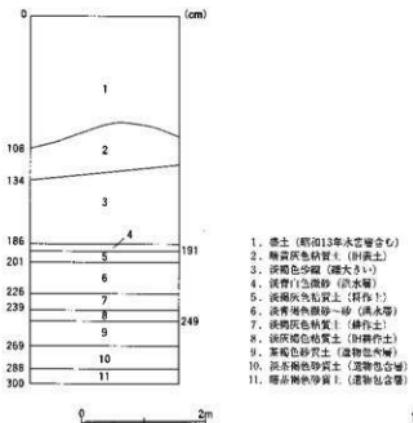


fig. 68 土層断面図

第1造構面

茶褐色砂質土および淡茶灰色細砂を取り除いた段階で検出した造構面で、方墳と考えられる古墳を2基検出した。

1号墳

調査区西部で検出した古墳で、東辺・北辺の一部を検出したのみに止まり全体の規模は明らかではない。検出長は東辺で約4.0m、北辺では約3.0mを測る。検出面付近に人頭大から拳大までの石を逆L字形に並べた状況を確認しており、古墳の葺石と考えられる。ただし、古墳の裾までは葺石は及ばず、検出面から中位の狭いテラス部分までで見られなくなる。周溝底から検出した墳頂までの高さは約1.2mを測る。古墳は弥生時代の包含層と考えられる暗灰色粘質土を基盤にし、灰褐色細砂及び茶灰色細砂などで盛土し、その外面に葺石を貼り付けていたものと考えられる。なお、主体部は調査区外に存在するものと考えられる。検出した東側の周溝は検出長約4.0m、幅約3.0m、深さは65cmを測る。上層から中層にかけては黄灰色粗砂～茶灰色極細砂といった洪水砂と考えられる分厚い堆積が見られる。下層には暗灰色シルト質極細砂・茶灰色極細砂などの堆積が見られた。下層からわずかに土器器質の土器の小片が出土したのみで、時期を確定できるような遺物は出土していない。周溝については、工事の掘削影響深度の関係上、トレンチを2ヶ所、完掘するのみに止まった。



fig. 69 1号墳検出状況



fig. 70 2号墳検出状況

2号墳

調査区の東部で検出された方墳と考えられる古墳である。この古墳についても、全体の規模を確認することができず、西辺・東辺の一部を検出したのみに止まる。検出長は西辺で約4.3m、東辺で1.5mを測る。このことから墳頂部の幅は検出面で6.0～6.5mを測る。また、周溝底から検出した墳頂までの高さは約50cmを測る。墳頂部は、洪水砂と考えられる淡茶灰色細砂により削平を受け中央部は大きく凹む。この削平のため主体部は確認されなかったものと考えられる。なお、この洪水砂の上面で、古墳時代のものと考えられる埋甕を1基検出した。埋甕は調査区東部中央付近で検出されたが、掘形は確認されていない。甕は土圧でつぶれたような状態で、内部からは胴部の破片が折り重なるように出土した。また、口縁部は周辺に散乱したような状態で出土している。このことから、この埋甕は後世に整地などにより削平され、上部は破損し、下部は土圧により損壊したものと考えられる。墳頂部南西部では10～30cm人の骨が集中して検出された箇所があり、他の調査でも確認されているコーナー部の隅石と考えられる。

東辺については落ち際を検出したに止まるが、西辺については周溝を検出した。検出長は約4.3m、幅約2.5～3.0m、深さ20～40cmを測る。1号墳と同様に上層から中層には洪水砂と考えられる黄灰色粗砂～茶灰色極細砂が堆積し、下層には暗灰色シルト質極

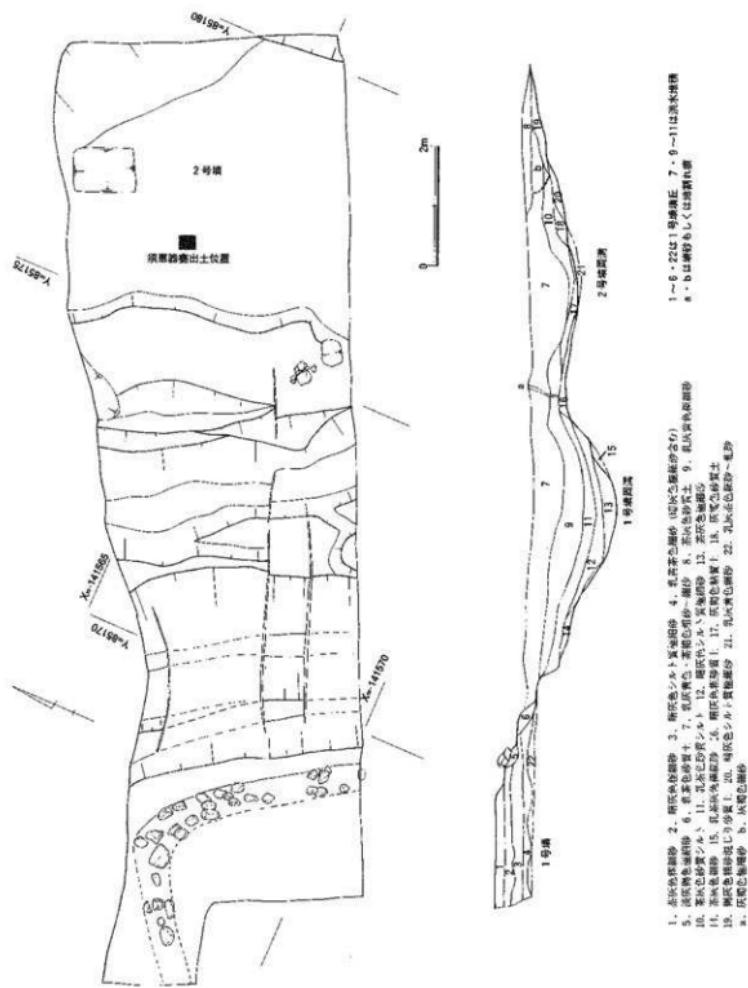


fig. 71 第1造構面平面図・断面図

細砂が堆積する。また、底面に接するように須恵器高杯・壺蓋・鏡（はそう）、土師器片がまとめて出土している。底面との間にあまり堆積が見られないことから、古墳の築造後、間もない時に溝に転落したものと考えられる。また、土器に混じり、石製防錐車（直径3.6cm・高さ1.6cm）が1点出土している。

下層検出遺構

古墳時代の落ち込みを2号墳の墳丘を掘り下げる過程で1基検出した。掘削深度の制限があり明確なプランとして検出されていないが、推定長5m以上・推定幅1m以上と考えられる。断ち割りにより、深さは検出面から約40cmを測ることを確認している。上層では洪水堆積層と考えられる茶色砂質シルト～黄灰色粗砂が約40cmの厚さで堆積し、下層には暗灰色粘質土を主体として湿地状の堆積が見られた。上層と下層の間からは須恵器が出土している。

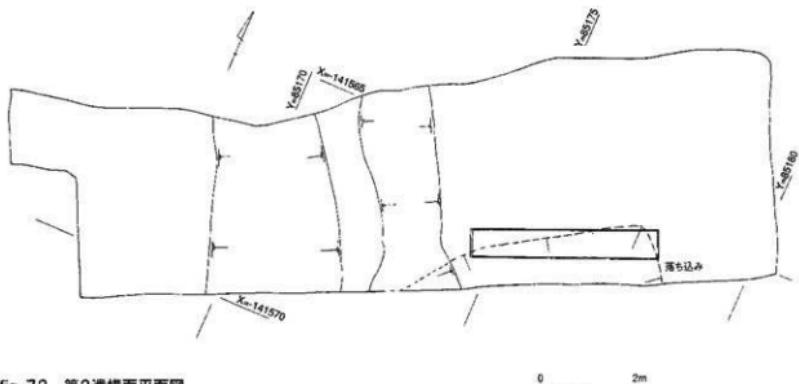


fig. 72 第2遺構平面図

まとめ

今回の調査では、平安時代～中世の遺構は確認されなかったが、古墳時代後期の方墳を2基・壺甕1基・落ち込み1基を検出した。

古墳の規模・方向性などは第29次調査の古墳とほぼ同様であると考えられる。1号墳は古墳の中位に葺石を貼り付ける形態を持ち、佐吉宮町遺跡の古墳群の中でも特異な存在といえる。また、2号墳は隅石と考えられる集石が確認され、西辺の周溝からは祭祀に使用されたと考えられる上器群と石製防錐車が確認された。これらの古墳を埋没させた洪水砂は周辺での調査成果などを参考にすると、古墳を構築して間もない時期に堆積したものと考えられる。そのため墳頂部上層洪水砂上で検出された壺甕については、洪水によって古墳が埋没した後に、すぐに構築されたものと考えられる。

周辺の調査では人物埴輪など埴輪をもつ古墳がいくつか見つかっているが、今回確認した古墳からは埴輪は出土していない。

下層確認のトレンチ内で検出した落ち込みについては、周辺の状況から新たな古墳の周溝である可能性がある。

6. 郡家遺跡

郡家遺跡は、六甲山南麓に形成された扇状地上に立地する遺跡である。昭和54年度の大蔵地区における発掘調査での奈良時代の掘立柱建物の検出以降、都市計画道路山手幹線・弓場線築造工事、個人・共同住宅建設に伴う発掘調査等、これまでに80次の調査が実施されている。弥生時代～鎌倉時代にかけての、六甲山南麓における複合大集落のひとつである。





fig. 74 土層断面図

第1遺構面

検出遺構

土坑

調査区全体で多くの遺構を検出した。3区は工事影響深度の関係から一部のみの調査

である。上坑20基、ピット40基、落ち込み1ヶ所を検出した。

長径0.8m~1.3m、短径0.7m~0.8mの楕円形のもの、直径0.6m前後の円形のものが存在する。深さは検出面から0.15m~0.5mである。土師器、須恵器の細片が出土した。

SK18

4区中央西側で検出した長径2.1m以上、短径1.1m以上、検出面からの深さは15cm前後の土坑で、南側が擾乱を受け、西側は調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。掘形内には人頭大から拳大の石が多く存在する。土坑内からは古墳時代の环身、环蓋、高环脚部などの須恵器や、土師器細片が出土している。また、土坑内出土の須恵器高环、环身付近を中心にして230余の滑石製臼玉が出土し、須恵器环身内からも51点が出土した。祭祀に関連するものと考えられる。SK18の周辺からも20点程の滑石製臼玉が出土していることから、臼玉は須恵器环身等の容器に収めて埋納したというよりも、ばら撒くように散布したものと推定される。須恵器は田辺昭三氏の編年によるTK23~47型式に併行するものと考えられる。

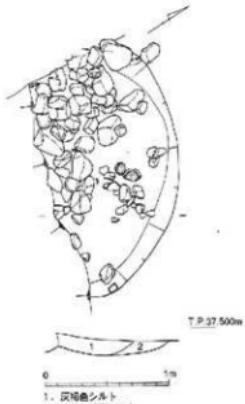


fig. 75 SK18平面図・断面図

ピット

検出したピットは、直径15~60cm、検出面からの深さ10~60cm前後で、いずれも建物等を構成するものであるかは、確認することができなかった。土師器、須恵器の細片が出土している。

SX01

2区東端付近で検出した幅2.2m~2.5m、検出面からの深さ15cm前後の落ち込みである。平安時代頃のものと考えられる須恵器の环蓋の他、土師器、須恵器の細片が出土している。

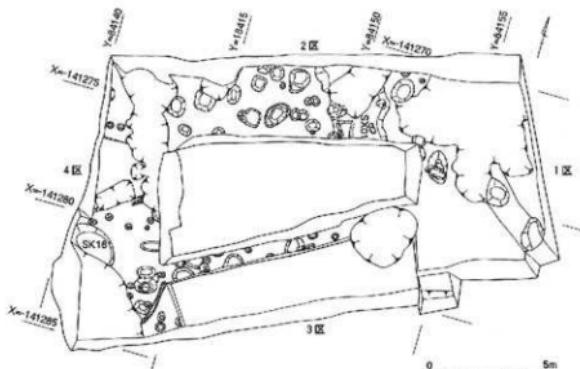


fig. 76 第1遺構面平面図



fig. 77 第1遺構面全景



fig. 78 第2遺構面全景

第2遺構面

1区は工事影響深度での遺構面検出であったため、遺構検出のみで調査を完了し、2区のみ遺構掘削を行なった。3・4区は遺構面が工事影響深度よりも下層となるため、調査は実施していない。堅穴住居1棟、土坑15基、ピット19基を検出した。

SB201

1区南端部で検出した堅穴住居で東西3.6m、南北1.3mを検出した。南・西側は調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。

土坑

長径0.6m～1.5m、短径0.7m～1.2m前後、検出面からの深さ20～65cm前後である。土師器、須恵器の細片が出土している。この中でSK201は2区西半部で検出した、直径75cm、検出面からの深さ40cmの土坑である。東半分を搅乱により切られている。土師器、須恵器の細片が出土している。

ピット

検出したピットは直径25~60cm、検出面からの深さ5~50cmで、建物等を構成する物であるかは、確認することができなかった。出土遺物は土師器、須恵器の細片が出土している。2区西端部付近で検出したSP201からはTK23~47型式と考えられる、須恵器壺蓋が出土している。

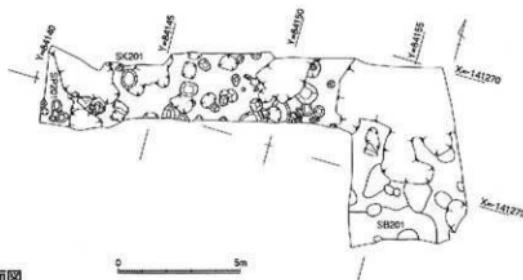


fig. 79 第2遺構面平面図

まとめ

東側隣接地で実施した第34次調査では古墳時代後期の遺構面と鎌倉時代の遺構面の2面が検出されたが、今回の調査では鎌倉時代の遺構面は確認されなかった。第1遺構面で検出した遺構の出土遺物の大半は微細な細片であり、時期の特定は困難であるが、SK18からはTK23~47型式と考えられる須恵器が、300点近くの滑石製臼玉を伴って出土した。古墳時代における祭祀のあり方を考える上で、貴重なデータと言えよう。SX01からは平安時代の遺物が出土しており、検出遺構は概ね古墳時代から平安時代にかけてのものと考えられる。

第2遺構面からは竪穴住居を含む、多くの遺構を検出した。SP201からはTK23~47型式に併行すると考えられる須恵器壺蓋が出土しており、他の遺構からの出土遺物もこれと同時期のものとして捉えられそうである。

今回の調査における検出遺構については、出土遺物の整理が完了しておらず、遺構の詳細な時期の特定については、これを待ちたい。古墳時代を中心とする多くの遺構、遺物の検出は、郡家遺跡を考える上で、大きな成果と言えよう。

2. 第82次調査

調査概要

当該地は郡家遺跡の城ノ前に所在するが、同地区の周辺の調査だけでも40回以上の調査が行われている。既往の調査で、弥生時代後期の集石墓や古墳時代後期の煙道を持つ堅穴住居などの構造や、水晶製と考えられる算盤玉などの遺物が検出されており、弥生時代後期や古墳時代後期の集落域を示す重要な成果が得られている。

基本層序

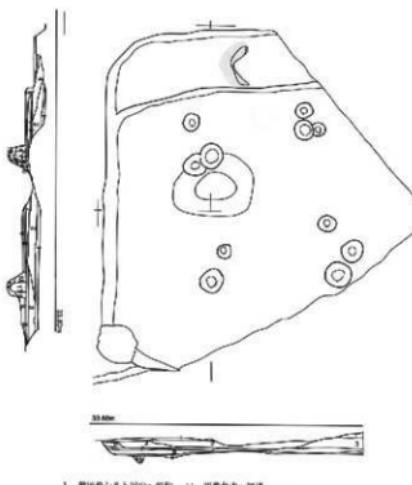
基本層序は、旧耕土・床土直下で、黄褐色シルト混細砂となり、遺構面となる。遺構検出面は、現状から60cm～80cmである。

遺構と遺物

遺構面は、削平をうけており、すべての遺構は同一面で確認されている。

主な遺構は、流路・掘立柱建物・堅穴住居である。

堅穴住居は、北側に竈をもつもので、4本柱の方形住居である。周壁溝は確認できていない。なお、この堅穴住居は建て替えを行っており、北に少しづらして作り変えている。作り替えにともない、張り床をしている。また、住居内からは、剣形模造品2点、臼玉13点の滑石製品が数点出土している。堅穴住居の時期は古い段階で5世紀末、新しい段階で6世紀前半と考えられる。



1. 剥離色化する土壌～粘膜
2. 岩底急傾斜の谷底
3. 黄褐色シルト混細砂
4. 黄褐色シルト混細砂
5. 剥離色シルト
6. 剥離色シルト混細砂
7. 黄褐色シルト混細砂
8. 剥離色シルト
9. 剥離色シルト混細砂
10. 剥離色シルト混細砂
11. 黄褐色シルト
12. 剥離色シルト混細砂
13. 黄褐色シルト混細砂
14. 黄褐色シルトブロック
15. 黄褐色シルトブロック混灰岩中～粘膜
16. 黄褐色シルト
17. 黄褐色シルト
18. 黄褐色シルト
19. 黄褐色シルト

fig. 80 堅穴住居平面図・断面図



fig. 81 調査区全景



fig. 82 堅穴住居完掘状況

掘立柱建物は、南北2間×5間（東西）以上の大型の建物で、柱掘形も直径60cm以上、柱痕跡も25cm～30cmの大きなものである。掘形内の遺物の出土が乏しく、時期の正確な特定はできないが、5世紀後半とされる。

流路は、奈良時代から平安時代にかけての堆積と、古墳時代前期から中期にかけての堆積があることから、2時期にわたり流路としての機能を果たしていたと考えられる。流路の規模は、幅7m以上で、深さは影響深度の関係から確認できていないが、六甲山南麓に見られる小河川が流れ続けていたと考えられる。

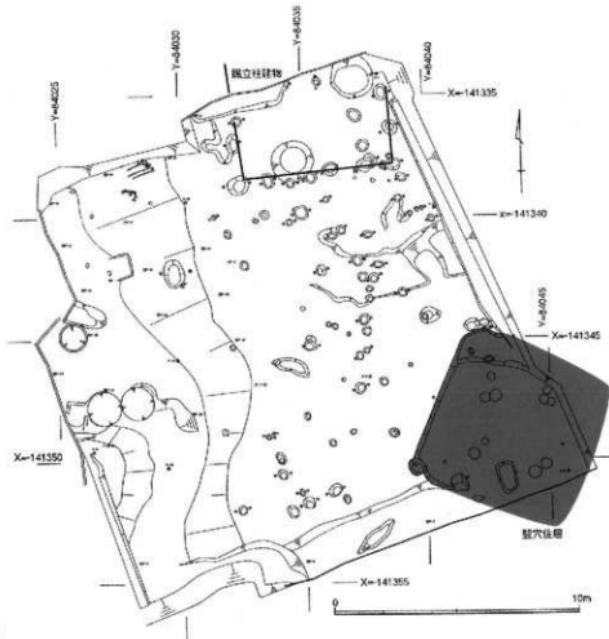


fig. 83 遺構面平面図

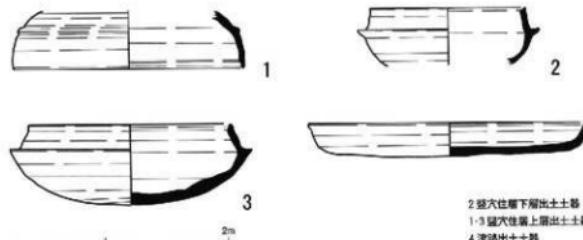


fig. 84 出土遺物実測図

まとめ

今回の調査において、流路・掘立柱建物・豊穴住居を確認した。特に建物を確認したことにより、この地区にまで、古墳時代の集落の広がりが確認できたことは重要な成果といえよう。また、流路の検出と時期の特定から、東から広がる古墳時代の集落の縁辺を明らかにしたことも大きな成果である。

7. 御影郷古酒蔵群 第4次調査

現在の灘五郷は、神戸市内に所在する魚崎郷・御影郷・西郷の三郷と、西宮市の今津郷・西宮郷の二郷で、明治19年（1886）に結成された浜津灘酒造組合での構成となっている。

江戸時代においては、西浜沿岸地域の「灘目」と呼ばれていた地方は、東は武庫川河口から西は旧生田川の近傍にいたる沿岸地域を総称して「灘」と呼ばれていた。明和九年（1722）、大阪・伊丹・池田と並び、上灘・下灘の二郷を形成した。その後に上灘は、東組（魚崎）・中組（御影）・西組（新在家・大石）に分郷し、これに下灘と今津郷を加えて江戸時代の灘五郷を形成している。そのうち、神戸市域では御影郷・魚崎郷・西郷の酒造地がある。これらの酒蔵も阪神・淡路大震災により大きな被害を受け、失われた酒蔵も少なくない。平成10年度には、周知の埋蔵文化財として神戸市埋蔵文化財分布図に登録されている。今回の調査は御影郷古酒蔵群内の、4回目の調査となった。

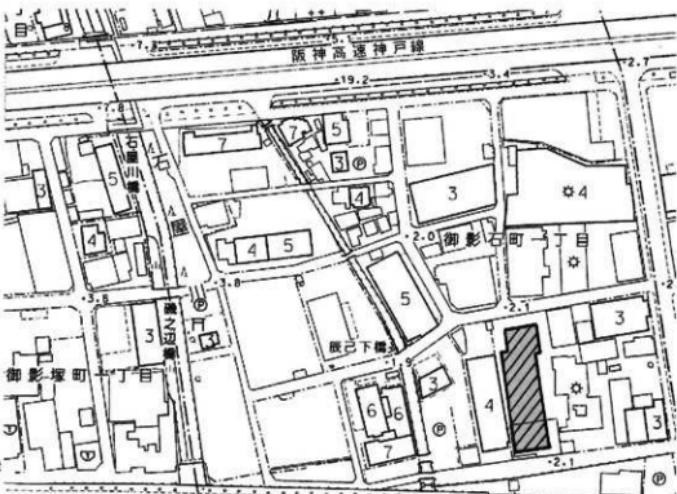


fig. 85 御影郷古酒蔵群
調査地位置図

調査の経緯

今回の調査地は、震災前まで酒蔵が存在していた場所で、この敷地に共同住宅建設の計画がなされたために、事業地内の埋蔵文化財の状況を確認するための試掘調査を実施した。その結果、酒蔵の建物の一部と考えられる遺構が確認された。発掘届出書の建築計画書と試掘調査で得た埋蔵文化財のデータを検討した結果、工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施することとなった。

調査概要

今回の調査では、江戸時代後期から近代に至る酒蔵遺構を検出することができた。検出された酒蔵は、3期の変遷を復元することができた。今回の酒蔵の遺構からの出土品は、きわめて少なく、各時期の酒造遺構の廃棄に際しても、精良な海砂によって埋め戻され、当時の遺物が混入することは稀であった。蔵の内部を清潔に保ち麹菌や酵母の力

を最大限に活用した蔵人の工夫によるものであるが、時代を推定する出土品が極めて少なく、時期の判断が困難であっが、第2期の基盤整備及び蔵の再建時期を概ね18世紀半ばから後半の時期に推定している。第3期はこれに統く19世紀以降と考えられる。検出された各期の酒蔵の特徴をまとめると以下の通りとなる。

当調査地内で酒造りを開始した第1期の酒蔵は、敷地の北端に東西棟の建物を配置し、内部では、麹づくりや玩づくり、もろみづくりの掛米に適した蒸米をつくる釜場と洗米等に使用する水を得るために井戸が作られ、洗い場が存在した。その南には、醸酢が進んだもろみを圧搾し、酒と酒かすを分離させる槽場が配置されている。その背後は海浜であり、酒蔵の構造は検出されなかった。よって、第1期の酒蔵は、北側の街道（山側）に面して門戸を開き、酒米などの原材料処理から醸造作業の進行が、北から南へ、街道側から海側へ進行する蔵建物の配置と酒造施設の配置を行っている。

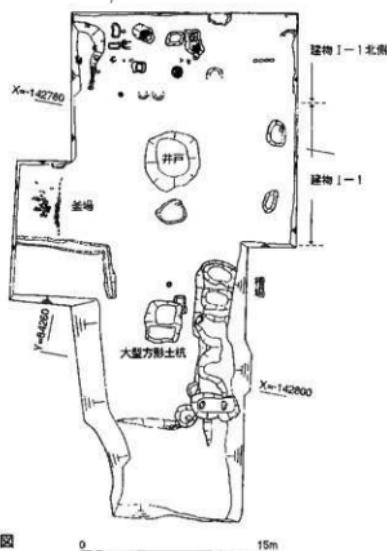


fig. 86 第1期酒蔵平面図

0 15m

第2期の酒蔵は、酒蔵の経営の方針を第1期の酒蔵が大火災によって被害を受けたことを期に、敷地の基盤整備を行い各酒造工程の蔵建物の配置を大きく変更する時期であり、酒蔵の経営方針を大きく変えた時期と考えられる。

基盤整備にあたっては、海浜側に敷地の南境を設定し、海浜を埋め立て、敷地の南境に堅固な石垣を構築している。この石垣は海に面しており、防波堤の役目を果たしていたものと考えられる。敷地の南半部の整地を行い、原材料の一時保管や貯蔵など蔵を運営するための東西棟の蔵建物を敷地の北端の海に面した位置に建築している。この建物には附属建物が取り付き、酒造作業にあたる杜氏や蔵人の生活の場である会所部屋が存在する。

この建物の北側は、中庭となっており、敷地の中心にあたるところに井戸を作っている。建物の痕跡は検出できなかったが、米洗いの場があった可能性がある。敷地の北端には、東西棟の蔵建物が南北に2連棟で築造され、明確な重ね蔵の形式をとっている。

この蔵の南棟内には、蒸米をつくる釜場と、醸酵の進んだもろみを圧搾し酒と酒かすを分離する槽場の酒造施設が配置されている。北棟内は、平坦な床面が特徴であるが、柱を支える礎石の掘形の四隅に柱を立て上げるための支柱の痕跡があり、複階の建物であった事が推測され、蒸づくりやもろみの醸酵等、醸造作業を行った仕込み蔵であったことが推測される。

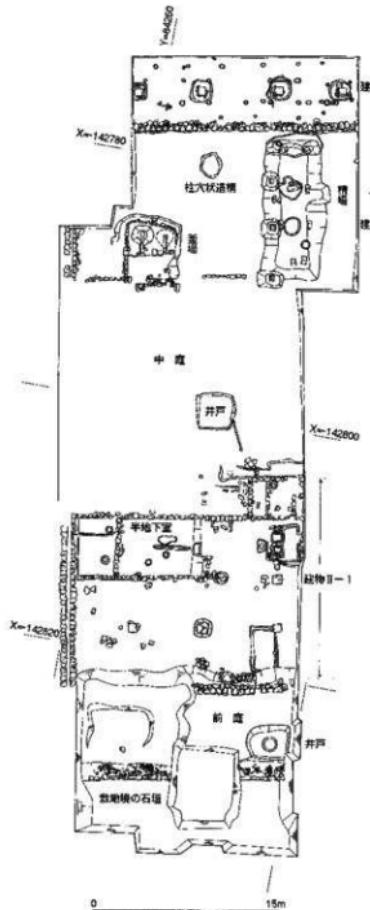


fig. 87 第2期酒蔵平面図

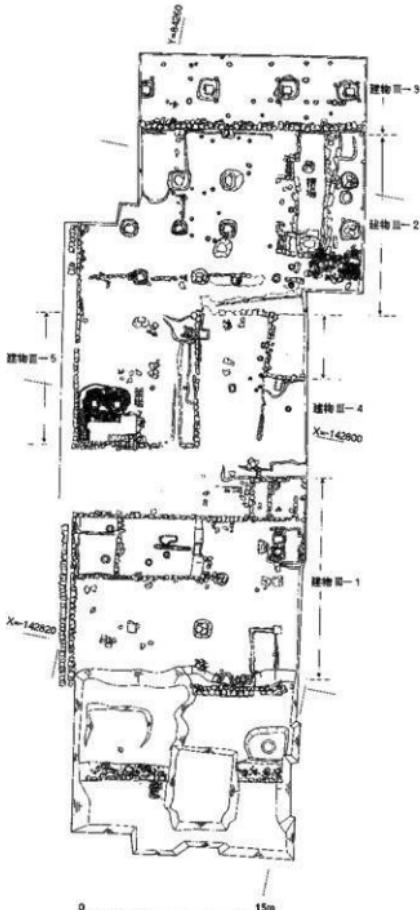


fig. 88 第3期酒蔵平面図

第2期の酒蔵は海岸線の整備を行い、海側に面し、前蔵・大蔵が六甲山を背にした建物配置となっており、酒造りの工程が海側から山側へと進み、できた酒は海側へ搬出する流れとなっている。

第1期から第2期へは概ね18世紀後半代と考えられるが、防波堤を構築するなど蔵前面の海岸整備を行う背景には、江戸への酒輸送を樽回船によって行っていたと推測される。

第3期の酒蔵は第2期の酒蔵を基盤にしつつ、敷地北端に建てられていた重ね蔵の前蔵（南棟）の部分の建て替えを行い、建物の西端と東端に南北棟の建物を2棟増築することと、酒造施設の配置換えによって、原材料の保管・原材料の処理・醸造作業（仕込み）・圧搾作業・製品の貯蔵などが蔵建物別に行われ、これらの蔵を連結させることによってより効率のよい酒造りが行われていたことが窺える。

以上のように、3期にわたる酒蔵の変遷を明らかにすることができた。特に、建物配置の変遷とそれに伴う酒造施設の配置を復元できたことが大きな成果と言える。

検出された第2期の酒蔵は、大規模な海岸線の整備を行うと共に、酒蔵の敷地の基盤整備を行い、建物配置も効率的な酒造工程の導線を意識した建物配置となっている。

今回の調査で検出した大量の花崗岩石材を使用した建物構築や石垣構築、大規模な埋め立などは、灘五郷が江戸時代中期以降、江戸への下り酒の輸送に樽廻船の活用を盛んにし、これまで江戸への下り酒の酒造地として栄えた、伊丹や池田などの酒造地にかわって台頭した歴史的背景を裏付けている。その要因は、海上輸送に有利な海岸地帯に酒造地を持ち、樽廻船が充分に活用できしたことや、寒造りに適した気候などの立地的要因や宮水などの原料水に恵まれたことや、水車精米によって高品質の酒米を大量に得られた原材料的要因、大量消費地の江戸に対して販売網や商圈を拡大させ、大量生産を行えるだけの蔵などの施設に多額の財を投入できた資本力の充実などの様々な要因が考えられている。今回の発掘調査で明らかになった3期の酒蔵の変遷は、灘五郷の発展過程的一面を反映するものであり、貴重な発見となった。

なお、本調査内容については『御影郷古酒蔵群 第4次調査 発掘調査報告書』が刊行されているため、詳細は報告書を参照されたい。



fig. 89 第3期酒蔵全景



fig. 90 第3期槽場検出状況

8. 篠原遺跡 第25次調査

篠原遺跡は六甲山南麓、都賀川左岸の傾斜地に立地する。これまでの発掘調査で縄文時代から中世に至る遺構・遺物が確認されている。縄文時代では中期の堅穴住居・後期の上坑等も確認されているが、とりわけ晩期の遺物が顕著で、東北地方北部の土器である大洞式土器や遮光器土偶などが出土し、この時代における遠隔地の交流を示す事例としてこの遺跡の名を著名なものとしている。弥生時代は後期の堅穴住居など、中世は掘建柱建物などの遺構が確認されている。



fig. 91 篠原遺跡
調査位置図

宅地開発によって遺跡の破壊される部分約40mについてこれを行った。

調査の概要

調査地は、北および東に高くなる傾斜面上にあたるため、耕作地および宅地造成により調査地の北東側は削平をうけ、表土直下で地山面となる。西寄りはこの擾乱を受けず、1936年ころの宅地造成とともに盛土された現表土下に、その時代までの水田耕土(2a層)、3a層、須恵器を含む4a層と続き、この下で弥生時代中期～奈良時代の遺物を含むかつての表土層となる5a層が確認できる。この層の下面が遺構確認面となる。

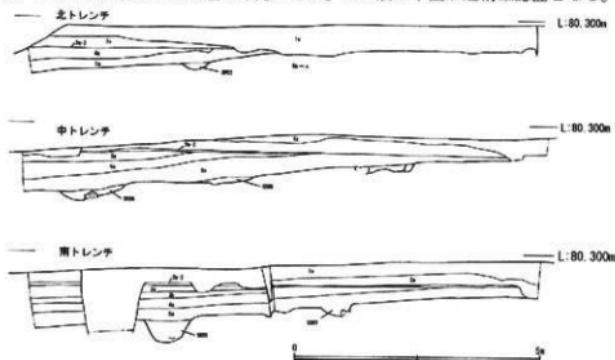


fig. 92 土層断面図

1a: 黄褐色・褐色土、2a: 褐黃土 (1936年電線化以前の耕作土)
 2a-2: 盛土下の土、3a: 黄褐色砂紋ヒリシルト
 3b: 黄褐色砂紋ヒリシルト、全般に風化、4a: 淡褐色砂紋ヒリシルト、含泥層
 5a: 黑色砂紋ヒリシルト、特生時代耕土

SK05 南トレンチ西部、北壁にかかるかたちで検出された径約90cmの円形の土坑である。遺構確認面からの深さは約45cmで、奈良時代ごろの楕・製塩土器が出土している。

SP09・11 SP09・SP11は深い柱穴であり、SP11は柱痕も確認されている。両者の間隔は約1.8mと柱間としてほどよい距離となっており、あるいは掘立柱建物を構成する柱群の一部の可能性がある。

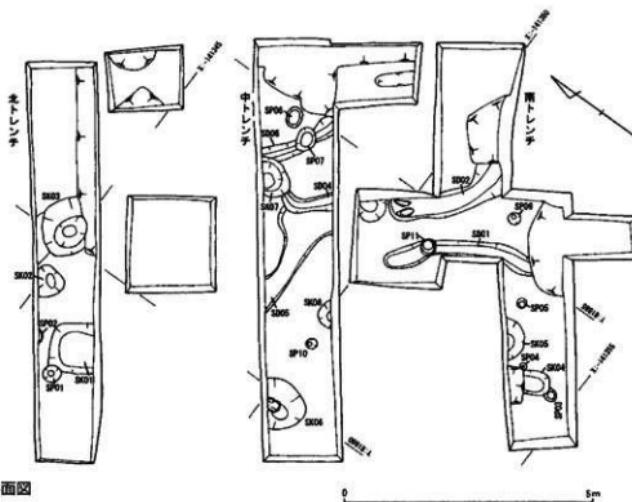
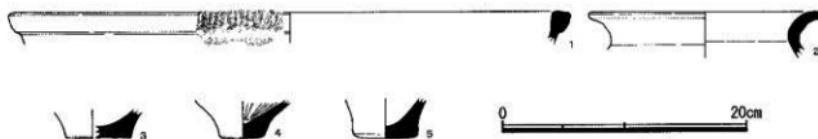


fig. 93 造構面平面図



1:中トレンチ3~4層、2-3：南トレンチ5a層、5-6：中トレンチ5a層（すべて弥生土器）

fig. 94 出土遺物実測図

まとめ 調査区の東寄りは削平を受けていたが、5a層下で土坑・柱穴・溝などかなりの密度で遺構が存在していることを確認できた。中世の遺構は確認されなかったが、上層の3a層・4a層からは中世の遺物が出土している。

SK05からは奈良時代ごろの遺物が出土したが、この時期の遺物の存在が篠原遺跡で確認されたのは初めてであり、今後、この遺跡に律令期の遺構・遺物が存在することを認識していかなくてはならない。

9. 都賀遺跡 第19次調査

都賀遺跡は、六甲山系に源を発する都賀川の中流域東岸の扇状地上に立地する遺跡である。昭和63年以降、断続的に調査が行われ、今回の調査が19次目となる。これまでの調査では、縄文時代早期、弥生時代中期、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭、奈良時代末～平安時代、鎌倉時代などの集落の実態が徐々に明らかとなってきた。

調査地は現在登録されている遺跡の範囲の南東端に位置している。調査地は山手幹線の南側に接しており、北から南に傾斜する地形がこの地点においてさらに南側に傾斜する変換点に位置している。

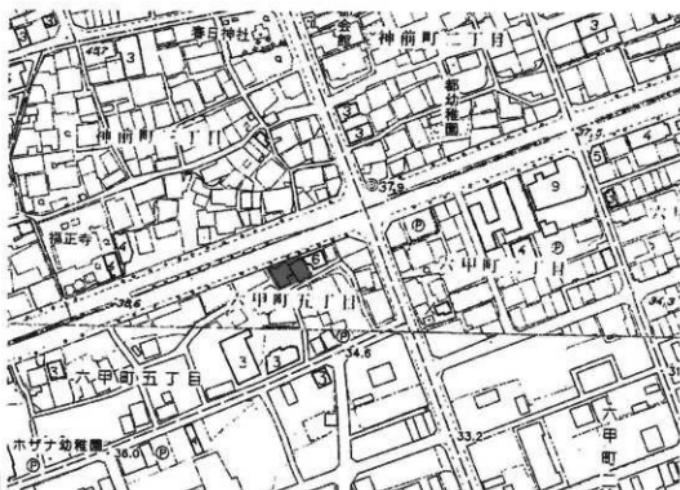


fig. 95 都賀遺跡
調査地位図

調査概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴い、工事影響範囲に存在する埋蔵文化財の記録作成を目的とした発掘調査である。事前に実施していた試掘調査において、弥生時代の遺物包含層や構造が確認されていた。発掘届出書の建築計画書と試掘調査で得た埋蔵文化財のデータを検討した結果、工事による掘削が埋蔵文化財に影響をおよぼす範囲について、発掘調査を実施した。

調査は計画建物基礎の工事影響範囲の形状（建物基礎部・フーチング部分と連結する地中梁部分）で調査を行った。発掘調査は、事前に弥生時代の遺物包含層の上面までの土壌を除去した状態で実施した。設定した調査区内からは、弥生時代中期（II～III様式）の遺物包含層を検出した。

基本層序

現地表面（標高38.3m～37.2m）から下に1.12mから1.2m前後までが盛土であり、以下、1.65mまで近世以降の陶磁器を含む砂やシルトの堆積であった。その下層で弥生時代の遺物包含層である黒褐色シルトが堆積していた。遺物包含層の下層は、北側では暗

灰色礫混じりシルト、南側では人頭大の礫を非常に多く含む灰黒色砂質土が続く地山となる。地山面は、調査区の北端で標高36.6m前後、南端では35.5m前後で10mの間で1.1m前後の傾斜面となっている。



調査地土層剖面図（調査地内側 南北土壌断面図）
 1. 灰色砂質土（近世の耕作の有無を問わず） 2. 黒褐色砂質土（灰化・粘多く含む・多生土の片持土）
 3. 黑褐色砂質土（強化土壌台地） 4. 灰色砂質土（粘土・土壌台地）
 5. 黑褐色混じり砂質土（弱化土壌少耕無） 6. 灰色シルト
 7. 地山 黒茶褐色細砂（10~30mmの大粒の礫を多く含む）
 8. 地山 灰色化した混じりシルト

fig. 96 土層断面図

弥生時代の遺物包含層は厚さ30~40cmで、北から南に傾斜する地形に堆積し、北から南へ徐々に厚くなっている。遺物包含層からは弥生時代中期（II~III様式）の土器片が出土している。遺物包含層を除去し、遺構の検出を行ったが遺構は検出されなかった。

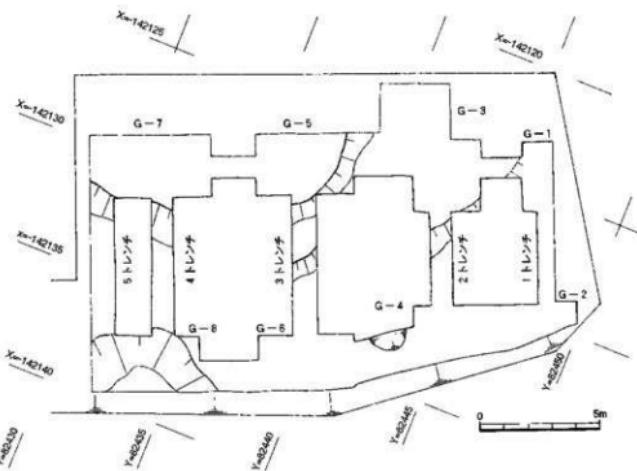


fig. 97 遺構面平面図

調査の結果、弥生時代中期（II~III様式）の遺物包含層を検出することができた。遺構については調査範囲内で検出することはできなかったが、調査の状況から、北から南へ傾斜する地山面に遺物包含層が斜め堆積しており、すぐ北側に弥生時代中期の集落の存在を想定させる資料となつた。当調査地は、都賀遺跡の南東端に当たるもので今後の周辺の調査成果とともに遺跡の環境を復元することができる貴重な資料となつた。

10. 西郷古酒蔵群／大石東遺跡

西郷古酒蔵群／大石東遺跡は、西郷川の扇状地に位置している。この地区的埋蔵文化財は、2種類に大別されると今日までの調査で判明している。

その第1は江戸時代から明治・大正・戦前の昭和までの各時代の酒造業関連遺跡で、これを「西郷古酒蔵群」と総称する。神戸で、江戸時代から栄えた酒蔵の近世生産遺跡であり、震災以降、酒蔵が徐々に住宅やショッピング街へと変貌していくに従って、調査も増加しており、それに伴い江戸時代から、昭和にかけての酒蔵の変遷と共に、酒造技術の進展の状況も徐々に明らかとなっている。

第2は酒蔵に先行する時代の遺跡を指し、「大石東遺跡」と呼んでいる。ひとつの場所に二つの遺跡の名称が存在するが、これは同じ場所で発見された遺跡であってもその遺構の時代・性質によって遺跡の名称が異なるものである。



fig. 98 西郷古酒蔵群／
大石東遺跡
調査位置図
(S = 1 : 5,000)

1. 第4次調査

今回の調査では、酒造関連遺構3ヶ所、近世遺構1ヶ所、奈良時代から平安時代の遺構を調査地全域で複数箇所確認した。酒造遺構の時期は、近世末～近代におさまるものである。3つの酒造遺構はどれも実際に清酒を醸造する酒蔵の施設の一部である。

近世遺構については、おおむね18世紀後半～末の範囲に収まるもので、水路状の石組である。3度にわたる補修痕跡を確認しており、最終的には調査地直近を南流する都賀川の冲積作用の影響を受けて埋没したものである。

奈良時代～平安時代の遺構は、地山層上に残されていたもので、掘立柱建物が6棟、竪穴建物が1棟、耕作痕、柵、溝などが配置された家地の痕である可能性が高い。

奈良時代の竪穴建物検出例は珍しく、今回のように家地の中心に意図的に配置されたのではないかと考えられる例は興味深い。

なお、当該調査については『西郷古酒蔵群／大石東遺跡 第4次調査発掘調査報告書』が刊行されており、詳細は報告書を参照されたい。

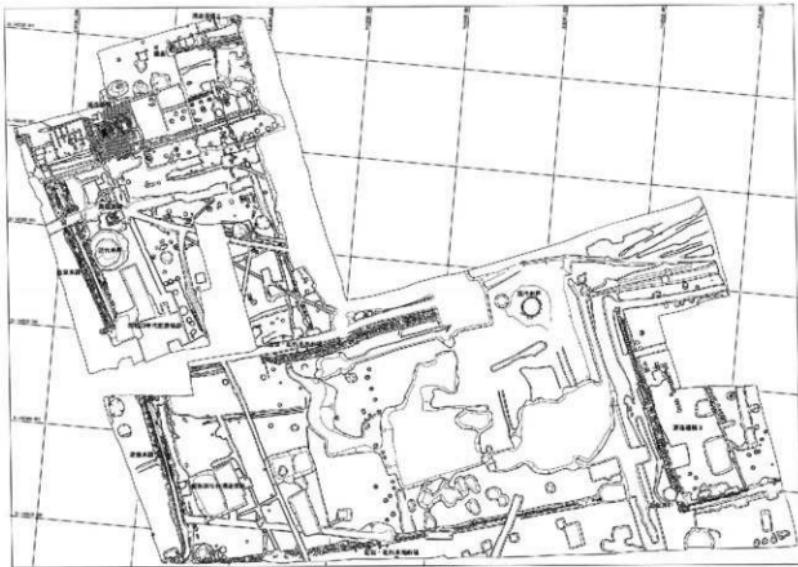


fig. 99 近世及び近代遺構面平面図

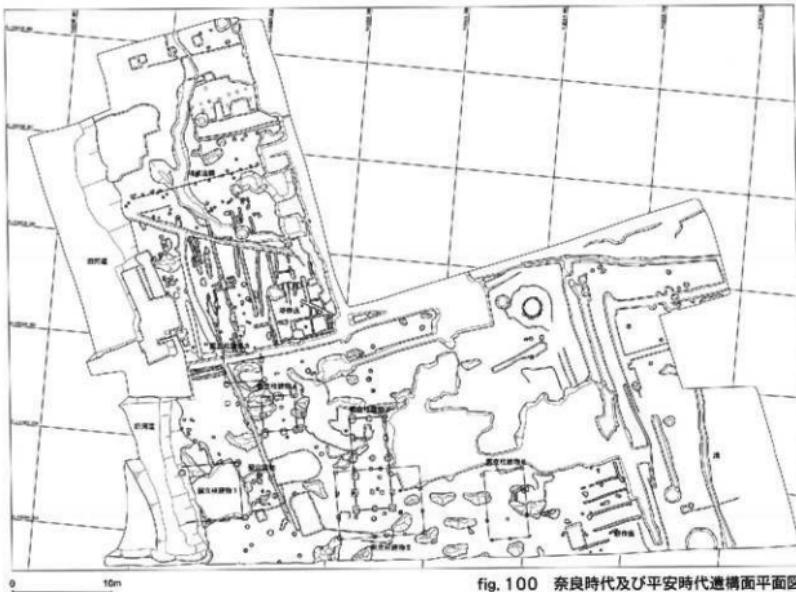


fig. 100 奈良時代及び平安時代遺構面平面図



fig. 101 近世水路



fig. 102 近世水路

2. 第5次調査

道路拡幅に伴い、遺跡の破壊される福徳長酒造の酒蔵の一部の石垣部分についてのみ、発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序は、コンクリート厚さ15cmを取り除くと、さらにコンクリートが厚さ20cmにわたって張られていた。このコンクリートは、粗いもので、戦後まもなくの頃に使用されたコンクリートの特徴に類似している。このコンクリートの下は、黄茶色砂が40cmほど堆積しており、これを取り除くと、黄色シルトの人為的に埋めたと考えられる層が10cmほど存在する。この層の下に一部ではあるが、石垣が検出された。

遺構と遺物

第1遺構面

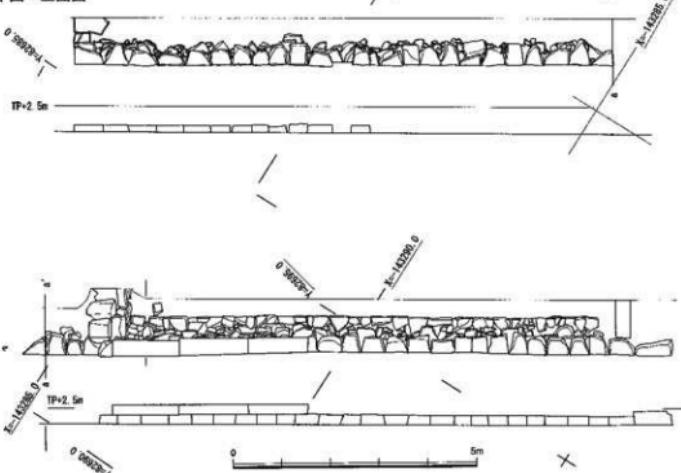
コンクリートの状況や、石垣の石材の使用状況から、戦後のものと考えられる。おそらく、空襲で、焼失した酒蔵を復旧するに当たって、石垣等が積みなおされ、コンクリート等で補強されたものと考えられる。

石垣A

高さ40cmほどが、道路面から確認できる。方柱状の石材が、三段ほど積まれている。このような石材を使用して石垣等を築くのは、明治時代以降と考えられる。なお、この石垣は、調査区北端にて東に折れるのを確認している。また、調査区南端付近にて、東に延びる新たな石垣を確認しているほか、調査区中央付近でも、東に延びる石垣を確認している。中央付近で確認した、石垣は、方柱状の石材は1段のみであった。

これらの石材の使用状況からみて、明治時代以降と考えられ、コンクリートとの関係から、概ね戦後まもなくのものと考えられる。

fig. 103 石垣A平面・立面図



石垣B

調査区南半にて確認した石垣である。石垣Aとは石の面を逆に向けており、単純には、石垣Aとともに壁面を構成しているかのように見える。この石垣は調査区中央付近で東に折れており、地下室内に作る石垣なのかは、調査区の制限から判断としない。ただし、使用されている石材が、自然面を多く残しており、石積みの状況からみて、幕末以前に遡る可能性を含んでいる。この石垣の上面が、戦後のコンクリートに壊されていることを考えると、戦前以前の石垣であることは、明らかである。

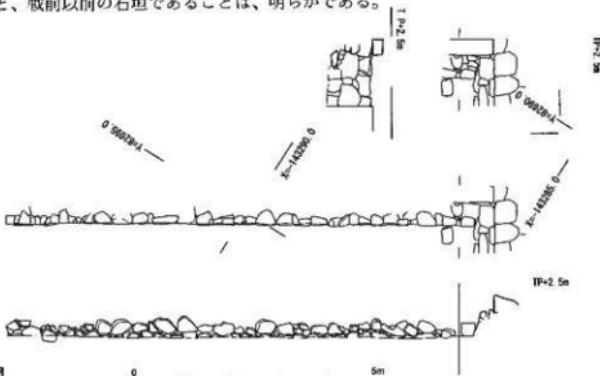


fig. 104 石垣B平面・立面図

まとめ

今回の調査では、石垣を検出し、その時期を特定した。これらの石垣が、前蔵・大蔵の西側の石垣と考えられるが、調査区が限られており、断定することは困難である。

今回は出土遺物等に乏しく、昭和・大正期の時期決定の根拠となる煉瓦の出土もなかつたため、およそその時期を推測するに留まった。

11. 西求女塚古墳 第16次調査

西求女塚古墳は、六甲山系から流れ出す中小河川によって形成された扇状地の末端に築造された前方後方墳である。処女塚古墳・東求女塚古墳とともに古くは万葉集など書物に記載されている。

昭和60年度からは古墳の残存状況・規模・時期の確認のためにトレンチ調査が実施された。後方部の墳頂付近で鼓形器台と呼ばれる山陰系の土器が比較的まとまって出土した。そのことにより、この古墳が山陰地方とのつながりをもつ人物であつて推定されている。また、平成6年度には、南くびれ部を調査した結果、葺石が直線的に並んだ状態で検出され、墳形が前方後方墳であることが明らかになった。西求女塚古墳の調査で最も注目を集めたものが、平成5年の調査である。後方部の調査を行い、慶長の大地震によって倒壊した堅穴式石室が検出され、その中から画文帶神獸鏡・三角縁神獸鏡や鉄製品などの副葬品が出土したこと有名になった。

また、平成15年度に実施された第14次調査では、古代のものと考えられる大型の掘形をもつ掘立柱建物が検出された。古代にはこの周辺に「敏馬泊」と呼ばれる港があり、それに関連する遺構と考えられている。平成9年度第9次調査でも、奈良時代から平安時代の遺構・遺物が確認されており、西求女塚古墳の周辺に当該時期の遺構が広がっていると予想される。

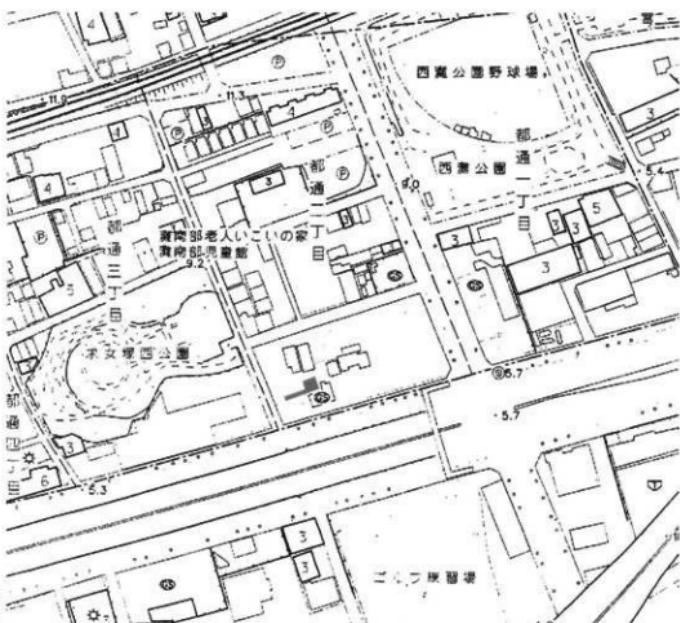


fig. 105 西求女塚古墳
調査地位置図

調査概要

今回の調査地は前方部の南東付近で、平成9年度の第9次調査地点に接する。

調査区は東側の四角形の部分を1区、西側のトレーンチ状の部分を2区とした。

基本層序

現地表面から盛土・灰色砂質土（IH耕作土）・淡灰色砂質土（旧耕作土）・茶灰色砂質土（旧耕作土）・暗灰褐色砂質土（バイラン多く混じる）・暗茶灰褐色砂質土（バイラン混じる）が堆積する。その直下に無遺物層である灰白色砂礫・黒褐色極細砂質土・黒灰色極細砂質土が堆積するのが確認された。一部には上面に奈良～平安時代ごろの遺物が入る灰黑色砂質土が堆積する。なお、灰白色砂礫は古墳の基盤層と同様のものと考えられる。

検出遺構

灰白色砂礫および黒褐色・黒灰色極細砂質土の上面で遺構検出を行なった。その結果、1区で自然の落ち込みの肩部を検出したが、明確な遺構は確認されなかった。なお、落ち込みについては、調査区北壁や調査区に設定した断ち割りトレーンチなどの断面観察から、調査区北西隅で検出された灰白色砂礫を基盤層として南東方向に大きく落ち込むことが判明した。しかしその埋土である黒褐色極細砂質土からは遺物が出たせず、時期は不明である。

なお、2区については、大半が擁壁の掘形や、排水管により搅乱を受けており、調査が不可能な状態であった。

1. 盛土
2. 灰色砂質土
3. 淡灰色砂質土
4. 黑褐色砂質土
5. 黑灰褐色砂質土（小標記する）
6. 暗茶灰褐色砂質土
7. 茶灰色砂質土
8. 基盤層
9. 灰白色砂質土
10. 塔黃茶色砂質土
11. “吉灰褐色極細砂質土”より基盤砂質土
12. 黑灰色極細砂質土
13. 黑褐色極細砂質土（小標記する）
14. 茶灰色極細砂質土
15. 灰白色砂礫
16. 黑灰色極細砂質土
17. 灰黑色砂質土（走査包帯層）
18. 塔灰褐色砂質土（小標記する）

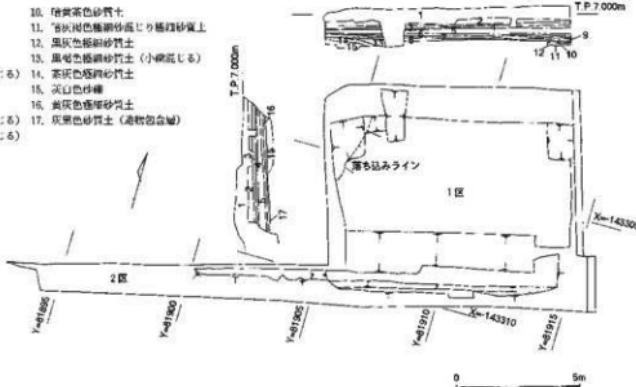


fig. 106 遺構面平面図・断面図

まとめ

今回の調査では、遺物は出土したもののは、明確な遺構が検出されていない。2区では大半が擁壁の掘形や、配水管で搅乱されていたが、1区の状況から、調査地が遺跡の縁辺部であったことが確認された。

また、落ち込みについては、急激な落ち込み具合から海岸段丘の端部の可能性がある。

12. 岩屋北町遺跡 第2次調査

岩屋北町遺跡は西郷川によって形成された扇状地に立地する弥生時代から中世の集落遺跡で、平成3年度（1991年）に開発事業に伴う試掘調査および発掘調査によって、その存在が初めて確認された遺跡である。（平成18年度現在：遺跡面積約4,000m²）

調査地の位置

遺跡が立地する地点は、現在の海岸線から約750mの内陸に位置する。これは明治末から昭和初期にかけて神戸港の発展に伴い、臨海地域の埋め立てが進んだ結果である。埋め立てが行われる以前の明治19年に作成された地図によると海岸から約350mに位置している。

周辺の遺跡

周辺の海岸沿いの遺跡としては、古墳時代前期の西求女塚古墳とその周辺の奈良時代の集落跡、弥生時代から中世の集落遺跡である日暮道跡。西郷川の右岸標高5m前後の海岸線辺砂堆上に位置する中世後期の集落である脇浜西遺跡などある。また、遺跡南方の海岸は、奈良時代には敏馬の浦（崎）とよばれ、風光明媚なこの周辺の風景を当時の歌人柿本人麻呂や田辺福麻呂などが『万葉集』に多くの歌を残している。

当調査区周辺は、古代より交通の要所にあたる地域であったが、明治時代末から昭和初期にかけての沿岸部および市街地の急速な発展により旧地形の改変が著しく、かつて遺跡の北西にあった割塚古墳もその詳細が不明となっている。

調査の経緯

今回の調査は共同住宅建設に伴い工事影響範囲に存在する埋蔵文化財の記録作成を目的とした発掘調査である。事前に実施した試掘調査の結果、開発敷地から6世紀末頃の須恵器が出土する河道が確認された。そのため、工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施することとなった。

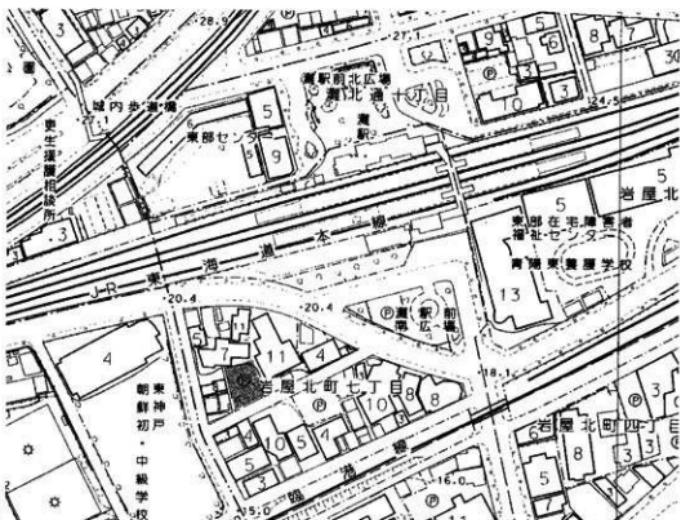


fig. 107 岩屋北町遺跡 調査地位置図

調査概要

調査は計画建物基礎の工事影響範囲の形状で調査を行った。調査区内からは、古墳時代後期の自然流路1条と詳細な時期が不明な自然流路1条と土坑1基が検出された。以下、検出された遺構について記述する。

基本層序

調査地の現地表面から遺構が検出された地表面（遺構面）までの基本層序は、地表面から30~40cm前後までが盛土であり、その下層に厚さ20~35cm程度の耕作土がある。耕作土下層に厚さ10~20cmの黒灰色砂質土があり、中世の遺物を包含する。

今回検出した流路1は、この下層、暗褐色砂質土の上面（標高19.5m前後）で確認された。



fig. 108 土層断面図

流路1

(SR-1)

調査区の北東隅から南西隅に南流する幅5.2m、深さ2.1mの流路である。工事の影響深度の関係で流路の底を確認することができたのは調査区のはば中央で、そこでの観察では断面形状はV字形に近い形状である。底近くの下層では疊交じりの粗砂、中層は細砂やシルトが混ざり合った中砂、上層は細砂が混ざり合った暗褐色砂質土で埋まっている。上層から下層まで古墳時代後期（6世紀後半ごろ）の須恵器や上師器の破片が出た。

流路の堆積層の観察から比較的緩やかな安定した水の流れがあったと考えられ、水田耕作に伴う水路など当時の生業や生活に利用された可能性が考えられるが、流路の全体像が確認できた範囲が狭く断定はできない。また、出土した土器類に水流による摩滅が少なく、古墳時代後期の集落が近くに存在する可能性が高いと推測される。

流路2

(SR-2)

流路1の東岸に並行するように南流する自然流路で、東側の岸（肩部）は調査範囲の外にあり、流路の幅や深度は明らかではない。流路内の堆積は、疊交じりの粗砂で、激しい流れのためか流路の底が抉られた状態である。出土品もなく詳細な時期は不明であるが、堆積状況から自然流路1の以前の土石流のような一時的な流れの一つと考えられる。

土坑

(SK-1)

調査区の北西隅で検出された直径50cm、深さ20cmの平面の形状が円形の土坑である。暗褐色砂質土の埋土に山上土は含まれていなかった。検出された層位が自然流路1と同一で、自然流路の最上層を覆う土と同質であり、同時期の可能性が高いが出土品が存在せず詳細な時期は不明である。

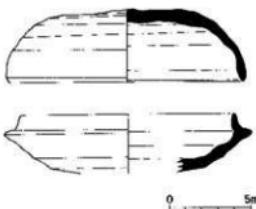


fig. 109 出土遺物実測図

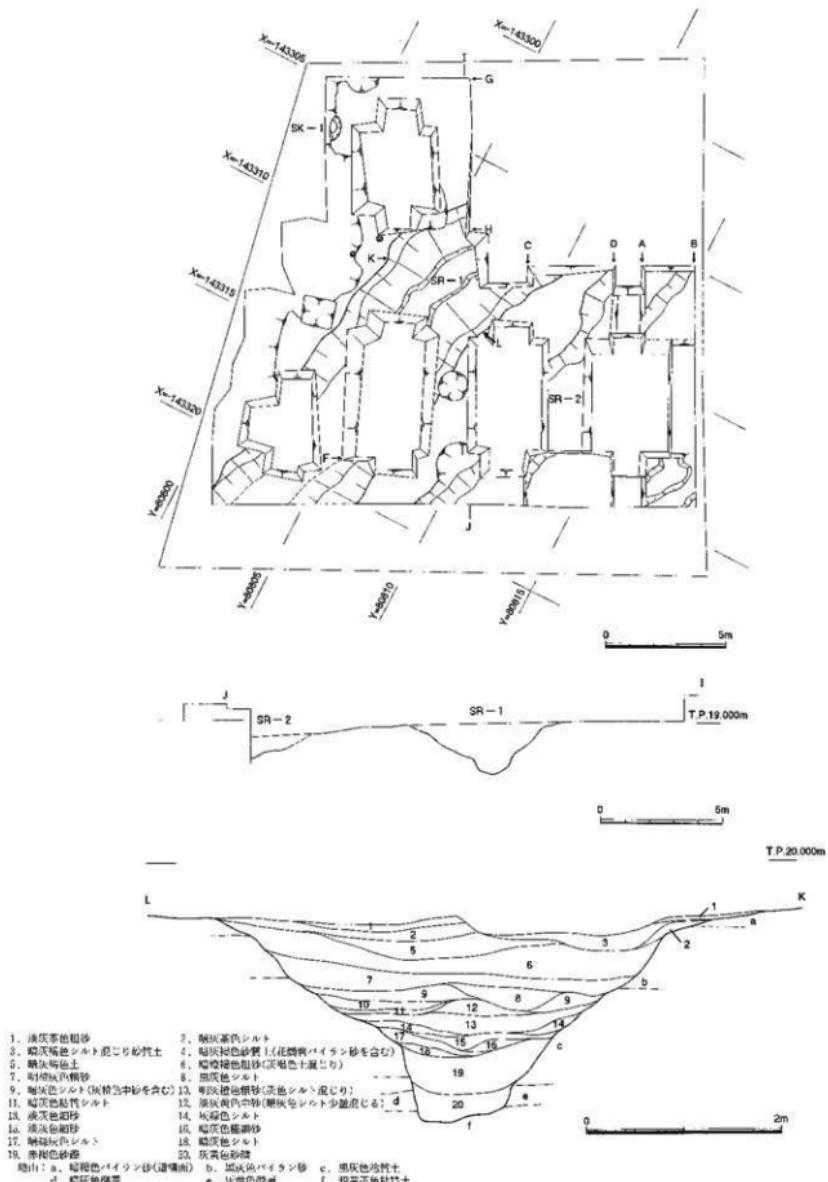


fig. 110 遺構面平面図・SR-1断面図



fig. 111 SR-1断面



fig. 112 遺構面全景

まとめ

今回の調査では古墳時代後期の遺構面を検出し、自然流路2条と土坑を検出した。検出された自然流路1は、本調査地の北東に隣接する第1次調査地（平成4年度調査）で検出された自然流路の一つの流れと考えられるが、奈良時代・平安時代の出土品はなかった。

また、第1次調査では鎌倉時代の土坑墓が確認されたが、今回の調査では鎌倉時代に相当する遺構は確認されなかった。

岩屋北町遺跡の発掘調査は今回で2回目でありその全体像は未だ明らかではないが、今回出土の自然流路1は比較的緩やかで安定した流れの流路で、その水流による影響をほとんど受けていない古墳時代後期（6世紀末頃）の須恵器や土師器片が出土している。

今回の調査では工事影響範囲・深度の関係で流路の状況が明らかとなった範囲は狭く、断定はできないが、古墳時代後期の集落が近くにあり、この流路も当時の生業や生活に利用されていた可能性が考えられる。今後、発掘調査を重ねる機会があれば、今回の調査とあわせて遺跡の環境復元に役立てたい。

13. 日暮遺跡 第29次調査

日暮遺跡は、生田川と西郷川に挟まれた地域に位置し、遺跡の標高は約13m～17mである。この遺跡は昭和62年に発見され、これまでの調査結果から弥生時代後期に始まり、古墳時代、奈良時代～平安時代、鎌倉時代～室町時代、近世の各集落が確認されている。



fig. 113 日暮遺跡
調査地位置図

調査概要

今回の調査地は、共同住宅の建設に伴い平成17年度に調査を実施しているが、設計変更に伴い新たに遺跡の破壊される部分について、発掘調査を再び実施している。

基本層序

基本層序は、搅乱と盛土、暗灰褐色砂質土（近代以降耕作土）、淡灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土（近世以降耕作土）、暗黃褐色砂質土（上面が遺構面）と続く。

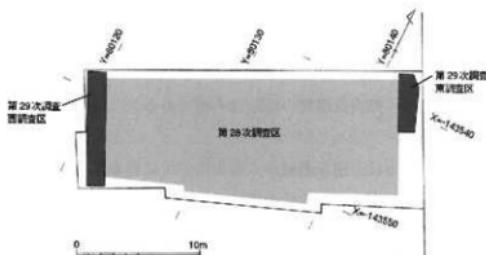


fig. 114 調査区配置図

遺構と遺物

遺構は、鎌倉時代～室町時代頃と考えられるピット、土坑と共に、江戸時代の土坑、小溝等も検出している。遺物は、鎌倉時代～室町時代頃の須恵器、土師器の他、江戸時代の陶磁器や瓦片も出土している。

東調査区

SX01

出土した陶磁器から、江戸時代と考えられる。土坑中央の底部に、曲物を据え付けている。おそらく水を溜める機能を持つ遺構であろう。

上坑は径約80cm×80cmの不整円形で、深さ約10cmを測り、灰色砂質土が堆積している。曲物は径約45cmで、高さ約10cmを測る。曲物内部には、暗灰色砂質土が堆積している。

SK01

遺物は出土していないため、確実な時期は不明である。径約90cm×50cm以上で、深さ約18cmを測る、不整円形と考えられる土坑である。暗褐色砂質土が堆積している。

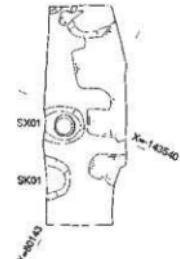


fig. 115 東調査区遺構面平面図

0 2m

西調査区

SK02

調査区の南端部で確認した、不整円形の土坑である。径約50cm以上×74cm以上で、深さ約50cmを測り、暗灰色砂質土が堆積する。江戸時代の瓦当を含む瓦片が多く出土している。

SK03

径約66cm×50cm以上で、深さ約28cmを測る土坑である。暗褐色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。

SD01

幅約50cmで、深さ約12cmを削る、東西方向に延びる溝である。暗褐色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。

SD02

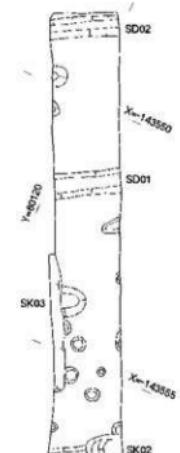
幅約42cmで、深さ約13cmを測る、東西方向に延びる溝である。暗褐色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。

ピット

調査区内に散在する状況が確認できる。建物や柵列は確認できない。径約15cm～30cmで、深さ約10cm～30cmを測り、暗褐色砂質土が堆積するピットと暗灰褐色砂質土を堆積するピットが確認されている。

遺物は出土せず、確実な遺構の時期は不明である。

fig. 116 西調査区遺構面平面図



まとめ

今回の29次調査では、出土遺物から確実に中世に遡る遺構は、確認できなかった。遺構面を覆う近世耕作土からは中世の遺物が出土しているが、遺構から遺物の出土は希薄であり、時期決定が困難である。

遺物を出土した遺構は、SX01とSK02が確認できる。共に近世の遺構である。他に遺物を出土した遺構は確認できず、結果的に中世に確実に遡る遺構は確認できていない。

同じ調査地内で、平成17年度に28次調査を実施している。28次調査の結果では、近世の遺構と共に中世に遡る遺構も確認されている。その調査結果を合わせて考えると、暗褐色砂質土の堆積する遺構が、中世に遡る遺構である可能性を持つ事が考えられる。

14. 雲井遺跡

雲井遺跡は、神戸の中心地である三宮駅前の神戸市中央区雲井通・旭通に位置している。遺跡は六甲山系の南側の扇状地末端付近に営まれており、これまでに23回の発掘調査が実施されている。その結果、繩文時代から中世に至る遺構・遺物が確認され、神戸の中心部において、現在でも遺跡が良好に遺存していることが明らかになっている。



fig. 117 雲井遺跡
調査地位置図

1. 第24次調査

調査概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴い、その基礎の影響する範囲について発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序は上部が削平されており、盛土直下で、遺構面となる。以下、暗灰褐色シルト層・黒灰色シルト・黒褐色シルト・暗茶褐色シルトと続く。層厚は、それぞれ、15cm～20cm程度である。

遺構と遺物

第1遺構面では、石組みの溝に切られた溝2条を確認した。石組みの溝は、角礫を含むもので、切り込み面も最上位からの切り込みによって作られている。出土遺物からみても、幕末から明治にかけての時期に使用されていたと考えられる。この溝に切られていたSD01・02は深さ80cmを測る規模の大きなもので、幅4m以上である。

出土遺物からみて、鎌倉時代前半には埋没していたと考えられる。なお、切り合ひ関係からみると、SD01がSD02に切られていることが断面観察によって確認されている。第2遺構面以下では顯著な

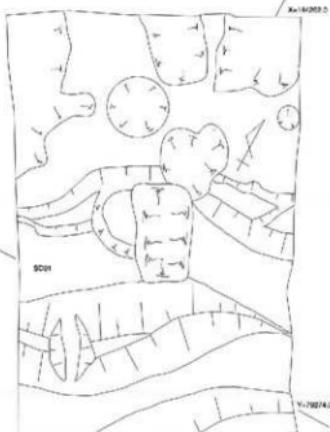


fig. 118 遺構面平面図

遺構は確認できていない。遺物の出土もなく、古墳時代以前の遺構・遺物については希薄になる地区なのかもしれない。

まとめ

今回の調査では、少量の遺物と溝を検出したにすぎない。ただ、この溝は西へ約150m離れた地点の第19次調査で確認された溝と規模や形状が類似している事からつながると考えられ、溝の規模並びに、長期間にわたって、作り替えられている点などを考えるところこの溝が坪塙溝である可能性が指摘される。これによって、この周辺における平安時代の条里の成立と条里の方向性を知る手がかりを得たといえよう。

2. 第25次調査

調査概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴い、その基礎の影響する範囲について発掘調査を実施した。なお、この調査地は、第16次調査の南に位置している。

基本層序

基本層序は上部が削平されており、盛土直下、現地表面より40cm下で造構面となる。以下、暗灰褐色シルト層上面が第1造構面で弥生時代、黒灰色シルト上面が第2造構面で弥生時代前期である。層厚は、それぞれ、15cm～20cm程度である。茶灰色砂疊層が40cmほど中間層として存在しており、今回は遺物の出土は認められなかったが、周辺の調査成果によれば、縄文時代中期から後期にかけての層である。その下面、黄灰色シルト（層厚10cm）並びに暗灰褐色シルト上面（20cm～30cm）が第3造構面であり、縄文早期（神並上層式を中心とする時期）、黄褐色砂混シルト層（層厚20cm～30cm）上面が第4造構面で、神宮寺式土器を中心とする時期で、この面から集石遺構を確認している。この層の下面で、一部に黒灰色シルト混細砂の層（層厚10cm）が存在し、上器もわずかながら出土している。黄褐色砂混シルト層下面でも集石遺構1基を確認していることから、本来、縄文時代の造構面は、1面から5面存在していたものと考えられる。縄文時代早期の層は厚いところで、80cmに達する。

第1造構面

SD01

調査区の西に位置する幅1.0m、深さ20cmの南北方向から西に折れる溝である。土器がほとんど出土しておらず、時期は特定できない。

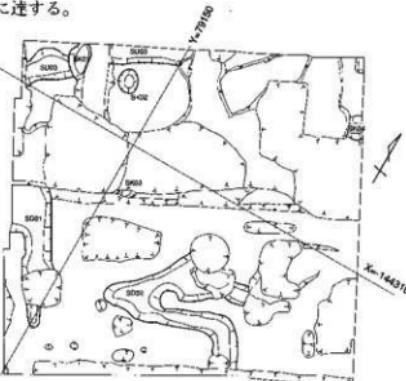


fig. 119 第1造構面平面図 (S = 1 / 200)

SD02

調査区中央部に位置する幅1.0m、深さ20cmの蛇行する溝である。土器は若干の出土をみるが、時期を特定できるまでには至っていない。

SD03

調査区の北に位置する幅1.3m、深さ20cmの南北方向から西に折れる溝である。土器がほとんど出土しておらず、時期は特定できない。

SK01

調査区の北西隅に位置する上坑である。そのほとんどを擾乱で失われており、造構の規模や形状は不明である。遺物は若干であるが山土にしており、時期としては、弥生時代前期と考えられる。

- SK02 調査区の北西に位置する土坑である。直径80cm、深さ30cmの円形の土坑である。遺物の出土はなく、時期は不明である。
- SK03 調査区の中央付近に位置する土坑である。そのほとんどを擾乱で尖われており、遺構の規模や形状は不明である。遺物の出土はなく、時期は不明である。
- SK04 調査区の北東隅に位置する土坑である。そのほとんどを擾乱で失われており、遺構の規模や形状は不明である。遺物は若干であるが出土しており、時期としては、弥生時代前期と考えられる。

第2遺構面

- SK201 調査区の中央部に位置する幅1.8m、深さ40cmの円形の土坑である。サヌカイトや土器が出土しており、弥生時代前期と考えられる。

- SK202 調査区中央部に位置する幅1.8m、深さ20cmの円形の浅い土坑である。土器が多量に出土している。弥生時代前期と考えられる。

- SK203 調査区の中央部に位置する幅1.8m、深さ20cmの不定形の土坑である。土器がほとんど出土しておらず、時期は特定できない。

- SK204 調査区の中央部に位置する幅1.3m、深さ20cmの円形の浅い土坑である。土器がほとんど出土しておらず、時期は特定できない。

- SK205 調査区の中央付近に位置する幅50cm、長さ2.0mの不定形の土坑である。遺物の出土はなく、時期は不明である。

- SK206 調査区の東に位置する幅1.5m、の不定形の土坑である。出土遺物がなく、時期は不明である。

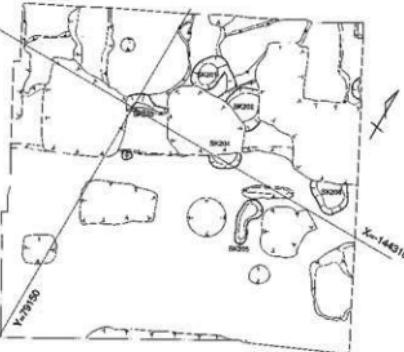


fig. 120 第2遺構面平面図 (S = 1/200)

縄文早期遺構面

縄文時代の遺構面は、縄文時代中期から後期の土器が若干出土する砂礫層の下面に存在する。土層は、細かくは4層に分層可能であるが、間層の砂礫層下面から、上器は多量に出土したが、特に遺構は検出されなかった。今回の調査においては、確実に直的に広がっている黄褐色砂混シルト層上面を第2遺構面として2層に分けて調査を行った。

黄褐色砂混シルト層上面の第2遺構面からは、集石土坑が3基確認された他、黄褐色砂混シルト層下面でも集石土坑が1基確認できた。

出土遺物としては、上層内には神並上層式の土器が中心であり、下層からは、神宮寺式または、大川式のもっとも新しい段階の土器がそれぞれ中心となって出土している。また、胎土からみて、下層からの出土遺物は、搬入であるものが多く認められる。

集石土坑1

調査区の西に位置する土坑である。明確な落ち込みは確認できていない。石材の集中している範囲は、東西約1m、南北1mである。小振りの石材が集中しておかれていた。石材としては花崗岩が中心であるが、一部に砂岩および片岩も使用されている。

集石土坑 2

調査の過程で確認できたものの、明瞭に落ち込みの肩を検出できていない。集石土坑の最下層部分において、その範囲を確認できたものの、本来はもう少し規模は大きなものであったと考えられる。

集石の範囲は南北1.7m、東西3.0mである。土坑の落込みの範囲はこれよりさらに広がるものと考えられる。集石は、西端と東端に小規模に石材が集中する箇所があるが、それ以外は緩慢な分より片岩も使用されている。

第七章

作業過程で、集石の可能性を確認し、慎重に遺構検出を行い、落ち込みの肩を検出し、調査を実施した。遺構の範囲は、東西4.1m、南北2.6m、深さ13cmの浅い楕円形の十坑である。集石は東西にその分布が分かれているとみられるが、ほぼ全域に分布しており、石材の分布にあまり粗密は認められない。石材は5cm未満のものから20cmを超えるものまで様々であるが、10cm前後の石材が大半を占める。石材は花崗岩が中心であり、他の石材はほとんど認められない。

集石土坑 4

黄褐色砂混シルト層下面で検出した土坑である。明確な掘形は確認できなかった。集石土坑最下部において、わずかに上坑の範囲を検出したにすぎない。東西1.1m、南北87cm、深さ18cmを測る浅い十坑である。石材は、10cmから20cmのものが中心である。ほぼ中央付近に集中して石材は置かれていた。右材は花崗岩が中心であるが、十坑の床面にてサヌカイト片1点が

遗物

最大層厚で80cmに及ぶ縄文時代の遺物包含層内からは、雲井遺跡第4次調査に次いで多量の遺物が出土している。縄文十器では、上層からは神业上層式を中心的に、文様として

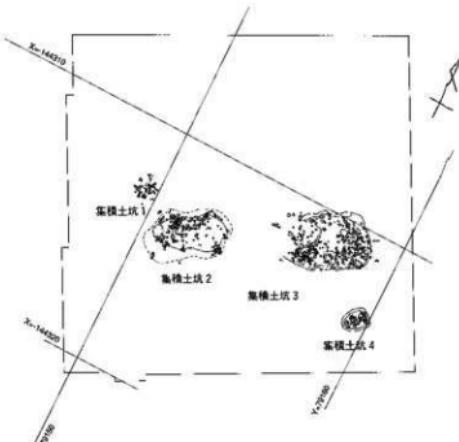


fig. 121 銀文時代遺構面全体図 ($S = 1/200$)

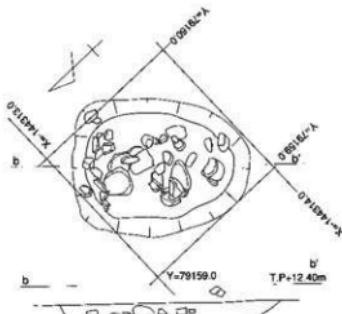


fig. 122 繪文時代集石土坑4平面図・断面図 (S = 1/30)

ては、綾杉文（矢羽状文）や山形文と格子目文の組み合わせの土器などが出土し、下層からは、神宮寺式（大川式の最も新しい段階）を中心に格子目文（平行線文）とネガティブな格円文の組み合わせの土器などが出土している。

また、石器も多数出土している。サヌカイト製の石鏃、石錐、搔器、削器が出土している。さらに、これらの石製品の他に、人為的に持ち込まれた搬入砾が多量に出土している。その形状は直径数cmから30cmぐらいまでのものがほとんどで、石材は9割以上が花崗岩である。また、焼石も多く含まれているが、その用途は明らかでない。

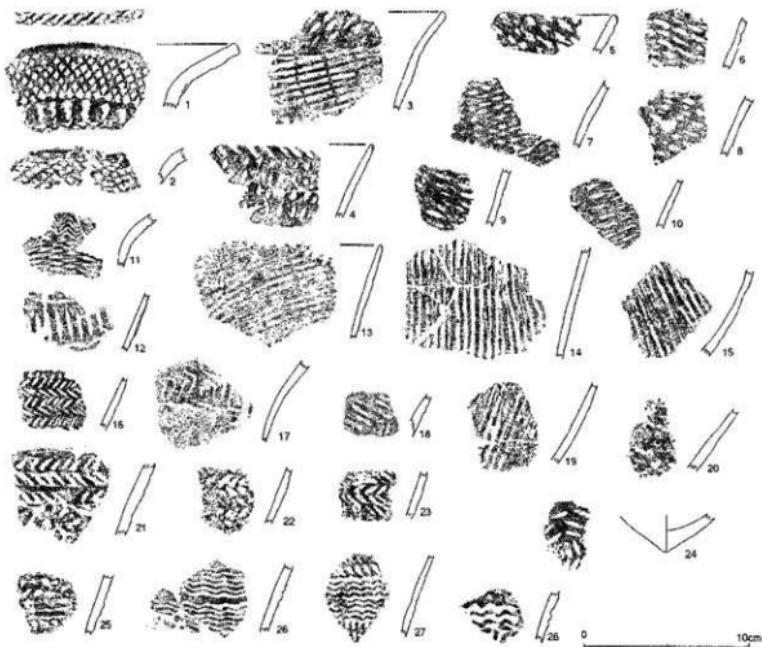


fig. 123 繩文土器実測図

まとめ

今回の調査では、弥生時代の遺構・遺物と共に縄文時代早期の遺構・遺物も確認した。弥生時代では、第19次調査で確認されている方形周溝墓の続きとも考えられる溝が検出できたが、周溝墓として確定できる要素をつかむまでは至らなかった。また、SK01、SK202において弥生時代前期の土器を伴う土坑が確認できたことは今回の成果のひとつといえよう。今後の整理の進捗状況を待たねばならないが、SK202は、弥生時代前期のあわせ口の壺棺墓である可能性がある。また、SK201に関しては、その形状により小型の貯蔵穴である可能性を持つ。明確な切り合い関係は持たないが、SK201が、SK202に先行して築かれたものと考えられる。

3. 第26次調査

今回の調査地は、遺跡範囲の南東隅にあたる地点である。

工事により埋蔵文化財に影響を及ぼす部分についてバックホーにより盛土・耕作土を除去し、人力により遺物包含層掘削・遺構検出を行った。

基本層序

現地表面から黄灰色系の粘質土を主体とする旧耕作土が3層堆積し、その直下に暗灰褐色粘質土・黒灰色シルトをベースとする遺構面を検出した。一部で遺構面となる黒灰色シルトは約40cmと厚い堆積で、その下層に暗灰褐色シルト・灰茶褐色シルト（いずれもバイラン上・小疊混じる）が堆積しており、それぞれで遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。

1	T.P.12.000m
2	1. 古墳時代粘質土 (耕作土)
3	2. 古墳時代粘質土 (耕作土)
4	3. 古墳時代粘質土 (耕作土)
5	4. 古墳時代粘質土 (耕作土)
6	5. 黒褐色シルト (小疊多く見る)
7	6. 灰茶褐色シルト (小疊多く見る)
8	7. 暗灰褐色シルト (小疊多く見る)
9	8. 暗灰褐色シルト (小疊多く見る)

fig. 124 土層断面図

検出遺構

SX01

今回検出された遺構は、落ち込み1基、溝2条、上坑2基、ピット1基である。調査区北端で検出された落ち込みで、検出長約4.5m、幅1.0~2.0m、深さ20~40cmを測る。東側が浅く、西側に大きくなっている。底面には数多くの凹みがあり、安定していない。埋土は灰色粗砂～細砂が主体で、6世紀後半から7世紀末ごろの上部器・須恵器が出土した。

SD01

調査区に斜行するように検出された溝で、検出長約6.0m、幅30~50cm、深さ10cmを測る。中央付近で、西側に屈曲する。埋土は灰色粗砂で、遺物は出土しなかった。

SD02

調査区に斜行して検出された溝で、検出長約9.5m、幅30~50cm、深さ10cmを測る。埋土は灰色粗砂で、弥生上器と考えられる上器が出土した。

SK01

調査区北側で検出された不整形な上坑で、最大長80cm、幅30~50cm、深さ20cmを測る。底面は一定せず、凹凸が激しい。埋土は灰褐色粘質土で、上部器と考えられる上器が出土した。

SK02

調査区南側で検出されたやや崩れた円形の土坑で、直径80cm、深さ15cmを測る。南東側は長さ30cm、幅20cmの規模で延びる。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。

ピット

調査区南側で検出されており、直径20cm、深さ10cmを測る。埋土は褐灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。

まとめ

落ち込みなどの遺構は確認されたが、集落に伴う遺構は確認されていない。集落の周辺部といった様相が見られた。ただし、SX01から古墳時代後期の遺物が比較的多く出土したことなどから、この時期には近隣に居住域が存在する可能性が指摘できる。



15. 花隈城跡

花隈城は、天正年間の初めに、織田信長の命により荒木村重によって築かれた。しかし、信長に反旗を翻した村重を討つ命を受けた池田信輝の軍により、天正8年（1580年）、花隈城は落城する。岡山大学図書館所蔵の「攝津國花熊之城圖」によると、中央に主郭（本丸・二の丸・三の丸）をおき、東に侍町、西に町屋を配置し、切り岸や堀に囲まれた構造を備えていたことが記されているが、存在を示す遺構は確認されていない。



fig. 126 花隈城跡
調査地位置図
(S=1:5,000)

1. 第3次調査

調査概要

調査対象地は、比高差10mの斜面下方を造成し、平坦面としている。試掘調査の結果、現地表下80~240cmで埋蔵文化財の存在が確認され、工事により影響を受ける範囲について発掘調査を実施した。土留支保工の都合により、調査区を2区に分け、17年度は東半部と西半部南側の調査を実施し、18年度は、未調査であった北側部分の調査を実施した。先年度調査結果と合わせて報告を行う。

東半部の調査

遺構面は、北東から南西に傾斜しており、調査区の南半部は、現代の石垣施工時の擾乱により、遺構面は残存していない。また、既存建物による擾乱が多く、検出された遺構は少ない。検出された遺構は、流路、柱穴、溝状遺構などである。

SD101

中央部で検出された自然流路である。西側の肩は擾乱により残存していない。残存幅4m以上、深さ約1mの規模で北東から南西に流れる。埋土は、細砂～粗砂が交互に水平

堆積している。北側部分からは、30cm程度の焼土層と炭を含む埋土から、遺物コンテナ10箱分の16世紀後半の瓦と少量の上部器片が出土した。二次被熱を受けて赤変した資料が含まれ、落城時に兵火によって被災した構造物の一部である可能性があるが、焼上面は存在せず、二次堆積した状況であり、原位置を保っているとは考えられない。

SD102 東端部で検出した流路である。埋土は、粗砂が東側に傾斜して堆積している。残存幅2m以上、深さ約60cmの規模である。擾乱の影響が大きいため、詳細は不明であるが、北西から南東に流れる流路と考えられる。遺物は出土しなかった。

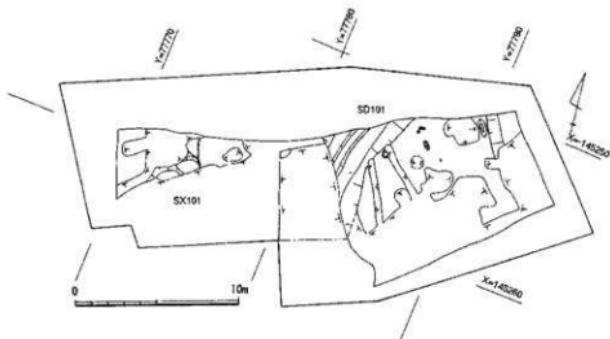


fig. 127 東半部遺構面平面図

西半部の調査

SX101 東半部同様、南側は擾乱されており、遺構面が残存していた面積は約12m²である。南側に傾斜する不定形の落ち込みを検出した。擾乱のため、遺構の性格は不明であるが、自然地形である可能性が高い。埋土はSD101・102と同様の粗砂で、20～50cm角程度の花崗岩と瓦、土師器、木製椀、下駄などが少量出土した。遺物は二次堆積したと考えられる分布を示し、北側から流入して堆積したと考えられる。遺物の所属時期は、16世紀後半と考えられる。

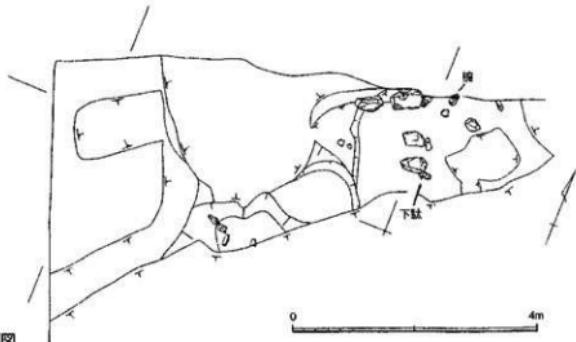


fig. 128 西半部遺構面平面図

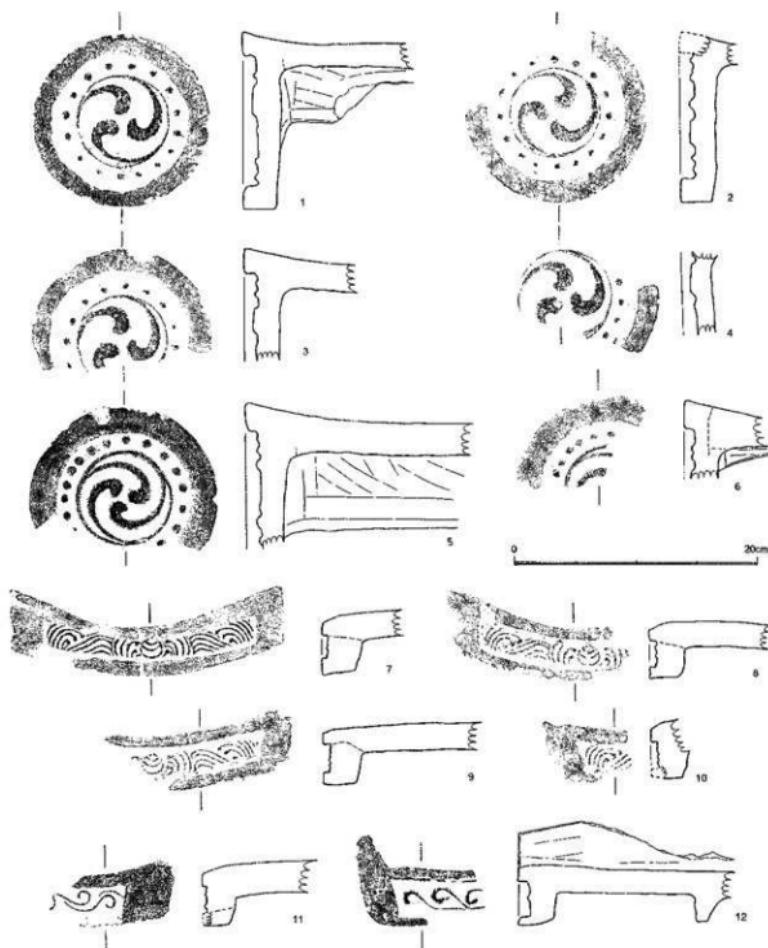


fig. 129 出土瓦実測図

まとめ

調査の結果、16世紀後半の自然流路2条や造構の性格が判然としない落ち込みなどを検出するにとどまった。しかし、山土遺物については、花隈城が機能していた時期に相当する瓦がまとまって出土しており、落城時に放棄された一括資料と捉えることができる。今後、資料の増加を待って、花隈城の部材が運ばれたとされる兵庫城山土の資料との検討により、使用年代が限定できる基準資料になると考えられ、重要である。

2. 第4次調査

調査の概要

調査地は、花隈城跡の北東隅付近に位置している。東側は鯉川の浸食により、約3mの比高差を形成している。試掘調査で古墳時代後期の遺物包含層と遺構が確認されたため、工事により影響を受ける約30m²について発掘調査を実施した。

基本層序

從前建物の基礎により、著しく搅乱を受けており、文化財の遺存状態は悪い。検出した遺構面は1面で古墳時代後期の用途不明土坑と溝状遺構を検出した。

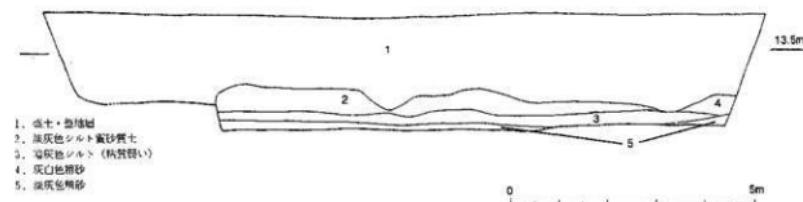


fig. 130 土層断面図

SX101 幅1.8m、長さ3m以上、深さ10cmの不定形の遺構である。埋上は暗灰色粘質土で、T K23に併行する遺物が出土した。

SX102 調査区の制約により全体の形状は不明であるが、一辺4m以上の遺構である。ベッド状の高まりを持ち、ピット5基を検出した。豊穴住居である可能性があるが、遺存している遺構の形状からは判断できない。埋土から古墳時代後期の遺物が少量出土している。

SD101 幅35cm、深さ10cmの溝状の遺構である。遺物は出土しなかった。

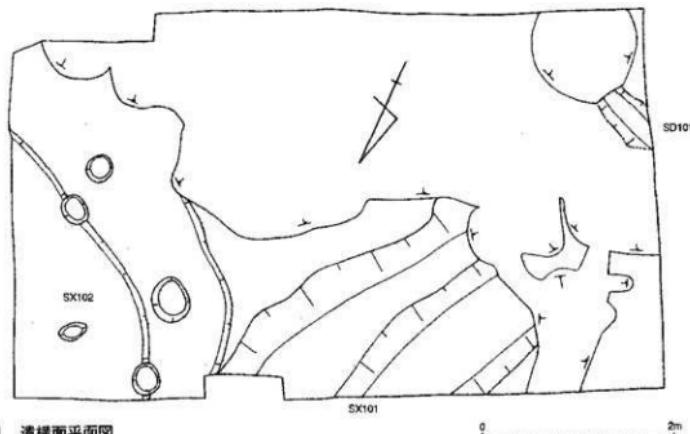


fig. 131 遺構面平面図

まとめ

今回の調査では、花隈城に関係する資料の検出はなかったが、古墳時代後期の遺構を確認した。同時期の遺構は、東側の生田遺跡、中山手遺跡等で確認されており、古墳時代の集落が当遺跡の立地する尾根上に広がることが確認できた。

16. 花隈城向城跡 第1次調査

花隈城向城は、今回の工事に先立つ試掘調査によって新たに確認された遺跡であり、六甲山麓を流れる生田川右岸の標高20m前後の扇状地の扇頂付近に位置する。

周辺には、すぐ南に隣接して最近、繩文時代後期の集落址が発見された生田遺跡が、東には飛鳥時代の堅穴住居・掘立柱建物とあわせて鍛冶炉なども確認されている二宮遺跡、また西には中山手遺跡などが存在している。

調査地一帯は、戦国時代末期の織田信長による花隈城攻めの模様を描いたとされる『摂津國花隈之城圖』によると、「池田紀伊守向城」という城攻めのための陣地(付城)が築かれたとされる場所にあたり、本遺跡名もこれにちなんで付けられた。

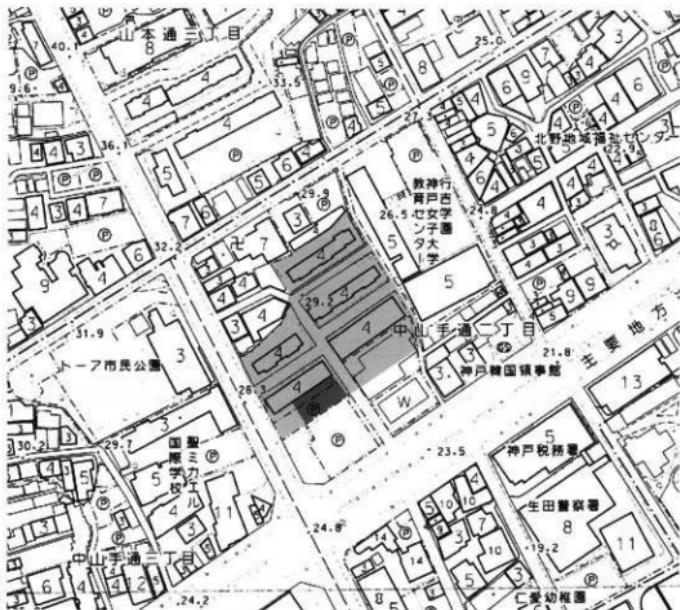


fig. 132 花隈城向城跡
調査地位置図

調査概要

昨年度からの継続事業である。調査地は、標高26~28mで北から南への傾斜地にあたる。また、従前の建物の造成により大きく削平されており、盛上下は部分的に薄い旧耕土状の遺物包含層が認められるものの、すぐ遺構面(地山面)となる。

検出遺構は、流路状の遺構SD01をはじめピットや不定形の落ち込み、耕作痕などを検出した。SD01は、調査地中央を北東から南西に流れる流路状の遺構で幅3~4m、深さ0.5~1.8mを測る。断面形は北側の深い部分においては下半がほとんど直に落ちる漏斗状となる。流路の底部には板材や丸太材が堆積しており、飛鳥時代から奈良時代の遺物が多量に出土した。

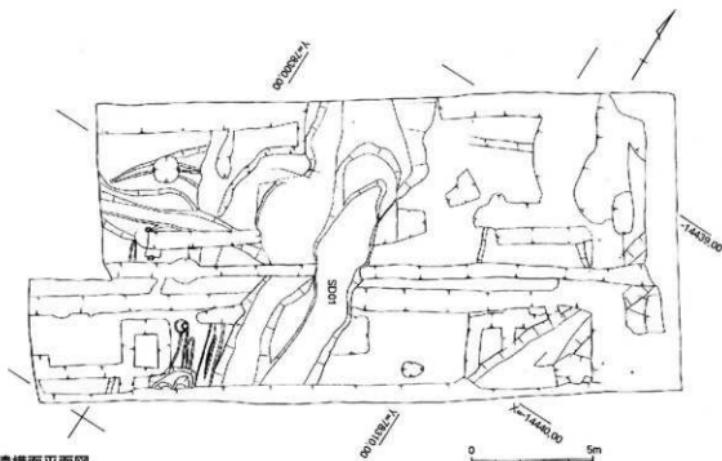


fig. 133 遺構面平面図

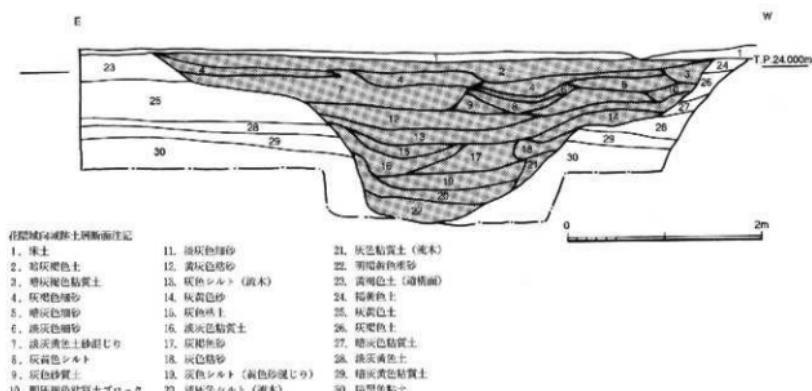


fig. 130 土層断面図

まとめ

今回の調査によって飛鳥時代から奈良時代の遺物を多量に含む流路状の遺構が確認された。この流路の中央部分で自然木に混じって板材や丸太材、二又の幹に加工したものなどが集中した状態でみつかった。これらは上流に設けられていた護岸施設等が流され流路の狭んだ部分に溜まつたものと考えられる。また、流路から出土した遺物は、ほとんど摩滅等を受けておらず、調査地のごく近い場所に飛鳥時代から奈良時代の集落が存在する可能性が高い。

今回の調査では、戦国時代末期の向城に関連する遺構・遺物は確認されなかった。

17. 元町遺跡 第5次調査

元町遺跡は、中央区の西部に存在する宇治川により形成された沖積地に立地している。平成2年度に、第1次調査が実施され、中世後半の井戸や土坑が確認された。この事から、周囲に中世の集落が存在していることが判明した。その後、平成8年度に兵庫県教育委員会により第2次調査と第3次調査が実施され、近世集落を検出しただけにとどまっている。また平成17年度に神戸市教育委員会により第4次調査を実施し、中世遺物包含層を確認した。



fig. 135 元町遺跡
調査地位置図

今回の調査は、共同住宅の建設に伴い、工事影響深度が埋蔵文化財に影響を与える、建物の基礎部分の一部について、発掘調査を実施した。

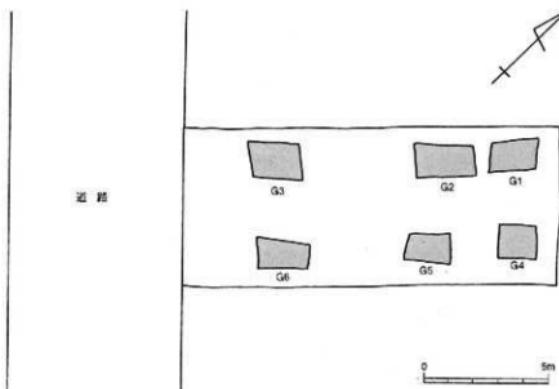


fig. 136 調査地配置図

基本層序

搅乱と盛土、暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土（近世遺物包含層）、暗灰褐色砂質土（色調がやや淡い、近世遺物包含層）、暗灰褐色砂質土（中世遺物包含層）、淡黄灰褐色砂質土（上面が中世遺構面となる、無遺物層）と統一している。中世遺構面の上面で標高約0.2m～0.4mとなる。



fig. 137 土層断面図

遺構と遺物

今回は、基礎杭部分を対象としたグリッドによる調査で、G 1～G 6 まで調査している。G 1～G 3 は中世遺構面まで調査したが、G 4～G 6 は掘削深度が深く、危険回避のため、中世遺物包含層を確認しただけにとどまっている。

遺構は、G 1 で淡黄灰褐色砂質土の上面から、土坑状の落ち込みを確認している。調査範囲が狭いため、遺構の詳細は不明である。深さ約30cmを測り、暗灰褐色砂質土が堆積している。遺物は出土していない。中世遺物包含層の下面で検出した遺構面であり、中世の遺構であろう。

G 2 と G 3 は中世遺構面を確認したが、遺構は検出していない。また、灰褐色砂質土と暗灰褐色砂質土の近世遺物包含層と、暗灰褐色砂質土の中世遺物包含層との境で、近世遺構面が想定できる。今回の調査地の東側に接した第1次調査で検出した中世末～近世の遺構面が、これに相当する可能性が考えられる。

遺物は暗灰褐色砂質土遺物包含層から、中世後期の羽釜片を含む須恵器と土師器が破片で出土している。ただし、遺物量は少ない。

まとめ

今回の調査では、中世遺構面から土坑状の落ち込みを確認している。遺構から遺物は出土していないが、遺構面を覆う遺物包含層から中世後期の羽釜片が出土しており、遺構の時期もその頃と考えられる。これは東側に接した第1次調査の調査結果とも一致している。遺物の出土量は比較的少なく、遺構も比較的希薄と考えられるが、当該調査区にも第1次調査から続く中世後期の集落居住域が広がるものと考えられる。

18. 楠・荒田町遺跡 第38次調査

楠・荒田町遺跡は、旧漆川沿いの段丘上に位置する。縄文時代後期からはじまる遺跡である。弥生時代には西摂平野の拠点集落となり、その後、古墳時代後期にも集落が営まれている。また、平安時代末には、福原京との関連も注目される遺跡である。



fig. 138 楠・荒田町遺跡
調査地位置図

今回は病院建設に伴い、発掘調査を実施した。その基礎により遺跡が損壊を受ける部分についてのみ、調査を実施した。

基本層序

基本層序は、擾乱と盛土、淡黄褐色細砂～粗砂（洪水砂？）、暗灰色砂質土（近現代耕土）、灰褐色砂質土（近世耕土、古墳時代後期～中世の遺物も含む）、淡黒褐色砂質土（2トレンチ東端部を主として確認した古墳時代後期遺物包含層、上面が中世の造構面となる）、暗黄褐色砂質土（上面が造構面となる、無遺物層）と堆積している。

遺物包含層は一部で確認しただけに止まる。調査区の大部分が近世以降の耕作土により、造構面付近まで削平されている状況である。

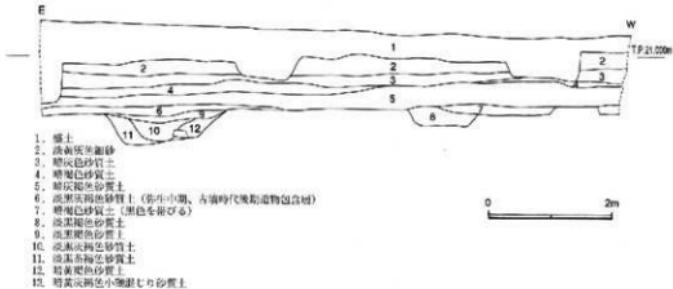


fig. 139 土層断面図

遺構と遺物

遺構は、中世の土坑や溝、古墳時代後期の土坑と柱穴、弥生時代中期の土坑、縄文時代後期の土坑を確認した。

遺物は、溝や土坑等から中世の須恵器や青磁等が出土した他、遺構と淡黒褐色砂質土の遺物包含層から古墳時代後期の須恵器、土師器が出土した。古墳時代後期の柱穴上面から耳環も出土している。また、弥生時代中期の土坑から弥生土器が出土した。

今回の調査で最も重要な一括出土資料として、縄文後期中頃の土坑一基から多量の縄文土器とサヌカイトの剥片、それらと共にサヌカイト製石鏃10点、剝器1点が出土している事が挙げられる。

建物基礎の関係で、1トレンチ～3トレンチに区分して調査を実施した。

柱穴群

1トレンチ～3トレンチまで、広い範囲で柱穴を多数確認した。これらの柱穴は、径約15cm～30cmで、深さ約10cm～35cmを測る。

黒褐色砂質土か淡黒褐色砂質土が堆積し、須恵器、土師器、弥生土器の細かな破片が出土した。なかには弥生土器しか出土しない柱穴も確認しているが、古墳時代の柱穴に弥生土器が混入している可能性も考えられることから弥生時代の柱穴も存在する可能性は考えられるが、基本的に古墳時代後期を主とする柱穴群が、調査地の周辺に広がると考えられる。

また、特記すべき遺物として、2トレンチのSP17上面から耳環が出土している。

他に2トレンチと3トレンチでは、これらの柱穴の中に、柵列(SA01, SA02)としての並びが確認できる。この柵列は、SA01の東端から約90°南に方位を変え、SA02へと続く可能性が考えられる。

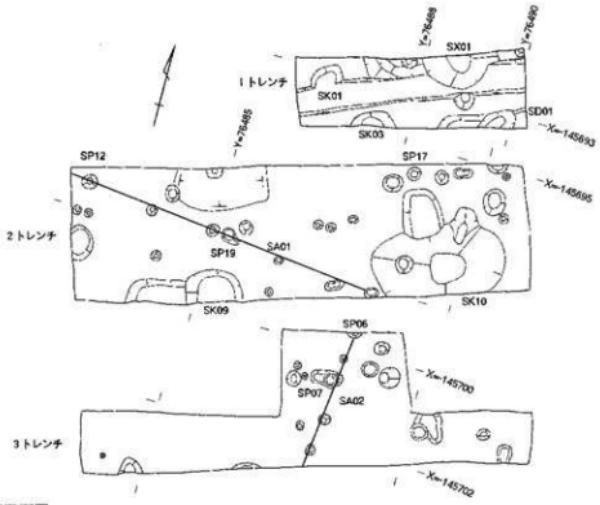


fig. 140 遺構面平面図



fig. 141 1 トレンチ全景



fig. 142 3 トレンチ全景

- SA01** 2 トレンチの西側で確認した柵列である。座標北から約88° 西へ振る方向に、5間以上並ぶ柱穴を検出した。大部分の柱穴間は約1.1m~1.3mを測る。遺物はSP12とSP19から、時期不明の弥生土器か土師器の細かな破片が出土した。
- SA02** 3 トレンチの中央で確認した柵列である。座標北から約8° 東へ振る方向に、4間以上並ぶ柱穴を検出した。大部分の柱穴間は約60~80cmを測る。遺物はSP06とSP07から、時期不明の弥生土器か土師器の細かな破片が出土した。
- SX01** 1 トレンチで確認した、不整形な土坑状の落ち込みである。幅東西約155cm×東西約65cm以上で、深さ約47cmを測る。褐色砂質土が堆積している。弥生土器に混じり、中世須恵器の細かな破片が出土している。
- SD01** 1 トレンチで確認した東西に伸びる溝である。幅約34cm以上で、深さ約24cmを測る。褐色砂質土が堆積している。弥生土器が細かな破片で出土しているが、堆積土層がSX01で確認した中世の土層と類似しており、溝の時期も中世まで下る可能性が高いと考える。
- SK01** 1 トレンチで確認した不整円形の土坑である。幅東西約65cm×南北約40cm以上で、深さ約21cmを測る。淡黒褐色砂質土が堆積し、弥生土器が出土した。
- SK03** 1 トレンチで確認した不整円形の土坑である。幅東西約85cm×南北約30cm以上で、深さ約13cmを測る。黒褐色砂質土が堆積し、弥生土器とサヌカイトが出土した。
- SK04** 2 トレンチで確認した不整形の土坑である。東西54cm×南北60cm以上で深さ約12cmを測る。詳細な時期は不明であるが、弥生土器に混じり中世の土師器が出土した。
- SK05** 2 トレンチで確認した、不整円形の土坑である。幅東西約50cm×南北約30cm以上で、深さ約4 cmを測る。暗灰褐色砂質土が堆積し、中世の須恵器甌や土師器が出土した。
- SK06** 3 トレンチで確認した不整形の土坑である。東西約1.9m×南北約0.5m以上で、深さ約11cmを測る。暗灰褐色砂質土が堆積している。詳細な時期は不明であるが、弥生土器に混じり中世の須恵器が細かな破片で出土した。

- SK07** 3 レンチで確認した不整円形の土坑である。東西42cm以上×南北50cmで、深さ約19cmを測る。土坑底部に約10cm～20cmの大礫を3個検出した。弥生土器や土師器に混じり、古墳時代後期の須恵器が出土した。
- SK08** 3 レンチで確認した不整円形の土坑である。東西約0.8m×南北約1.0m以上で、深さ約9cmを測る。遺物は殆どが弥生土器であるが、須恵器も出土していることから、遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。
- SK09** 2 レンチの西側で検出した、不整円形の土坑である。径約114cm×66cm以上で、深さ約26cmを測る。淡黒褐色砂質土が堆積している。弥生土器片が出土した他、投棄された可能性がある大礫も検出した。
- SK10** 2 レンチの東側で検出した、不整円形の土坑である。径約2.5m×1.5m以上で、深さ約68cmを測る。淡黒褐色砂質土等が堆積している。縄文時代後期中墳の土器とサヌカイト片が多量に出土した他、サヌカイト製剣器1点、石鏃10点も出土している。

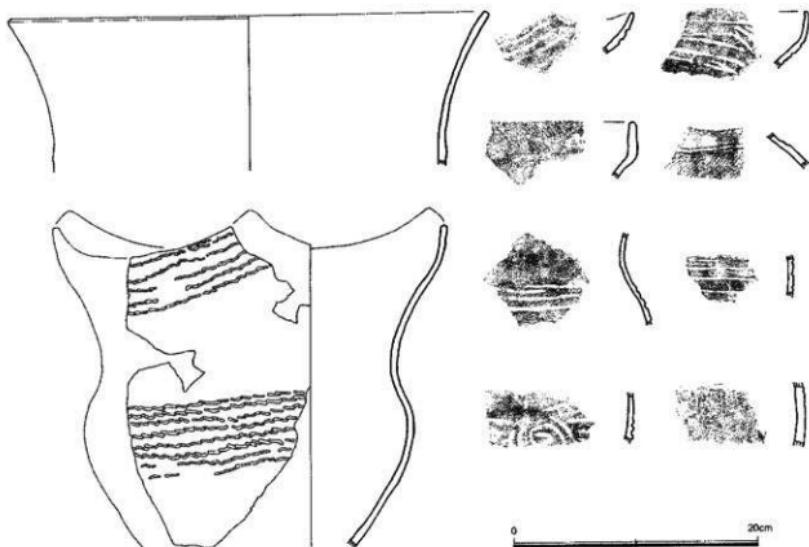


fig. 143 SK10出土縄文土器実測図

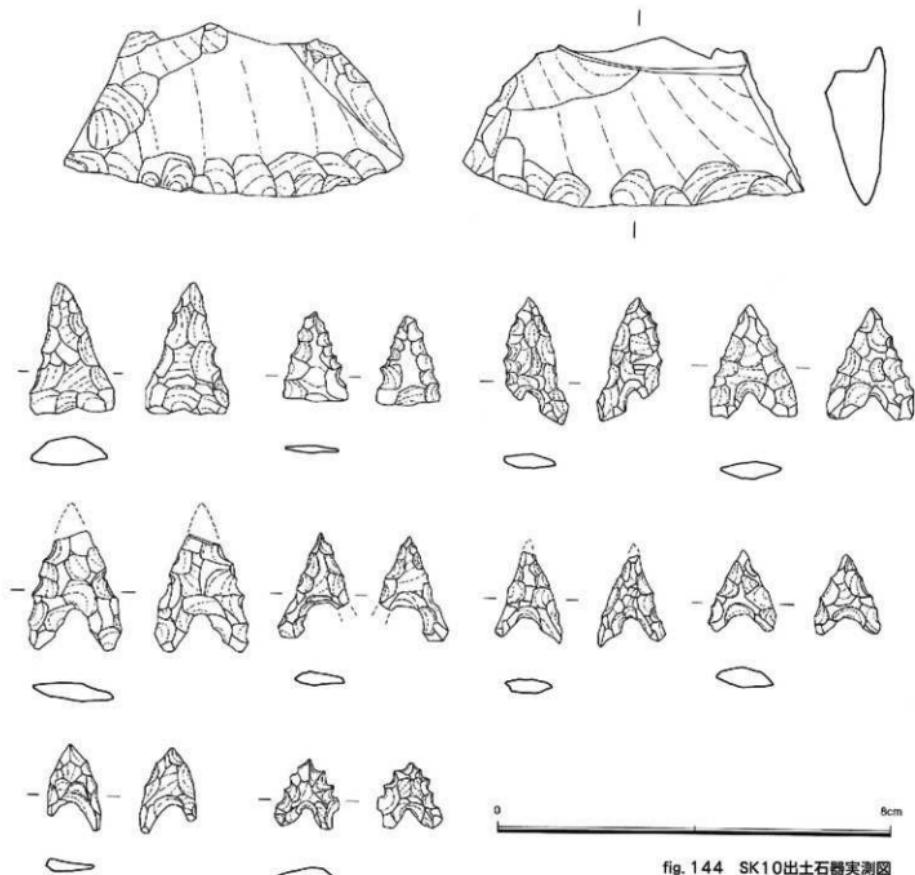


fig. 144 SK10出土石器実測図



fig. 145 2トレンチ全景



fig. 146 SK10土層断面

まとめ

今回の第38次調査では、中世前期の土坑や溝、古墳時代後期の柵列を含む柱穴や土坑を確認した他、弥生時代中期の土坑も確認している。また、縄文時代後期中頃の土坑も確認し、当該遺跡での貴重な調査事例となった。

中世では溝や土坑、落ち込みは確認できるが、柱穴等は確認できない。

集落居住域でも辺縁部を調査したと考えられる。時期については、細かな土器片ばかりで不明確だが、中世前期の範疇には収まる様である。

古墳時代後期では土坑や柱穴等を確認している。柵列は、構成する柱穴からの出土遺物が弥生土器か上師器の細かな破片であり、時期不明である。ただし他の柱穴からは須恵器片が出土しており、弥生時代よりは古墳時代後期の可能性がはるかに高いと考える。この柵列は、SA01からSA02にかけて、柵列が約90°方位を変えて伸びている可能性を考えられ、敷地を区画する柵列である事も考えられる。

弥生時代中期には、集石を伴う小土坑を含む土坑等が確認できる。詳細な時期については、細かな土器片ばかりであるため、不明である。

縄文時代後期では、縄文時代後期中頃の土器や多数のサヌカイト片と共に、10点の石鏃と1点の剥器を出土した土坑（SK10）を確認している。土器の出土量も比較的多く、括資料としても重要である。

19. 上沢遺跡

上沢遺跡は、会下山による小丘陵の裾部に形成された扇状地に位置している。縄文時代晚期からの遺物が出土しており、弥生時代前期～鎌倉時代の集落も確認されている遺跡である。遺跡の北西に接して古代寺院跡と推定されている室内遺跡も存在し、奈良時代には官衙的性格の建物の存在も想定されている。



fig. 147 上沢遺跡
調査地位置図

第53次調査

個人住宅の建設に伴い、遺跡の損壊される範囲についてのみ、発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序は、攪乱と盛土、淡黒褐色砂質土（弥生時代後期・古墳時代後期～奈良時代遺物包含層、上面が中世の造構面となる）、黒茶褐色砂質土（上面が弥生時代後期・古墳時代後期～奈良時代の造構面となる）、暗茶褐色砂質土（無遺物）と堆積している。

造構と遺物

造構は、2面の造構面を検出した。第1造構面で時期不明の柱穴、土坑を検出し、第2造構面で弥生時代後期～古墳時代前期と古墳時代後期～奈良時代の柱穴、土坑等を検出した。

遺物は、各造構面の造構と遺物包含層から、平安時代頃と考えられる須恵器と土師器、古墳時代後期～奈良時代の須恵器と土師器、弥生時代後期の土器が破片で出土した。

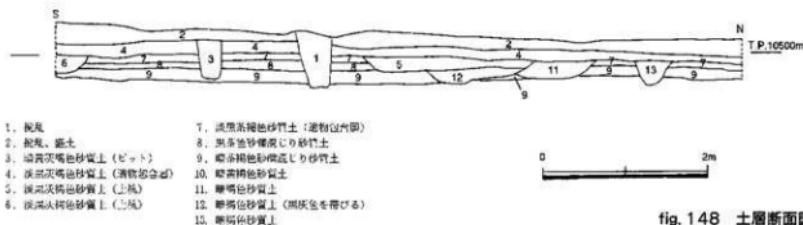


fig. 148 土層断面図

第1造構面

平安時代頃と考えられる造構面である。

- SK101** 幅東西約80cm×南北約35cm以上で、深さ約31cmを測る上坑である。黒褐色砂質土が堆積し、須恵器と土師器が破片で出土した。
- SK103** 幅東西約86cm以上×南北幅約160cmで、深さ約25cmを測る十坑である。黒褐色砂質土が堆積し、須恵器と土師器が破片で出土した。上坑としたが、自然地形の落ち込みの可能性も考えられる。
- SK104** 幅東西約52cm以上×南北120cmで、深さ約18cmを測る十坑である。黒褐色砂質土が堆積し、甕を含む須恵器と土師器が、破片で出土した。土坑としたが、自然地形の落ち込みの可能性も考えられる。

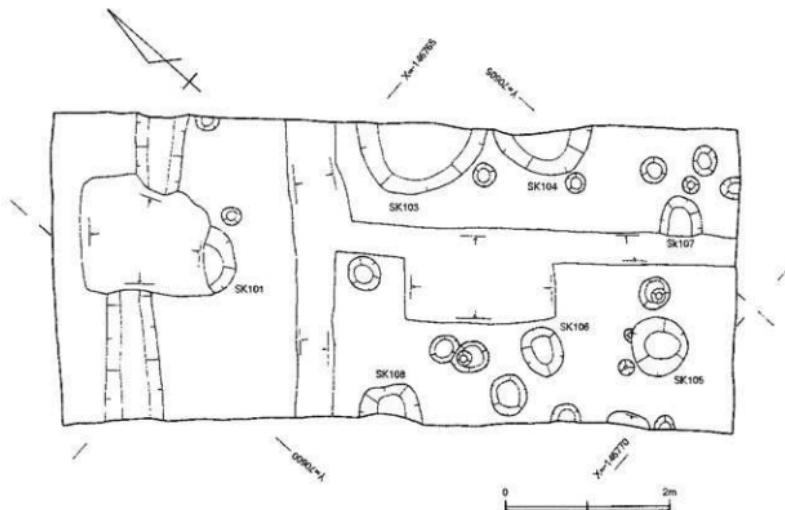


fig. 149 第1造構面平面図

- SK105** 幅東西約72cm×南北68cmで、深さ約19cmを測る上坑である。
- SK106** 幅東西約58cm×南北49cmで、深さ約11cmを測る土坑である。
- SK107** 幅東西約48cm以上×南北50cmで、深さ約18cmを測る土坑である。
- SK108** 幅東西約45cm以上×南北78cmで、深さ約23cmを測る土坑である。
- ピット群** 径約20cm～50cmで、深さ約10cm～30cmを測り、柱穴が大多数である。黒褐色砂質土が堆積している。一部のピットからは、須恵器を含む須恵器と土師器の破片が、出土した。

- 第2遺構面** 古墳時代後期～奈良時代頃と、弥生時代後期頃の遺構面である。
- SK201** 幅東西約47cm以上×南北36cm以上で、深さ約8cmを測る上坑である。黒褐色砂質土が堆積し、土師器か弥生上器の細片が出土した。
- SK202** 幅東西約84cm×南北79cmで、深さ約9cmを測る土坑である。黒褐色砂質土が堆積し、古墳時代前期の土師器が破片で出土した。
- SK205** 調査区の中央付近で確認した集石土坑である。幅東西約52cm×南北約58cmで、深さ約15cmを測る。土坑内で5個の中疊を検出した。遺物は、土師器もしくは弥生上器の細片が出土した。
- SK206** 幅東西約83cm×南北98cmで、深さ約28cmを測る方形の上坑である。黒褐色砂質土が堆積し、奈良時代の須恵器を含む須恵器と土師器が、破片で出土した。あるいは規模の大きな柱穴となる可能性を持つ。
- SK207** 幅東西約92cm×南北66cmで、深さ約58cmを測る土坑である。黒褐色砂質土が堆積し、古墳時代後期～奈良時代頃の須恵器と土師器が、破片で出土した。あるいは規模のおおきな柱穴となる可能性を持つ。
- SK208** 幅東西約110cm×南北110cmで、深さ約22cmを測る方形の上坑である。黒褐色砂質土が堆積し、奈良時代の須恵器蓋等を含む須恵器と土師器が、破片で出土した。あるいは規模の大きな柱穴となる可能性を持つ。
- SK209** 幅東西約110cm×南北55cm以上で、深さ約34cmを測る上坑である。黒褐色砂質土が堆積し、弥生上器か土師器が破片で出土した。
- SK210** 幅東西62cm以上×南北85cm以上で、深さ約15cmを測る落ち込み状の上坑である。黒褐色砂質土が堆積し、奈良時代の須恵器蓋を含む須恵器と土師器が、破片で出土した。
- SK211** 幅東西47cm以上×南北72cmで、深さ約47cmを測る土坑である。黒褐色砂質土が堆積し、時期不明の須恵器と土師器が出土した。
- SK212** 幅東西57cm以上×南北80cmで、深さ約25cmを測る土坑である。黒褐色砂質土が堆積し、時期不明の須恵器と土師器が出土している。
- SK213** 幅東西約48cm×南北56cmで、深さ約46cmを測る上坑である。黒褐色砂質土が堆積し、弥生後期上器の破片が出土している。
- SK214** 幅東西約73cm×南北80cmで、深さ約47cmを測る土坑である。黒褐色砂質土が堆積し、弥生土器か土師器の破片が出土している。

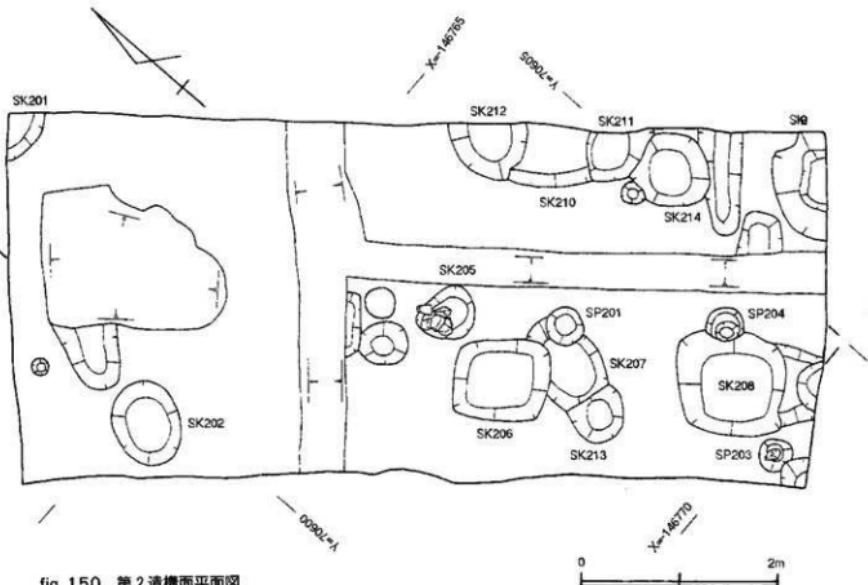


fig. 150 第2遺構面平面図

SP201 径約38cmで、深さ約27cmを測る柱穴である。黒褐色砂質土が堆積し、時期不明の土師器が、破片で出土している。

SP203 径約33cmで、深さ約5cmを測る柱穴である。黒褐色砂質土が堆積し、時期不明の上師器が細片で出土している。

SP204 径約40cmで、深さ約21cmを測る柱穴である。黒褐色砂質土が堆積し、土師器が破片で出土している。柱痕が確認でき、径約21cmを測る。

まとめ

今回の第53次調査は上沢遺跡で確認されている集落の中央付近に位置している。予想されたとおり、2面の遺構面から、弥生時代後期、古墳時代～奈良時代、平安時代頃の集落に伴う各遺構を確認できた。

第1遺構面の遺構から出土した遺物は、須恵器と土師器の細片が殆どであり、詳細な遺構の時期決定が困難である。遺構から明らかな中世の須恵器は出土しておらず、より時期的に遡る可能性が高い。明確に時期決定できる遺物は出土していないが、平安時代頃の遺構群である可能性が考えられる。

第2遺構面では、弥生時代後期と古墳時代～奈良時代にかけての遺物が、遺構から出土している。ただし遺物の出土量が比較的少なく、詳細な時期決定が困難な遺構も多い。

この第2遺構面に関しては、土坑として報告した遺構も規模の大きな柱穴である可能性が考えられる。特にSK206、208は、方形の掘形を持つ柱穴である可能性が高い。共

に奈良時代の須恵器が出土しており、時期が確定できる。他にSK207も古墳時代後期～奈良時代頃の須恵器と十帥器が出土しており、柱穴の可能性も持つ。

弥生土器か上師器しか出土していない上坑では、SK202、205、209、213、214が確認できる。ただし古墳時代後期以降の遺構に弥生土器等が混入している可能性も考えられ、遺構の確実な時期決定は困難である。また、SK213、214に関しては柱穴の可能性も考えられる。

第54次調査

共同住宅の建設に伴い、工事により搅乱される影響深度まで調査している。

基本層序

基本層序は、搅乱と盛土、淡青灰色礫混じり砂質土、旧耕土、暗青灰褐色砂質土、(上面がSD01の流路の遺構面となる。あるいは中世以降の遺構面か?)、青灰色砂質土、(上層と同じく、上面がSD01の流路の遺構面となる)、暗青灰色砂質土、灰褐色砂質土(上面がSD01 流路 2 の遺構面であり、平安時代後期頃の遺構面となる)、黒灰色砂質土(弥生時代後期～古墳時代後期遺物包含層)、淡青灰色砂質土(上面が弥生時代後期～古墳時代後期の遺構面となる)と堆積している。

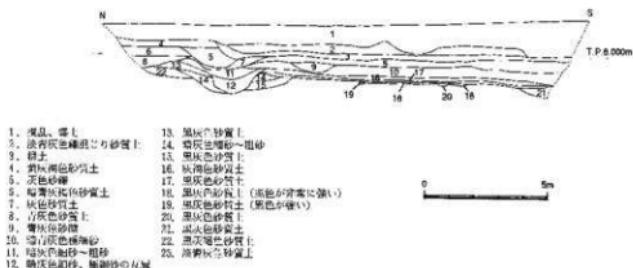


fig. 151 土層断面図

遺構と遺物 遺構は、弥生時代後期の上坑等の他、弥生時代後期の堅穴住居、弥生時代後期と古墳時代前期のビット、古墳時代後期～平安時代後期以降に続く溝等を確認している。

おそらく古墳時代後期以降に始まる溝(SD01)が調査区の北側で確認でき、弥生時代後期の堅穴住居や土坑、弥生時代後期と古墳時代前期のビットの多くはこの溝より南側で確認している。調査区の南端は谷状地形への落ち込みとなる。

遺物は、弥生時代後期の土器の他、古墳時代前期の上師器、古墳時代後期～平安時代後期にかけての須恵器と上師器、瓦器等を、遺物包含層と各遺構内から出土している。

SB01

弥生時代後期の方形堅穴住居である。ただし、調査区の東端で方形堅穴住居の北西角を確認しただけであり、全体の規模などは不明である。黒褐色砂質土が堆積し、一辺4.3m以上で、深さ約5cmを測る堅穴住居である。周壁溝が確認され、幅約20cmで深さ約10cmを測る。弥生時代後期の土器細片が出土している。

SD01

古墳時代後期には確実に始まり、中世以降まで続く溝である。

最も古い流路1は淡青灰色砂質土を造構面とし、幅約4.7mで、深さ約90cmを測る。平安時代後期頃の流路2に削平され、検出したSD01の堆積層の中では、南北両岸付近だけで確認している。暗灰色細砂～粗砂と黒灰色砂質土が多く堆積し、古墳時代後期の須恵器と土師器が出土した。

また、この流路1の南肩付近の堆積層で、弥生時代後期の土器しか出土しない上層が存在している。あるいは流路1より以前の弥生時代後期の流路も、一部で存在していた可能性が考えられる。

次の時代に確認した流路が、流路2である。幅約2.4mで、深さ約1.1mを測る。より上層の灰褐色砂質土を造構面としているが、流路1と同一造構面で検出した。

灰色中砂～極細砂が堆積し、奈良時代～平安時代後期頃の遺物が出土している。最も新しい遺物では、平安時代後期頃の瓦器塊や須恵器塊が出土しており、埋没年代はその頃と考えられる。

流路の南北両岸に護岸が施されている。調査で確認した造構は杭列だけであるが、当初は横木も施された護岸であった事が予想できる。

護岸に使用された杭は径5cm～10cmで、長さ40cm～100cmである。復元すると、地中には30cm～60cmほど、打ち込まれていたと推定できる。これらの杭は、南北両岸に50cm～110cm間隔で、打ち込まれている。

SD01の東壁土層を確認すると、中世以降に続くと考えられる時期についても、灰色砂質土や灰色砂礫による流路の堆積が、次々とその検出面を変えながら、土層壁の上部へと続いている。基本的に、自然の小流路が連続と存在する位置なのであろう。

この小流路を、集落の營まれた時代には、護岸等により人工的な溝へと改変していた事が推測される。



fig. 152 SD01杭列検出状況

SK01

調査区の南端で確認した、浅い落ち込み状の土坑である。幅東西4.7cm以上×南北約2.2cmで、深さ約15cmを測る。黒灰色砂質土が堆積し、弥生時代後期の細かな土器片が出土している。

SK02

調査区の南側で確認した、浅い方形の土坑である。幅東西約1.2m×南北約1.1mで、深さ約6cmを測る。黒灰色砂質土が堆積し、弥生時代後期の土器片が出土している。

SK03

調査区の南側で確認した、浅い方形の土坑である。幅東西0.8m以上×南北約1.1mで、深さ約5cmを測る。黒灰色砂質土が堆積し、弥生時代後期の土器片が出土している。

SK04

調査区の南側で確認した、浅い方形の土坑である。幅東西約1.6m以上×南北約1.3m以上で、深さ約7cmを測る。黒灰色砂質土が堆積し、弥生時代後期の細かな土器片が出土している。

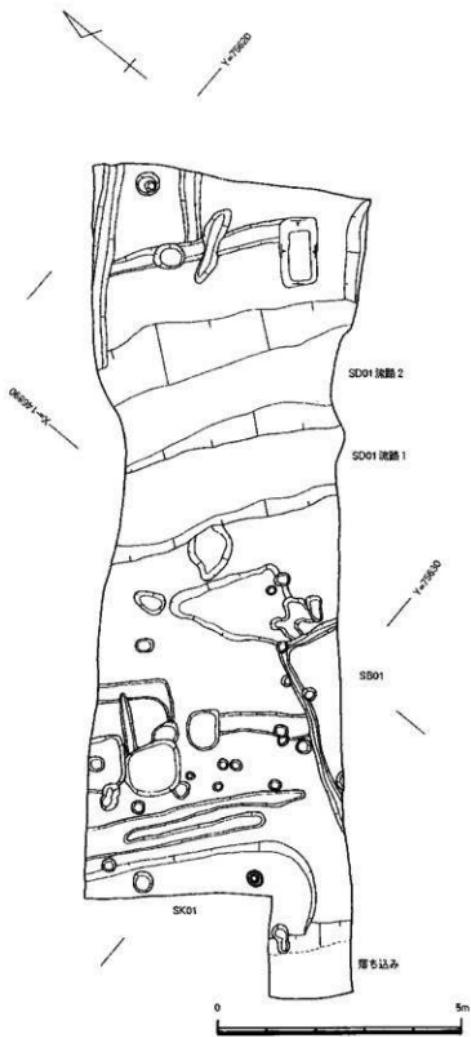


fig. 153 遺構面平面図

ピット群	柱穴を含むピット群である。黒灰色砂質土が堆積している。径約17cm～30cmで、深さ約10cm～40cmを測る。
	多くのピットから弥生後期から古墳時代前期の可能性が考えられる細かな土飾器片が出土している。
落ち込み	調査区の南端で確認した、落ち込みである。おそらく自然地形の微高地端部から、谷状地形への落ち込み端部を検出したと考えられる。
	丁寧の影響深度を超えるため、底盤までは発掘していない。黒灰色砂質土が厚く堆積し、部分的に深さ約60cmまで掘削している。弥生時代後期の上器が多く出土しており、少量だが古墳時代後期の須恵器が混じる。奈良時代以降の遺物は確認できず、当該時期にはほぼ埋没していた可能性も考えられる。

まとめ

今回の第54次調査では、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代～平安時代の集落に伴う造構が確認できた。

調査地の南端で、微高地から谷状地形に変わる地形の落ち込みが検出でき、集落の最南端付近を調査した事が考えられる。位置的には地下鉄上沢駅に接した南方であり、現在までの調査では造構の確認されていない地域である。当該調査区の周囲については、微高地が舌状に張り出しているのであろう。

SD01を除くと、全体的に弥生時代後期の造構と遺物が多い状況である。堅穴住居や土坑、ピット等が確認でき、南端の谷状地形の落ち込み際まで、集落居住域の主要な部分が広がっている。

古墳時代前期はSD04とピットの一部が確認できる程度であり、造構と遺物は希薄である。古墳時代後期以降もSD01を除くと造構と遺物は希薄である。SD03が古墳時代後期であり、SD05が奈良時代頃となる。共に調査区の北端部付近の造構であり、南半部ではこの頃の造構は確認できていない。

古墳時代前期以降では、集落居住域の主要な部分がより北方に移動したことが、理解できる。

20. 兵庫津遺跡

兵庫津遺跡は兵庫区南部のJR兵庫駅からJR和田岬駅付近の一帯に広範囲に拡がる、兵庫の港と港町を中心とする奈良時代から近世にかけての遺跡である。これまでに40次を超える調査が実施され、その様相は次第に明らかになりつつある。

兵庫津は古くは「大輪田泊」と呼ばれ、瀬戸内海航路の基幹港の一つとして発展してきた。文献上での記録では奈良時代の大輪田船息の記載が知られていたが、平成13年度に芦原通で実施された第32次調査において、はじめて奈良時代の遺構、遺物が検出され、兵庫津遺跡が奈良時代まで遡る事が確認された。

大輪田は平清盛による大修築を経て、日宋貿易の窓口として繁栄し、中世には兵庫津と呼ばれるようになる。室町時代には日明貿易の根拠地として栄えたが、応仁・文明の乱〔1467～1477年〕により衰退する。しかし国際港としての地位を堺に譲るもの、重要港としての地位は変わらず、安土桃山時代には織田信長による花隈城攻めに戰功のあった池田恒興、輝政父子により兵庫の町の中心に兵庫城が築かれている。

近世には西国街道も兵庫へと迂回するようになり、江戸幕府の宿駅指定を受ける。近世の兵庫津については尼崎藩領期の元禄9年〔1696年〕に作成された『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』などにより町並みの様子が知られていたが、平成13年度に須佐野通で実施された第26次調査での真光寺の濠の北東角、町屋、水路、道路の検出、平成14年度に西柳原町で実施された柳原惣門の調査である第29次調査などによって、絵図の正確さが立証された。兵庫津は幕末には兵庫（神戸）開港が行なわれた。



fig. 154 兵庫津遺跡調査地位置図 (S = 1 : 5,000)

第40次調査

基本層序

基本層序は、搅乱と盛土、淡茶褐色細砂～粗砂、淡褐色、淡茶褐色、淡灰褐色等の細砂～粗砂（幾度にもわたる洪沢砂、堆積途中に石列遺構を検出した第1遺構面が存在する）、暗灰色砂質土、黄褐色粗砂（上面がSE01を検出した第2遺構面となる）と堆積している。

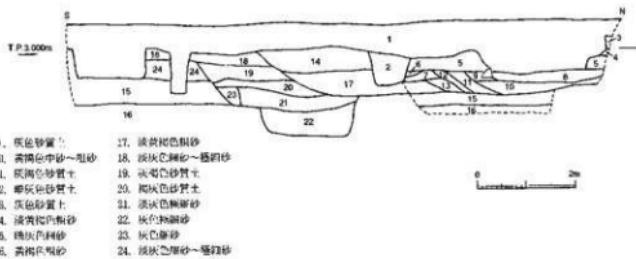


fig. 155 土層断面図

遺構と遺物

遺構は、江戸時代後期～幕末頃の石列遺構と、時期不明であるが江戸時代中期頃の可能性も持つ曲物を伴う井戸状遺構を確認している。

遺物は、江戸時代後期～幕末頃までの陶磁器が主に出土している。

第1遺構面

石列遺構

調査区の南方で確認した。旧湊川の西岸に近接した位置で、旧湊川に平行する方向に確認されており、自然堤防の護岸の為の石列遺構であろう。

東西方向に延びており、調査区内では長さ約2.5mで確認している。南方向を面として築造し、1段から3段の石組みである。高さは、約30cmを測る。

石列を埋没させた細砂～粗砂から、江戸時代後期～幕末頃の陶磁器が出土している。また、幕末頃と想定できるワイン瓶が出土している。また、石列の築造以前の堆積土層にも、江戸時代後期～幕末頃の陶磁器が出土している。

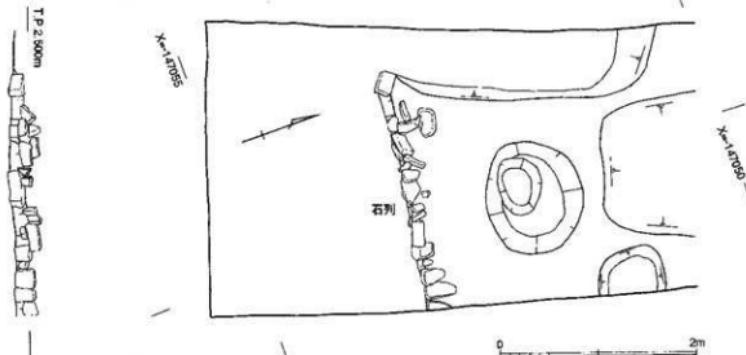


fig. 156 第1遺構面平面図

第2遺構面

SEO1

調査区の北方で確認した。遺構の時期は不明であるが、江戸時代中期頃の可能性も考えられる井戸状遺構である。1.8m×80cm以上で、深さ約45cmを測る土坑の掘形内に曲物2基を据付けている。曲物は共に径約42cmで、高さ約45cmを測る。

上坑上面が曲物上面となり、遺構面直上で曲物が存在し、その内部に水を溜める方法をとった遺構である。旧湊川に近接した地点に存在しており、この様な井戸状遺構でも漏水するのである。

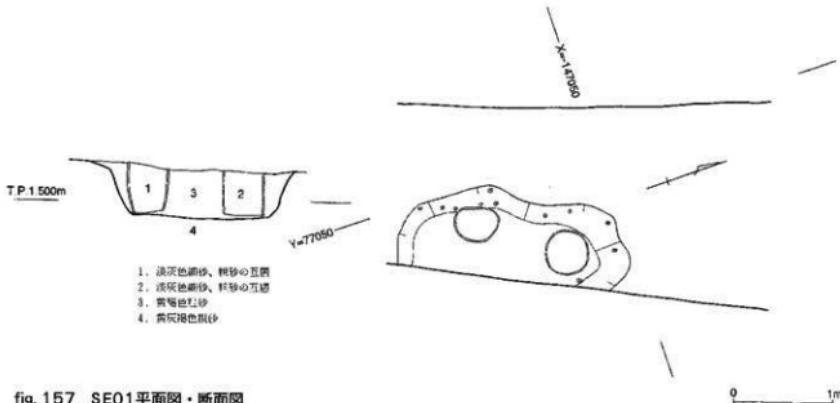


fig. 157 SEO1平面図・断面図

まとめ

2面の遺構面から、江戸時代後期～幕末期頃の石列遺構と、江戸時代中期頃の可能性も考えられる井戸状遺構を確認した。調査地は位置的に旧湊川の影響を受けやすい場所であり、基本的には江戸時代の集落は造営しにくい地域である。今回の調査で確認できた遺構が建物に隣接する遺構ではなく、井戸状遺構や旧湊川からの護岸に伴う石列遺構である事も、それを証明している。

第41次調査

今回の調査地は兵庫津遺跡の北東部に位置する西出町の稻荷神社の北にあたる。兵庫津を描いた現存する最古の絵図、長州八部郡福原庄兵庫津絵図（元禄9年【1696年】）では若狭守平経俊塚の北側にあたり、南には佐比江、川崎船入江に面した西出町に近接するがこの絵図においては当地には町屋の形成は見られない地域である。

調査の経緯

今回の調査は共同住宅建設に伴い工事影響範囲に存在する埋蔵文化財の記録作成を目的とした発掘調査である。発掘調査に至る経緯は、開発事業地内の埋蔵文化財の状況を確認するための試掘調査を平成18年6月27日に実施。その結果、事業地敷地から近世の遺物包含層が確認された。発掘届出書の建築計画書と試掘調査で得た埋蔵文化財のデータを検討した結果、工事による掘削の影響が及ぶ範囲（建物基礎部・フーチング部分の

工事影響深度が埋蔵文化財に達し破壊されると判断された範囲)について、発掘調査を実施することとなった。

調查概要

調査は計画建物基礎の工事影響範囲の形状で調査を行った。約4m²のグリット10基の調査区内からは、中世の遺物包含層と近世の遺物包含層が検出された。各グリット内の各地層面上で遺構検出手作業を実施したが、遺構は確認されなかった。なお、10基設定したグリット中、2基については後世の擾乱を大きく受けており、埋蔵文化財は確認されなかった。以下、調査地の基本概要と検出された遺物包含層の状況について記述する。

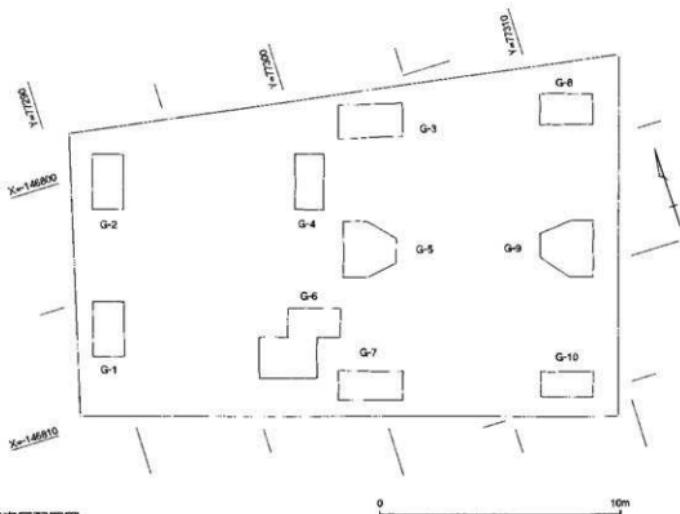


fig. 158 調査区配置図

基本層序

調査地の現地表面（標高2.3m～2.1m）から1mから1.3m前後までが表土であり、その下層に厚さ10cmから20cm程度の洪水砂と考えられる遺物を含まない明灰黄色粗砂が堆積している。

この層の下層に、厚さ20cmから30cmの近世の遺物を包含する暗灰褐色粗砂混じり砂質土、その下層に厚さ10cm程度の近世の遺物を包含する暗灰褐色砂質土を検出した。

この2層の近世の遺物包含層は、標高1.05mから0.5mの間で検出された。この層の間や下層で、これまでの町屋遺構の調査で検出されている土間に形成する締った粘土層は確認されなかった。出土品は、各グリットから出土しており、一箇所に固まって出土することはなかった。出土品には、搔鉤、急須、皿、行平鍋などが出土しており、おおむね19世紀代のものと考えられる。いずれも当時の町屋で使用されていた生活用具であると考えられる。

近世の遺物包含層の下層には、遺物を含まない厚さ25cm程度の暗灰色中砂、その下層に厚さ10cm程度の暗黄色粗砂が堆積していた。その下層には、17世紀代の唐津焼の塊

などの陶器片をわずかに含む暗灰褐色砂質土（灰色シルト混じり）が25cmから35cmの厚さで堆積しており、これらの土層が元禄9年の兵庫津絵図にある町が形成されていない時期の当地の状況であると考えられる。

この下層、標高0.18mで厚さ15cmの中世の遺物包含層、淡灰黑色砂質土（暗灰色シルト混じり）を検出した。その下層、標高0.03mで暗灰色砂質土を確認したが、激しい湧水によってこの上面での状況は明らかにできなかった。出土遺物は少量であるが土師器鍋があり、内側する口縁外面に断面三角形の短い鉗をもち、体部外面に斜め方向の平行叩き目があるもので15世紀代のものと考えられる。

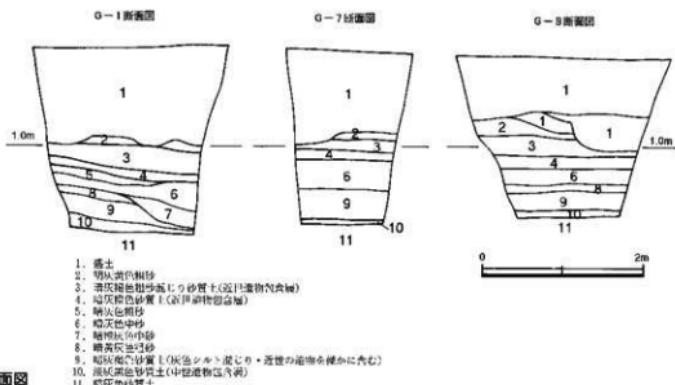


fig. 159 土層断面図

まとめ

今回の調査では近世の遺物包含層と中世の遺物包含層を確認することができたが、調査範囲が狭小で遺構の検出には至らなかった。近世の遺物包含層からは擂鉢や皿、急須、行平など町屋の生活で使用された陶器類が出土しているが、いずれも19世紀以降に属するものと考えられる。それ以前の出土品はほとんどなく、当地に19世紀以降、町屋が形成されていたことが明らかとなった。

調査地周辺を現存する絵図から概観すると、尼崎藩が支配していた元禄9年（1696）の兵庫津絵図では町屋の形成は認められない。明和6年（1769）の絵図でもこの地域は同様であるが、尼崎藩の支配から幕府領に転換する時期にあたり、これ以降海岸部の埋め立てや、町域の拡大が大規模に行われる。調査地周辺でも佐比江の埋め立てが行われ、佐比江新地が新たに町として加わっている。嘉永3年（1850）の津川絵図控には、さらに町域の拡大が見られ、当調査地においても町屋が形成されている。

今回発見された出土品は、現存する絵図が示すように、尼崎藩領から幕府領に転換されさらに町域の拡大や海岸部の開発が大規模に行われた19世紀以降の状況を窺い知ることのできる資料となった。今後周辺の調査の進展で、当時期の兵庫津の発展段階を明らかにできることがあると考えられる。また、中世の遺物包含層から出土した土師器鍋は15世紀代のものであり、当時期の町場の存在も窺われる発見となった。

第42次調査

共同住宅建設に伴う発掘調査である。残土置場の確保から、東西2分割の反転調査を実施し、西半部（1・2区）の調査を完了後、東半部（3区）の調査を実施した。

基本層序

調査地の基本層序は、整地、盛土が繰り返されたことにより、形成されている。現地表から15cm～70cmまでは整地、搅乱層で、この下層に焼上層が存在する。これはガラス片等を含むことから、第2次世界大戦の神戸空襲に伴うものと考えられる。この下層に部分的に数枚の整地層が存在し、その下層に第1造構面が、その下層には焼土層が存在し、この上面から第2造構面が検出された。第3造構面は焼土層の下層で検出される。第4造構面は1区のみで検出された。この下層には、もう1層焼土層が存在し、下層に第5造構面が存在する。本来、第6、7造構面は別に分層されるが、盛土による整地で、第6造構面までの造構の検出はできなかったため、第7造構面にて同一面で検出している。第7造構面は淡褐色細砂上に検出された。

調査概要

今回の調査では7面の造構面を検出し、第1～5造構面からは、東西方向に主軸を持ち、短冊型の区割、町屋、多数の土坑を検出した。また、第6、7造構面からは多数の上坑、ピットを検出した。

各造構面の時期は、第1造構面からは18～19世紀にかけて、第2造構面からは18世紀代のものと考えられる遺物が出土している。第3造構面を覆う焼土層からは17世紀半ば～18世紀前半頃のものと考えられる遺物が出土している。調査区全体を覆う焼土の規模や、よく焼けた造構面の状況から、兵庫の町に大きな被害を与えた、宝永5年（1708）の大火に伴うものと推定され、この下層の第4造構面下層で、もう1層検出された第5造構面、及びこれを覆う焼上層からは17世紀半ば～18世紀前半頃のものと考えられる遺物が出土している。第6造構面からは17世紀頃の遺物が出土し、第7造構面からは15世紀頃のものと考えられる遺物が出土している。

町屋部分は整地の繰り返しにより第1～5造構面で一段高い状況が確認された。また、町屋の高さは同じではなく、3区第3造構面では宅地により高さが違う状況が確認された他、1区のみで第4造構面が検出されている。2区及び3区の西半は多数の土坑が切り合った状況で検出され、町屋の道路に面した反対側は空間地として利用され、検出された土坑は廻葬穴等の目的を持って使われたとも推定できる。2区では第5造構面は第3造構面と同一で検出され、第5造構面の造構は検出されなかった。

なお、本調査内容については『兵庫津遺跡第42次調査発掘調査報告書』が刊行されているため、詳細は報告書を参照されたい。

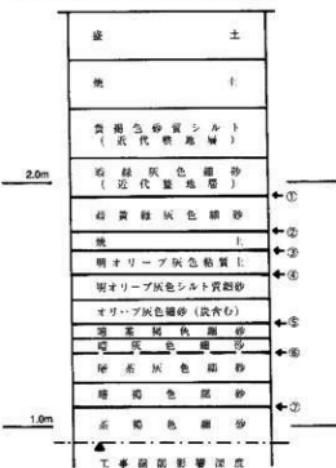
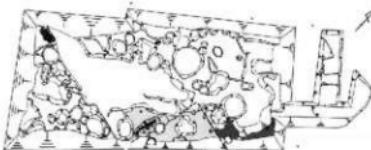
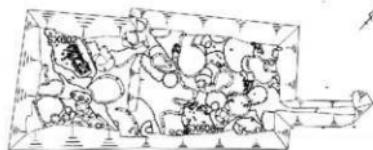
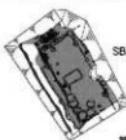


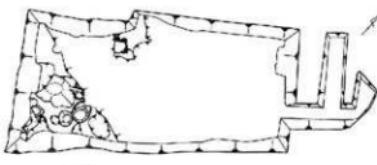
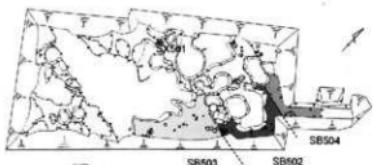
fig. 160 土層断面図



第6・7遺構圖（15世紀～17世紀）



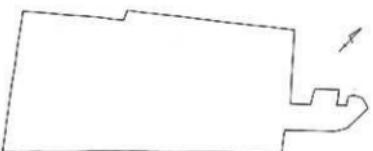
第3遺構圖（17世紀後半～18世紀半）



第5遺構圖（17世紀後半～18世紀前半）



第2遺構圖（18世紀～19世紀）



第4遺構圖（17世紀後半～18世紀前半）



第1遺構圖（19世紀）

0 10m 納田範勝氏

fig. 161 第1～7遺構面平面図

第43次調査

共同住宅建設に伴う発掘調査である。

基本層序

基本層序は、搅乱と盛土、淡灰褐色細砂～粗砂、暗褐色細砂～粗砂（近代以降のレンガを含む、土壤化層）、褐色細砂～粗砂と淡灰褐色細砂～粗砂の互層（土壤化層、近世陶磁器を含む）、暗褐色細砂～極細砂（土壤化層、近世陶磁器を含む）、淡黄灰褐色細砂～粗砂（上面が造構面となる）と堆積している。

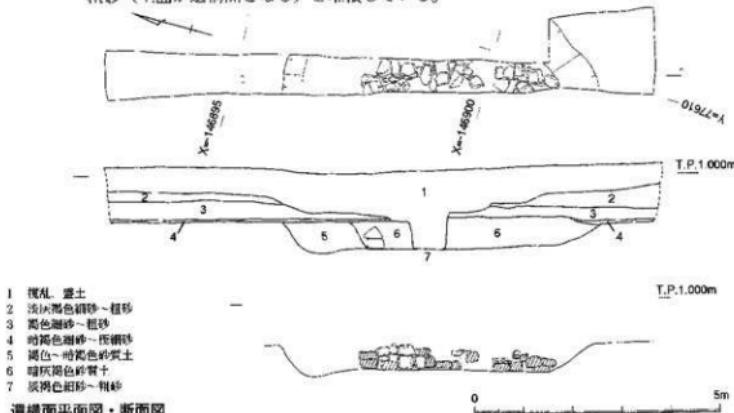


fig. 162 造構面平面図・断面図

遺構と遺物

造構は、近世の石垣状造構、落ち込みと、近代以降の石垣を確認した。

遺物は、近世の陶磁器と瓦片が出土している。

1 トレンチ

近代以降の石垣を確認している。石垣は東西方向に延びており、高さ約90cmで3段まで積まれている。この石垣は南北方向に面して築造されている。築造土の上面は近代以降のレンガを含む土壤化層の、暗褐色細砂～粗砂である。また、石垣の裏込め土からも多数のレンガが出土している。

2 トレンチ

近世の石垣状造構を確認している。この石垣状造構は南北方向に延びており、高さ約60cmで、3段まで積まれておらず、西方向に面して築造されている。近世陶磁器しか含まない褐色細砂～粗砂と淡灰褐色細砂～粗砂の互層の下面で確認されており、確実に近世の造構である。土坑状に深さ約60cm掘削された下面に石を据えている状況が確認され、石垣の根石だけが遺存している状況である可能性も考えられる。

SK01

石垣状造構に削平される上坑である。南北幅約1.6m以上×東西幅約0.9m以上で、深さ約60cmを測る。淡褐色細砂～粗砂が堆積し、近世陶磁器が出土している。

3 トレンチ

近代以降の石垣を確認している。石垣は東西方向に延びており、高さ約1.0mで、3段まで積まれている。この石垣は南北方向に面して築造されている。石垣の裏込め土から、多数のレンガが出土している。

まとめ

近世の石垣状造構を確認した。この近世の石垣状造構は2トレンチでしか確認できていない。また、トレンチ調査であり、石組の全体像が確認できず、何に伴う造構であるかは不明である。

第44次調査

調査概要

今回の調査は、8面にも及ぶ生活面が確認され、宝永の大火（1708年）に伴う焼土層も確認した第15次調査地から約200m西に位置する。

共同住宅の建設に伴う調査で、土壤改良工事により遺跡が破壊される部分に限定し、発掘調査を実施した。掘削の影響深度は、1区（南半）ではGL-2.1m、2区（北半東）では-3.6m、3区（北半西）では-3.0mを測る。なお、1区北東隅にはエレベーターピット部分があり、その部分については、-2.5mを測る。調査は1～3区に分割して実施したが、記述は各遺構面にまとめて行う。

第1面

主に表層掘削が行われた面で検出された遺構面である。石列・土坑・ピット・礎石・竈を検出した。わずかに残存する被覆土は焼上層で、周辺で確認されている宝永の大火と考えられる。南半（1区）では幅6m、検出長12mの町塀と考えられる東西に長い区画を検出した。内部は全体の約2/3に土間状の粘土敷を確認し、一部は赤褐色で、火災の影響をうけ変色したものと考えられる。北側の石列は残存状況の良好な箇所で3段に疊を積み重ね、石垣状を呈する。下段の右列は50×50cm程度の隅丸の比較的大きな花崗岩を用いており、上段の疊とは大きく異なる。石列の積み直しの可能性が指摘で

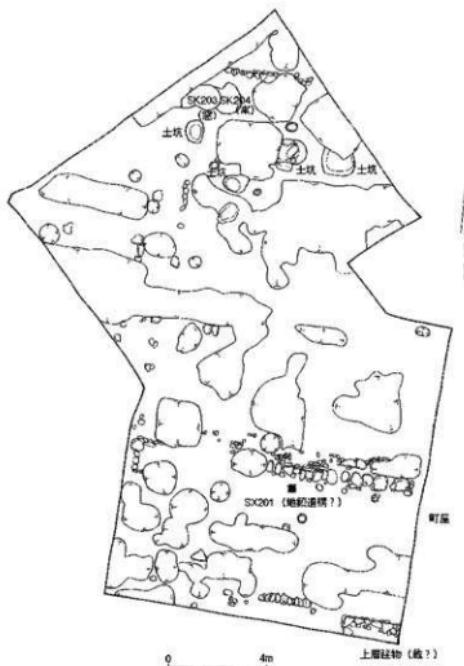


fig. 163 第1遺構面平面図

きる。土間を取り除くと、押しつぶされたような状態の培塿1個体と銅銭1枚が出土した。上間に構築する際の祭礼に伴うものと考えられる。南東隅にはさらに上層に炭と考えられる切石積の石列を確認した。

北半(2・3区)では北東隅に東西方向の石列が検出されている。右列の南側には切り合ひ形で礫が2基(SK203・204)検出された。いずれも直徑1m程度で、いずれも外周に瓦・礫(直徑15cm程度)を交互に積み重ねる。内部は赤褐色に変色しており強い火を受けている。しかし、焼き締まりは弱く短期間使用されたものと考えられる。なお、SK204の北側には煙道状の括れが検出された。SK203の焚き口と考えられる部分には支柱と考えられる被熱した礫が直立した状態で検出された。17世紀中頃～18世紀中頃の陶磁器が出土した。また、SK204の掘形からは銅銭が1枚出土し、地鎮的なものである可能性が高い。3区部分では礎石と考えられる30cm大の花崗岩礫が南北方向に1～2mの間隔で検出された。

第2面

町屋と考えられる東西方向の区画が3間分検出された。宝永の大火で被熱した土間および廃土と考えられる粗砂を掘り下げる面で検出されており、それ以前のもので、17世紀後半から末期のものと考えられる。

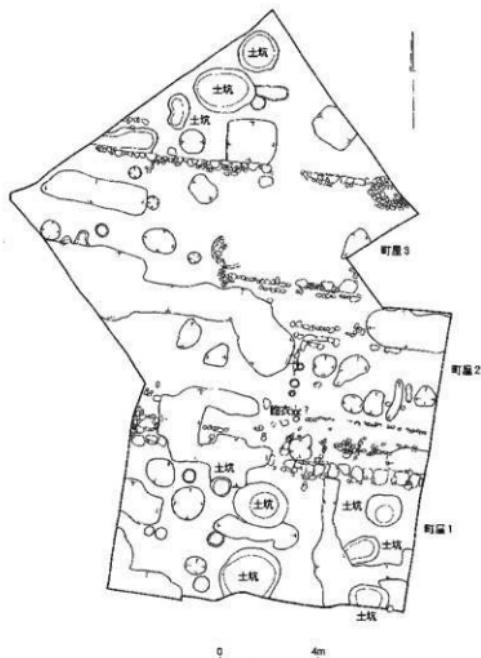


fig. 164 第2階構面平面図

南側で検出したのは町屋1で、第1面で検出した区画と同様のものである。西側にわずかに土間状の粘土貼りの部分が検出されたが、中央から東側にかけては直径1m前後の円形の土坑が5基検出された。この状況から大半は芥溜のようなものと考えられる。

町屋2は町屋1と町屋3の石列に挟まれた部分で、1区東半分に石列が幅4m、検出長約6mに配置される。町屋1との境には石敷きのような礫の集中する部分があり、また町屋3との境には水路状に拳大の礫を石列と平行して配置する。内部は搅乱が多く、不明な部分も多いが、所々に土間状に締まった部分が確認される。

町屋3は町屋2から約2m北に間隔をあけて築造されている。幅約4m、検出長約11mを測る。周辺の町屋よりも20~30cmも多い。西側部分(3区部分)はわずかに礎石と考えられる礫が見られるが、東側には盛土と考えられる黄灰色粗砂の中に高さ・幅ともに約1mの礫塊が確認されたが、どのような用途を持つものか現在のところ不明である。北側の右列は、切石を使用し、石垣状に2段分を検出した。石列北側の埋土および石列の上段からは備前焼、丹波焼、肥前系陶磁器が出土している。また、東端には上面に拳大的の礫を円状に配した土坑が検出されている。この町屋に付属するものと考えられるが、その用途は不明である。石列北側には、芥溜と考えられる直径0.5~1.0mの円形・不整形の土坑を3基検出した。

第3面

この遺構面では、上面で検出したような明確な区画は1区の南部で確認されるだけであった。北側には主に芥溜と考えられる直径1.5~2.0m程度の土坑を8基検出するのみにとどまった。各遺構及び上層の盛土からは17世紀代の陶磁器が出土しているが、それらに混じって18世紀代のものも出土している。遺物の混入が見られるため、正確な時期の判定は困難であるが、おおよそ17世紀中頃の遺構面と考えられる。なお、この遺構面からは、中國福建省漳洲窯系の輸入磁器が出土している。

1区南部で検出した区画で、第1・2面の区画はこれを踏襲していると考えられる。区画は、長さ50cmの隅丸方形の礫と20~30cmの礫を交互に並べて形成する。中央には長辺約1.5m、短辺約1.0mの方形の石列の土坑を作りつける。中央から西部では検出長約4.0mの落ち込みが1基と直径1.0~1.5mの円形の土坑が2基検出された。また西端付近では灰褐色粘質土で上間が構築されており、そこに検出長3.5m、検出幅40cmの塙列を確認した。塙の法量は、長さ約25cm、幅約20cm、厚さ約2cmを測る。このような塙を使用する建物は、これまでの近世の近世遺跡の調査例から藏のようないわが予想される。その南側には20~40cm程度の礫で構築した長さ約1.8m、幅約1.5m、深さ約40cmの長方形の石積遺構(SX401)が1基検出された。石積みは高い部分では3段積み上げられている。埋土は暗灰色から灰色のシルト質極細砂が堆積しており、肥前系陶磁器が出土している。これについても、他の近世遺跡での調査成果から、地下貯蔵庫・トイレ・水溜などの使用用途が予想されている。また、南側では一部に礫の堆積する落ち込みが検出された。

3区第2面の町屋3の北側の石列を除去した段階で、検出長3m程度の石列を検出しておらず、第3面の区画の元になるものがあった可能性がある。しかし、そのほかの部分について、区画らしいものはあまり見られず、直径1.0~2.0m程度の土坑、集石、ピットなどが主に検出されているのみである。土坑は大半が芥溜のようなものと考えられるが、

中には特異なものも見られる。SK313は、長さ90cm、幅60cm、深さ約10cmを測る。17世紀中頃の完形もしくはほぼ完形の上部器皿が大量に出土した。このような状況から、何らかの祭礼行為に関わる遺構と考えられる。

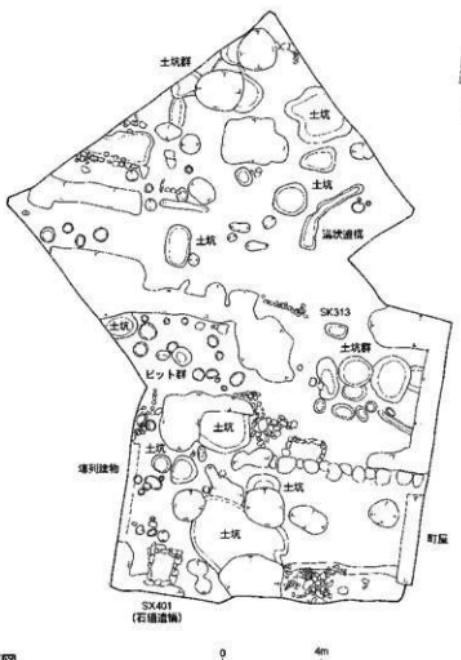


fig. 165 第3遺構面平面図

第4面

この遺構面では集石遺構3基、土坑14基、石組遺構1基、溝状遺構2条、落ち込み1基を検出した。この段階では区画は一切見られなくなる。上層の盛土、遺構から出土した遺物から17世紀前半から中頃のものと考えられる。

集石遺構は、1区南部・同区中央部・3区北西隅で検出している。南部のものは、主に拳大の礫を長さ4.0m幅2.0mの範囲に配する。中央のものは右組遺構SX402に付属するようにその東側に20~30cmの礫を長さ1.5m、幅50cmの範囲に配する。3区のものは、人頭大の礫を円形に配するもので、壁面の崩落が激しく、観察が不十分であるが、礫が下層にまで続いている状況が確認されたので、石積の井戸と考えられる。

土坑は、直径1.5m、深さ30cm以上（影響深度以下に及ぶため掘削不可能であったため）を測る円形の土坑が多い。埋土は主に黄灰色粗砂のものと、灰褐色系の粘質土のものが存在する。

石組造構は1区中央で検出したSX402で、長さ約1.5m、幅約90cm、深さ約20cmを測る。長さ約40cmの横長の礫をコの字状に配する。内部からは肥前系陶磁器が出土した。

溝状造構は1区西端、2・3区北部でそれぞれ検出した。前者は南北方向で、検出長4.0m、幅30~60cm、深さ約20cmを測る。一方後者は東西方向で、検出長4.5m、幅約70cm、深さ約20~40cmを測る。

落ち込みは3区で検出されており、検出長約5.0m、幅約3.0m、深さ30cmを測る。埋上からは、16世紀から17世紀の遺物が出土した。

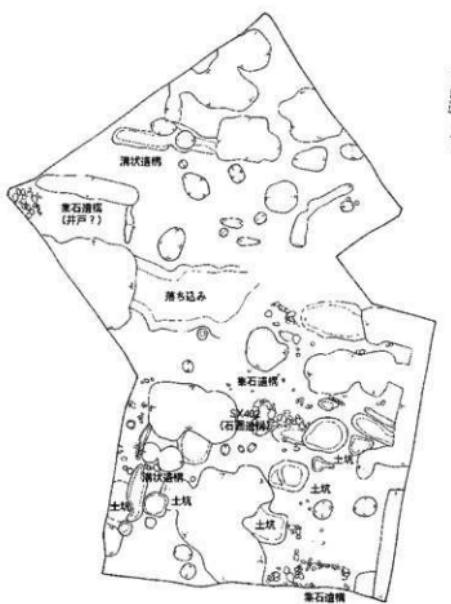


fig. 166 第4造構面平面図

第5面

1区では土坑14基、ピット1基、集石6箇所を、2・3区では落ち込みを2基、上層を疊で囲む円形の上坑を1基検出した。落ち込みなどから出土する遺物から17世紀前半以前のものと考えられる。

土坑は主に1区中央に切り合って検出され、円形で直径1.0~2.0mを測る。いずれも、影響深度以下に遺構が及んでいるため、平面プランの検出にとどまっている。また、3区では直径約2.0mの石囲の上坑が1基検出されている。

集石は1区全域にわたって6箇所確認されている。方形のプランを形成するもの、南北に列状を呈するものも見られるが、町屋に関わるものか不明な点が多い。

落ち込みは、2・3区を東西に分割するように東方向の落ち込み（SX501）と西方向の落ち込み（SX502）を検出した。特にSX502の肩部からは17世紀前半の土師器皿が大量に出上している。なお、これらの落ち込みは、海拔0mを超える水が激しく堤面の崩壊が激しく、完掘は不可能であった。

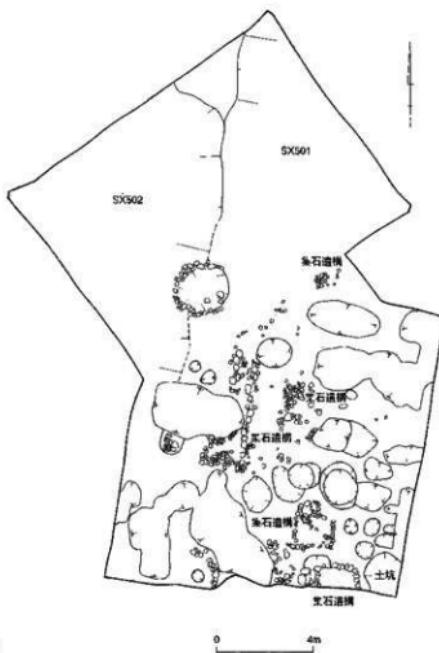


fig. 167 第5遺構面平面図

まとめ

江戸時代の遺構面を5面検出し、町屋に関連する遺構を多く検出した。第3面（17世紀中頃）が町屋の形成された時期と考えられる。特に1区で検出された壇列の建物は、兵庫津内でもあまり検出例がなく、特徴的な建物である。西国街道に面した場所であることから、おそらくは商人など富裕層の蔵であった可能性がある。

また、第1・2面は区画に大きな石を用いて区画を形成しており、地割に際し比較的大掛かりな普請が行われていたことが判明した。17世紀前半以前に関しては、2・3区の第5面で大きな落ち込みを検出しており、町屋の区画に関わるような遺構は確認されていない。そのため、この段階では町屋の地割がなされていないと考えられる。

21. 日下部遺跡

日下部遺跡は八多川と有野川の合流点付近の段丘上に位置する遺跡である。

平成6年度、14年度に実施された、共同住宅建設等に伴う調査では弥生時代後期～古墳時代初頭の堅穴住居、平安時代後期の掘立柱建物等が検出されている。また平成7年度～平成9年度にかけて、道場八多地区区画整理に伴い、兵庫県教育委員会が実施した発掘調査では弥生時代後期後半～古墳時代前期の堅穴住居、方形周溝墓、古墳時代後期の堅穴住居、溝、飛鳥時代の堅穴住居、土坑、中世の掘立柱建物が検出されている。

本遺跡については、現在調査次数の整理中であるため、調査次数を使用せず、事業内容に分けて調査ごとに掲載している。



fig. 168 日下部遺跡調査位置図

雨水幹線に伴う調査

道場八多地区区画整理事業に伴う雨水幹線埋設にかかる調査で、埋設管の設置に際し、掘削により文化財に影響を及ぼす範囲について調査を実施した。

基本層序

調査区内の基本層序は、上から盛土、現耕土、黄灰色砂質土（旧耕土：近世）、灰色砂質土（旧耕土：中世）の順に堆積し、その下の（暗）褐色砂質土面が遺構面となる。明確な遺物包含層は存在せず、遺構面に近い灰色砂質土（中世旧耕土層）の下位から中世の遺物がまとまって出土した他、粘性を帯びた遺構面上の土壤化部より弥生土器が少量出土した。また、調査区の北・南壁際及び中央の隙間の露呈部分にトレンチを設けて下層の状況を確認した。隙間の間に暗褐色を呈する砂質の強いシルト層の堆積があり、今回の調査区の中央を、南から北へ下がる地形を呈しながら貫流する旧河道の痕跡を検出した。埋土上層から弥生土器の小片、サヌカイト片がそれぞれ1点出土したが、その他に遺物、遺構面は確認されなかった。

調査概要

検出遺構は柱穴6基、土坑1基、落ち込み1基である。

柱 列

調査区の北東部で径約30cm、深さ約20cmの柱穴を3基（SP01～03）を検出した。建物を構成するものと考えられるが、調査区外に拡がるため全体の規模は不明である。

SP01と02の間は1.6m、同02と03の間は2mを測る。いずれも底面あるいは下部に隕

を掘え、柱の根固めを行ったものと判断される。埋土は暗灰色を基調とするシルト層で、S P01・02に、柱の抜き取り後に埋没したと思われる乳白色シルト層の堆積が認められる。遺物はS P01より弥生土器と思われる極小片が1点出土したのみで、遺構の詳細な時期は不明である。

S K01 径約80cm、深さ10cmの円形を呈する浅い皿状の土坑である。埋土は暗灰色砂質シルトの單一層である。小疊が僅かに混じるのみで遺物の出土はなかった。

S X01 長径4.5m、短径4m、深さ10cmの浅い落ち込みである。埋土は暗褐色粘質土で、小片ではあるが、弥生土器と考えられる破片が比較的多く出土した。下層に存在する旧河道の影響により形成された浅い窪みに土器が混入したものと考えられる。

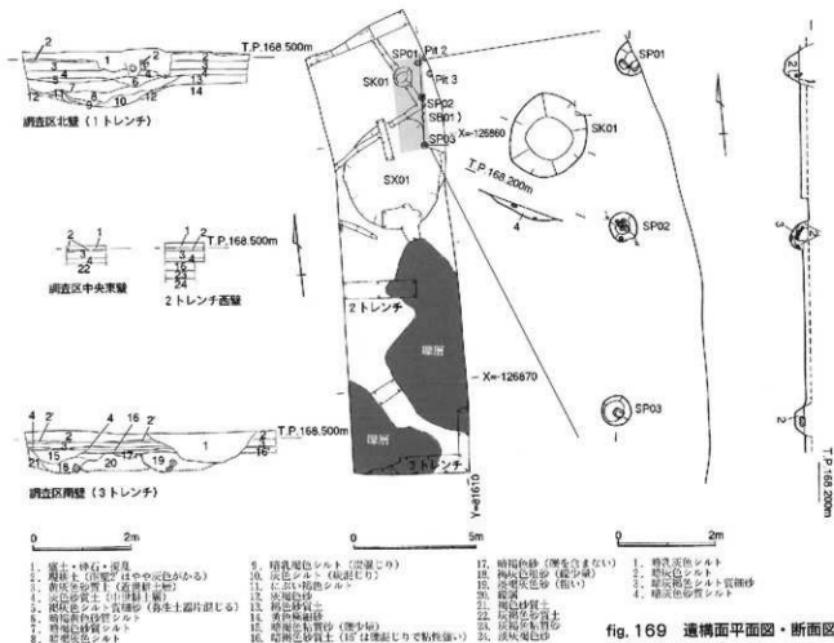


fig. 169 遺構面平面図・断面図

まとめ 時期は不明ながら、柱列を検出し、建物の存在が推定される。やや高位となった調査区の北東部分のみ、比較的安定した地盤を形成するようであり、今回の調査地の北東、神鉄道場南口駅東側に微高地が拡がるものと考えられる。南西方向へ下がる地形は八多川の氾濫原で、遺物・遺構は希薄になるようである。

周辺で大規模に実施された区画整理事業に伴う調査でも遺構・遺物の検出される範囲についてにはばらつきがあり、後世の水田形成の影響の他に、八多川の氾濫による地形の改変作用が非常に大きいものと思われる。今後の調査の進展により日下部遺跡における微地形の復元が進めば、遺跡の形成過程が明らかになることであろう。

駅舎改修に伴う調査

本調査は、神戸電鉄道場南口駅駅舎改修工事に伴うものである。

調査は排水溝の敷設範囲で実施した。調査範囲内に既設の水路が存在しており、これを挟んで西側を1区、北側を2区とした。

基本土層

調査地の基本土層は地表面から30cm～35cm前後までが、盛土・旧耕土・床土層で、この下層に中世の遺物包含層である灰褐色シルトが存在する。この下層が黄灰褐色極細砂で、1区の南半付近では砂礫を多く含んでいる。この黄灰褐色極細砂の上面から遺構が検出された。地表面から遺構面までの深さは40cm前後である。



fig. 170 土層断面図

検出遺構 溝3条、土坑1基、ピット11基を検出した。遺構は1区の北半に多く集中する。

溝 1区中央やや北側で3条の溝を検出した。幅20cm～25cm、検出面からの深さは5cm～15cm、いずれも北東から南西方向である。溝の中からは遺物は出土しなかった。

SK01 1区南半で検出した長径30cm、短径25cm、検出面からの深さ10cmの土坑である。遺構内から遺物は出土しなかった。

ピット 検出したピットは、直径15cm～35cm、検出面からの深さ10cm～20cmの円形で、いずれのピットからも遺物は出土しなかった。西側隣接地の獨立柱建物に対応する柱穴は確認されなかった。

まとめ 限られた範囲の調査であったが、比較的多くの遺構が検出された。道場八多地区土地区画整理事業に伴い実施された西側隣接地では掘立柱建物1棟が検出され、北側を中心にして遺構が検出されたが、今回の調査においても1区北側に多くの遺構が集中しており、これまでの調査成果から見ても、調査区近隣付近では北側に集落本体が存在し、南側に向かって遺構の分布は希薄となる状況が確認された。

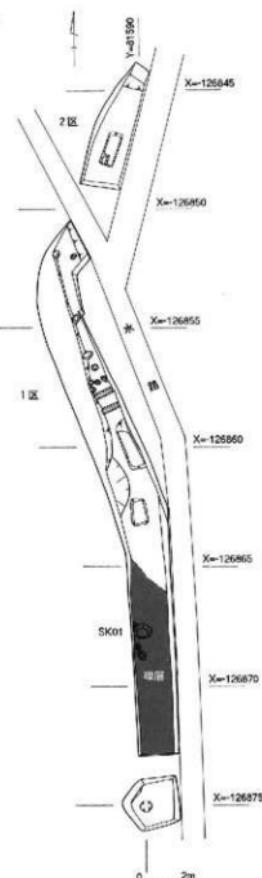


fig. 171 遺構面平面図

共同住宅建設に伴う調査

調査は建物基礎の掘削範囲で実施した。建物基礎形状から1～10区を設定した。

基本土層

調査地の地形は南から北へ緩やかに傾斜する。基本土層は南側で地表面から50cmまで、北側で70cm前後までが盛土、旧耕土・床土層で、この下層の褐灰色砂質シルト上面から遺構が検出された。褐灰色砂質シルトから黄褐色シルト質細砂(旧床上)を挟んだ上層の旧耕土層である灰褐色砂質シルト及び褐灰色砂質シルトには中世の遺物が多く含まれる。

検出遺構

溝3条、土坑1基を検出した。
SD01・02 6～9区で検出した、北東から南西方向の溝である。SD01は幅30cm～70cm、検出面からの深さ5cm前後、SD02は幅30cm～80cm、検出面からの深さは15cm前後で、両者は並行する。出土遺物は共に微細な土師器片が出土している。

SD03 1区東端付近で検出したやや西に振る、南北方向の溝である。幅60cm～80cm、検出面からの深さは南側で20cm、北側35cmであり、北側が深く下がる。北端付近は工事掘削影響深度よりも深くなるため、完掘は行なっていない。出土遺物はなかった。

SK01 1区東半部で検出した直径55cm前後と考えられる土坑で、南側は調査区外へと続く、検出面からの深さは15cmである。出土遺物はなかった。

まとめ 今回の調査では遺構の分布は多くはなかったが、東西に隣接する兵庫県教育委員会の調査データを繋ぐものとして重要である。

平成8年度の兵庫県教育委員会の調査では中世の掘立柱建物、溝、ピットが検出されている。今回の調査で検出された溝は、出土遺物はSD01、02からわずかに微細な土師器片が出土しているのみであり、詳細な時期は不明であるが、検出状況から隣接地での検出遺構と同時期である可能性が高い。SD01、02は南から緩やかに下がる段丘に直交して掘削されており、排水等を目的とする性格とも捉えられる。

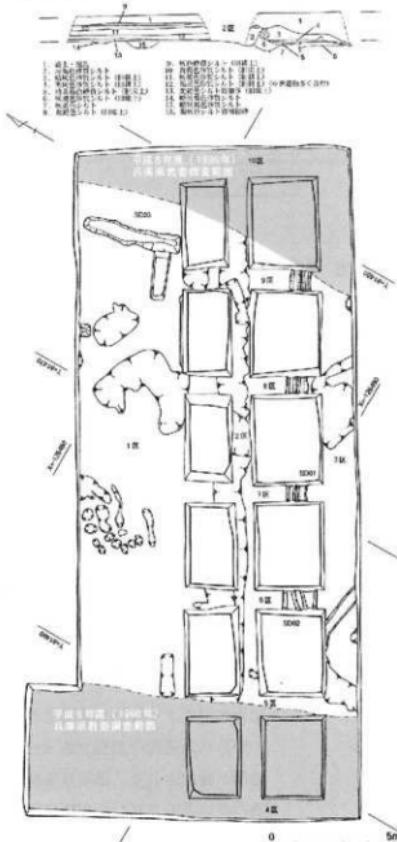


fig. 172 遺構面平面図・断面図

22. 中遺跡

中遺跡は神戸市北区八多町中、旧摂津国有馬郡八多郷に位置する。ここは六甲山の北、武庫川支流の八多川左岸にあたる。八多川流域の平野には、上流から附物遺跡・吉尾遺跡・上小名田遺跡・下小名田遺跡・中遺跡・日下部遺跡・日下部北遺跡が、縄文時代から江戸時代に至る各時代の遺跡が互いに隣接して存在する。

中遺跡ではこれまでに31次の調査が行われ、縄文時代から中世、さらに近世に至る遺構・遺物が確認されている。

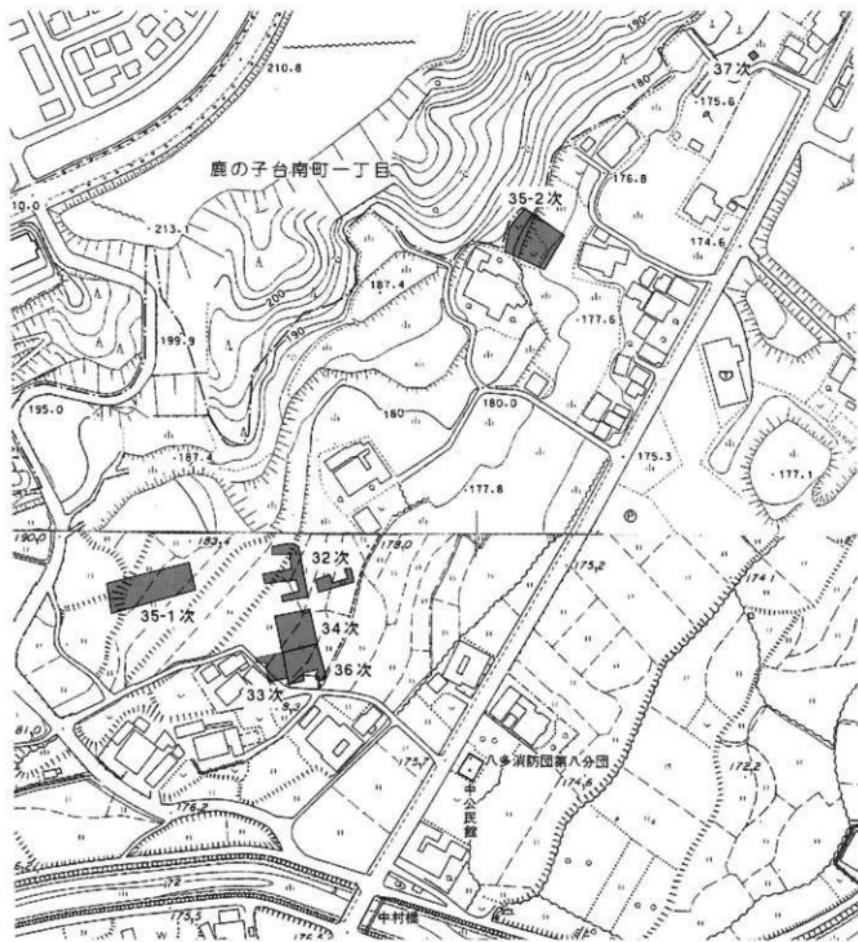


fig. 173 中遺跡調查地位置圖

第32次調査

調査地は宇池尻で、これまでの調査において、飛鳥時代・奈良時代後半から平安時代中期・平安時代末の遺物、比率的には奈良時代後半から平安時代中期の遺物が多く出土している。この中には綠釉陶器・灰釉陶器・須恵器棲塊などが含まれる。遺構としては奈良時代から平安時代末の掘立柱建物・井戸・溝・土坑などの遺構を検出している。

調査の概要

今回の調査は住宅建設に先立つもので、工事によって遺跡の破壊される部分について調査を行った。その結果、古代から中世の遺物包含層（3a層）が確認され、その下面（3a層下面）でこの時期の遺構が検出された。確認された遺構には、柱穴・焼土坑などがある。

柱穴のひとつは位置関係から平成8年に兵庫県教育委員会による調査で確認されている掘立柱建物SB09の続きであると推測されるもので、建物規模は柱間3間×3間となる。

兵庫県教育委員会の調査で確認された掘立柱建物SB03・07～09については出土遺物が少なく、時代の特定ができなかったと報告されている。

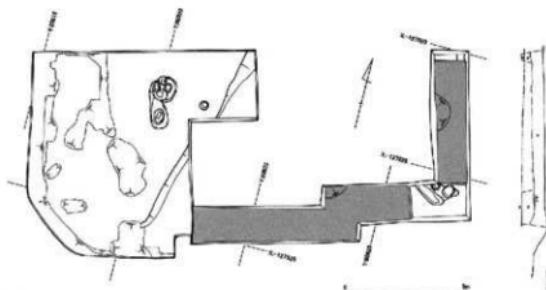


fig. 174 遺構面平面図・断面図

▲柱穴は工事影響深度（最高17.4m）となる造営層基底上に堆積する遺物包含層の下までの深度

第33次調査

調査概要

集合住宅建設工事に先立つもので、工事によって遺跡の破壊される部分について調査を行った。その結果、古代から中世の遺物包含層（3a層）が確認され、その下面でこの時期の遺構が検出された。確認された遺構には、樋（SA01）・柱穴・溝などがある。

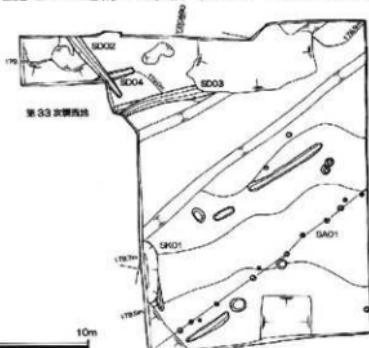


fig. 175 遺構面平面図

第34次調査

調査の概要

集合住宅建設工事に先立つもので、工事によって遺跡の破壊される部分について調査を行った。調査区の北半は後世の搅乱により遺構が遺存していなかったが、南半では古代から中世の遺物包含層（3a層）が確認され、その下面でこの時期の遺構が検出された。確認された遺構には、掘立柱建物（SB01）・柵あるいは塀（SA01～03）・土坑・柱穴・溝などがある。

- SB01** 調査地の南部で確認された。一部は南の第36次調査地にかかる。2間×3間（4.3m×6.2m）の掘立柱建物。柱掘形のプランは円形。建物の設計軸は遺構確認面の等高線にはほぼ合致する。
- SA01** 西に隣接する第33次調査区から続く遺構。当地旧地形の等高線に合致する南西から北東方向にのびる杭列で、柵あるいは塀のような土地を区画するものと推定される。この遺構は20m以上ものびることが確認できた。
- SA03・04** SB01の北西にある柱列。柱間3間分がほぼ同じ位置にあり、SA04が古くSA03が新しいことを、遺構の切りあいから確認できた。SB01の設計軸とはややずれるが、ほぼ同一であり、この建物にともなう日隠し塀的なものになる可能性が考えられる。

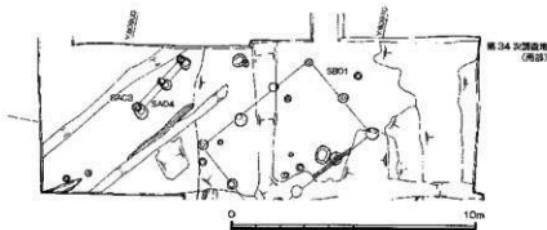


fig. 176 遺構面平面図

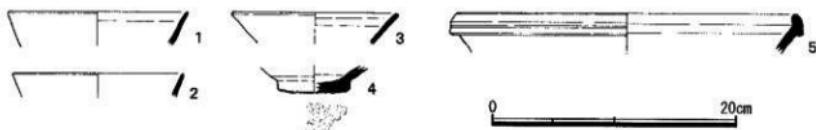


fig. 177 出土遺物実測図 すべて1層出土・須恵器

第35次調査

35-1次

基本層序

当調査地は池尻地区にあり、北西から南東にかけて傾斜する段丘の傾斜面にあたる。

調査の基本層序は、区画整理に伴う盛土を除去すると区画整理前の水田耕上があり、その下に近世以降の水田造成時の客土があり、その下に基盤層である黄褐色疊混じりシルトがある。この基盤層は西から東に向かって緩やかに傾斜している。調査区東端部で谷状に落ち込んでおり、客土の下に灰色シルトが厚く堆積している。

調査の結果、遺物包含層は存在せず基盤層上面で遺構を検出した。しかし全体的に遺構の密度は希薄で、直徑20~30cm、深さ15~20cmのピット15基を検出したのみである。建物としてまとまるものはなかった。ピットには須恵器、土師器が出土したが、小破片のため遺構の時期は不明である。

客土内及び谷状の落ち込みからも須恵器、土師器が若干出土しているが、いずれも小破片のため明確な時期は不明である。

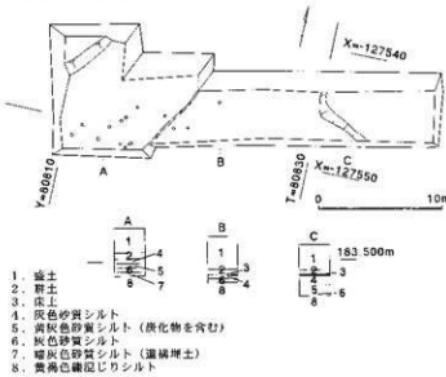


fig. 178 造構面平面図・断面図

35-2次

当調査区は堂ノ元地区にあり、鹿の子台から東に延びる尾根の東斜面に立地している。

基本層序

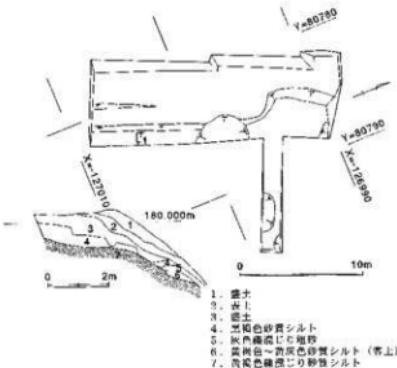
近世以降の新田開発及び区画整理に伴う造成時に原地形が大きく削平されており、盛土、耕土を除去すると基盤層である黄褐色疊混じりシルト層を検出した。

調査の結果、遺構は検出されなかった。遺物は、耕土、客土内より近世の陶磁器が若干出土している。なお、当初予定にはなかった

が宅地造成により基盤層が削除されたことがわかったため、東側にトレッセを設定し確認調査を実施したが、遺構はなかった。

まとめ

第35-1次調査地ではピットを検出したが、その密度は希薄であった。東側の傾斜面地ではこれまでの調査により掘立柱建物が多く存在していることから、今回の調査区は集落の縁辺部に当たるものと考えられる。



第36次調査

調査の概要

今回の調査は集合住宅建設工事に先立つもので、工事によって遺跡の損壊される部分についてこれを行った。調査の結果、古代から中世の遺物包含層（3a層）が確認され、その下面でのこの時期の遺構が検出された。3a層からの出土遺物には須恵器円面鏡などもみられる。確認された遺構は、掘立柱建物（SB01～03）・柵あるいは塀（SA02）・土坑・柱穴・溝などがある。

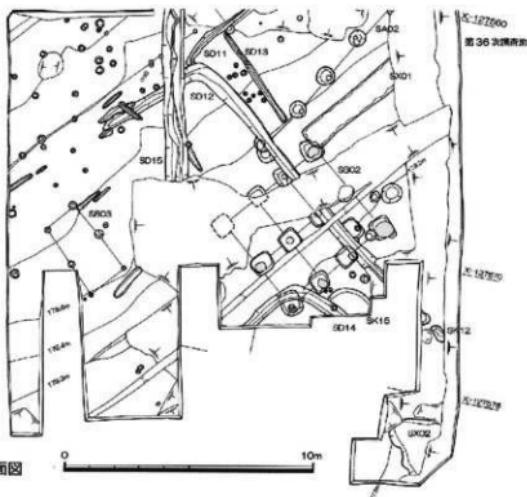


fig. 180 遺構面平面図



fig. 181 遺構面全景



fig. 182 SB02全景

- SB01** 調査地の北部で2間×3間(4.3m×6.2m)の掘立柱建物の南隅柱穴が検出された。柱掘形のプランは円形。建物の設計は遺構確認面の等高線にはば合致する。
- SB02** 調査地のほぼ中央にある3間×3間(5.0m×5.4m)の掘立柱建物。柱掘形のプランは一辺80cmから90cmの方形。唯一柱根が遺存する南隅の柱根の直径は約30cmで、他の柱穴にのこる柱の痕跡も同様の大きさを示す。太い柱を使った総柱であることから倉庫であると推定される。柱建物の設計は遺構確認面の等高線にはば合致する。埋土からは奈良時代の土器が出上しており、この時期の遺構である。

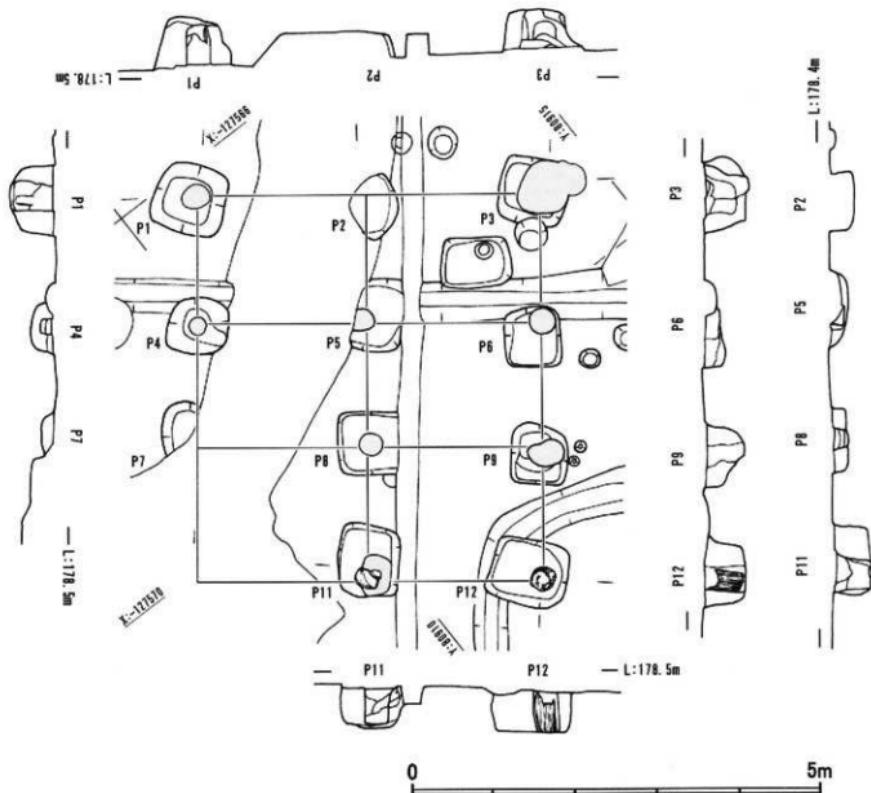


fig. 183 SB02遺構面平面図・断面図

- SA02** SB02の北にある柱列。柱間四間分が確認された。溝SD12と切りあい関係にあり、SD12のほうが新しい。柱穴は径約60cmほどと大型だが、プランは円形で、SB02と異なる。方位も若干異なる。あるいは北のSB01に対応する遺構であろうか。

まとめ

池尻地区31~34・36次調査遺構成因図に明らかなように当地においては飛鳥時代から鎌倉時代の遺物群が高い密度で集中することを確認できた。また、遺物包含層から出土した須恵器円面鏡は、奈良時代には当地で文書行政が行われる場所であったことを示している。奈良時代、当地に単なる地域の有力者の住居があったということではなく、官的な性格をもつ施設があった可能性もある。

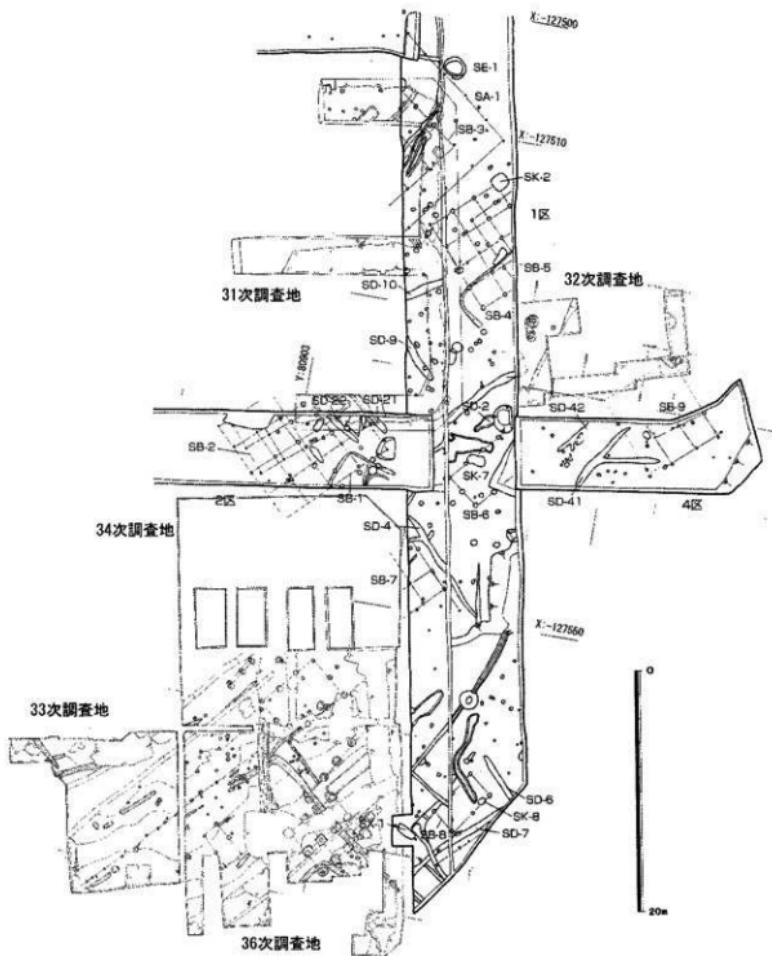


fig. 184 第31~34・36調査遺構平面合成図

平安時代の建物も規模が大きく、地域を統率する階層の住居などが両時代を通して継続的に営まれた可能性が高い。調査地点は丘陵部から八多川により形成された狭長な平野部に移る地形の変換点にあたる。平地を目の前にする丘陵末端の高台に営まれた有力層の屋敷地また官衛的な施設の痕跡が当地に遺跡として残されたとして位置づけることができるだろう。遺構の密度からみて、遺跡はさらに南の平野部にも続くと考えられる。今後の周辺における調査の進展により、より詳細な遺跡の状況が明らかにされるだろう。

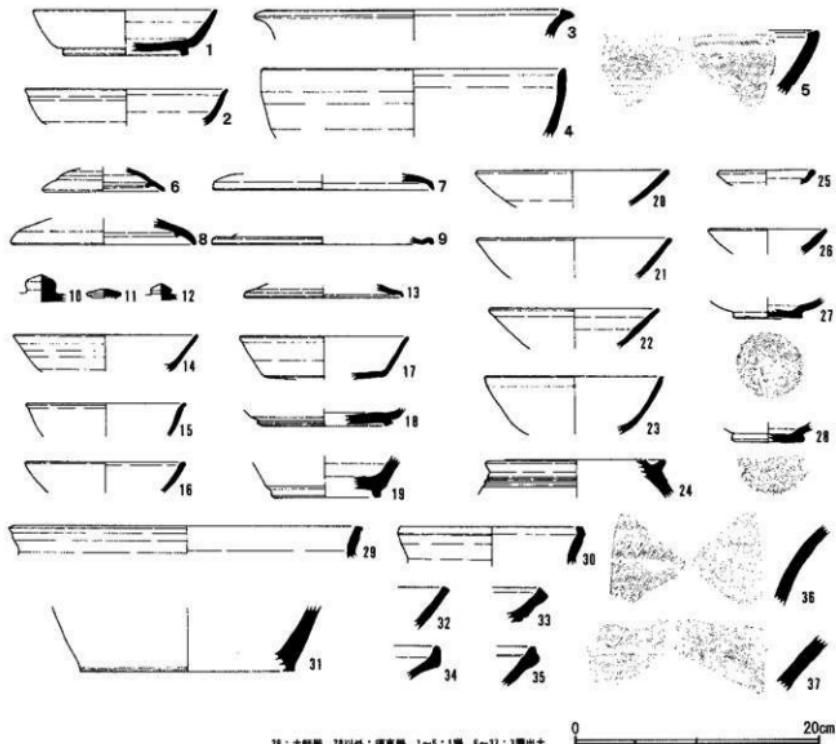
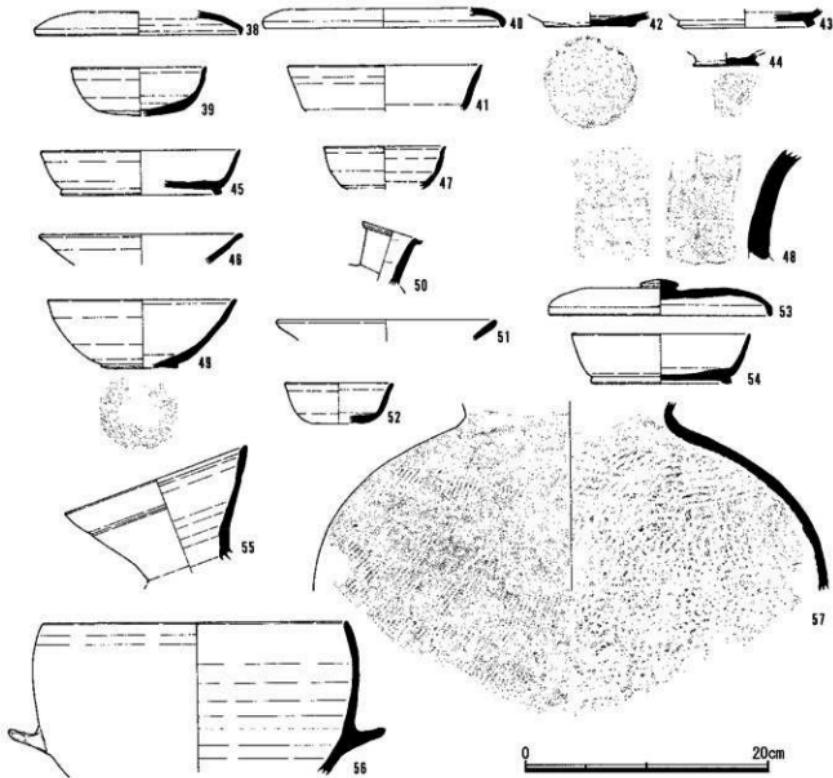


fig. 185 出土遺物実測図 1



すべて鉛筆書き (45:鉛筆) (38~42:3層, 38~39:S801-P11, 46~44:SD12, 45~48:SD14, 49:SK12, 50:SP82, 51:SK81, 52~57:SK82)

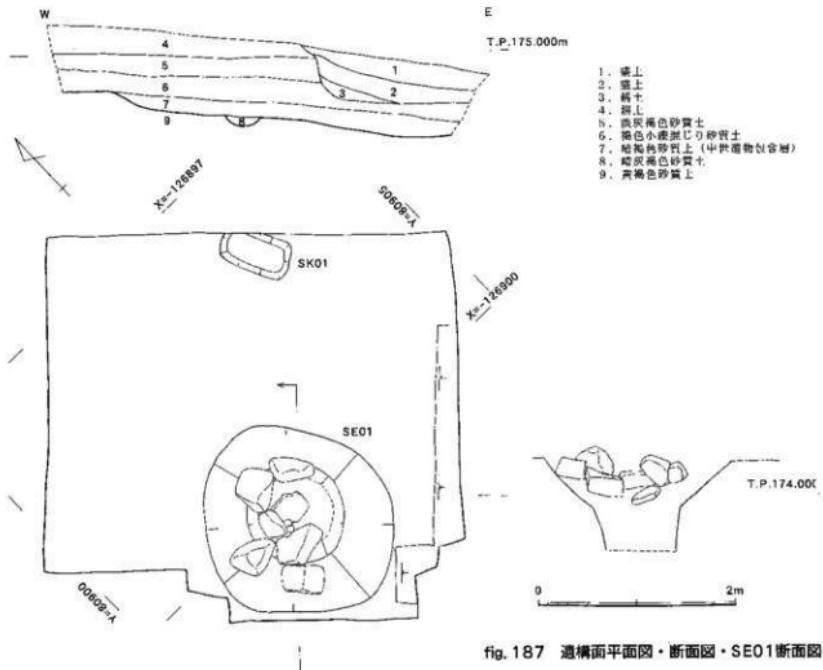
fig. 186 出土物実測図 2

第37次調査

個人住宅兼共同住宅の建設に伴い、遺跡が搅乱される範囲で搅乱される深度まで、発掘調査を実施している。

基本層序

基本層序は、搅乱と盛土、旧耕土、淡灰褐色砂質土、褐色小礫混じり砂質土、暗褐色砂質土（中世遺物包含層）、黄褐色砂質土（上面が遺構面となる）と堆積している。遺構面の標高は約175.6m～175.1mで、南西方向が高く、北東方向に向けて緩やかに傾斜している。



遺構と遺物

遺構は、鎌倉時代頃と考えられる井戸 1 基と、詳細な時期不明の浅い土坑を 1 基確認している。遺物は、井戸と暗褐色砂質土の遺物包含層から、鎌倉時代頃の須恵器塊の破片を含む中世の須恵器と土師器が、破片で出土している。

SE01

上面で径約1.9mを測り、中層で径約0.8mを測る、円形の井戸である。深さ約90cmまで掘削し、より下層については地下保存とした。上層の埋没土層に大甕が多く投棄されている。また、鎌倉時代頃の須恵器塊を含む中世の須恵器と土師器が破片で出土しており、井戸の時期もおよそ理解できる。完掘しておらず、井戸の構造等については不明である。

SK01

東西約74cm×南北約40cmで深さ約10cmを測る、不整円形の土坑である。暗褐色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。暗褐色砂質土の中世遺物包含層の下面で検出しており、中世の遺構である可能性が高い。

まとめ

今回の調査では、鎌倉時代頃の井戸を 1 基確認した。土坑も確認し、鎌倉時代の集落居住域が調査区周囲に広がることは確実である。

詳細は不明であるが、現在までの調査例から中遺跡の広い範囲で、鎌倉時代の集落に関係する居住域と生産域が広がっている状況は理解できる。

井戸については完掘せず、詳細は不明である。円形の井戸であることは理解できる。構造物が全く出土しないことから、素掘りの井戸である可能性も考えられる。

23. 野瀬遺跡 第6次調査

野瀬遺跡は淡河川の上流域、淡河川により形成された河岸段丘及びその上位の丘陵部に立地する平安時代～近世にかけての集落遺跡である。平成12年度より圃場整備事業に伴う発掘調査が実施され、12～13世紀代を中心とする遺物をはじめ、建物や溝、水溜めなどの土坑や墓など生活に伴う多くの遺構が確認されている。

今回の調査地は、平成14・15年度に圃場整備事業に伴い調査が実施され、平安時代後期～鎌倉時代にかけての掘立柱建物、木棺墓あるいは土坑墓などが検出された調査地の西に隣接する。調査地の北側は淡河川に面し、西側では西流する川が南へと急激に流れの向きを変え屈曲部を形成しており、川へと張り出した段丘突端部に位置する。現状は盛土上に碎石が敷かれ更地となっているが、当初は先に調査を実施した圃場から西へと段下がりになった圃場であった。

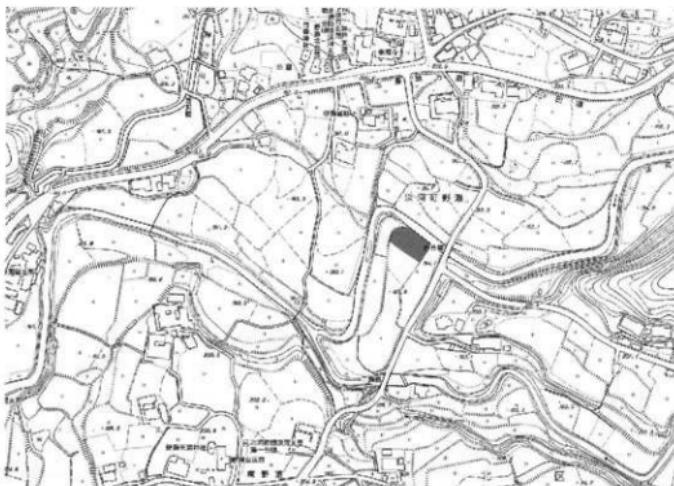


fig. 188 野瀬遺跡
調査地位置図
(S = 1 : 5,000)

調査の概要

今回の調査は集落排水処理施設建設に伴う発掘調査である。事前の試掘調査の結果から事業計画範囲の内、文化財が確認されなかった西側の一段低い圃場部分を除く約1,000m²について全面調査を実施した。

試掘調査では事業地の西側にトレチを設定、盛土直下の黄褐色土層面で土坑を1基検出した。この面が地山層と考えられたため、西側より盛土を除去し、全面調査を実施する予定であった。その後、この黄褐色土が水田造成に伴う二次堆積であることが判明したため、盛土、また川沿いの北側の部分で床土を除去した段階で精査とトレチによる下層の確認調査を実施した。トレチでは旧耕土層と調査地中央南側で石列を伴う大きな落ち込みが存在することが明らかになった。また、東側についても、先の調査区から続く地山が南側へ下がる地形を呈することが判明したため、残土置き場の関係から西

側より調査を開始し、残土を反転した後、東側半分の調査を実施することとした。西半ではわずかに土器は出土するものの良好な遺物包含層、遺構面は確認されず、近世以降の耕作地造成に伴う整地層が大部分を占める結果となった。遺構・遺物は主に調査区の東半で検出した。

まず、調査地西半の概略を述べ、次いで東半の状況について記していく。

調査区西半の状況

盛土、現耕土・床上、旧耕土層を除去した面（黄灰色土面）で遺構検出作業を実施した。北側で溝5条と土坑1基、南側で落ち込み3基と溝2条を確認したが、近世以降の圃場に伴う遺構と考えられる。また、下層についてはトレンチを4本設けて遺物・遺構の確認作業を行った。その結果、トレンチ4・5では南への落ちと落ち込み肩部と思われる位置で石列を確認した。これは後述するSX01の輪郭であった。

トレンチ調査の結果を受けて東半部分の調査は南の落ちを含む部分で設定した。

調査区東半の状況

西半調査区から続く地山面は、今回の調査区東端の一部で確認されたのみで西へは軟弱なやや下がる地形が続く。落ち込み2基、溝1条、石列1基、土坑1基、柱穴を検出した。

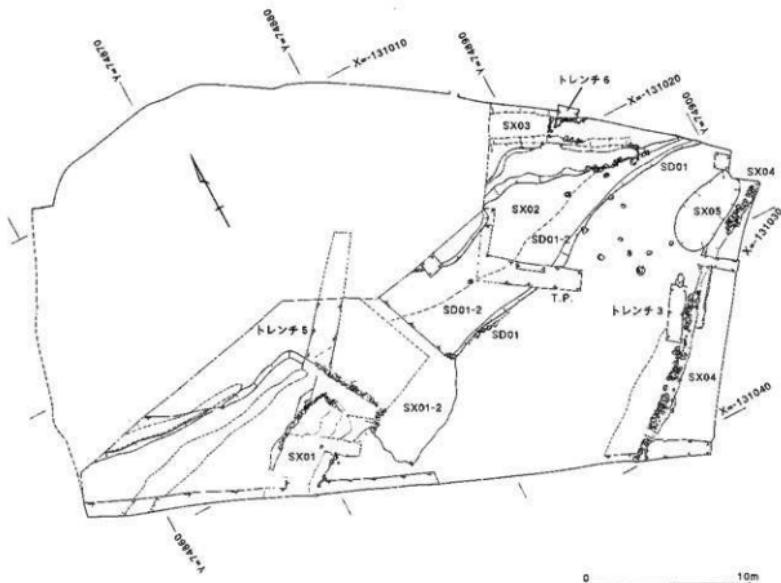


fig. 189 東半部遺構面平面図

SX01

調査区中央の南側で検出した石列を配する遺構である。石列は二重になっており、双方とも全周はしないが、地面を成形し、上下二段となる構造をとる。調査区内での規模は、外（上段）側の石列は南北約5m、東西約9m、内（下段）側は南北約3.5m、東西約7mを測り、南側にさらに延びるものと考えられる。上下の石列の高低差は約50cmである。遺構内の埋土は下部では砂層を主とし、上部にはシルト質の土が水平堆積する。遺構の南東部については石を細かく配する様子は認められず、輪郭の形成が行われた程度である。基盤層に直接石を据えているため、東～北～西側は堅面に構築される。一方、軟弱な谷状の解放部分についてはあまり加工していない。石列内側からの遺物の出土はほとんどなく、中世の須恵器・十師器がわずかに出土したのみである。

また、外側の石列の裏込めには多量の拳人の礫が用いられている（SX01-2）。裏込めとしては規模が大きく、その用途は不明である。礫の間からいずれも小片ではあるが12～13世紀代の遺物が出土した。SX01の性格については水溜め状の施設、あるいは園池などの可能性が考えられるが、積極的にこれを裏付ける根拠は乏しい。

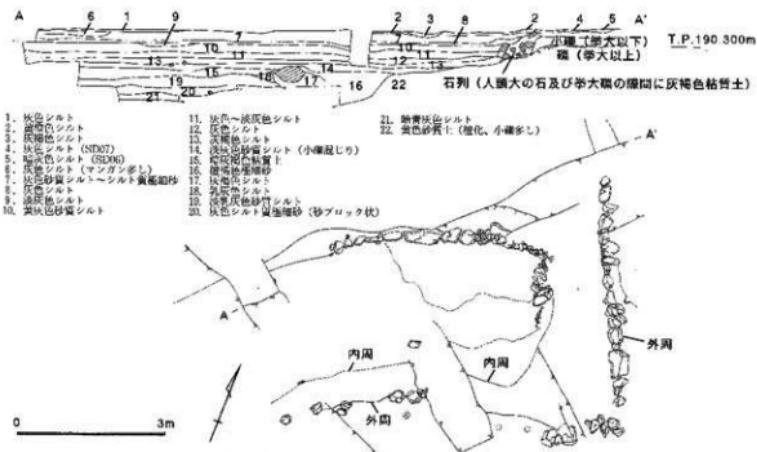


fig. 190 SX01遺構平面図・断面図

SX02

中央北側で検出した落ち込みである。西半に設定したトレンチ1・2でも同様の堆積が確認されており、淡河川に沿って延びるものと考えられる。検出面からの深さは20cmで、底面は酸化が著しい。淡河川から頻繁に水が流れ込んだ痕跡かと推測され、常に水が浅く溜まっていた状況にあったのだろう。さらに落ち込みの中央には溝状の遺構SX02-2があり、同様に水みちとなっていたことが推測される。SX02にはその後、灰白色砂質シルトが徐々に堆積し、これを床土とする水田面が形成される。上層の水田層には中世末と考えられる遺物が含まれる。後述するSD01の最終埋土からも中世末の陶器片が出土しており、水田とそれに附隨する溝として意識されたものと考えられる。

SX03

調査区の北側、淡河川に沿って東西方向に続く疊層である。調査区内での検出長は約45mである。断面は台形状を呈し、上端幅は1～2m、高さは60～70cmである。基本的

に疊層から成るが、間にシルト質も混じる。但し、突き固めたような痕跡はなく、間層の土も軟弱である。一部に礫の周囲に粘質の強い土を貼り付けた痕跡が認められることから、人為的な構築物と考えられるが、河川により運ばれた疊層が水田造成などによって帶状に残り、これらを畦に利用した可能性も考えられる。遺物が全く伴わないことも状況を把握する上で困難な要因となっている。

SX04 調査区東端で検出した石列で、調査区内での検出長は約19mである。先の調査地で検出した基盤層との傾斜交換点（段落ち肩部）に並べられ、南にさらに延びるかと考えられる。人頭大の石を基本に、それよりも大きな石も交え一列に据えている。丁寧に据えられた部分とやや乱雑に据えられた部分が混在する。石列下の溝状の堆積から12～13世紀の遺物が出土しており、この層には崩落した石の一部も含まれる。石列を被覆する暗灰色シルト層からは中世末の遺物が出土している。また、近世の耕上層を挟んで上に置かれた石もあり、何度も改修が行われたことが推測されるが、この段差が永らく境界として認識されていた状況を示唆するものであろう。

SX05 SX04の北端下で検出した東西約5m、南北約2.5m、深さ約15～20cmの平面長楕円形の浅い皿状の土坑で、内部には拳大から人頭大の石が詰まっている。疊の隙間に灰褐色シルトが堆積し、12世紀後半～13世紀代の須恵器・土師器が出土した。SX04では石が検出されず、抜けていた箇所に近接することから、人頭大の石はSX04より崩落してきた可能性がある。

SD01 調査区を東西に横切る溝である。最終埋土をSD01、それ以前の溝状の形状をSD01-2とした。SD01はSX02が埋没し、上層に水田が造成された時期に水を引き込む機能を果たしたと考えられる溝である。幅約40cm、深さは20cmである。中世末の遺物が若干出土している。また、SD01-2は淡河川とSX01を繋ぐ位置にあり、SX01へ水を流し込む機能を有したと考えられる。溝幅約2m、深さは約70cmを測る。極少量の12～13世紀代の遺物が出土している。

また、調査区の北東部、SX05、SD01に挟まれた範囲で柱穴や平石が据えられた状況を検出した。これらが分布する約7m四方の範囲にやや粘質の強い灰色シルトの堆積があり、周囲とは状況が異なる。平石が礎石となり、小規模ながら建物が存在した可能性がある。

まとめ 今回の調査では、隣接する先の調査地で検出された建物や墓といった遺構は検出されず、建物の分布する範囲が西側に延びず、SX04を境として一段下がった今回の調査区との間に土地利用の上に差があった状況が明らかになった。今回の調査地は、淡河川の扇状地に位置することから、軟弱な地盤や土壤化の様子から洪水など避けず水の影響があったと推測され、水に浸かっていたことを想像させる。集落に近接する河原と言ってもよい場所で検出した遺構の中で、SD01、SX02とSX01などは興味深い遺構である。この地が水田として利用される以前の12～15世紀代にかけて、園池、あるいは水溜めなどの施設を設け、水を流し込む機能を有していた。これらの遺構は中世農村集落の姿を見る上で重要なものと考える。

24. 五番町遺跡 第12次調査

五番町遺跡は昭和53年にはじめて発掘調査が行われた遺跡で、これまでの調査結果から縄文時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代など広範な時代にまたがる遺跡である。

縄文時代には人が住み始め、鎌倉時代まで続いた集落であると考えられているが、住居址のような集落の本体部分が確認された例はなく、遺跡の情報はいまだ断片的で、不明な点の多い遺跡である。

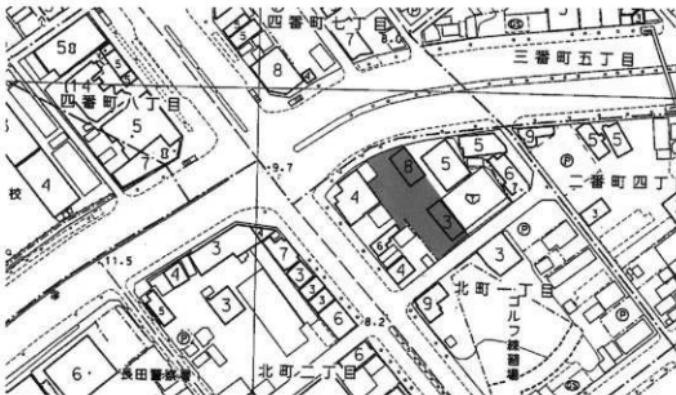


fig. 191 五番町遺跡
調査地位置図

調査概要

今回の発掘調査は、共同住宅建設工事に伴い実施した。なお、工事の影響を受けない深度については、調査対象地内であっても遺跡の存在の有無にかかわらず調査の対象外として扱った。

基本層序

調査の結果、2つの異なる時期の遺構が、ひとつの層上に並存することを確認した。遺構の基盤層（遺構面）となる地層は標高7.80m付近に堆積するもので、遺構の時代は古墳時代前期（西暦300年代～400年代）と平安時代半ば～後半（西暦1000年代～1100年代初頭）である。調査対象地内の地層の堆積状況は、基本的にどの地点でもほぼ同様で、現代の盛土→2～3層の中世の耕作土→遺構面となる地層→縄文時代晚期～弥生時代前期の河川性の堆積層の順である（厳密には遺構面となる地層自身も弥生時代前期に堆積した河川性の堆積層の最上層部分である）。

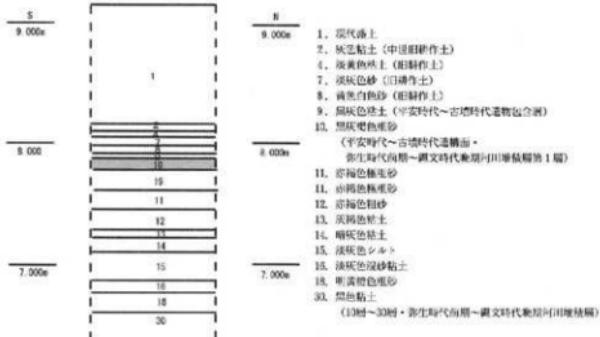


fig. 192 土層断面図

調査結果

今回確認したのは、古墳時代前期の竪穴建物址1ヶ所、平安時代（11世紀半ば～後半）の掘立柱建物址5ヶ所、そのほか、平安時代の建物に伴うと考えられるピット（穴）が複数ヶ所、浅い溝を長方形にめぐらした区画が1ヶ所である。

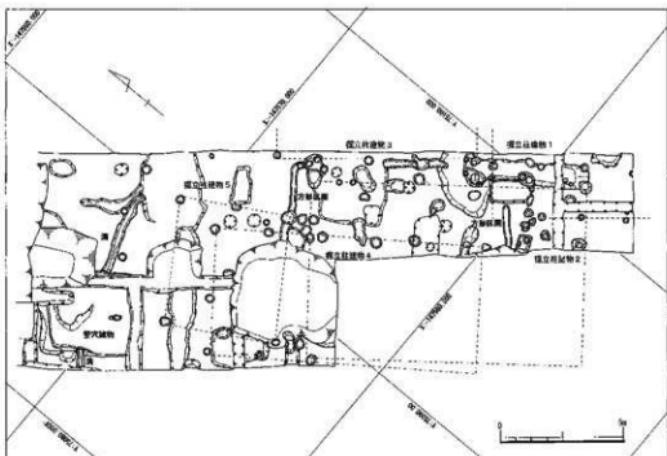


fig. 193 南南部遺構面平面図

平安時代（11世紀半ば～12世紀初頭）の掘立柱建物群については、5棟のそれぞれが接近して、あるいは重なり合って発見されていることから、5棟すべてが同時にたっていたのではなく、30～50年ほどの時期差の中で、なんどか建て替えられたものであることがわかる。これらの建物の柱穴からは多数の土器が出土した。建物間の時期差については、11世紀中ごろ～11世紀後半あるいは12世紀初頭にいたるまでの時期幅ではないかと考えられる。

今回の調査地付近の実態は不明な点が多くったが、調査の結果、かなり高密度で遺構が残されていることも判明した。また、調査区北半分については、極端に遺構が少なく、居住域外（田園等耕作地）である可能性が高まった。

また、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺跡が近くに存在することを示唆する出土品も、平安時代遺構の下層から発見されており、今後の調査の方向性を見極めるうえで重要な発見であるといえる。

なお、本調査は『丘番町遺跡発掘調査報告書・第12次調査』が刊行されており、詳細は報告書を参照されたい。

25. 御藏遺跡

御藏遺跡は茹藻川により形成された自然堤防及びその後背湿地に立地する遺跡で、平成2年度に地域福祉センター建設工事に伴い、その存在が初めて確認された。付近は長田区内で最も遺跡の分布が濃密な地域である。

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災により、御藏遺跡の所在する長田区御藏通一帯は甚大な被害を受けた。その復興に伴い、共同・個人住宅建設に伴う調査が平成9年度から、復興区画整理に伴う調査が平成10年度から開始され、また、平成11年度からは国道28号線拡幅に伴う調査も実施された。これまでに57次の調査が実施され、縄文時代晚期～弥生時代の遺物、弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての遺構、多量の遺物、飛鳥時代～中世にかけての掘立柱建物群、井戸、溝状造構等の遺構、須恵器・土師器・黒色土器・綠釉陶器・灰釉陶器・瓦・土馬・錢貨・鉢帶・銅鏡等の遺物が出土した。大型の柱掘形を有する掘立柱建物の存在や土馬・鉢帶・銅鏡等の出土遺物から、当遺跡が官衙的な要素を持つ事が指摘されている。

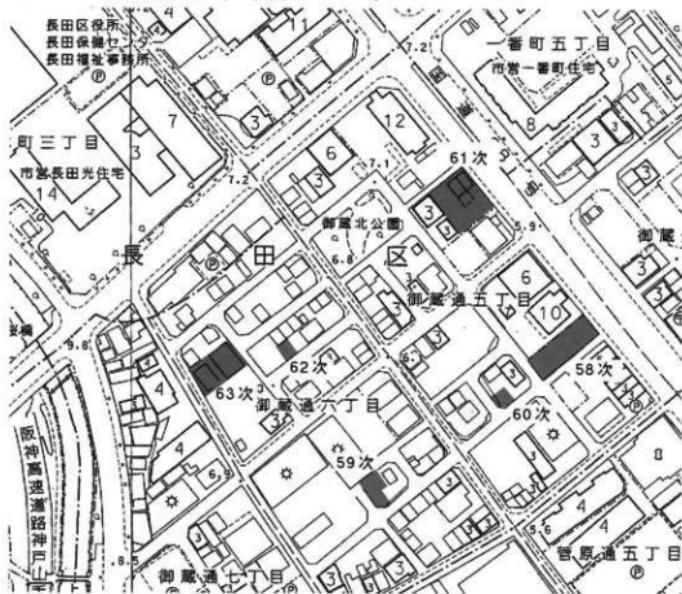


fig. 194 御藏遺跡調査位置図

1. 第58次調査

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査地は東側を平成14年度第51次・1、西側を平成14年度第50次・9、北側を平成9年度第3次調査及び平成11年度第22次調査地、南側を昨年度に実施した第57次調査地に隣接する。工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。

調査概要

調査は計画建物基礎の形状から1~10区を設定した。残土廣場の確保から2分割の反転調査を実施した。東半部(1~6区)から調査を開始し、これを完了後に西半部(7~10区)の調査を実施した。

基本層序

調査地の基本層序は地表面から35cm前後までが、盛土・旧耕土・床上層で、この下層の淡黄灰色シルト上で遺構が検出された。遺構面は基本的に南に緩やかに下る。尚、遺物包含層は後世の耕作により削平されたと推定され、旧耕上・床上層直下が遺構面であった。

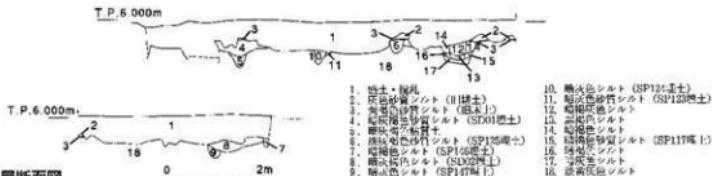


fig. 195 土層断面図

検出遺構

掘立柱建物1棟以上、溝2条、土坑4基、落ち込み2ヶ所、ピット147箇を検出した。以下、主要な遺構について述べる。

掘立柱建物

SB01

SB01は1、3、4区で検出した、南北に主軸をもつ掘立柱建物である。東西2間、南北2間分を検出したが、調査範囲外部分と搅乱の影響のため、さらに規模の大きな建物である可能性もある。柱間は東西が1.7m、南北2.3m~2.7mで、主軸を12°西に振る。柱穴は円形のプランで、直径70cm~90cm、検山面からの深さは6cm~56cm、柱痕は直径30cm~40cmである。土師器・須恵器の微細な破片が出土している。

SB02

SB02は9、10区で検出した、南北に主軸をもつ掘立柱建物である。東西2間、南北2間分を検出した。東側半分は調査範囲外である。柱間は東西が1.5m、南北はほぼ2.3mで、主軸を15°西に振る。柱穴は直径60cm~94cm前後の梢円形で、検山面からの深さは25cm~40cm、柱痕は直径30cmである。奈良~平安時代頃の土師器・須恵器片が出土している。

SB03

SB03は1区北側で検出した、南北に主軸をもつと考えられる掘立柱建物である。東西1間分を検出したが、付近は搅乱の影響を大きく受けしており、東西両方向にさらに延びる可能性が考えられる。南北は調査区外へ北側に延びるものと考えられる。柱間は2mで、主軸を17°西に振る。柱穴は、直径70cm~80cmの円形プランである。検山面からの深さは24cm~30cmで、柱痕は40cm前後である。土師器・須恵器の微細な細片が出土している。

SB04

10区西侧で検出した、南北に主軸をもつと考えられる掘立柱建物である。南北2間分を検出した南側及び西側は調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。柱間はほぼ1.8m、主軸は11°西に振る。柱穴は長径72cm~96cm、短径56cm~78cmの梢円形で、検山面からの深さは20cm~50cmである。土師器・須恵器の細片が出土している。

SD01

7区北端中央から10区南端付近にかけて検出したやや西に振る、ほぼ南北方向の溝である。幅45cm~85cm、検山面からの深さは北側で30cm、南側では40cmと南側で深くなってしまっており、10区では壁面が流れにより、抉られている状況が検出された。

埋土中から須恵器、土師器の細片が出土している。

SP145

10区北半部の8区との交点付近で検出した長径65cm、短径50cm前後の楕円形のピットで、検出面からの深さは50cmである。断面観察からの柱痕の直径は30cmで柱材が遺存していた。埋土中から土師器、須恵器の細片が出土している。SP145の周辺には造構が濃密に分布するが、これに対応するものは確認できない。

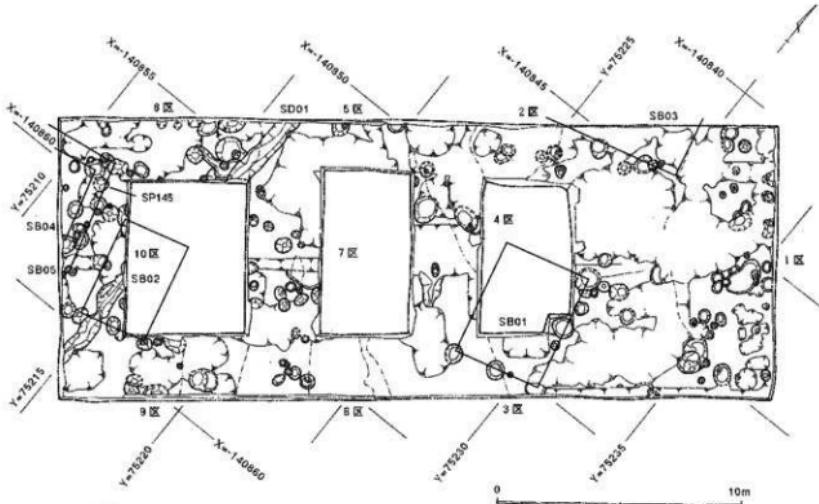


fig. 196 造構面平面図

まとめ

今回の調査では奈良時代～中世の造構面を検出し、多くの造構を検出した。

本調査地の北西に近接する平成9年度に実施した第3次調査では、純文時代晩期～弥生時代の遺物を含む自然河道、造構が確認されているが、今回の調査でもほぼ南北に流れる2条の自然河道を検出している。第3次調査の自然河道に対応するものと考えられるが、断面調査の結果、遺物の出土は認められなかった。

古墳時代の造構は西側に近接する第9次調査等で前期の竪穴住居が確認されているが、今回の調査では確認されなかった。

奈良時代～中世の造構については、これまでの周辺地での調査成果と同じく、高い密度で造構を検出した。柱掘形の直径が1mを超える大型の柱穴も存在する。今回検出されたSB01～04の4棟の掘立柱建物も、これまでに御歳遺跡において確認されている掘立柱建物群とほぼ方向を同一にするものとして捉えることができ、11～17°西に振っている点も共通する。造構の密度からさらに建物が存在するものと考えられる。

また、西半部で検出したSD01は本調査区の北側に位置する平成9年度第3次、平成11年度第22次調査、南側に近接する平成12年度第14次・23調査においても検出されている御歳遺跡内を貫流すると考えられる溝で、区画を示すものと捉える事もできるが、掘立柱建物群とは切り合いがある点、SD01がやや東に振る点から、詳細な検討が必要である。

2. 第59次調査

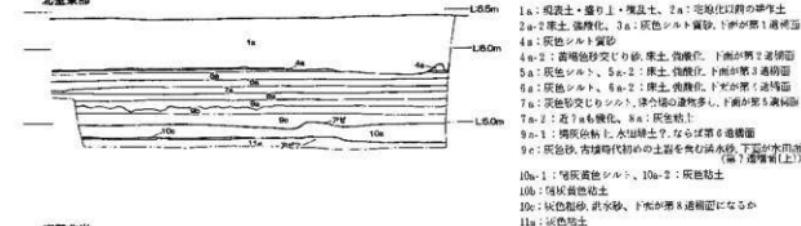
住宅建設にともなう工事により遺跡の損壊される部分について発掘調査を行なった。

その結果、以下の通り遺跡が確認された。

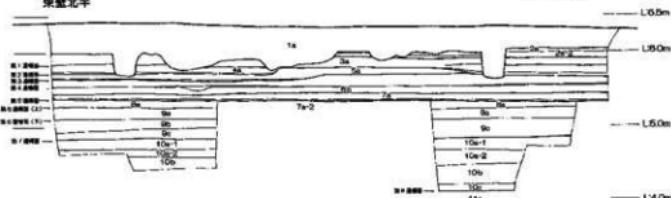
遺構面 遺構面8枚が確認された。それぞれの標高・時代は以下の通り。

現地表(1a層上面)	: 約6.4m	第5遺構面(7a層下面)	: 約5.4m	古代
第1遺構面(3a層下面)	: 約5.8m	中世	第6遺構面(上)(9a層上面)	: 約5.3m 古墳時代
第2遺構面(4a層下面)	: 約5.7m	中世	第6遺構面(下)(9a層下面)	: 約5.1m 古墳時代
第3遺構面(5a層下面)	: 約5.6m	中世	第7遺構面(10a-1層上面)	: 約4.8m 弥生時代
第4遺構面(6a層下面)	: 約5.5m	中世	第8遺構面?(11a層上面)	: 約4.2m 弥生時代?

北壁東部



東壁北半



東壁南半

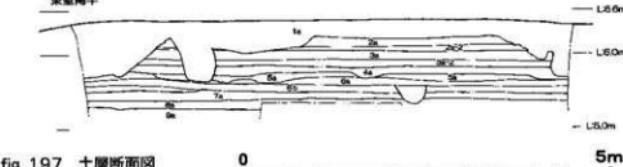


fig. 197 土層断面図

0

5m

第1遺構面 中世の遺構面。溝および耕作痕が検出された。室町時代の第2遺構面のS D01からは

第4遺構面 瓦質の犬形土製品が出土している。

第5遺構面 律令期の遺構面。遺構は検出されなかったが、当時の表土7a層からは土器・瓦など、遺物が多く出土している。なかでも和同開珎・巡方が近接して出土していることは注目されよう。巡方は銅製で一辺30mmを測る。

第6遺構面(上) 9a層上面で牛蹄あとが検出された。遺構面上から古墳時代の土器高杯が出土している。

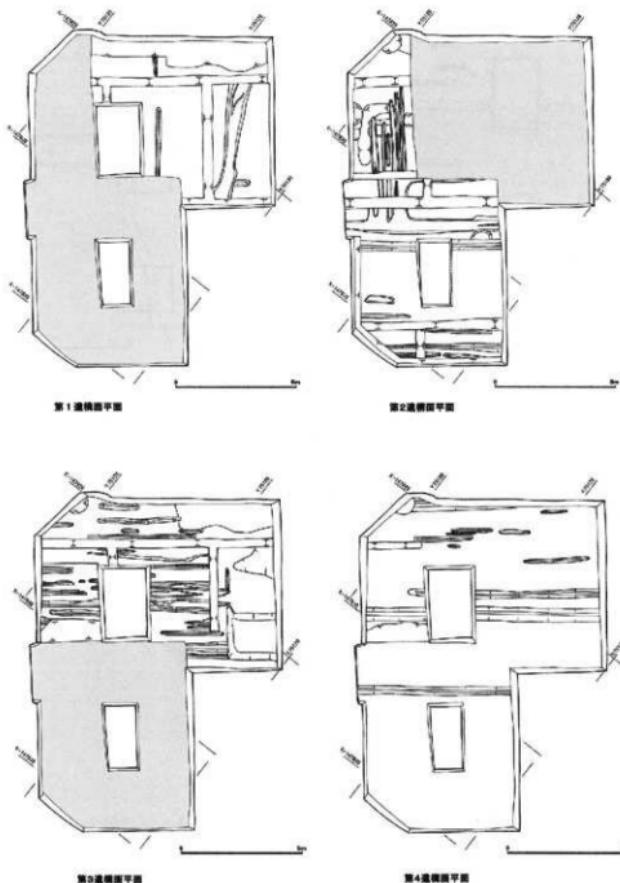


fig. 198 第1～4遺構面平面図

第7遺構面（上） 洪水砂層である9c層によって覆われる水田が検出された遺構面。9c層からはタタキ甕等、少量の弥生土器が出土しており、この水田は弥生時代後期のものである可能性が高い。畦が確認されているが、水田1枚の面積等を確認することはできない。水田面は平滑で足跡等も明確なものは確認できなかった。

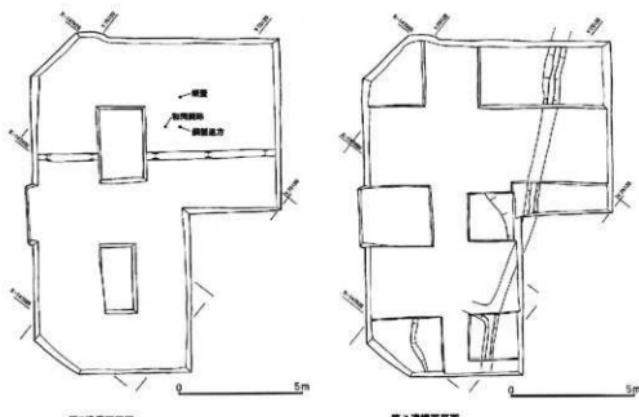


fig. 199 第5・7遺構面平面図



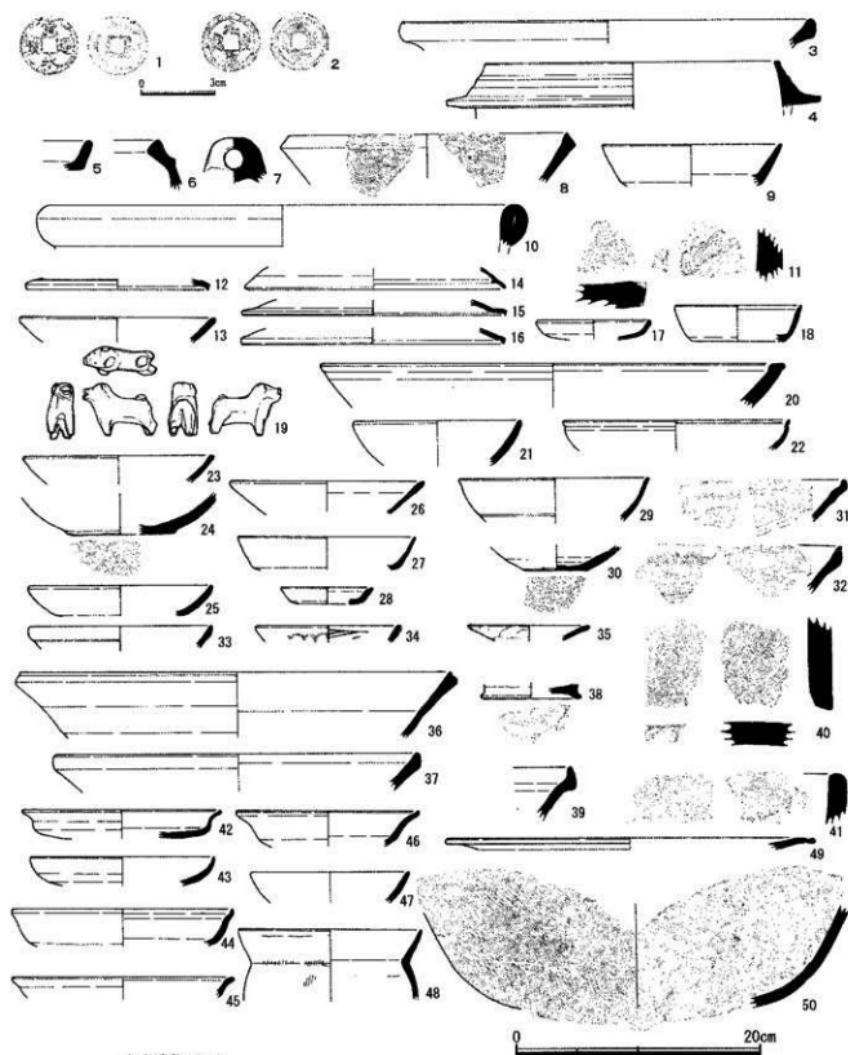
fig. 200 和同開政の土痕跡

第8遺構面？ 厚く堆積する洪水砂10c層に覆われる11a層は上面が水平堆積する土壤化層である。今回調査地の北で行われた31次・33次調査では律令期の遺構面の下で3面、52次・53次では2面の遺構面を確認しており、この層も遺構面となる可能性がある。ただし、湧水のため平面的な遺構確認はできず、土層断面の観察に止まる。10c層からの遺物出土も確認できていない。

まとめ

律令期の第5遺構面では、遺構は検出されなかったが、土器等とともに和同開称・銅製巡方が出土し、御藏遺跡の官衙的性格を示す遺物が追加されたことになる。当遺跡における帶金具関連遺物の出土は14-10次調査の銅製鉈尾、37-2次の銅製鉗具、51-2次の銅製巡方・銅製鉈尾裏金具に次ぐ5例目である。

他の遺構面はすべて耕作地であったことが確認され、律令期以外の弥生時代初めから近世に至るまで、当地が耕作地としての景観を保っていたことを確認した。



出土遺物（1）

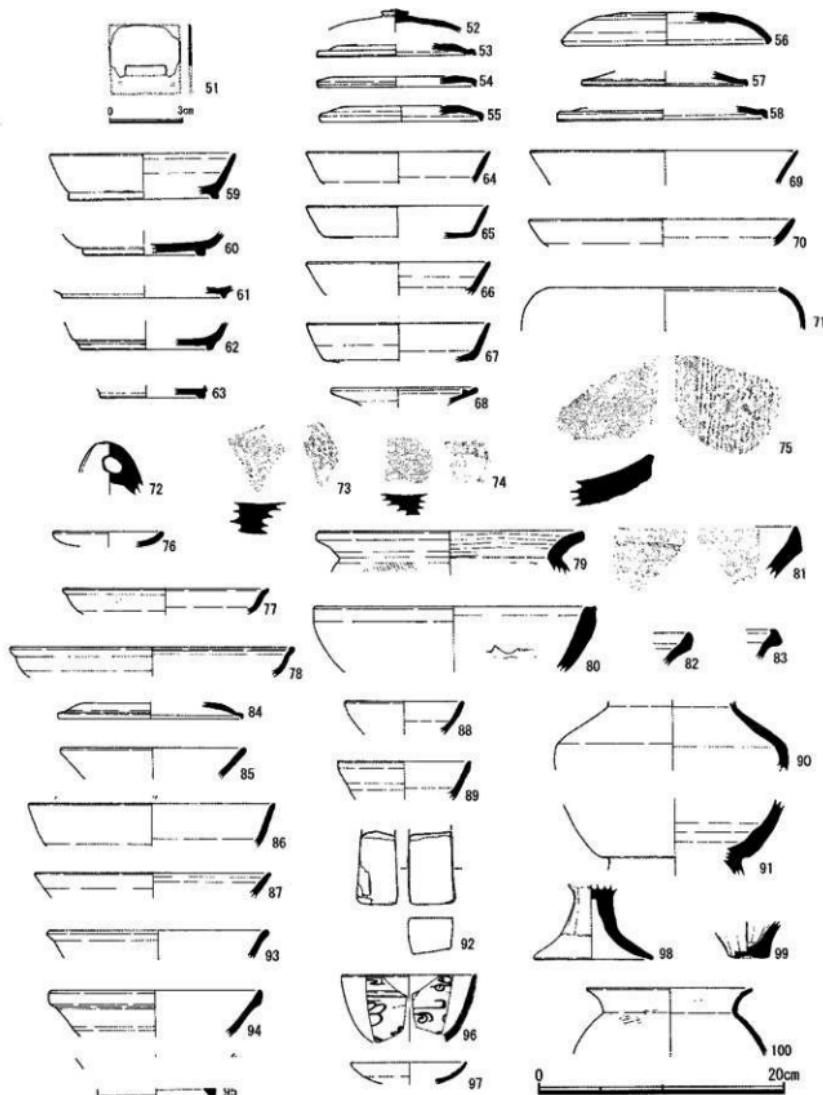
1:1層、2:層位不明、3~7:3層、8~20:4層、21:S D O 2、22~41:5層、42~50:6層

(1:寛永通宝、2:元豐通宝、8:丹波焼、10:備前焼、4~6・17・21・22・28・31・32・35・42~49:土師器 49は高橋、

3・7・9・12~16・20・23~27・29・30・36~39・50:須恵器、11・40:瓦、18・33:白磁、

19:瓦器風、34:青磁、41:奈良火鉢)

fig. 201 出土遺物実測図1



出土遺物（2）

51~75 : 6層、76~97 : 7層（混入あり）、98 : 8a層上面、99・100 : 8c層

（51：銅製返方【漆錫は現存部分で幅29mm、薄い錫は現地で撮影した写真と現存部分を重ね合わせて復元、

2箇所の円孔は糸通し部が脱落したもの】、52~72・82~91：須恵器、73~75：瓦、76~80・98：土師器、81：備前焼、

92：磁石、93・96：青磁、94・95・97：白磁、99・100：赤生土器）

fig. 202 出土遺物実測図 2

3. 第60次調査

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、調査地は東側を平成10年度第9次、南東側を平成10年度第6次・3、南西側を平成10年度第6次・5、9、平成11年度第14次・7、平成12年度第32次・1調査区に隣接する。工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。

調査概要

調査は計画建物基礎の形状から1～5区を設定した。残土置場の確保から2分割の反転調査を実施した。1～4区から調査を開始し、これを完了後に5区の調査を実施した。

基本層序

調査地の基本層序は地表面から64cm前後までが、盛土・旧耕土・床土層で、この下層に古墳時代～中世の遺物包含層である暗灰色粘質土で、この下層には南半部の一部で暗茶灰色砂質シルトが存在する。暗茶灰色砂質シルト上面からは遺構は検出されなかった。その下層の淡茶灰色細砂上で遺構が検出された。これより下層は砂層の堆積であったが、5区では一部に調査地周辺で確認されている弥生時代末～古墳時代初頭頃の遺構面と考えられる茶灰褐色砂質シルトが検出された。

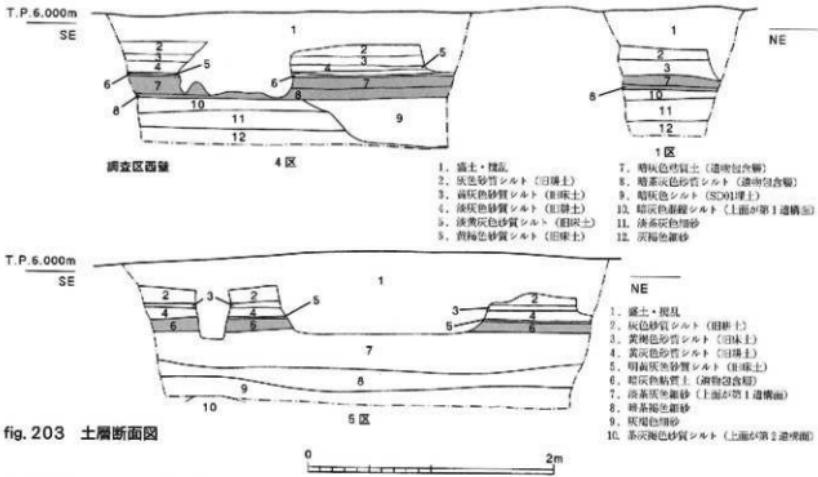


fig. 203 土層断面図

検出遺構

溝2条、土坑2基、ピット12基を検出した。

SD01

1区及び4区北西隅で検出した北西～南方向の溝で、両端は調査区外へと続く、1区では西側の肩、4区では東側の肩を検出した。これによる推定幅は50cm前後と考えられる。検出面からの深さは40cm前後である。土師器・須恵器の細片が出土した。

SK01

5区北側で検出した土坑である。SP12、13によって切られており全体の規模は不明であるが、直徑1m前後と推定される。検出面からの深さは16cmである。埋土中から土師器・須恵器の細片が出土した。

SK02

5区南側で検出した土坑で、西側をSP07に、南側を搅乱によって切られている。直徑は80cm前後と考えられる。検出面からの深さは6cmと浅く、出土遺物は、埋土中から土師器の細片が出土した。

ピット

2区で5基、5区から7基の計12基のピットが検出された。直径は20cm～80cm前後、検出面からの深さは3cm～36cmである。建物等を構成するものであるかは確認することはできなかった。出土遺物は数基から微細な土器器、須恵器片が出上している。

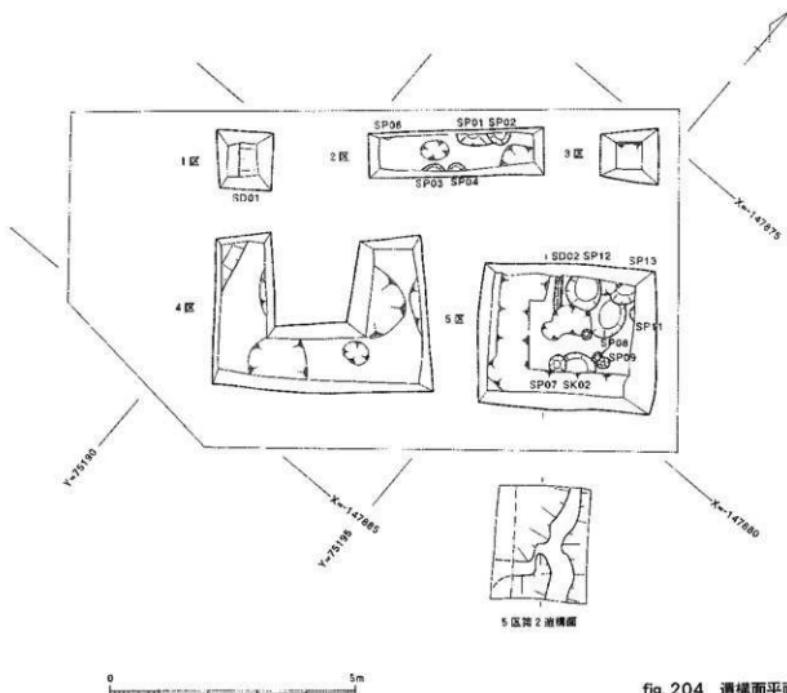


fig. 204 造構面平面図

まとめ

今回の調査では限られた範囲の調査であったが、比較的多くの造構が検出された。

1区と4区で検出されたSD01は規模、方向から平成10年～12年度に実施された、震災復興土地区画整理に伴う、5丁目南地区第2調査区SD208と同一の溝と考えられる。

また、東側に隣接する第9次調査区等で確認されている古墳時代前期の竪穴住居は、今回の調査では確認されなかった。

調査地周辺でこれまでに確認されている、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての造構面については、わずかに5区の一部で検出されたのみで、他の調査区では確認されなかった。第2造構面を覆う洪水砂が第1造構面のベース層となっており、5区では埋没した流路若しくは河道と推定される落ち込みを検出した。水田の畦畔にも見えるが、水田で検出される土壤が確認されないため、流路若しくは河道と考えられる。この落ち込み及び洪水砂中からローリングを受けた弥生土器、土師器片数点が出土した。

4. 第61次調査

社屋の建設工事に伴い実施したものである。調査の対象となったのは、工事予定範囲内、先行する試掘調査によって遺跡が損壊すると予測された部分である。

対象総面積は約46.5m²であるが、調査対象地は工事範囲内で2ヶ所に分かれており、調査の便宜上南側の調査対象地をI区、北側の調査対象地をII区として順次調査を行った。

なお調査は工事により掘削される深度に応じて行われたもので、工事の影響を受けない深度については、調査対象地内であっても遺跡の存在の有無にかかわらず調査の対象外として扱った。

基本層序I区

調査区北東部分では、上から順に①現代盛土（IH耕作土含む）②奈良時代遺物包含層（中世造構面）③地山層（奈良時代造構面）の順で堆積しているが、調査区西南角の一部、もっとも地形的に低い範囲では①現代盛土（IH耕作土含む）②奈良時代遺物包含層（中世造構面）③古墳時代遺物包含層④地山層（古墳時代造構面）となる。

基本層序II区

従前の建物による地層の損壊が著しく、遺跡のある層はごくわずかに残されている状態であった。II区北側の①現代盛土②奈良時代遺物包含層（中世造構面）③地山層（奈良時代造構面）I区北東部分と同様の順で地層は堆積していた可能性が高い。

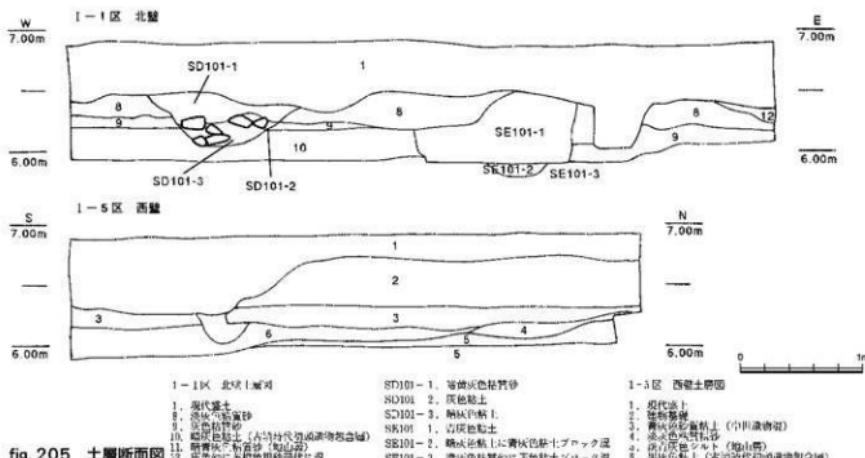


fig. 205 土層断面図

SD101-1. 青灰色粘土質砂
SD101-2. 黒色粘土
SD101-3. 淡灰褐色土
SE101-1. 黄褐色粘土
SE101-2. 黄褐色粘土上に青灰色粘土七ブロック層
SE101-3. 青灰色粘土中に灰色粘土ゾロッタ層

1-1区 北壁 I断面

SD101-1. 黄褐色粘土

SD101-2. 黑色粘土

SD101-3. 淡灰褐色土

SE101-1. 黄褐色粘土

SE101-2. 黄褐色粘土上に青灰色粘土七ブロック層

SE101-3. 青灰色粘土中に灰色粘土ゾロッタ層

1. 現代の盛土
2. 黒色粘土
3. 淡青色粘土
4. 淡青色粘土
5. 青灰色粘土
6. 青灰色粘土

調査結果

I区 第1造構面 I区第1造構面となる中世の造構としては、溝1条、土坑1基、ピット2基、井戸1カ所、暗渠水路1条が確認された。

井戸と暗渠をのぞいてこれらの造構からは顕著な出土遺物はなかった。

ピット・土坑

このうちピットは直径30cm未満、深さも10cm未満の浅い円形の穴で、配置も不規則で建物の柱穴ではないと考えられる。土坑は、直径1m以上深さ20cm以上あるが、半分以上が現代の建物の工事に際して削平されてしまっており、正確な規模や機能などは不明

である。

溝 溝は南北方向に走る幅70cm程度、深さは5cm程度の浅いものである。新しい時代に、耕作などに際してできた鋤痕の可能性も考えられる。

井戸 井戸は直径1.1m以上、深さは1.8m以上あるが、調査区が狭いため確認できたのはごく一部である。ほぼ底に近い部分まで確認できたと思われるが、正確なことは不明である。出土遺物から中世の井戸であると確定した。

暗渠水路 暗渠水路は井戸の南西横で確認されたもので、これも調査区が狭いため確認できたのはごく一部である。やや南にふれた東西方向に軸のある溝で、中に人頭大の石を組んで暗渠としている。確認できた範囲での幅は3m、深さは1m程度で、石組みは水路の底に幅30cmくらいで組まれていた。この遺構も出土遺物から中世の遺構であると確定できる。

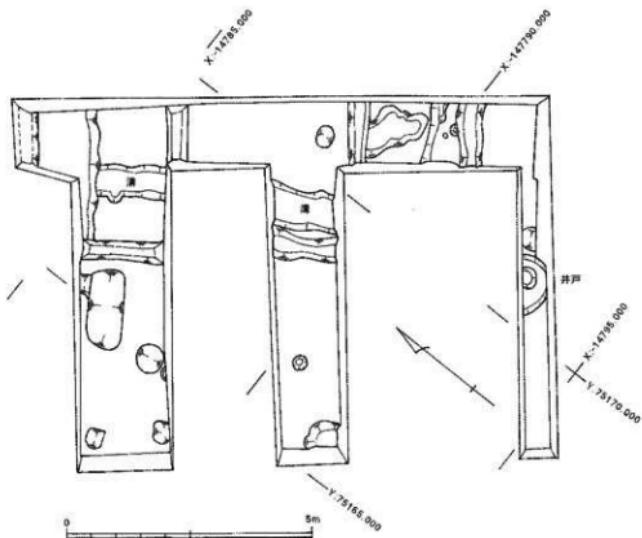


fig. 206 第1遺構面平面図

I区 第2遺構面 第2遺構面は、第1遺構面から20cmほど掘り下がったところで確認した。ピット10基、溝2条と土器片が多量に集中して投棄されたと考えられる上器溜りが1ヵ所である。

溝 溝は幅20cm未溝深さ5cm程度で、耕作などに際してできた鋤痕の可能性も考えられる。

ピット ピットは直径20cm前後、深さ10cm前後のものが大半で、互いの配列も規則性がなく建物址などを構成するものではではない。

土器溜り 土器溜りは、調査区の中央付近で幅50cm×1m程度の範囲で、土器の破片が密集した状態で出土したものである。特にならかの遺構に伴うものではなく、無造作に投棄されたかのような印象を与える。

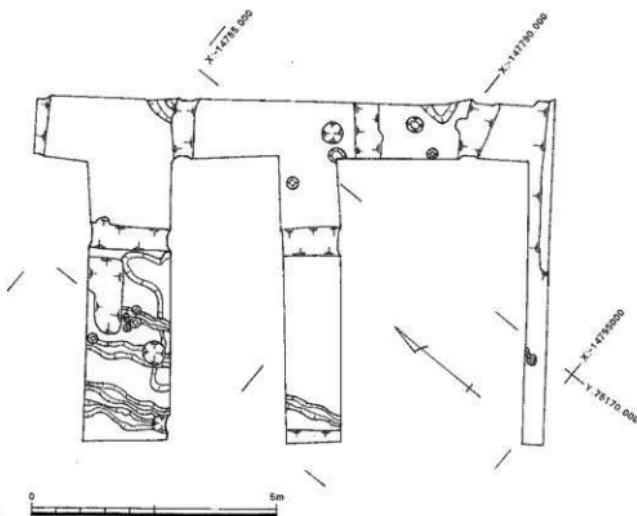


fig. 207 第2造構面平面図

I区 第3造構面 調査区の西南角部分のみ、地山層直上に古墳時代の遺物包含層の堆積を確認したが、調査範囲が狭いため地山面には顕著な造構はなかった。しかし包含層中の遺物密度は濃く、残存状況も良好であることから、直近に古墳時代初頭の造構が存在することを感じさせるものである。

また、調査区西壁の堆積層観察の結果、古墳時代の層が南の低地へ向かってより厚く堆積していく様子が明瞭に確認でき、今回の調査で古墳時代の層を検出した場所が、御歳遺跡における古墳時代の造構分布の北限であることが確認できた。

II区

II区では從前の建物による地層

の損壊が著しく、遺跡のある層は10.5mほどしか残されていなかつた。確認できたのは、土坑1基とピット2基であるが、どちらも本来の形状ではなく、上部が削られた残滓であると考えられる。土坑は深さ10cm、直径は60cm以上だが、半分以上はすでに削られて失われている。ピットは直径20cm程度、深さは25cm前後だが、掘立柱建物などの柱穴ではないと思われる。

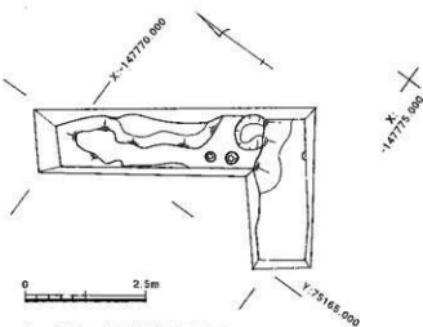


fig. 208 第3造構面平面図

まとめ

今回の調査では、古墳時代～奈良時代当時の地形を復元することができたのが最も大きな成果である。当時の地形は、現在のような平坦ではなく、南に下がる傾斜地、すなわち微高地と低地の境目であったことが明瞭に確認できた。

調査範囲のうち、北側のII区は微高地部分、南側のI区は低地部分にあたるため、低地側により多くの地層が堆積していた。古墳時代の層はI区の中央付近から堆積が始まり、南西にむかって広がっていく状態が確認できた。これによって当遺跡における古墳時代遺構の分布範囲（北限）がある程度確定できると考えられる。

また、古墳時代より新しい奈良時代や中世の層は、調査区全体に広がっていることから、古墳時代には今回の調査地より西南方向に集落の中心が位置していたが、時代が下るにしたがって東北方向へと居住域が広がっていったと考えられる。これは農業技術の進歩や人口の増加に伴い御歳遺跡の集落の規模が拡大したものと考えられ、集落の変遷を考える上で興味深い結果となった。

5. 第62次調査

今回の発掘調査は、個人住宅建設に伴い実施したものである。調査の対象となったのは、工事予定範囲の内、建物の基礎によって遺跡が損壊すると予測された部分である。基礎の入る深さに応じて調査を行ったため、調査区内でも部分的に深く掘り下げた地点と深度制限のある地点とに分かれた。対象総面積は約35m²であるが、基礎の深く入る部分はそのうち18.5m²である。工事の影響を受けない深さについては、工事範囲内であっても遺跡の存在の有無にかかわらず調査の対象外として扱った。

基本層序

調査の結果、2つの異なる時期の遺構が存在しているのを確認した。第1遺構面は標高6.30m付近に堆積する地層上に残されたものである。

本調査区の堆積層を単純化すると以下のようない層序となる。上から順に①現代盛土（旧耕作土含む）②奈良時代遺物包含層 ③奈良時代（あるいは中世）遺構基盤層 ④古墳時代遺物包含層 ⑤地山層（古墳時代遺構面の可能性が高い）。

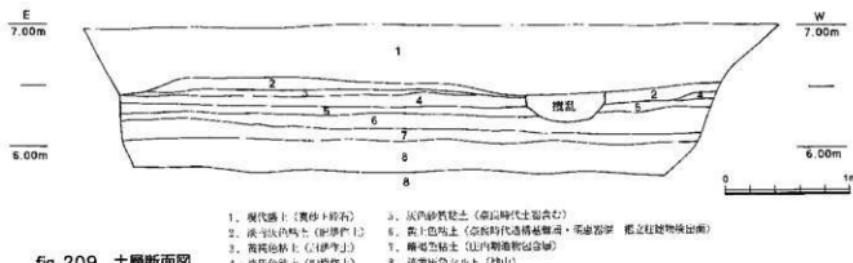


fig. 209 土層断面図

調査結果

第1遺構面上で、ピット4基を確認した。

ピットはどれも直径30cm程度、深さ20cm～30cmの円形で、規則的な配列から見て掘立

柱建物の柱穴であると考えられる。

調査範囲が狭く限られているため、建物の全貌などは不明だが、2間以上×2間以上の、南へ約37度ぶれる軸方向の建物であると考えられる。柱穴のうちの1カ所からは柱穴内に礎盤となる石材も確認できた。これらの遺構からはごく小片の上器しか出土しなかったため、建物の正確な時代を判定することはできなかったが、奈良時代以降のものである。

掘立柱建物のある第1遺構面より下層については、工事影響深度までの調査となるため、基礎の深い部分のみにサブトレレンチを設定しておこなったが、遺構は確認できなかった。

まとめ

調査の結果、過去の調査結果との整合性の得られる遺構および堆積層の存在を確認した。

今回の調査地は、御藏遺跡のなかでも西よりに位置するが、この地点でも御藏遺跡で普遍的に認められる奈良時代の上器を多く含む灰色粘土層から古墳時代初頭の暗褐色粘土層まで、この遺跡の典型的な層序を確認した。遺構の存在も確認でき、過去の調査を補完する結果が得られた。

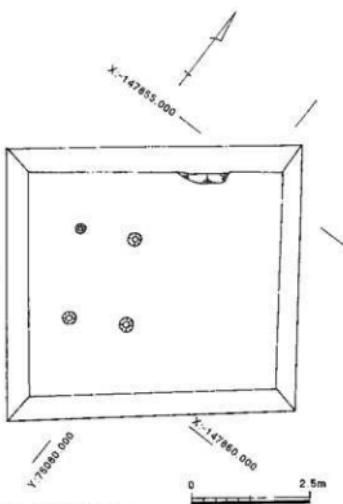


fig. 210 遺構面平面図

6. 第63次調査

今回の調査は寄宿舎建設に伴うもので、調査地は東側を平成10年度第6次～4、6調査区、西側を平成10年度第14次～18調査区に隣接する。工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。

調査概要

調査は計画建物基礎の形状から1～17区を設定し、調査を実施した。

基本土層

調査地の基本土層は東側で地表面から65cm前後までが、盛上・旧耕土・床土層で、この下層に中世の遺構面を形成する灰褐色シルトが存在する。これは西へ緩やかに下がっており、平安時代の遺物を多く含む。この下層の暗灰褐色砂質シルト上面に第2遺構面が検出される。暗灰褐色砂質シルトは奈良～平安時代の遺物を多く含む。この下層は茶灰褐色粗砂もしくは灰褐色シルトで、この上面で第3遺構面が検出された。これより下層は砂層の堆積であったが、洪水砂と考えられる茶褐色粗砂の一部で古墳時代の遺物が出土した。



1. 盛土・保土
2. 黄褐色砂質シルト（田代土）
3. 灰褐色シルト（田代土）
4. 灰褐色砂質シルト（田代土）
5. 灰褐色シルト（田代土）
6. 灰褐色シルト（田代土）
7. 混灰褐色シルト（田代土）
8. 混灰褐色シルト（田代土）
9. 混灰褐色シルト（田代土）
10. 混灰褐色シルト（遺物区分面）

11. 混灰褐色砂質シルト（遺物区分面）
12. 須恵器片シルト
13. 混灰褐色砂質シルト
14. 基底褐色粗砂（奥水砂、古墳時代遺物含む）
15. 混灰褐色砂質シルト
16. 古褐色粗砂
17. 古褐色粗砂
18. 古褐色粗砂
19. 古褐色粗砂
20. 古褐色粗砂

fig. 211 土層断面図

第1遺構面

1区東半部を中心に5条の溝を検出した。いずれも東西方向で、幅25cm～1.0m前後、検出面からの深さは5cm前後で、上師器、須恵器の細片が出土した。6区では溝3条を検出した。幅は15～60cm、検出面からの深さ5～15cm。いずれも東西方向である。微細な土師器、須恵器片が出土した。7区では溝1条を検出した。幅10～25cm、検出面からの深さ10cm前後である。東西方向で、微細な土師器、須恵器片が出土した。8区では溝2条を検出した。いずれも東西方向で、幅15～40cm、検出面からの深さは10cm前後である。微細な土師器、須恵器片が出土した。9区では溝2条を検出した。微細な土師器、須恵器片が出土した。13区西端部でピット1基を検出した。南半は調査区外へと続くため、全体の規模は不明で、直径80cm以上、検出面からの深さは20cmである。土坑に近い形状をしている。微細な土師器、須恵器が出土した。

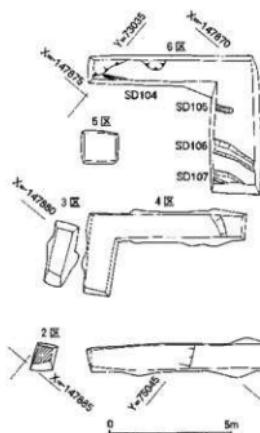


fig. 212 第1遺構面平面図

第2遺構面 第3遺構面

周辺の調査結果から、平安時代に該当する層を確認したが、遺構は検出されなかった。1区東半部を中心に多くの遺構を検出した。溝17条、ピット36基を検出した。溝の内訳は東西方向6条、南北方向11条である。西半部西端で検出した幅1.5m、検出面からの深さ25cm前後のSD325以外は、いずれも幅15～40cm前後、検出面からの深さ5～15cmである。出土遺物は十師器、須恵器の細片等が出土したが、SD311から古墳時代後期の須

漆器高杯片、SD314、SD325から平安時代頃の須恵器片等が出土した。ピットの直径は25~95cm、検出面からの深さは15~65cmである。いずれも建物構成を確認することはできなかった。出土遺物は微細な土師器、須恵器等が大半であるが、SP340からは平安時代頃の上師器片、SP360からは平安時代頃の上師器皿、SP366からは飛鳥時代頃の須恵器片等が出土したほか、SP339、342では柱材が遺存していた。

4区では溝2条、ピット2基を検出した。溝は南北方向で、幅25cm~1.25m前後、検出面からの深さは5~15cm前後である。ピットは30cm前後、検出面からの深さは5~10cm前後である。上師器、須恵器の細片が出土している。調査区の西側は落ち込み状に下り、湿地状の様相を呈していたものと考えられる。須恵器、土師器片が出土している。

6区では溝2条、ピット7基を検出した。溝はいずれも南北方向で、幅25~60cm、検出面からの深さは5~15cmで、上師器、須恵器、黒色上器等が出土している。ピットは直径25~50cm、検出面からの深さは10~25cmである。土師器の細片等が出土している。

7区では溝1条、ピット6基を検出した。溝は幅55cm前後、検出面からの深さは15~20cmで、東西方向である。上師器、須恵器の細片が出土している。ピットは直径5~35cm、検出面からの深さは25~35cmである。SP317からは土師器、須恵器の細片が出土し、柱材が遺存していた。

8区では溝1条、ピット3基を検出した。溝は南北方向で、幅80cm~1m前後、検出面からの深さは10cm前後である。土師器、須恵器の細片が出土した。ピットは直径30~50cm、検出面からの深さは15~30cm前後である。SP316は土師器、須恵器の細片が出土し、柱材が遺存していた。

9区ではピット2基が検出された。直径は0.65~0.8m、検出面からの深さは0.2m前後で、土師器、須恵器の細片が出土した。

11区では直径50cm前後、検出面からの深さ10cmのピット1基が検出された。

13区ではピット2基を検出した。ピットは直径30~50cm、検出面からの深さは10~35cmである。

14区では東西方向の溝1条とピット3基を検出した。溝は東西方向で、幅60cm~1.0m、検出面からの深さは15cm前後である。土師器、須恵器の微細な破片が出土した。ピットは直径30~90cm、検出面からの深さは15~50cmである。

15区ではピット3基を検出した。ピットは直径60~75cm、検出面からの深さは15~30cm前後、上師器、須恵器等が出土している。

16区では南半で東へと下がる落ち込みを検出した。調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。検出面からの深さは30cmで、土師器、須恵器の細片が出土している。近隣の調査区で検出されている溝の一部である可能性も考えられる。

17区では溝2条、ピット2基を検出した。溝は北半部の東壁側で検出された。北西~南東方向であると考えられ、幅20cm前後、検出面からの深さは12cmである。南西側に下がる落ち込み状の造構は、14区で検出したSD301の続きと考えられる。南東側は調査区外へと続くため、北西側の肩を検出したのみである。検出面からの深さは15cm前後である。土師器、須恵器の細片が出土した。ピットは直径30~55cm、検出面からの深さ13~

25cmである。他に調査区の東壁内より、平安時代頃の土師器の壺の上半部が出土した。

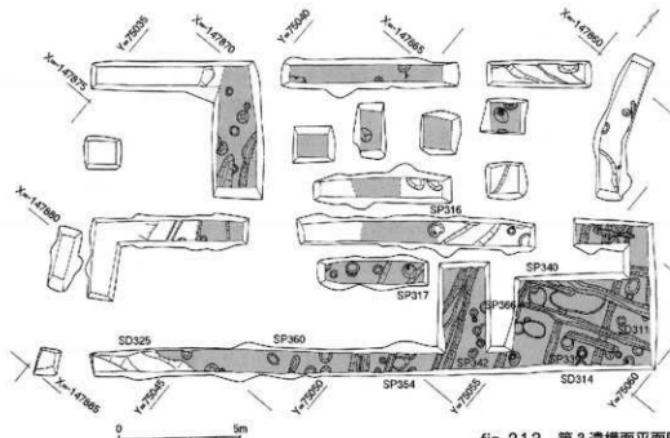


fig. 213 第3遺構面平面図

洪水砂

第3遺構面のベース層となる茶灰褐色粗砂、灰褐色粗砂から古墳時代中期末～後期頃の遺物が出土した。堆積の状況から洪水等に伴うものと考えられる。この洪水砂は1区、4、5区東端、7区、8、9区中央部、10～13、15区で検出され、8、9区では帯状に広がる状況も確認されている。これ以外の範囲では第3遺構面のベース層は固く締まった青灰色シルト若しくは青灰色細砂であるが、古墳時代の遺構は検出されていない。

出土遺物には土師器や須恵器壺、壺蓋等があり、比較的大きな破片も含まれる。4区からは完形の須恵器高壺が出土した。これら出土遺物にローリングは顕著ではなく、近隣地から流出したものと推定される。

まとめ

第1遺構面は調査区中央部から東側にかけて多く遺構が検出された、御菅西地区の土地区画整理に伴う調査では調査地の北、東、南側に遺構が多く検出され、西側には河道が存在することが確認されている。

第2遺構面は、上層の遺物包含層（灰褐色シルト）の出土遺物から概ね平安時代と考えられる。御菅西地区土地区画整理事業に伴う調査において、平安時代の遺構面に該当すると考えられる遺構面が確認されているが、今回の調査では遺構は検出されなかった。

第3遺構面からは多くの遺構の検出をみた。溝、土坑、ピットを検出したが、調査範囲が限られているため、ピットについては建物等を構成するものであるかは確認することができなかった。遺構の時期については平安時代が中心であると考えられる。

第3遺構面のベース層となる茶灰褐色粗砂、灰褐色粗砂の洪水砂からは古墳時代中期末～後期頃の遺物が出土した。4区から田辺昭三氏の編年によるTK47型式に並行するものと考えられる完形の須恵器高壺が出土した他、土師器、須恵器壺、壺蓋等が出土している。近隣地の調査で古墳時代の遺構も確認されているが、今回の調査では確認されていない。出土状況から近隣地より砂と共に運ばれてきたものと推定される。

26. 水笠遺跡 第28次調査

水笠遺跡はJR新長田駅の北側、水笠通2・3丁目の範囲に拡がる集落遺跡で、旧茹藪川により形成された冲積地上に立地する遺跡である。

今回の調査は、水笠通2丁目街区における防災公園建設に伴う発掘調査で、平成15年度より試掘調査、本調査を実施してきており、同事業に伴う発掘調査は3回目を数える。先の調査では、大型の掘形をもつ古墳時代後期の建物や、畝溝などが見つかっている。また3丁目の街区では、街路工事や個人住宅建設などに先立ち発掘調査を実施しており、弥生時代～中世の遺構、遺物が確認されている。

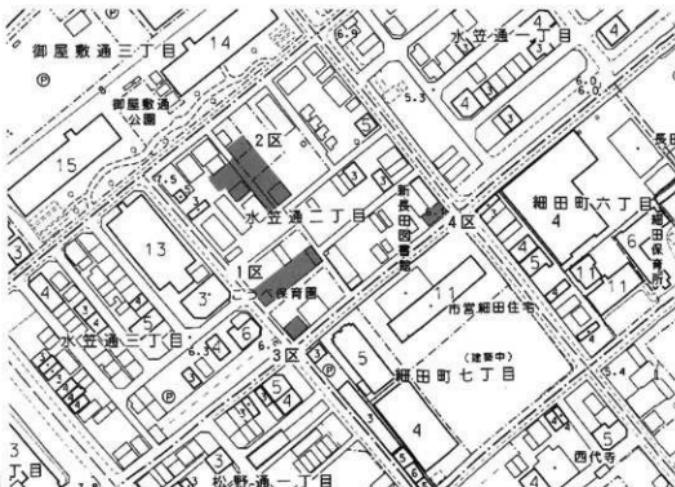


fig. 214 水笠遺跡
調査地位置図

今年度は仮設住宅などの建物があつて文化財の残存状況が確認できていなかつた部分について試掘調査を実施し、その結果を受けて、遺構、遺物の残存する範囲について調査を実施した。調査区は公園予定地内の2箇所と、南側に接する市道細田線拡幅部分の2箇所の計4箇所である。

基本層序

調査地内の基本層序は、整地土、盛土層の下に部分的に現耕土があり、その下に床上、近世の耕土層が堆積する。これら近世の耕作痕がその下層の中世の耕土層に深く及ぶ部分も多いが、灰色砂質土の中世の旧耕土層も比較的よく残っている。この下にわずかに灰色シルトの遺物包含層が見られるが、遺物の出土量は少ない。この下に黒色、黒褐色シルト層があり、この上面が遺構面である。但し、平面での遺構の判別は難しく、精査を繰り返しながら、その下の現表土下約60～80cmに堆積する褐色シルト（砂層部分あり）、あるいはさらに下層の黄色シルト層上面で遺構検出を実施した。

調査は中世の耕土層直上までを重機により除去し、後は人力により掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

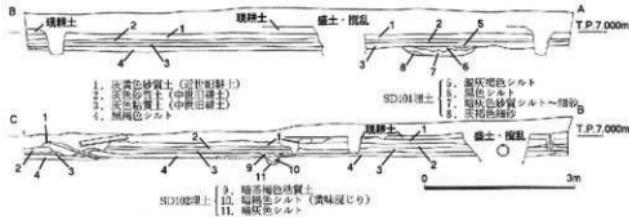


fig. 215 土層断面図

調査の概要

公園建設地の西側の調査区を1区、北側の調査区を2区、細田線拡幅部の西側の調査区を3区、東側の調査区を4区として調査を実施した。街区北側の2区での遺構面は標高約6.4m、南西部1・3区では約6m、南東部の4区では約5.6mとなり、北西から南東へと傾斜する旧地形となっている。遺構は調査地の北側を中心に検出され、南側では希薄となるが、遺物はほぼ全城で出土している。

1区の調査

SD101

幅約1m、深さ約30cmの南北方向の溝である。断面は幅広のU字形を呈し、上層に黒色シルト、下層には灰色系の砂層が堆積する。第26-3次調査区から続く溝で、遺物は出土していない。先の調査では6世紀後半の土器片が少量出土したが、埋土に中世の耕作土を含むことから、中世の遺構である可能性が高いものと考えられる。

SD102

幅30~50cm、深さ約15cmの溝で、調査区内での検出長は約12mである。第26次調査区内では東西方向であるが、今回調査地の1区北端部で南に折れ曲がり、わずかに蛇行しながら南下する。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、古墳時代後期の須恵器片の入ったSP102に切られるため、同時期を含めた、それ以前の溝と考えられる。

SD103

S102により切られる。検出長約10m、幅約40cm、深さは約20cmである。南側の端は、丸く収まり土坑状になる。遺物は出土していない。

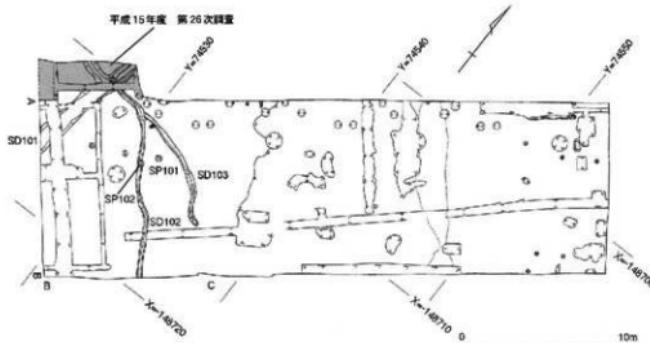


fig. 216 1区遺構面平面図

- ピット** SD101と103に挟まれた範囲で径約30cm、深さは約20cmのピットを6基検出した。その内3基は一列に並ぶが、建物を構成するものではない。柵のような施設になる可能性は残る。いずれのピットからも遺物は出土していない。また調査区の東端で径約10cmの杭跡と考えられるピットを8基検出した。調査区東半は中世以降に水田造成などにより大きく段が形成されるようである。さらに東は緩やかに傾斜する下がり地形となっている。
- 2区の調査** 街区北半に位置する調査区で、平成15年度に調査を実施した第26-3次調査区、平成16年度に調査を実施した第27次調査区の間に位置する。今回の調査区では最も面積の広い調査区である。調査区の北側を中心に遺構を検出した。

検出遺構は掘立柱建物1棟、溝20条、土坑11基、柱穴で、その他時代は下がるが、中世旧耕上層上面で近世以降の土坑、礎石建物、溝を検出した。

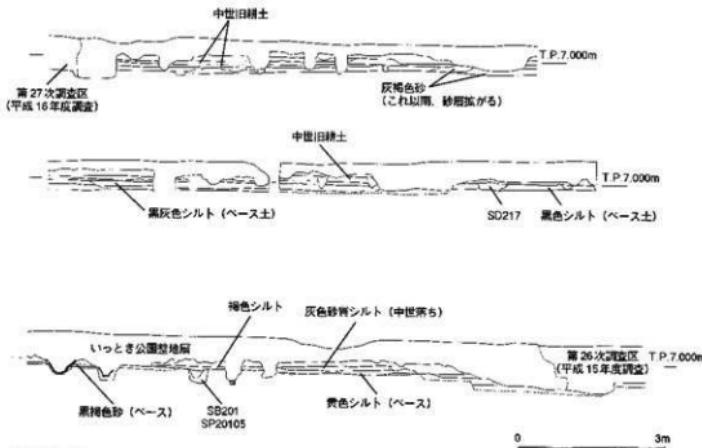


fig. 217 土層断面図

- SB201** 調査区北東で検出した掘立柱建物である。調査区外に延びることや、搅乱による影響が大きいことから詳細は不明であるが、第26次調査検出のS B101（3×5間以上）と同様の規模、方向性をもつ建物と推測される。柱掘形は円形で、径約40cm、深さは15～25cmである。埋土は上層に黒色シルト、下層に灰褐色系の砂層が堆積し、先の調査のS B101でみられた明確な柱痕は認められない。古墳時代後期の遺物がわずかに出土した。
- SD101** 第26次調査区で空白となっていた部分について検討できた。これにより今回の1区での検出部分も含めると南北約80mを越す溝となる。2区内での規模は幅約1.2m、深さは約20cmである。古墳時代後期の須恵器片が1点出土しているが、ここでも溝の明確な時期を決定するには至らなかった。
- SD201
～219** 第26次調査区から続く溝を検出したが、東西方向に延びるもののはかに、北側へ大きく弧を描く溝が検出された。S D202、203は幅30～40cm、深さ約15cmで、北側へ大きく曲がり、S D207や208に続くと考えられる。西側に延びるS D214～218は残りが悪く、詳細が不明な部分が多いが、矩形を呈する溝を含む。S D209～213、219は溝底に鉤痕

を残す溝で、幅約20cm、深さは約10cmが遺存する。6世紀末の須恵器片が出土しており、今回検出した古墳時代の造構の中で、やや新しい時期に属する。建物が施設されたのち、当地は畠地として利用されたと考えられる。

土坑

いずれの土坑も深さ10~20cm程度である。規模、形状は、長径約0.8~1.5m、短径約0.5~1mの平面横円形を呈するもの、径0.5m~1.2mの円形を呈するもの、長辺約1.5m、短辺約1mの長方形を呈するものがある。土坑として掘削を行ったが、遺物の出土もなく、結果的には基盤面の浅い窪みに上層の土壤化層が溜まった痕跡である可能性が高い。

柱穴

S B 201を構成する柱穴と同規模の柱穴を他でも検出したが、調査区内に散在し、建物を構成するには至らなかった。また径0.15mほどの杭状の小規模なピットも多いが、杭列など区画を形成するものも認められない。柱穴からの遺物の出土はほとんどなく、わずかに調査区中央東よりの部分で検出したS P 201~204から遺物の出土をみたのみである。S P 201は径約40cm、深さ約20cmで弥生土器が出土している。S P 202、203からは上層器片が出土し、S P 204からは土器片の他に須恵器片も出土している。

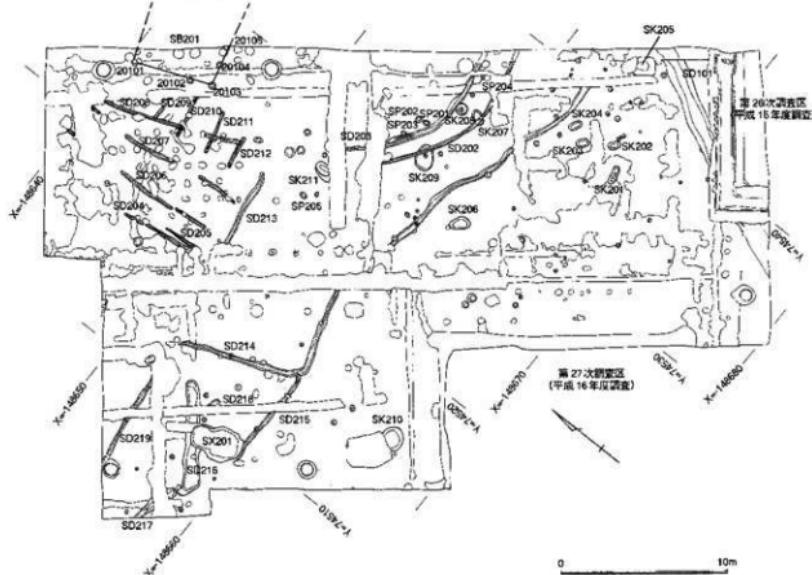


fig. 218 2区遺構面平面図

近世以降の

遺構

調査区北半の、中世の田耕土層または整地層と考えられる層面で近世以降の造構を確認した。土坑(S X 201)は重な平面形をもつ十坑で、おそらく一辺約2mの方形のものと径約1.5mの円形のものが切り合うものと思われるが、埋土に明確な差異は認められない。検出面から1.5m以上掘削を行ったが、湧水のため底部を確認するには至っていない。砂層の下、シルト層よりも深度があり、埋土、壁面の状況などから井戸を掘削

したものの壁の崩落などがあり、すぐに埋め戻した可能性がある。最上層から近世の染付片や加工木片が出土したが、下層からは井戸枠、曲物なども確認されなかった。また、調査区の北東部で礎石建物（S X 202）と土坑（S X 203、204）を検出した。礎石建物は6×6間、約6m四方の規模で、開口石を礎石として並べ据えている。また北辺の中央の一石にのみ脚部の欠損した灯籠の台石と考えられる石材を転用している。建物の西側には土坑が接し、S X 203からは幕末の撲鉢などが出土、その横には白、青、赤、黄色を意識した石を詰めた丹波焼の小甕の埋設遺構があり、地鎮に伴うものと推測される。いずれも近世末～近・現代のものと考えられる。

3区の調査

街区の南辺、細田線拡幅部西端に設けた調査区である。調査予定範囲のうち、西側と南側については既存の道路建設時にすでに遺構面が失われており、また埋設管なども多く、当初調査予定範囲の約半分について調査を実施した。また開削範囲についても近世以降の耕作十、落ち込みなどにより大部分の範囲で遺構面が既に失われており、中世以前と考えられる遺構は西半に限られる。溝1条、ピット3基を検出した。

SD301

幅約90cm、残りのよい北端の部分で深さ約35cmである。浅く皿状に掘り窪めた後、さらにU字形に二段に掘り込まれた断面の形状を呈する。詳細な時期は不明であるが、弥生時代のものと考えられる土器片が出土している。東西方向の溝で、同様の溝が水笠通3丁目の街区内での調査において検出されており、東西に長く続く溝と考えられる。

ピット

調査区西端で3基のピットを検出したが、いずれも深さは10cm程度で残りは悪い。埋土は灰褐色シルト、あるいは黒灰色シルトの單一層で、上層の堆積層と類似する。SP 301から古墳時代後期と考えられる須恵器片、SP 302からは弥生時代と考えられる土器片が出土している。調査区東端の状況から、南東方向に向かい軟弱な地盤となる様相を呈する。

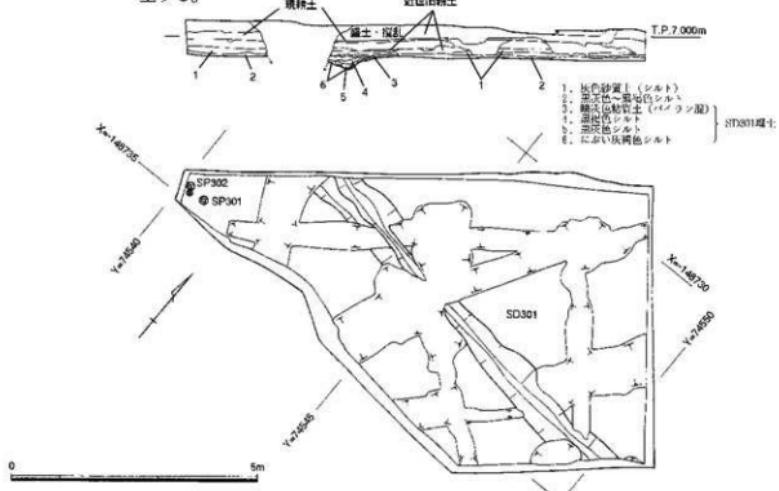


fig. 219 3区遺構面平面図・断面図

4区の調査

街区南の細田線拡幅部東端に設けた調査区である。造構面を掘りこむ既存建物の基礎と水道管が残るため、これらを残して調査を実施した。1～3区と同様の黒色系のシルト層が堆積するが、他の調査区と異なり、これらはベース面を形成せず、湿地状の地形に堆積した土壤となるよう、造構はこの下層、黄色シルトまたは褐色シルト層面で、溝1条とピット2基を検出した。

SD401

4区-①・⑦で検出した溝で、調査区内での検出長は約2mである。深さは約30cmで、最上層には造構面上にも広がる灰色砂が薄く堆積し、その下は黒灰色系のシルト層が堆積する。遺物は出土しておらず、この他に並行する溝なども検出されておらず、造構の時期とともに性格についても詳細は不明である。

また4区-①でも造構面上に灰色砂屑が薄く堆積し、偶蹄目類の動物の足跡が多く確認された。それら足跡の踏み込み内から古墳時代後期の上器が出土した。水田層、あるいは湿地状地形が拡がるものと想像される。

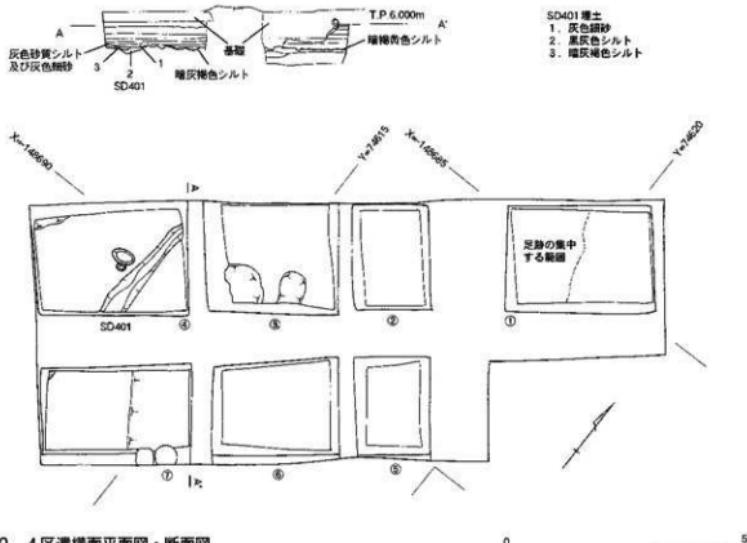


fig. 220 4区造構面平面図・断面図

まとめ

今回の調査では、先の調査に引き続き古墳時代後期の掘立柱建物の一部と耕作痕、弥生時代と考えられる溝、柱穴を検出した。後世の水田耕作などにより当時の生活面がすでに失われている可能性は高いが、2区の造構面は標高約6.4m前後、南の4区では5.6m前後の下がりの地形となっており、北側に建物や土坑などがつくられ、南側の不安定な土壤では水田耕作などが行われたと考えられる。2区の調査区内で北側に大きく曲がる耕作痕に伴う溝の形態は地形に伴うものか、あるいは水田、畑などの耕作の形態に伴うかは不明であるが、微高地の輪郭を表現するものであれば、地形の復元、土地利用のあり方を考える上では意義深いものと考えられる。

27. 大橋町遺跡 第2次調査

大橋町遺跡は、荏原川や妙法寺川により形成された沖積地上に立地する集落遺跡である。平成16年度、JR新長田駅の南約100mに位置する大橋町5丁目で第1次調査が実施され、平安～鎌倉時代の掘立柱建物、墓、溝、水溜め状遺構、耕作痕、古墳時代の溝、弥生時代の柱穴や溝などが検出された。

今回の調査は、第1次調査地の北側に隣接する若松町5丁目街区での再開発ビル建設に伴うものである。試掘調査の結果を受け、既存の建物等により損壊を受けていない範囲、約1,600m²を対象として調査（1～3区）を実施した。調査地内には整地土、盛土、近世～現代の旧耕土が堆積し、現地表下0.6～0.8mに中世の旧耕土、その下に厚さ0.1mほどの薄い灰色シルトの遺物包含層が堆積する。その下の暗乳褐色シルト面が遺構面であるが、土壤化が顕著な部分では現地表下0.8～1mの黄色シルト面において遺構検出を実施した。



fig. 221 大橋町遺跡
調査地位置図

調査の概要

今回の調査では、弥生時代の溝約20条、土坑1基、柱穴数基、古墳時代の溝1条、鎌倉時代の上坑4基、落ち込み2基、井戸1基、柱穴、杭跡を検出した。

弥生時代

3区中央から東の範囲で幅0.3～0.4m、深さ約0.3mの溝を検出した。溝の埋土は下層に砂の溜まるものもあるが、基本的に灰色～灰褐色を呈するシルトである。出土遺物は非常に少ないが、僅かに出土した土器片から弥生時代の遺構と考えられる。平面の形状は様々で、旧地形の形状を表わし、耕作地の区画(畦)に沿って掘削されたと推測される。また3区中央部を中心に約30基の柱穴を検出したが、明確な建物は確認できなかった。

古墳時代

3区の中央で北西から南東方向へ流れる溝を1条確認した。調査区内での検出長は約33mである。幅約1.8m、深さ約0.8mで、断面の形状は緩やかなV字形を呈する。溝の埋土中位の砂層から口縁部を人為的に打ち欠いた5世紀後半の須恵器の杯蓋1点と、埋土最上層のシルト層中から6世紀代の須恵器の杯蓋1点が出土した。

鎌倉時代

3区の西端でSX01やSE01などの取水に関連する遺構を中心に検出した。SX01は調査地の西端に位置する大きな落ち込みで、土壠観察の結果、この部分を流路が貫流し、その後は緩やかにシルト層が堆積し、その際に水汲み場や水溜めとして利用されていたと推測される。須恵器、土師器のほか、青磁、白磁、瓦器など鎌倉時代前半頃の遺物が出土した。SE01は直径約1.7mの歪な円形を呈する井戸で、検出面から約0.7mの深さの灰色砂面で熱を受けた縁が10個ほど出土した。当初はこの縁の出土レベルを底面とする素掘りの井戸と考えたが、断ち割りの結果、さらに下側から径0.36m、高さ0.22mの曲物が出土した。曲物を掘えた黄灰色粗砂層が湧水層になる。井戸の掘形壁面に地盤に伴うものと判断される地層のズレがあり、曲物下位の箇所も層のズレに符合するよう剖れていた。曲物が洪水などにより埋没した後、井戸は人為的に埋め戻されたと推測され、廃絶期は出土遺物より13世紀前半と考えられる。

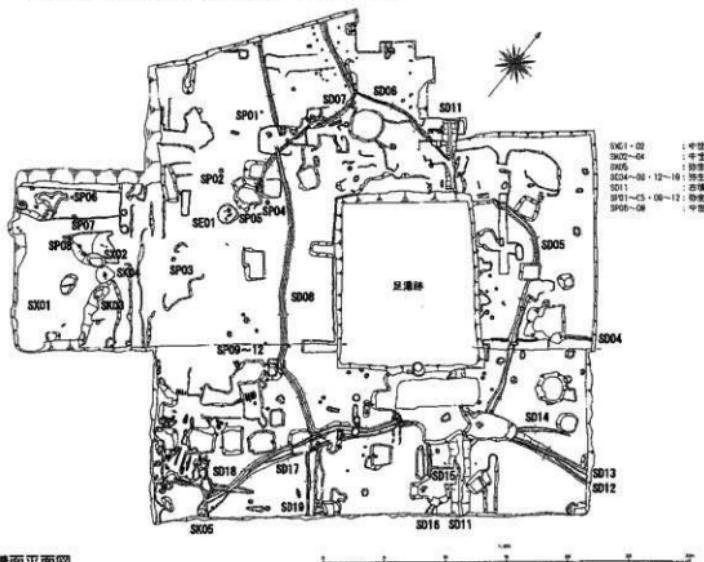


fig. 222 遺構面平面図

まとめ

今回の調査により、遺跡が先の調査地から北側へ拡がることが確認され、弥生時代から中世に至る当地の様相を知る新たな資料を得た。弥生時代には付近は基本的に耕作地であり、検出した溝は旧地形に沿って掘削されたと考えられる。旧地形の復元や土地利用の在り方を考える上で興味深い資料といえる。古墳時代の遺構は直線的に掘削された溝1条のみであったが、この溝は大橋町遺跡の西に隣接し、当地域の当該期の中心的な集落とされる松野遺跡との関連が注目される。中世においては、先の調査地からの居住域の拡がりは確認できなかったが、井戸や流路を利用した水溜め状遺構などを検出し、住居址周辺での取水の様子が明らかになった。なお、今回の調査の成果については、平成19(2007)年度に『大橋町遺跡第2次調査発掘調査報告書』を刊行している。参照されたい。

28. 二葉町遺跡 第20次調査

二葉町遺跡は、六甲山系から流れ出る妙法寺川と茹藻川によって形成された沖積地の自然堤防上に立地する集落遺跡で、新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う発掘調査が大規模に実施されてきた遺跡である。

これまでの調査では、縄文時代晚期の自然流路、弥生時代前期の溝、奈良時代の掘立柱建物・井戸・木棺墓などが検出された。特に11世紀末から12世紀前半に廃棄され、井戸枠として転用された「三材構造船」は貴重な資料である。



fig. 223 二葉町遺跡
調査位置図

調査概要

今回の調査は、新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴うもので、調査地は二葉町6丁目で4地点、久保町6丁目で2地点の調査を実施した。

基本層序

基本層序は搅乱と盛土、灰褐色砂質土（近世以降の遺物を含む）、暗灰褐色砂質土（近世以降の遺物を含む）、黒灰色砂質土（中世前期遺物包含層であり、部分的に存在している）、淡黄灰褐色砂質土（上面が遺構面）が堆積している。

二葉町6丁目の調査

遺構は、主に11世紀後半～13世紀にかけての、井戸3基、木棺墓1基、掘立柱建物1棟と柵列を含む柱穴群の他、溝、土坑を多数検出した。

20-1・5次調査地で遺構が集中して検出されたが、その他の地点は從前建物の基礎による搅乱が著しく、遺構面自体の残存が少なかった。しかしながら、残された遺構面での検出状況では、遺構の密度は比較的希薄である。

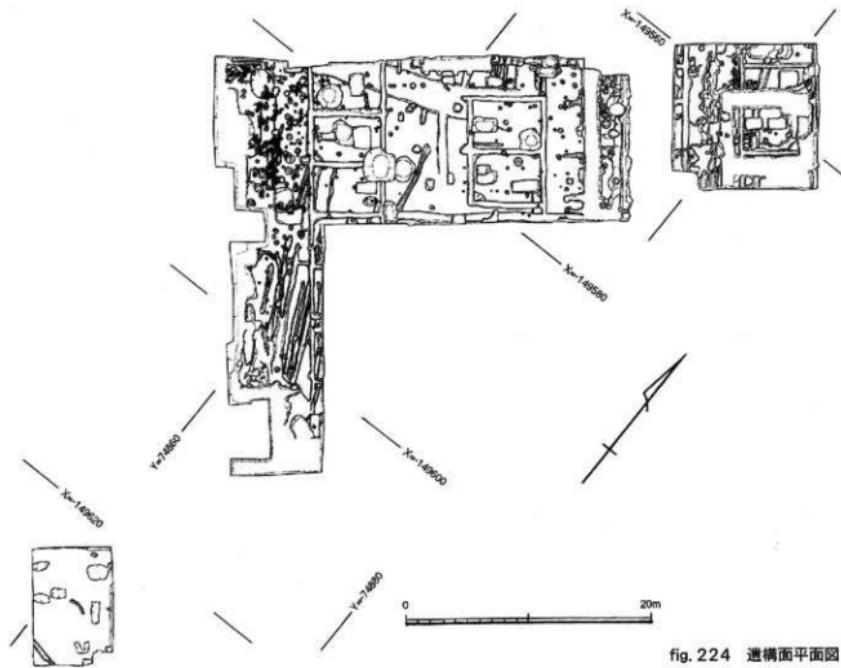


fig. 224 造構面平面図

久保町 6 丁目の調査

造構は全体的に希薄で、溝 6 条、ピット 5 基、水溜造構 1 基を検出した。

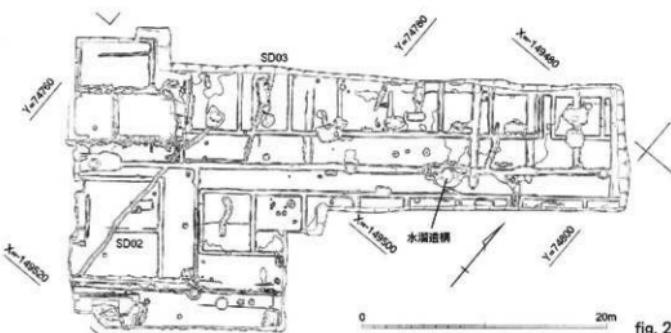


fig. 225 造構面平面図

まとめ

これまでの調査結果からも、二葉町遺跡の中世の居住域は散在する傾向があり、今回の調査結果も、20-1・5 次調査の地点に居住域が存在したものと考えられる。

なお、本調査は『二葉町遺跡発掘調査報告書 - 第14~21次調査 -』が刊行されており、詳細は報告書を参照されたい。

29. 松野遺跡 第40次調査

松野遺跡は妙法寺川により形成された扇状地及び自然堤防に立地する遺跡で、昭和56年度に市営松野住宅建設工事に伴う試掘調査により、その存在が初めて確認された。引き続き実施された第1・2次調査では柵列と溝で区画された古墳時代後期前半の豪族居館が確認され、大きく注目された。

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災により、松野遺跡の所在する長田区松野通一带は甚大な被害を受けた。その後復興に伴い、JR山陽本線南側で新長田駅南地区震災復興市街地再開発事業に伴う調査が平成8年度から、北側では新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業、区画整理後の個人・共同住宅等の建設に伴う調査が平成11年度から開始された。以後、これまでに30次を超える調査が実施され、弥生時代～中世にかけての集落の姿が次第に明らかになりつつある。

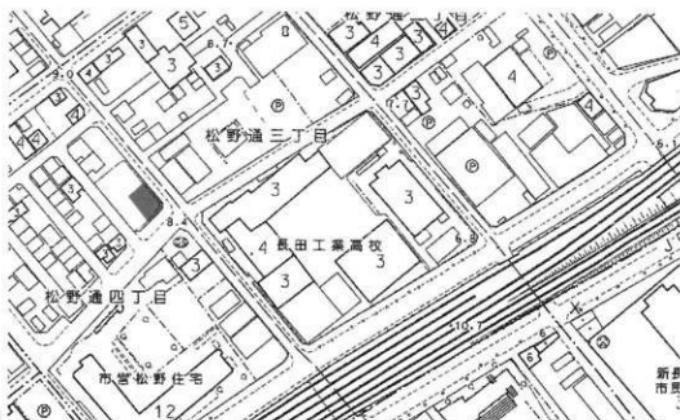


fig. 226 松野遺跡
調査位置図

今回の調査は工場建設に伴うもので、調査地は新長田駅北地区の区画整理区域内に位置する。南東側を平成12年度に実施した、第16-6次調査地に隣接する。工事による掘削の影響が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。

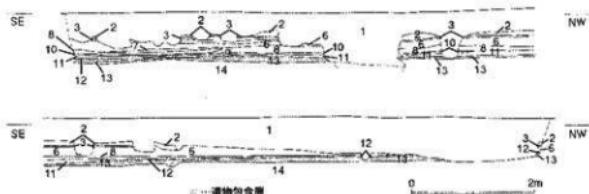
調査概要

基本層序

調査地の基本層序は盛土・搅乱層の下に数枚の旧耕土・床土層が存在し、この下層が弥生時代後期～古墳時代の遺物包含層の淡黒灰色砂混シルトである。今回の調査では、遺物の出土は極めて少量であった。また、これまでの調査では、第19次調査等で、この上層から切り込む、中世の遺構が淡黒灰色砂混シルトの上面で検出されているが、今回の調査では検出されなかった。この下層が遺構面である淡褐色砂混シルトで、この上面から遺構が検出された。現地表面から遺構面までの深さは北側で60cm、南側で80cmである。第16-6次調査では、この下層から流路、畦畔状の遺構、弥生時代前期頃の遺物が検出されているが、今回の調査地では確認されなかった。遺構面は北から南へ緩やかに傾斜する。

1. 植上・雑草
2. 淡紅色シルト（田耕土）
3. 暗赤褐色砂質シルト（田耕土）
4. 淡褐色砂質シルト（田耕土）
5. 淡褐色砂質シルト（田耕土）
6. 淡褐色砂質シルト（田耕土）
7. 淡褐色砂質シルト（田耕土）
8. 黄褐色シルト
9. 明る色シルト
10. 暗赤褐色砂質シルト（田耕土）
11. 灰色シルト（田耕土）
12. 淡青色シルト（田耕土）
13. 淡褐色砂質シルト（遺物埋含層）
14. 淡褐色砂質シルト（遺物埋含層）

fig. 227 土層断面図



検出遺構

SA01

柵状造構1基、溝1条、ピット9基を検出した。調査区の中央やや北寄りで検出した。東西方向の柱列である。2間分を検出したが、西及び南北にこれに対応する柱穴は確認できない。さらに東側へ続くものと推定され、柵列であると考えられる。柱間はほぼ1.7mで、柱穴は直径40cm前後、検川面からの深さは5~30cmである。出土遺物はなかった。

SD01

調査区の中央やや北寄りで検出した東西方向の溝である。SA01に切られており、方向も同じく東西であるが、SD01がやや南へ振る。東側は調査区外へと延びる。幅20~30cm、検川面からの深さは6cmである。出土遺物はなかった。

ピット

9基のピットを検出した、直徑は15~40cm前後、検川面からの深さ5~35cm前後で、いずれも建物等を構成するものであるかは、確認することができなかった。遺物は出土していない。

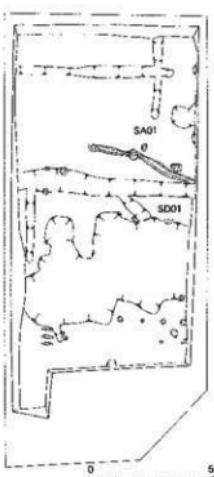


fig. 228 遺構面平面図

まとめ

遺構からの遺物の出土はなかったため、時期については不明であるが、いずれも遺物包含層よりも下層からの検出であり、近隣におけるこれまでの調査データから、ほぼ弥生時代後期~古墳時代頃の時期が推定される。

SA01とSD01は共にはほぼ並行して東西方向に延びるが、切り合ひ関係から時期の前後が判るもので、古いSD01がやや南に振っている。何らかの区画の方向を示すものと推定される。これまでの調査で、第31次調査地において、第1・2次調査と同方向の柵列が検出されているが、今回検出されたSA01とSD01は、やや南へ振っていて、異なるものである。川上遺物もなく、詳細な時期は不明であるが、区画のひとつを表すものとして、周辺地の今後のデータの増加を待ちたい。

30. 長田野田遺跡

長田野田遺跡は、六甲山系西半南麓の沖積地に立地する遺跡で、現在の標高は約3～5mである。平成7年に阪神・淡路大震災の復興事業に伴い第1次調査が実施され、鎌倉時代～室町時代の溝や土坑、奈良時代の掘立柱建物や掘立柱塀、井戸が確認されている。中でも奈良時代の掘立柱建物や掘立柱塀はその規模から公的な建物の一部の可能性を考えられ、周辺一帯の中での位置付けが注目されている。

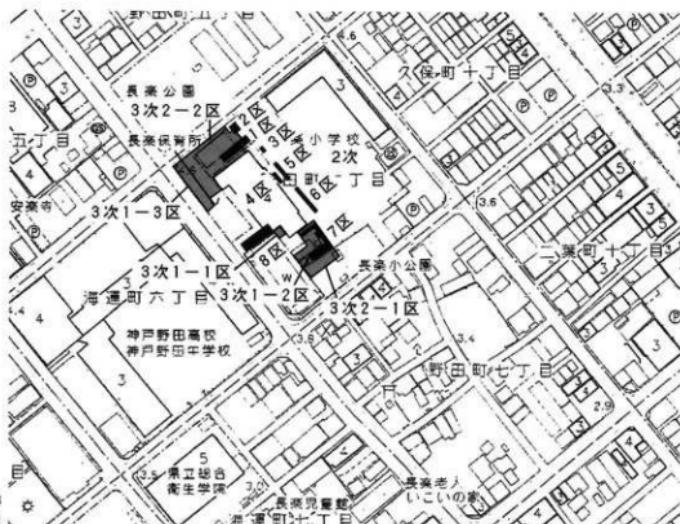


fig. 229 長田野田遺跡
調査地位置図

第2次調査

神戸市立長楽小学校と二葉小学校を統廃合し、長楽小学校の敷地内に駒ヶ林小学校として新築工事する事になった。今回の調査は、その建設工事に伴う発掘調査である。工事に先立ち試掘調査を行った結果、奈良から平安時代の遺物を含む遺物包含層が確認された。平成18年3月より調査可能な範囲を先行して、トレンチ調査を行った。調査期間が平成18年度に継続されたため、本年報に報告する。

基本層序

各調査区によって、わずかな差はあるものの、上から順に近現代の整地上、宅地化直前の耕作土、旧耕作土が1～3層、遺物包含層、中世造構面基盤層、地山と続く。地山の上面は第1次調査での奈良時代の造構面に相当する可能性があるが、今回の調査では明確な奈良時代の造構は確認できなかった。

SD01

調査区の南西隅で検出した大きな溝である。東側の肩の一部を検出したのみで、全体の規模は不明であるが、現状で幅3.4m以上、深さ80cm以上である。埋土は上から順に淡茶灰色砂、淡灰茶色砂、淡茶灰色砂、淡灰色シルト混じり砂、灰色砂混じりシルトで、遺物は土師器、須恵器、瓦器が多く出土した。

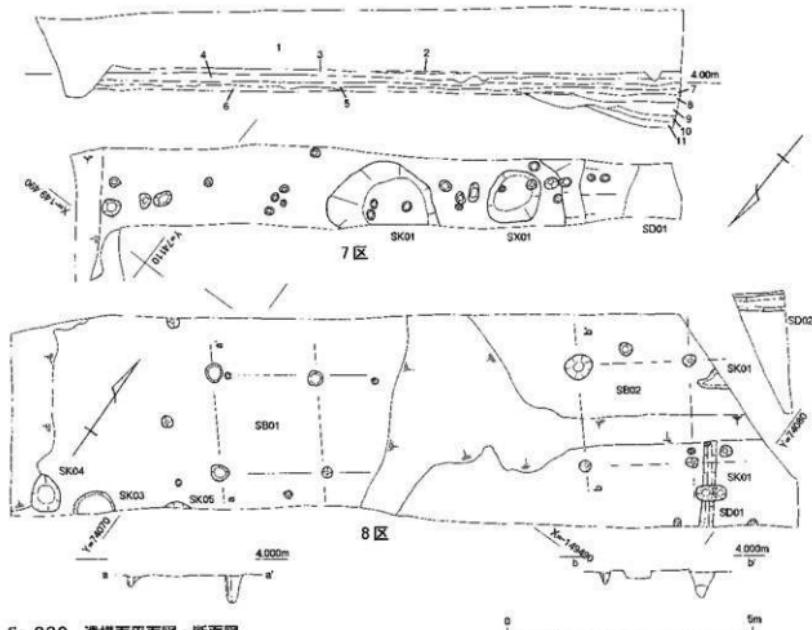


fig. 230 造構面平面図・断面図

SB01 8区の西半で検出した掘立柱建物である。現状では桁行1間（2m）×梁間1間（2.1m）を確認したのみであるが、調査区外に続く可能性が高く全体の規模は不明である。柱穴は北側の2基の方が南側の2基よりも深さが深いため、建物の本体は北側で、検出した部分は廂もしくは縁の部分である可能性も残る。

SB02 8区の東半で検出した掘立柱建物である。現状では桁行1間（2m）×梁間1間（2.1m）を確認したのみであるが、調査区外に続く可能性が高く全体の規模は不明である。掘立柱建物SB01同様に柱穴は北側の2基の方が南側の2基よりも深さが深いため、建物の本体は北側で、検出した部分は廂もしくは縁の部分である可能性も残る。掘立柱建物SB01との間は規模の大きな搅乱で遺構が破壊されているが、掘立柱建物SB01の柱間にまま掘立柱建物SB02の方向に延長しても柱穴の位置が一致しないので、ここでは別の建物と判断した。

今回の調査では掘立柱建物3棟、溝5条、土坑9基、落ち込み1基の他ピットが80基確認された。掘立柱建物は遺跡の北端近くに2区と、西端近くの8区で確認されたため、遺跡の範囲はさらに北側と西側に拡がる可能性がある。その一方で遺跡の中央部分の4～6区一帯は逆に遺構の分布が希薄である。当時の景観を想像すると、掘立柱建物群は点在して分布し、建物の周りには耕作地が広がっていたのであろう。

第3次調査

昨年度継続事業調査であった第2次調査は本体工事に先駆けた先行調査であったが、今回の調査は、本体工事に伴う調査となるため、既存校舎の除却や残土置き場の確保に合わせて調査区と実施時期を設定した。そのため、事業敷地内で隣り合わせの調査区であっても次数の付け方や区名の付け方に齟齬をきたしている。今回の報告では、近隣する調査区を北部と南部に分けて報告する。

基本層序

調査地はおおよそ北部（3次-2-2区・3次-1-3区）と南部（3次-1-1～2区・3次-2-1区）に分けられる。北部では、現地表面から盛土、淡灰黄色シルト質極細砂や灰褐色沙質シルトなどの旧耕作土が約60cmの厚さで堆積し、その直下に遺物包含層である灰褐色砂質シルトが堆積する。暗灰色シルトを間層として1層挟み、平安時代末～鎌倉時代前半の遺構面である暗灰黄色粗砂混じりシルトを検出した。また、南部では、学校のグラウンドのための盛土が約1m近くあり、その下にIH耕作土が約30cm堆積し、灰色粗砂を挟み、遺物包含層である灰褐色シルト質細砂が堆積する。ここでも、1層の間層を挟み、室町時代の遺構面である黄茶灰色シルトを検出した。

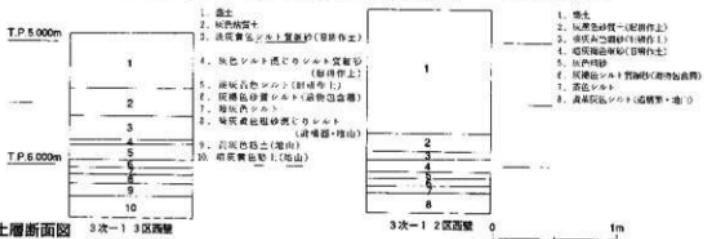


fig. 231 土層断面図 3次-1-3区西壁

南部の調査

3次-1-1区　　調査区が狭小なため、遺構・遺物ともあまり確認されなかった。

3次-1-2区　　検出された遺構は、室町時代と考えられる土坑11基、落ち込み1基、溝3条、ピット30数基を検出した。

土坑　　調査区南部で検出され、幅1.8m、深さ20cmを測る。2次調査と合わせると、最大長3.0m近い橢円形の土坑になる。内部には拳大から人頭大までの礫が多数放り込まれているような状態で検出された。中には石臼の破片が含まれていた。埋土からは、瓦・陶器・須恵器・土師器などが出土した。

SK01　　調査区南部で検出され、最大長2.7m、幅2.2m、深さ55cmを測る長方形の十坑である。断面観察から、一度掘り直しが行なわれているようである。埋土からは土師器・須恵器が出土した。

SK03　　調査区中央で検出され、長径1.8m、短径1.0m、深さ10cmを測るやや不整形な橢円形の上坑である。断面形は浅い皿形で、灰褐色細砂が堆積していた。埋土からは、須恵器・土師器が出土した。

SK04　　調査区中央で検出した長径1.0m、短径70cm、深さ20cmを測る橢円形の上坑である。断面形は皿形で、茶灰褐色極細砂が堆積していた。須恵器・土師器が出土した。

- SK05** 調査区南部で検出した長さ80cm、幅30cm、深さ15cmを測る長方形の土坑である。断面形は袋状で、灰褐色細砂が堆積していた。埋土からは須恵器・土師器が出土した。
- SK06** 調査区中央で検出した長さ50cm、幅40cm、深さ20cmを測る楕円形の土坑である。断面形は楕円形で、灰褐色シルト質細砂が堆積する。埋土からは須恵器・土師器が出土した。
- SK07** 調査区北部で検出した直径約2.0m、深さ20cmを測る円形と考えられる土坑である。断面形は皿形で、上層では暗灰色シルト、下層では灰色シルト質細砂～細砂が堆積する。埋土からは須恵器・土師器が出土した。
- SK08** 調査区北西隅で検出した幅1.1m、深さ25cmの土坑である。断面形は皿形で、淡灰褐色細砂が堆積する。埋土からは須恵器・土師器が出土した。
- SK11** 調査区中央部で検出した長さ80cm、幅60cm、深さ75cmを測る不整形な土坑である。SK01により南側が削平されていた。断面形はU字形で、3層に分かれ。上層は灰褐色粗砂、中層は灰褐色粗砂（黄灰色・茶灰色粘質土混じる）、下層は灰色シルト質極細砂（黄灰色・茶灰色粘質土が混じる）が堆積する。埋土からは土師器・須恵器が出土した。
- SK12** 調査区南部で検出したS X02の内部で検出された最大幅2.0m、深さ60cmを測る土坑である。断面形は箱形で、茶灰色系のシルト質細砂などが堆積する。断面観察からS X02より古いものと考えられる。埋土からは須恵器・土師器が出土した。
- 落ち込み遺構** 調査区南西部で検出した検出長約6.0m、幅5.5m、深さ20～40cmの不整形な落ち込みである。底面はほぼ平らであるが、中央部がやや周りと比べ凹む。埋土は灰色系のシルトや細砂などで、さらに底面にはテニスボール大から人頭大の礫をまとめて検出した。遺物は土師器・須恵器・瓦質の羽釜などが出土した。
- 溝** 溝は調査区中央で3条検出したが、いずれも深さ10cm足らずである。
- ピット** 30基あまりを検出したが、建物を復元できるようなものはなかった。規模は直径20cm前後、深さ10～40cmのものが多く、中には深さ60cm程度のものまで検出した。



fig. 232 3次-2 2区全景



fig. 233 3次-2 1区全景

- 3次-2-1区** 検出した遺構は、室町時代と考えられる溝1条、土坑12基、井戸3基である。
- 土坑** 調査地中央で検出した長径2.5m、短径2.0m、深さ20cmを測る楕円形の土坑である。
- SK02** 断面形は皿形をしており、上層には淡灰色シルト質細砂が堆積し、下層には礫混じりの灰色細砂～シルト質細砂が堆積する。埋土からは須恵器・土師器・骨片などが出土した。
- SK03** 調査地南部で検出した長さ2.5m、幅1.1m、深さ40cmを測る長方形の土坑である。断

面形は箱形で、上層は淡茶灰色極細砂、下層は淡茶灰色極細砂が堆積する。埋土からは須恵器・土師器が出土した。

SK04 調査区南部で検出した長径1.1m、短径80cm、深さ15cmの椭円形の土坑である。断面形は皿形で、灰茶色細砂が堆積する。埋土からは須恵器・土師器が出土した。

SK08 調査区北部で検出した長さ1.7m、幅1m、深さ8cmを測る不整円形の土坑である。茶灰色細砂が堆積する。埋土からは須恵器・土師器が出土した。

SK09 調査区南部で検出した直径1.3m、深さ約10cmの半円形の土坑である。断面形は皿形で、上層には灰茶色シルト質極細砂、中層には黄灰色粘質土、下層には茶灰色シルト質極細砂が堆積していた。

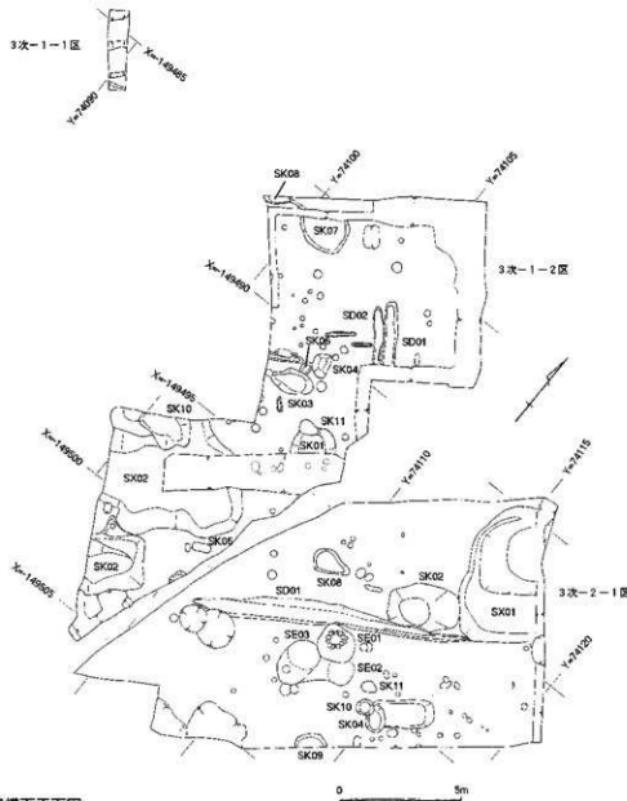


fig. 234 遺構面平面図

SK10 調査区南部で検出した直径70cm、深さ約10cmの円形の土坑である。断面形は浅い皿形で、茶灰色疊混じり砂質土が堆積する。埋土からは須恵器・土師器が出土した。

落ち込み遺構

SX01

調査区北東部で検出した検出長約5.2m、幅約3.5m、深さ約60cmを測る不整形な土坑である。北部は比較的急角度に落ち込み、底面では平らな面をもつ。南側では緩く立ち上がり、テラス状の底面を形成した後、なだらかに立ち上がる。断面観察により、北側は南側の堆積上を切り込んで堆積しており、再掘削された可能性がある。また、北側には東側に面を向けるように20cm大の礫が並べられたような状態で検出された。一方、南側でも5~10cm程度の礫が底面に散乱した状態で検出しており、礫に混じって土器・須恵器・羽釜片が出土した。

溝

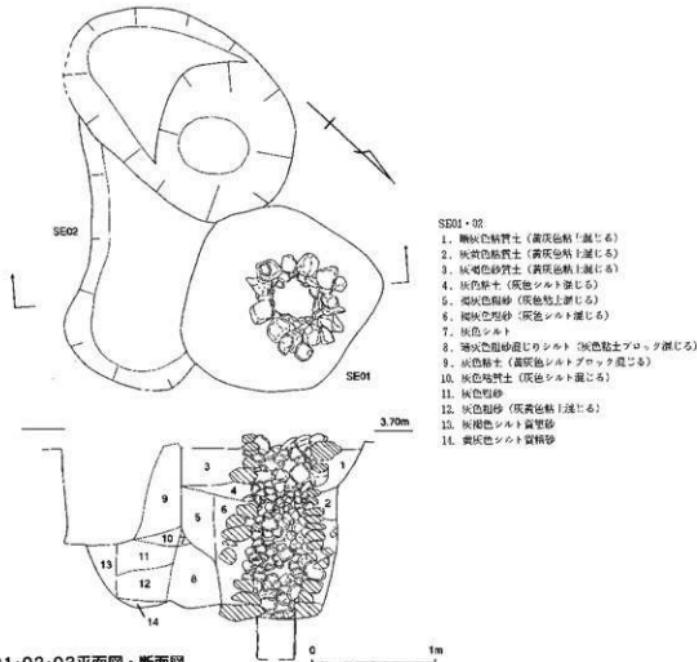
SD01

調査区中央を横切るように検出された検出長約11.0m、幅0.3~1.0m、深さ10~15cmを測る直線的な溝である。少量の土器と共にゴルフボール大の礫が多量に出土した。

井戸

SE01

調査区中央で検出した石積みの井戸である。石積み内部は直径40cm、深さ1.8m、掘形は直径1.5mを測る。石積みは自然石を高さ1.5mまで積み上げ、基底には他のものと比べ大振りな石を使用していた。石積みの下には幅30cm、高さ約30cmの曲物を据え置いていた。井戸内部からは土器皿や須恵器・陶器などが出土した。中層から出土した陶器皿は白色の釉薬が内面に施されている。その釉は均一ではなく生地が所々に見える。また、高台は低く、断面形は台形、高台と休部の接合部分は、一段低くヘラで削られたようになっている。高台の感じから、15世紀の古瀬戸と考えられる。



- SE02** 調査区中央で検出した直徑80cm以上、深さ1.3mの素掘りの井戸である。S E01に北側が一部切り合い削平される。上層では拳大から人頭大の礫が比較的多く出土しており、石積みであったことが予想される。下層では幅45cm、高さ40cmの曲物状の木質が検出された。埋土からは土師器・須恵器が出土した。
- SE03** 調査区中央で検出された長径2.1m、幅1.4m、深さ2.2mの井戸である。上層では拳大から人頭大の礫が大量に投棄されたような状態で検出された。中層から下層については、人頭大ほどの礫が比較的まとまって出土しており、石組みの井戸であったことが予想される。埋土からは、須恵器・土師器・陶器が出土した。



fig. 236 SE01完掘状況



fig. 237 SE01断ち割り断面

北部の調査

- 3次-1-3区** 検出された遺構はピット2基、落ち込み1基である。遺構面上には厚さ5~10cmの遺物包含層が堆積し、奈良から平安時代の須恵器・土師器が出土した。
- 溝** 調査区中央から南部で検出された検出長9.0m、幅1.3m、深さ10cmの深い溝である。褐色粗砂、淡灰黃色粗砂混じりシルト質極細砂が堆積していた。埋土からは須恵器・土師器が出土した。

3次-2-2区 第2次調査1・2区と一部重複する。2次調査では、掘立柱建物・柱穴などが検出されており、周辺に建物がまとめて検出されることが予想された。

検出した遺構は、平安時代末から鎌倉時代前半の掘立柱建物3棟、柵列3条、井戸5基、木棺墓1基、土坑墓1基、土坑2基、溝2条、落ち込み1基である。

- 掘立柱建物**
- SB01** 調査区中央で検出した2×1間以上の掘立柱建物である。柱穴は直徑30cm、深さ20~40cm、柱間は約2.0mを測る。建物の方向は磁北から大きく西に振る。埋土からは土師器・須恵器が出土した。
- SB02** 調査区中央で検出した3×2間の掘立柱建物である。柱穴は直徑20~50cm、深さ20~30cm、柱間は2.2mを測る。建物の方向は磁北からやや西に振る。
- SB03** 調査区中央で検出した1×2間以上の掘立柱建物である。柱穴は直徑30cm、深さ15~40cm、柱間は約1.5mを測る。建物の方向はほぼ磁北と一致する。
- 柵列**
- SA01** 調査区中央で検出された4間の柵列である。柱穴は直徑20cm前後、深さ20~40cm、柱間2.1mを測る。柵の方向は磁北から大きく西側に振る。
- SA02** 調査区中央で検出された3間の柵列である。柱穴は直徑20cm前後、深さ30cm前後、柱間は2.0mを測る。柵の方向はS A01と並行する。

SA03

調査区中央で検出された2間の柵列である。柱穴は直径20cm前後、深さ15cm前後、柱間は1.8mを測る。柵の方向はS A01・02よりもやや西への振りが少ない。

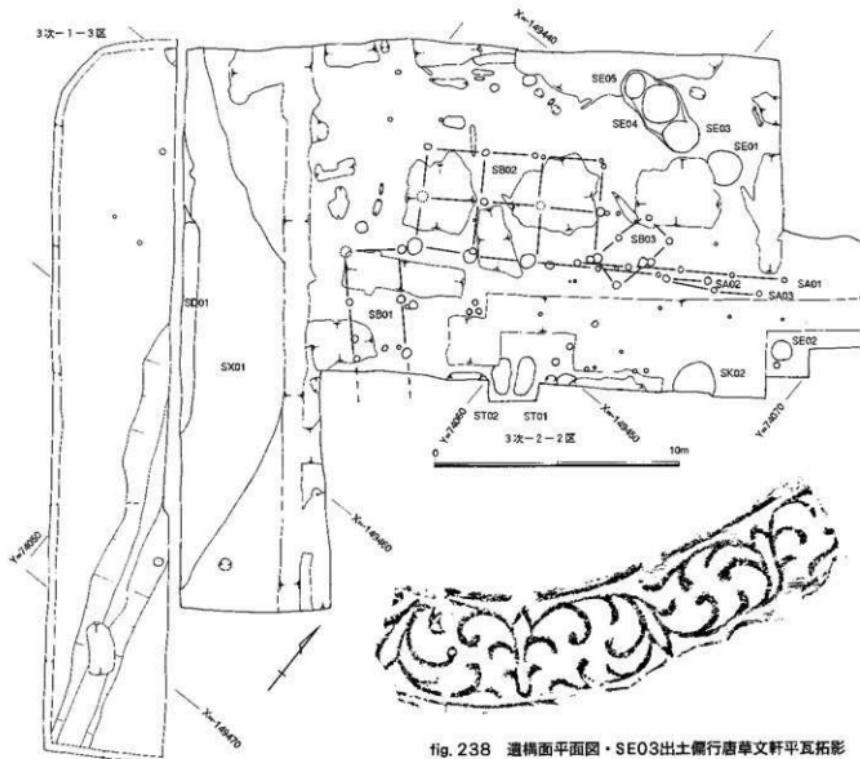


fig. 238 遺構面平面図・SE03出土偏行唐草文軒平瓦拓影

井戸**SE01**

調査区東北で検出された直徑1.5m、深さ3.2mを測る円形の素掘り井戸である。断面形は上層から中層まではやや広く、下層はやや細くなり直徑60cmの円形になる。上層から中層は、灰黒色系のシルトと灰色系のシルト質細砂が交互に、また下層では、暗灰色シルトが堆積する。中層からは土師器皿などが入った山物（直徑40cm、高さ20cm）が1点出土し、最下層では据え付けられた状態で山物（直徑40cm、高さ25cm）が1点出土した。

SE02

調査区東で検出された直徑90cm、深さ1.3mを測る円形の素掘りの井戸である。断面形は細長い台形で、底径は40cmを測る。灰褐色シルト質細砂・砂質シルトが堆積する。底に曲物は検出されなかった。埋土から上師器・須恵器が出土した。

SE03

調査区北東で検出された直徑約1.5m以上、深さ1.8mを測る円形の素掘りの井戸である。なお、SE03および後述するSE04・05は上面では切り合い関係の判別がつかず、

断ち割り調査によって、それぞれを判別した。断面形はY字形で、上層から中層は広く、下層では直径80cmを測る。中層には土器器・須恵器・瓦器が投棄されたような状況で大量に出土した。その中からは神川古窯址群のものと考えられる偏行階草文を施した軒平瓦が1点出土した。同様の瓦は西区白水遺跡で出土している。下層にはあまり遺物の出土は見られなかった。白磁は見込み部に明瞭な段をもつタイプ、須恵器は大半が、底部境界が明瞭でないものの見込みが明瞭に凹むタイプ、瓦器は高台の脚が短く外に踏ん張り、底部が下に張り出すタイプであり、概ね12世紀代に収まるものと考えられる。

SE04

調査区北東で検出された直径1.8m以上、深さ2.0mを測る円形の素掘りの井戸である。切り合ひ関係からS E03から05中でも最も新しいものと考えられる。上層は井戸棒の抜き取り跡と考えられ、灰褐色小礫混じり砂質シルトが最大幅約4mの範囲に堆積する。中層は直径1.5mを測る円形を呈する。最下層は直径約50cmの円形で、直径30cm、高さ20cmの凸物が掘え付けられていた。下層からは完形の瓦器塊・須恵器塊が各1点、上層から瓦器塊が1点出土した。

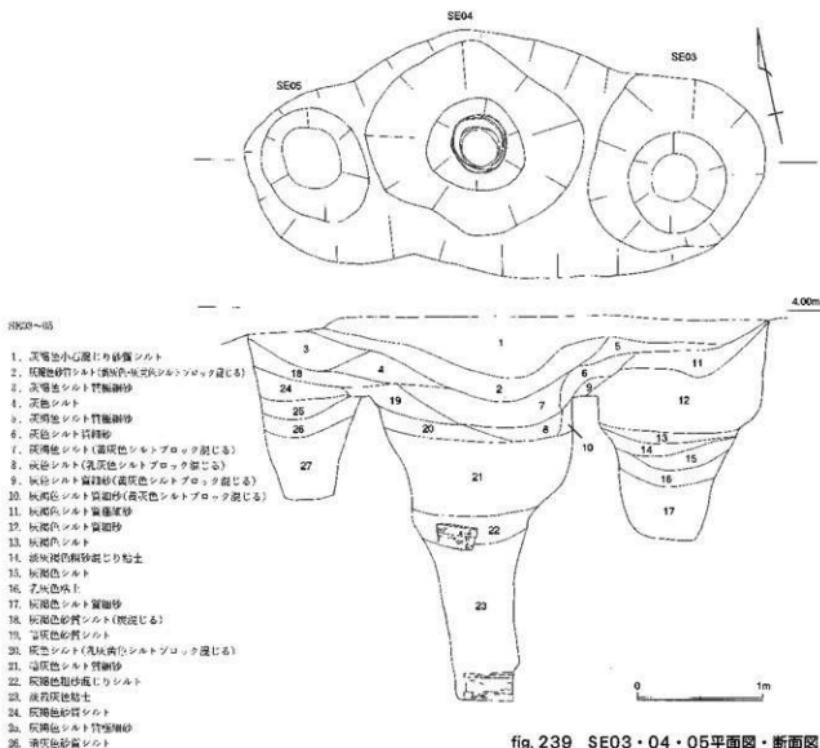


fig. 239 SE03・04・05平面図・断面図

SE05

調査区北東で検出された直径80cm以上、深さ1.4mを測る円形の素掘りの井戸である。上層はS E04によって搅乱されていた。中層には暗灰色砂質シルト～灰褐色砂質シルト、下層には灰褐色シルト質細砂（灰色・黄灰色シルト混じる）が堆積していた。下層には曲物は確認されなかった。埋土からは須恵器・土師器が出土した。



fig. 240 SE03・04・05完掘状況



fig. 241 ST01・02上層疊検出状況

木棺墓

ST01

調査区中央南端で検出された長さ1.55m、幅65cm、深さ50cmを測る木棺墓である。

上層では長さ30～40cm、幅20cm前後の縦長の石を長軸に直交させるように6個並べ、その東側に1辺20cm前後の石を置いていた。北部ではその石の直上に2個の重ねられた須恵器塊がうつぶせの状態で検出された。石を除去するとその直下に、遺存状態は悪いものの、木棺と考えられる木質が残存していた。さらにその下層には骨が一部で検出された。すべてを除去すると、頭部と考えられる北部がやや落ち込むような状況が確認できた。

ST02

調査区中央南端で検出された長さ1.45m、幅65～80cm、深さ25cmを測る土坑墓である。上層では若干の依存状況は悪いものの、ST01と同様に長さ30～40cm、幅20cm前後の縦長の石を長軸に直交させるように3個並べ置かれていた。同じく北部で須恵器塊が2個重なって検出されたが、うつぶせではなく正位置であった。これには木質は残存していないかったが、ST01同様に北部が落ち込んでいた。

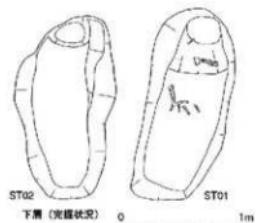
ST01・02は平行して構築されており、埋葬された人物に特別なつながりがあったものと予想される。なお、出土遺物からもほぼ同時期のものと考えられる。このような形態の墓は、須磨区行幸町遺跡で確認されている。



上層(縦検出状況)



中層(木質検出状況)



下層(充填状況)

fig. 242 ST01・02遺構平面図

土坑	調査区東部南端で検出された直径1.7m、深さ約40cmの円形の上坑である。
SK01	断面形はレンズ形で、灰褐色粗砂混じりシルト質極細砂～砂質シルトが堆積していた。埋土からは土師器・須恵器が出上した。
SK02	調査区中央南端で検出された検出長50cmの土坑である。南部は擾乱により削平を受けていたため、全体の規模は不明である。暗灰褐色砂質シルトが堆積し、須恵器・土師器が出上した。
落ち込み	調査区西部で検出された検出長22.0m、幅4.0m以上、深さ10～30cmを測る大きな落ち込みである。埋土は暗灰色粗砂混じりシルト～シルト質極細砂、西側のやや深い部分では、その直下に灰褐色粗砂が堆積していた。南部で弥生時代後期の斐形土器が1点完形で出土した。
SX01	今回の調査では、平安時代末から鎌倉時代初頭・室町時代の遺構・遺物を検出した。主に平安時代末～鎌倉時代前半の遺構は北部、室町時代の遺構は南部に集中しており、時期ごとの居住域の変遷をたどることができる。
まとめ	北部については、第2次調査の成果と合わせると、複数の建物が存在し、それに伴うと考えられる井戸も存在し、屋敷地の一部を検出したものと考えられる。 2次調査の北部で建物と並行するように溝が設けられており、区画溝と考えられるが、他に対応する溝などは検出されていない。しかし西部では奈良時代以降湿地状の地形であったと考えられ、それが建物域の境界になっていた可能性が高い。 3次調査SB02の南には木棺墓・土坑墓が並んで検出されており、その状況から屋敷地と考えられる。同様のものは、神戸市内で100基程度確認されており、近隣では二葉町遺跡・大橋町遺跡などで検出されている。今回検出された墓内からは、それぞれ須恵器塊を確認しているのみで、二葉町遺跡のように白磁碗等の供獻遺物は確認されていない。ただし、ST01は木棺の上に人頭大の礫を組み合わせるように配置している。比較的手の込んだ埋葬方法であり、被葬者がこの屋敷に係わる重要な人物であったと推測される。 SB02に隣接する井戸SE03からは、神出古窯跡群で製造されたと考えられる軒平瓦・平瓦などが出土しており、同時期に瓦葺の建物が存在したものと推測される。なお、神出古窯跡群の瓦については、当時（院政期：11～13世紀）の最高権力者たる上皇との強い結びつきが以前から指摘されており、当遺跡を考える上で貴重な資料といえる。 一方、南部については、ピットなどが確認されており、掘立柱建物が存在したものと考えられる。特に南端部分は、SE01をはじめ井戸やピットなど遺構が比較的密に検出されており、すぐ北側で検出した溝SD01が区画溝と考えると、その周辺が屋敷地であったものと推測される。3次調査で検出したSX01・02などは比較的大規模な上坑で、特にSX01については、護岸状に礫を配石している状況が確認されており、池状の施設であった可能性が考えられる。 最後に第1次調査で確認した奈良時代の遺構については、2・3次調査では明確な遺構は確認していない。ただし、3次調査西側の湿地状の堆積からは、奈良時代の遺物が比較的多く出土しており同時期の遺構が存在した可能性は高いが、奈良時代の居住域の中心は、やはり第1次調査地周辺であったと考えられる。

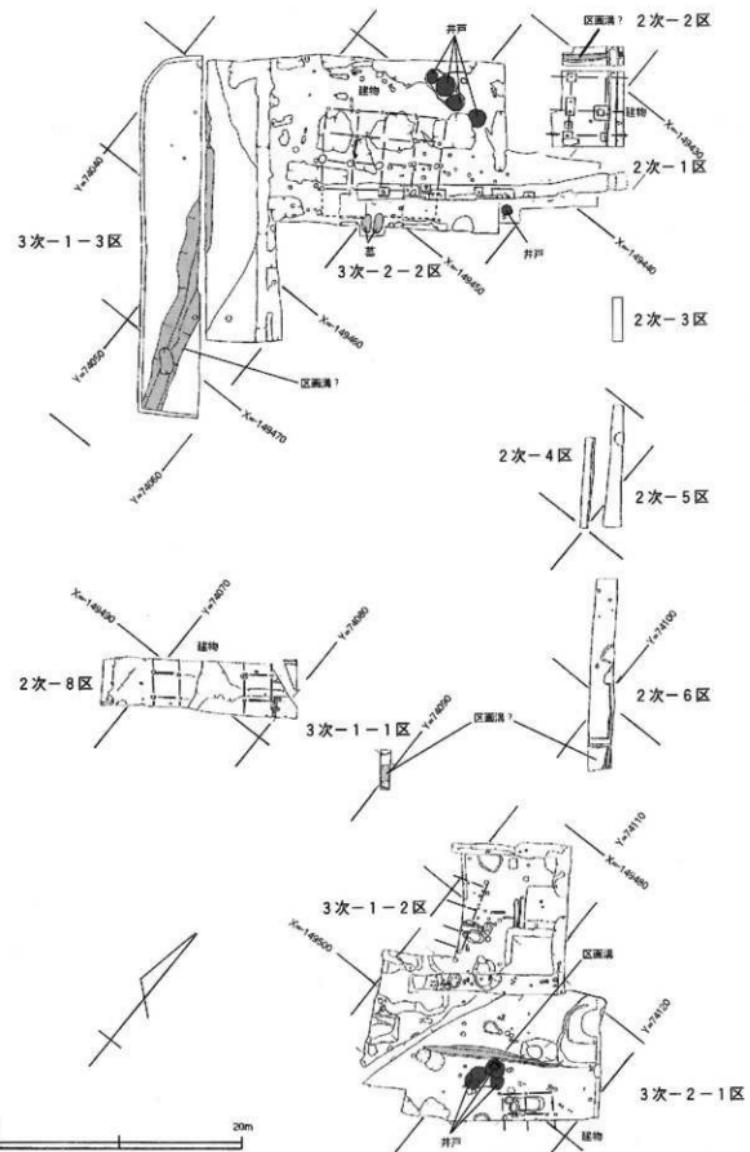


fig. 243 第2・3次調査区合成図

31. 戍町遺跡 第63次調査

戎町遺跡は、妙法寺川により形成された扇状地の末端部に位置している。昭和62年に第1次調査が行われ、弥生時代前期の水田が発見された事に始まる遺跡である。

現在までの調査結果から、戎町遺跡は縄文時代晚期～中世までの幅広い時期に生活が営まれた遺跡である事実が判っており、西垣平野西端の根占集落の一つと考えられている。



fig. 244 戻町遺跡
調査地位置図

今回の調査は共同住宅の建設に伴うものである。その基礎により搅乱される範囲と深さに限り調査を実施している。

基本層序

基本層序は、搅乱、盛土、近代～現代耕作土、旧耕作土、黃褐色砂質土（床土）、灰色砂質土（旧表土もしくは中世以降の耕作土）、淡黃灰色シルト混じり砂質土、黃褐色細砂と粗砂の互層（弥生時代旧河道）、灰色砂礫（弥生時代旧河道）、暗灰色シルト（弥生時代旧河道）と堆積している。

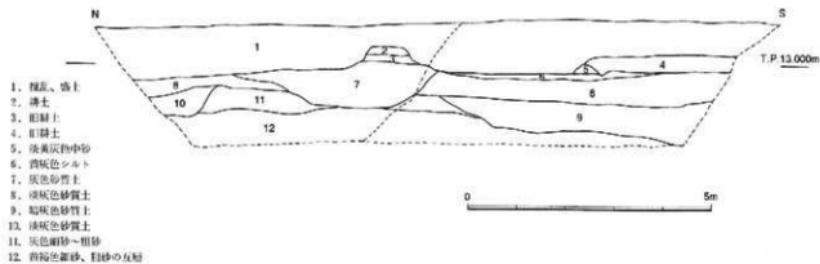


fig. 245 土層断面図

遺構と遺物

確実な遺構は確認していない。弥生時代中期～後期の遺物が出土する旧河道と、その旧河道の上面から存在する時期不明の落ち込みを確認している。

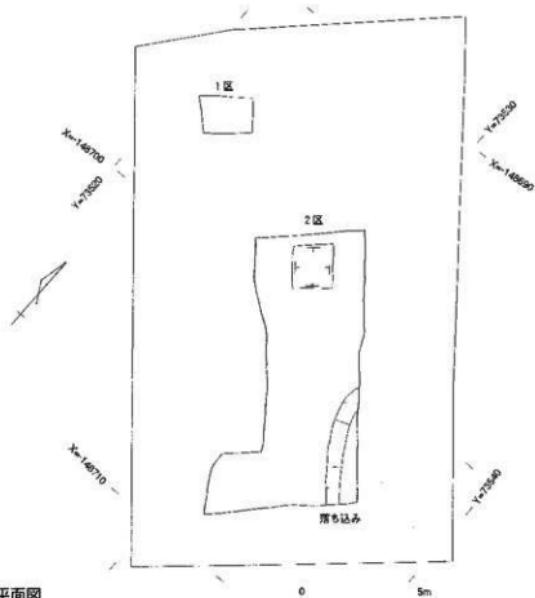


fig. 246 遺構面平面図

落ち込み

東西幅約1.35m以上×南北幅約4.5m以上で、深さ約65cmを測る落ち込みである。暗灰色砂質土に堆積し、遺物は出土していない。

弥生時代旧河道の上面を遺構面としている。

旧河道

調査区全体で検出している。旧河道の肩は確認できず、調査区すべてが旧河道内に存在している様である。工事の影響深度の関係で、旧河道の底面までは掘削していない。堆積土層から弥生時代中期～後期までの遺物が出土している。

まとめ

今回の調査では、弥生時代中期～後期の旧河道を確認している。調査区内ではこの旧河道の肩が確認できず、調査区すべてが旧河道内に位置する事が理解できる。この事実から、旧河道の本流内を調査した可能性が高い。工事の影響深度の関係で、T.P.11.3mまでの調査で終了し、旧河道の底面は確認していない。

また旧河道の埋没後に、その上面から切り込む落ち込みも確認している。遺物は確認できず、時期は不明である。ただし、落ち込みの上には中世以降の可能性が高い耕作土層かもしくは土壤化層と考えられる土層で覆われており、落ち込みも中世以降のものである可能性が高い。

32. 大田町遺跡 第13次調査

大田町遺跡は、妙法寺川流域の沖積地上に営まれた遺跡である。

時期的には、弥生時代前期～中期、古墳時代後期、奈良時代～平安時代を主とする集落が確認されている。特に奈良時代～平安時代にかけては、遺物では「荒田郡」の銘が認められる陶器や、多量の綠釉陶器、灰釉陶器等の出土、遺構では規模が大きく掘形が方形の柱穴による掘立柱建物の検出等から類推できる官衙的性格から、「須磨駅家」の存在も推定されている。

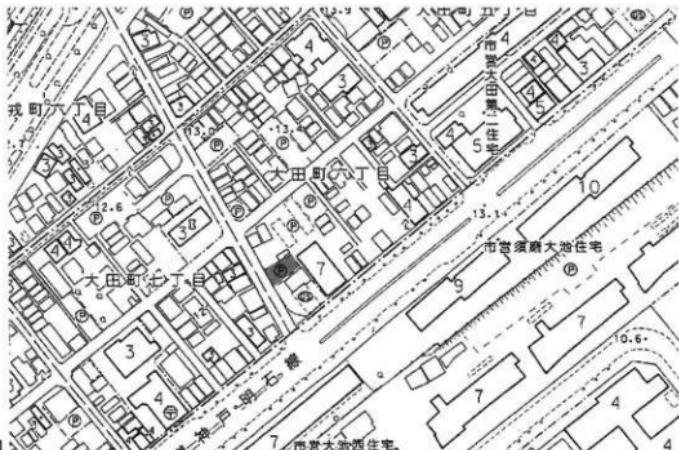


fig. 247 大田町遺跡
調査地位置図

今回は商業ビルの建設に伴い、その基礎により搅乱される部分について、発掘調査を実施している。

基本層序

基本層序は、搅乱、盛上、旧耕土、淡黄灰褐色砂質土（中世遺物包含層、中世耕土層と考えられる）、暗灰色シルト混じり砂質土（上面が第1遺構面となる、奈良時代～平安時代遺物包含層）、暗灰色砂質土（第2遺構面土壤化層）、淡黄褐色砂質土（上面が第2遺構面となる）、灰色砂混じりシルト（弥生時代～古墳時代後期遺物包含層）、淡黄灰色シルト（上面が第3遺構面となる）と堆積している。

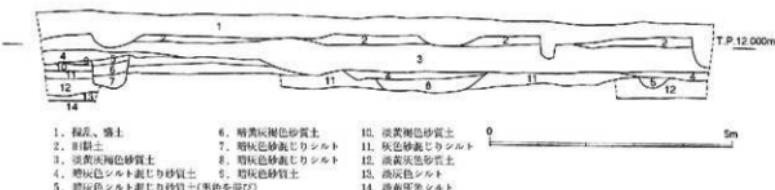


fig. 248 土層断面図

遺構と遺物

遺構は、第1遺構面から鎌倉時代頃の鋤溝、近世の柱穴等を確認し、第2遺構面から奈良時代の柱穴（方形の掘形の柱穴を含む）、土坑、溝等を確認している。第3遺構面となる弥生時代～古墳時代後期の遺構面からは、遺構が確認できなかった。

遺物は、3層の包含層から鎌倉時代頃の須恵器と土師器、古墳時代後期と奈良時代～平安時代の須恵器、土師器等、また弥生土器も確認している。

第1遺構面

近世の柱穴と時期不明の柱穴の他、中世の鋤溝を確認している。鋤溝は、出土した須恵器と土師器の時期から、鎌倉時代頃の範疇に収まる様である。

また、阪神淡路大震災に伴うと考えられる地滑り痕も確認している。

SP101

調査区の東半で確認した。直径約30cmで深さ約27cmを測る、円形の柱穴である。第2遺構面で検出したが、

fig. 249 第1遺構面地滑り痕

時期不明の土師器と共に仏像の土人形が出土した、近世の柱穴と考えられる。

鋤溝

座標北から西へ約40°、西へ振る方向へ延びている。幅約10cm～15cmで深さ約3cm～7cmを測り、灰褐色砂質土が堆積している。鎌倉時代頃の須恵器と土師器が、細かな破片で出土している。

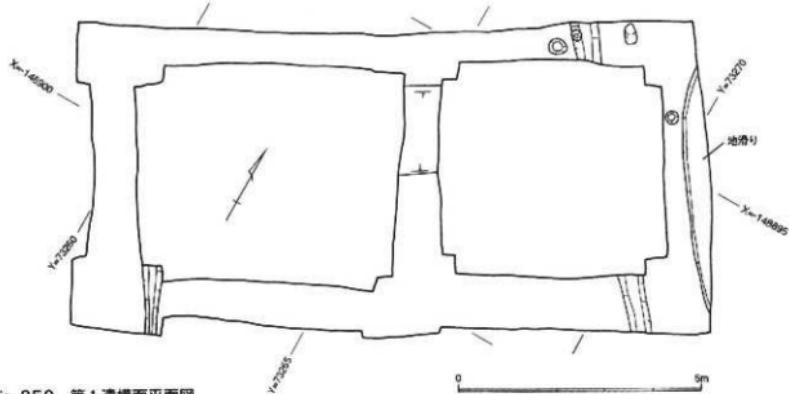


fig. 250 第1遺構面平面図

第2遺構面

奈良時代～平安時代の遺構面である。主として奈良時代の範疇に収まる柱穴、土坑の他、平安時代後期の溝を確認している。

SD201

調査区の中央付近で確認した。幅約140cmで深さ約34cmを測り、南北方向に延びる溝である。暗灰色砂混じりシルト～中砂が堆積し、大礫が多数投棄されている。奈良時代～平安時代頃の多量の須恵器と土師器に混じり、最も新しい遺物で平安時代後期頃の瓦器塊が破片で出土している。



fig. 251 第2遺構面SD201

SP201

調査区の東半で確認した。直径約30cmで深さ約28cmを測る、円形の柱穴である。柱痕は直径約20cmを測る。奈良時代の須恵器と土師器が、細かな破片で出土している。

SP203

調査区の東半で確認した。直径約40cmで深さ約50cmを測る、円形の柱穴である。柱痕は径約25cmを測る。細かな破片ばかりであり詳細な時期は不明であるが、奈良時代～平安時代頃と考えられる須恵器と土師器が出土している。

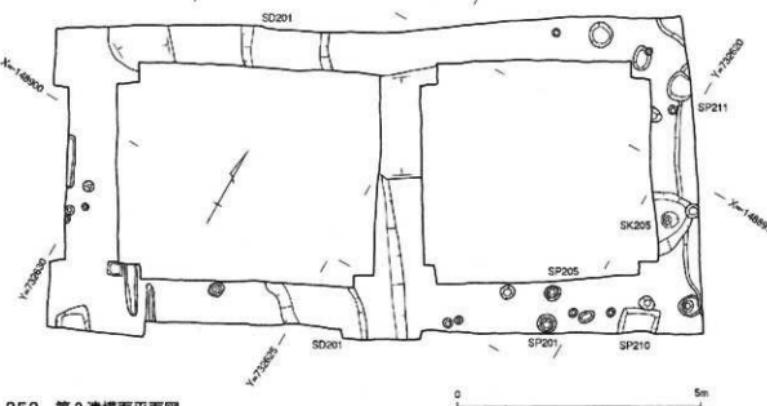


fig. 252 第2遺構面平面図

SP208

調査区の西半で確認した。直径約18cmで深さ約22cmを測る、円形の柱穴である。奈良時代の須恵器と土師器が細かな破片で出土している。

SP209

調査区の西半で確認した。直径約22cmで深さ約10cmを測る、円形の柱穴である。奈良時代の須恵器塊が破片で出土している。

SP210

調査区の東半で確認した。東西約80cm×南北約50cm以上で、深さ約58cmを測る方形の

- 柱穴である。奈良時代の須恵器と土師器が、細かな破片で出土している。また、土錐も出土している。
- SP211 調査区の東半で確認した。直径約60cmで深さ約13cmを測る、円形の柱穴である。遺物は出土していない。
- SP212 調査区の東半で確認した。直径が東西約38cm×南北約46cmで深さ約34cmを測る、不整円形の柱穴である。時期不明の須恵器と土師器が細かな破片で出土している。
- SP213 調査区の東半で確認した。直径約50cmで深さ約7cmを測る、円形の柱穴である。時期不明の須恵器と土師器が細かな破片で出土している。
- SK204 調査区の東半で確認した。直径東西約80cm以上×南北約44cm以上で深さ約41cmを測る土坑である。時期不明の須恵器が細かな破片で出土している。あるいは規模の大きな柱穴である可能性も考えられる。
- SK205 調査区の東半で確認した。直径東西約80cm以上×南北約130cmで、深さ約72cmを測る、不整円形の土坑である。奈良時代の須恵器と土師器が出土している。遺構の底部に柱痕らしき痕跡も存在し、あるいは規模の大きな柱穴の可能性も考えられる。
- SK206 調査区の西半で確認した。東西約62cm×南北58cm以上で、深さ約14cmを測る方形の土坑である。奈良時代の須恵器と土師器が細かな破片で出土している。あるいは方形の柱穴である可能性も考えられる。

まとめ

今回の調査では、第1造構面で鎌倉時代頃の動溝を作り集落の生産域と、第2造構面で奈良時代～平安時代の集落の居住域を確認している。

第2造構面の調査では、柱穴群を確認している。時期の判断できる遺物を出土した柱穴はすべて奈良時代の範疇に収まり、平安時代に降る遺物は出土していない。ただし、時期不明の遺物しか出土しない柱穴や、遺物を出土しない柱穴も存在する。

この柱穴群には方形の掘形の柱穴を含み、土坑として報告した遺構も規模の大きな柱穴である可能性が高く考えられる。またSP211、212、213は、座標北から西へ約88°振る方向に一列に並んでいる。これまでの調査で検出した官衙的性格を持つとされる掘立柱建物群とも同一の方位で並んでおり、柵列か建物を構成する可能性が考えられる。

溝はSD201が確認されている。平安後期頃の瓦器塊の破片が出土しており、柱穴群と比べて時期が新しいようである。

今回の調査地に隣接した調査では、官衙的性格を有する遺構と遺物が出土しており、今回検出した遺構についても、それらに関連した遺構と考えられる。

33. 太山寺遺跡 第13次調査

太山寺遺跡は、天台宗三身山太山寺の現伽藍周辺の段丘上に立地する遺跡である。太山寺の創立については諸説あるが、平安時代後葉、12世紀初頭とするのが一般的とされる。現存する本堂は鎌倉時代の遺構として国宝に指定されており、その他にも太山寺文書と呼ばれる文書類などの重要文化財を有し、神戸市内でも有数の古刹である。往時には多くの子院、塔頭が存在したことが付近の字名から窺われる。これまでに阪神高速北神戸線建設事業や子院の建て替えなどに伴う発掘調査が行われ、中世～近世の遺構・遺物が確認されている。



fig. 253 太山寺遺跡
調査位置図
(S = 1 : 5,000)

今回の調査地は、太山寺本堂より約200m南西の伊川により形成された河岸段丘端部に立地しており、伊川が南西方向に流下していたものが大きく北へと蛇行し、流れを大きく変える地点にあたる。護岸改修工事により削り取られる範囲について調査を実施した。

調査の概要

調査は現耕土層、旧耕土層、床上を重機により除去し、それ以下を人力により掘削し、遺構・遺物の確認作業を行った。西側半分では旧耕土層下に複数の砂礫層が斜め堆積している。これらは洪水により堆積した砂礫層や礫混じりの土を繰り返し盛ったものと考えられ、近世以降の耕地化に伴う堆積と考えられる。近世以降の盛土層については再度、重機による掘削を行い、地表面を検出して精査を繰り返したが、明確な遺構は確認されなかった。基盤層となるのは淡灰黄色極細砂層で、径1mを超す花崗岩の露呈もみられる。

調査区の中央では段落ちとなり、この部分の東側の一部には中世末の遺物を含む灰褐色極細砂層の堆積が認められる。調査区の東端では耕土・床土の直下で褐色砂礫層の地表面となり、調査区内の旧地形は東から西へ傾斜する。高低差は約30cmである。調査区の東半では大型の土坑1基、その他土坑4基、落ち込み1基を検出した。

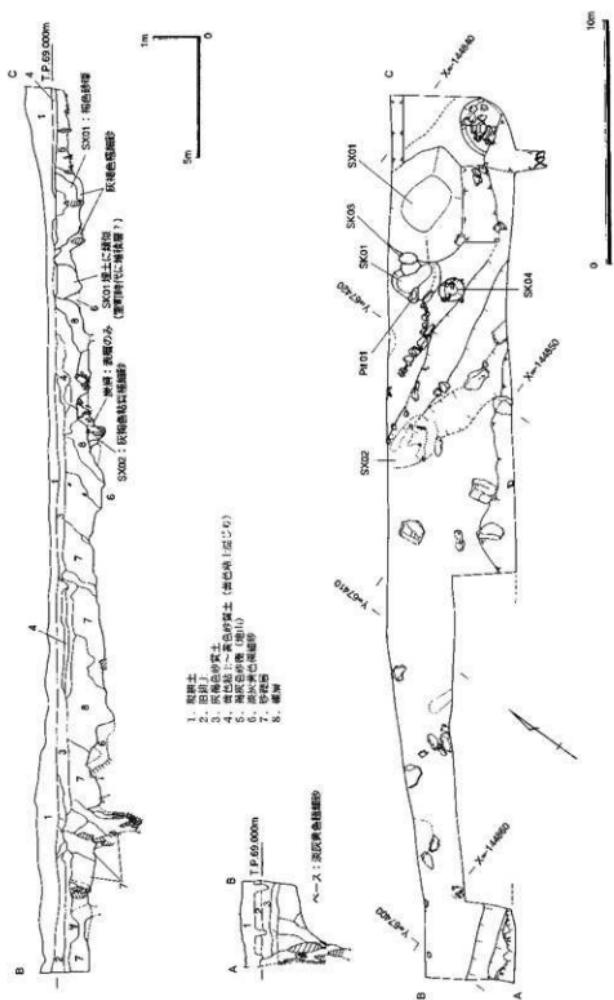


fig. 254 遺構面平面図・断面図

- SX01** 一辺約4m、中段までの深さ約30cm、最深部は40cmである。中段までに人頭大の石を中心にそれ以上の大きさの岩を含めた多くの岩が詰められる。岩を覆うように灰褐色砂質土の堆積があるが、岩の隙間に土の堆積はほとんど見られない。上層から瓦片が出土した以外に遺物の出土はなく、層位的に近世の遺構と考えられるが、詳細は不明である。
- SX02** 調査区の中央で段落ちが形成される。幅4~4.5m、深さ約30cmで、最も西側の溝状となった深い部分に炭の分布があり、基盤層上にも被熱の痕跡が認められる。この部分からは瓦片のほか、近世の染付片が出土した。落ち際に石が並ぶような状況が認められるが、意図的な配石かどうかは判然としない。ここを境に礫混じりの粘質土や砂礫層が堆積し、上面に黄色の粘土層を貼り付けた状況が認められる。近世以降、西側へ耕作地が拡張された様子がみられる。
- SK01** 長径約2m、短径約1.5m、深さ約20cmの平面稍円形の土坑で、埋土は褐色の砂質土である。埋土中から15世紀代のものと考えられる土器器類が出土している。土坑の東側に径80cmの礫の詰まった土坑が、また西肩部にも礫の入った径約50cm、深さ10cmの柱穴状の空洞（Pit01）があるが、一連のものであるかは判断できなかった。

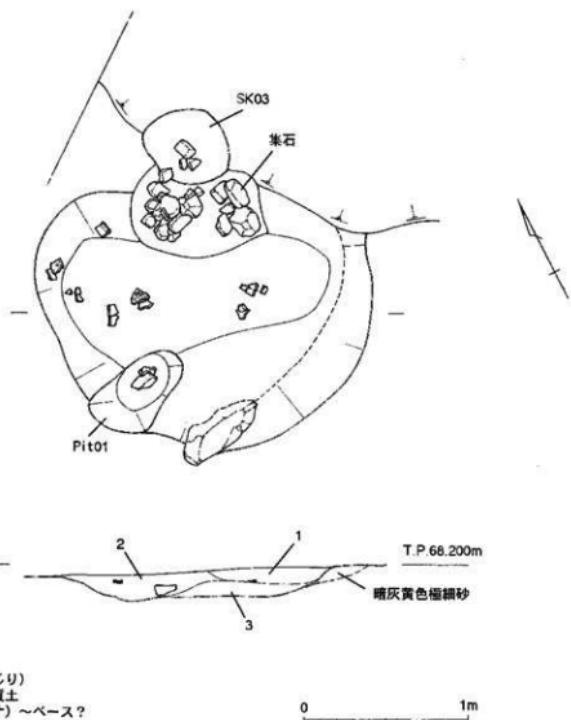


fig. 255 SK01遺構平面図・断面図

SK02

調査区の東端で検出した径2~2.5mの平面椭円形を呈する土坑である。埋土最上層の灰色シルト層から15世紀代と考えられる土師器の鍋片が多く出土し、その直下から加工痕のある一辺約60cmの柱状の石を1点含む多くの人頭大以上の大きさの岩が出土した。土坑としたが、底部については判然とせず、下層にはさらに小礫や灰色の粘質土の堆積が続く。現在の伊川の護岸石垣により削られているため明らかでないが、下層の堆積層からは古墳時代の遺物が出土している。段丘端部の堆積層の可能性も考えられる。

SK03

長径約70cm、短径約50cmの平面椭円形の土坑である。炭層の單一埋土で、遺物は出土していない。S X01の検出時より一部で炭が露呈しており、S X01よりも新しい時期の遺構とも考えられる。

SK04

径約1m、深さ約15cmの平面円形の土坑である。拳大の礫を多く含むが、遺物は出土していない。S K03と同様、上部に炭の混入が認められ、対（あるいは組み）になる遺構の可能性がある。

まとめ

今回の調査では中世末及び近世の遺構・遺物が確認され、段丘端部にも遺構の存在することが確認された。近世以降には氾濫などにより堆積した砂礫層を均す、また盛土を行うなどして耕作地を拡張した状況が認められる。現在の地形の形状も近世以降の耕作地造成に際し、大きく改変されている可能性が高いものと判断され、今後、周辺での調査が進めば、旧地形の復元が可能と思われる。

また旧耕土層からは平安時代後期の遺物が出土し、旧の伊川護岸石垣の裏込め土からは古墳時代後期と考えられる須恵器が出土している。周辺にさらに古い時代の遺構・遺物が存在する可能性を示唆するものと言えよう。



fig. 256 調査区全景

34. 伊川谷町潤和 所在確認調査

今回、計画された土地区画整理事業地は西区伊川谷町潤和字横尾他の山林を中心とするものである。事業地面積は115,503.9m²で、同地は現在、周知の埋蔵文化財包蔵地には登録されていないが、事業地が所在する丘陵は、古墳時代前期から後期の天王山古墳群に続く尾根筋に当たる。また、谷を一筋隔てた南側に対面する丘陵上には、古墳時代前期の前方後円墳である白水瓢塚古墳（兵庫県指定史跡）があり、事業地の西端に接し弥生時代後半から末期に相当する馬掛原遺跡が存在しており、同事業地内に埋蔵文化財が存在する可能性があり、開発事前審査に基づき当地の分布調査を実施した。

事業地の山林は昭和の前半期に山林利用の造成が行なわれ、旧地形の改変が所々で行なわれた形跡があり、踏査では埋蔵文化財の所在を確認することが困難であるため埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査を実施することとなった。



fig. 257 潤和所在確認調査地位置図 (S = 1 : 5,000)

調査概要

調査区設定

今回の所在確認調査は、事業地丘陵の最高所（標高68.63m）から東西に伸びる尾根筋上について実施した。同地は、主幹尾根であり、旧地形を最も良く残している地点である。まず、この調査地点において埋蔵文化財の所在について調査を実施し、今後の敷地内の調査について検討していくこととした。

調査は、幅1.5mの確認調査用のトレンチを、尾根上に貫くように東西に設定し、丘陵最高所においては、直交する南北トレンチを設定した。調査は、便宜上丘陵最高所以西を1区とし、最高所及びその以東を2区とした。

基本土層

調査地1区の現地表面から遺構が検出された地表面（遺構面）までの基本土層は、地表面から5cm～10cm前後までが腐植土であり、その下層に厚さ5cm～30cm程度の造成盛土

が存在する。後世の造成のためか遺物包含層は存在しなかった。1区では、埋蔵文化財が確認されたが、遺構・遺物が検出された面は現地表面下、10cm～22cmにある。

調査地東半部の2区では、1区で確認された造成土が確認されず、地表面下約10cm～20cm以下ですぐに地山となる。以下、区別に調査状況を報告する。

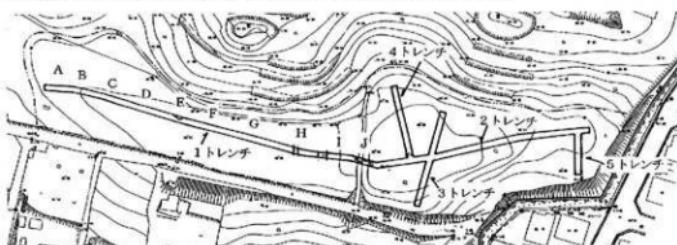


fig. 258 レンチ配置図

1区

調査地の丘陵最高所以西の尾根上に設定した東西長約100m、幅1.5mの1トレーナーを設定した。調査地の上層の状況を観察し、埋蔵文化財の有無を確認した。その結果、埋蔵文化財が確認された。

1区東端のJ地点では溝や上坑が確認されたが、出土品がなく詳細な時期は不明である。H地点は、幅約9mの間で落込みが確認され、弥生土器と考えられる土器片が数点出土した。また、落込みの底が火を受け赤く変色した部分があった。F地点では、焼けた円錐が出土し、E地点では落込みを確認し、その内側に幅15cmの溝が巡り、弥生時代中期後半と考えられる上器片が数点出土した。

2区

調査地の丘陵最高所及びその以東の尾根上に東西方向の2トレーナーを設定し、これから派生する南北方向の3～5トレーナーを設定した。その結果、腐植土の下層すぐで地山が確認され、埋蔵文化財は確認されなかった。

丘陵最高所は、現状では2区の中では最も尾根上の面積が広く見えるが、3～5トレーナーで確認したところ、地山を削り、斜面に盛土をして平坦な面を造り出しており、本来の尾根はもっと細く、南面・北面の斜面も急な傾斜地となっていたことが窺える。

まとめ

今回の調査地は、事業地内的一部分に過ぎないが調査区を設定した範囲の1区で、埋蔵文化財が確認された。今回の調査をもって周知の埋蔵文化財（遺跡）として登録し、潤和横尾遺跡とした。

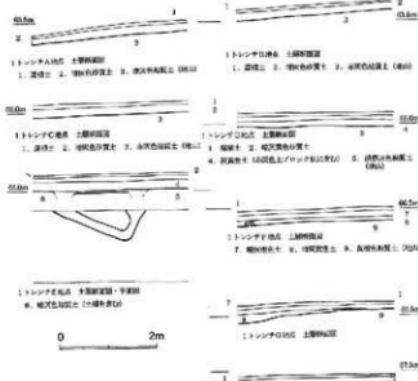


fig. 259 土壠断面図

35. 新方遺跡 第46次調査

新方遺跡は、明石川とその支流である伊川の合流する北側に広がる広範な遺跡である。両河川によって形成された沖積地上に弥生時代から近世に至る遺構が、東西1.5km、南北2kmの範囲で確認されており、明石川の下流域では最大級の規模の遺跡であると想定される。当遺跡で発掘調査が初めて実施されたのは昭和45年度に通り、現在までに15回の調査成果が積み重ねられ、その実態を窺い知ることができるようになってきている。特に、市指定文化財となった弥生時代前期の人骨や古墳時代の玉作り集落などが調査成果として注目される。

弥生時代では、野手西方地点で前期初めからの集落形成が認められ、中期になると遺跡の規模は急激に拡大し、明石川下流域で拠点的な集落となる。



fig. 260 新方遺跡調査位置図 (S = 1 : 5,000)

調査概要

調査は計画建物基礎の工事影響範囲の形状で調査を行った。

基本層序

調査地の基本的な層序は、現地表面（標高13.5m程度）から90cmから1m前後が盛土、耕作土、床土、その下層に厚さ10~20cm程度の平安時代後期の須恵器片を含む暗灰茶色砂質土があるが（上面の標高12.2m前後）、調査地の北辺（A-1・B-1）と南西隅（A-5）で検出した。

平安時代後期の遺物包含層の下層には、洪水砂と考えられる平安時代後期の遺物を含む砂やシルトが25~40cmの厚さで堆積している（上面の標高12.1m、下面の標高11.7m）。この下層で厚さ30cm程度の黒灰色粘性シルトが確認され、上面に人や動物などの足跡が検出された。この黒灰色粘性シルトは調査区の北半部（A・B・C各区の1~2区）で検出されたが、南側では確認できなかった。南半部では、砂礫層の自然流路の堆積層であり、深さは最大で1.5mに達する。調査区が狭小なため、この自然流路の詳細な規模や時期は不明であるが、両岸は、C-2区とC-5区で確認されており、幅20m以上であつ

たと考えられる。堆積砂中には、弥生時代後期の遺物が若干出土した。調査地南東端のC-5区では、弥生時代後期と考えられる土器片を含む厚さ約25cmの黒褐色シルトを検出している（上面の標高11.7m）。この下層で遺構は検出されなかったが、遺物包含層は調査地外の南東方向に広がっているものと考えられ、すぐ近くに集落跡が存在するものと考えられる。

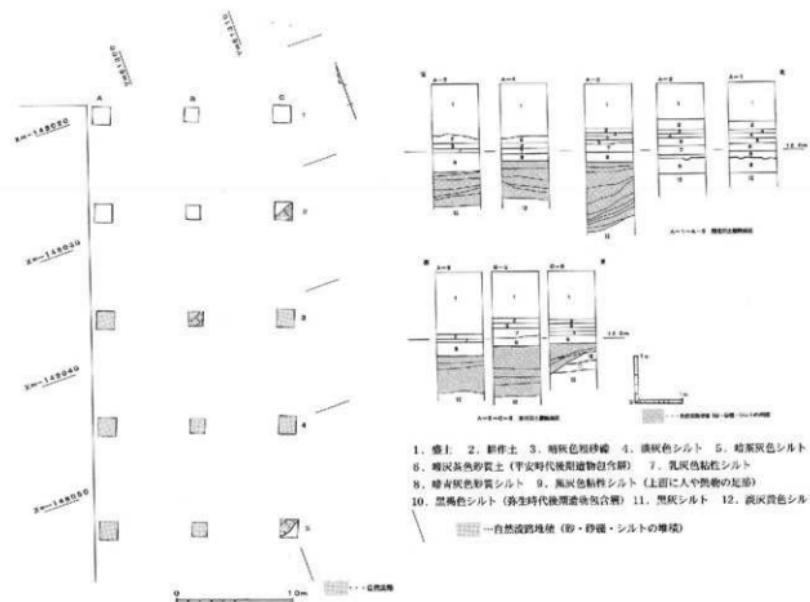


fig. 261 遺構面平面図・断面図

調査の結果、中世の遺物包含層と自然流路。弥生時代後期の遺物包含層と弥生時代後期の遺物を僅かに含む自然流路を検出した。また、この自然流路の堆積砂で埋没した黒灰色粘質土上面で偶蹄目（ウシなど）の動物の足跡と人の足跡を確認したが、畦畔は確認されず水田跡かどうかは断定できなかった。各グリッド内の各地層上で遺構検出作業を実施したが、人為的遺構は確認されなかった。

弥生時代後期の遺物包含層は自然流路の南岸、調査地の南東隅で検出された。同時期の住居跡等の生活址である遺構は調査地の南東方向に存在するものと考えられる。弥生時代後期に関しては、調査地の南東部を調査した試掘調査の結果からも、今回の調査地のすぐ南東部に遺構の存在が窺える。

36. 曙町遺跡 第1次調査

曙町遺跡は明石川右岸・西区曙町を中心として東の枝吉・西の王塚台にかけての沖積地に広がる遺跡である。明石川流域は両岸とともに弥生時代の集落が濃密に分布し、当遺跡の北に出土遺跡、東に森友遺跡・持子遺跡、南に前池遺跡等が隣接して存在する。西に位置する丘陵である王塚台には、北西に王塚古墳・幣塚・経塚古墳などの古墳が存在している。また枝吉城や出土城など中世の城館も付近に存在する。

曙町遺跡では、かつて弥生時代の遺物が表面採取され、この時代を含む遺跡であると認識されていたが、1998年に調査地の東、国立神戸視力障害センターの車庫等建設事業に関連して行なわれた試掘調査によってその具体的な状況が明らかになった。広範囲な用地のため、延べ120m²の試掘調査が行われた。その結果、弥生時代後期・古墳時代・古代・中世・近世の遺物が出土し、遺構として弥生時代後期・古墳時代前期の流路、古墳時代後期の竪穴住居5棟、中世・近世の水田・溝などが確認されている。

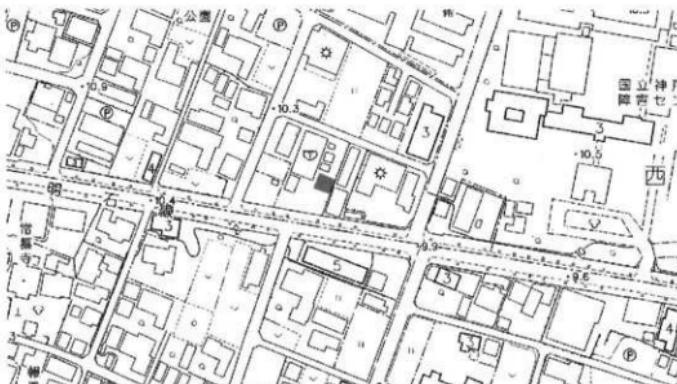


fig. 262 曙町遺跡
調査地位置図

調査概要

建築工事によって遺跡が影響される部分について発掘調査を行った。その結果、遺構面1面が確認され、古代あるいは中世の溝SD01と土器が投棄される古墳時代後期の広く浅い窪み(SX01)を検出した。

層序

今回の調査地における各面の標高は以下の通り。

現地表(1a層上面)：約9.7m(T.P.)

第1遺構面(6a層下面)：約8.3m(T.P.)

SD01

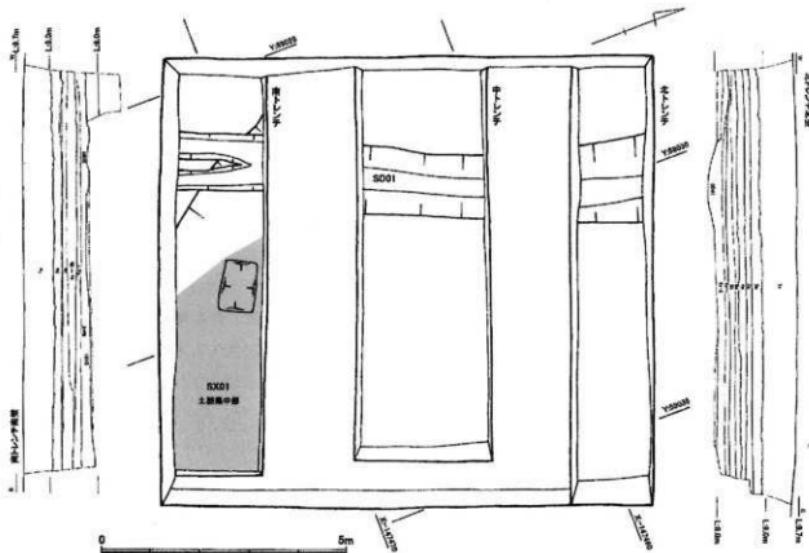
幅約1.5m、遺構検出面からの深さ10~30cmを測る溝である。当地の条里と同一方向にのびる。SX01よりも新しい。埋土からは須恵器などごく少量の遺物が出土した。

SX01

南トレンチで確認された広く浅い落ち込み遺構である。土器類が比較的まとまって出土した。そのほとんどが土師器である。

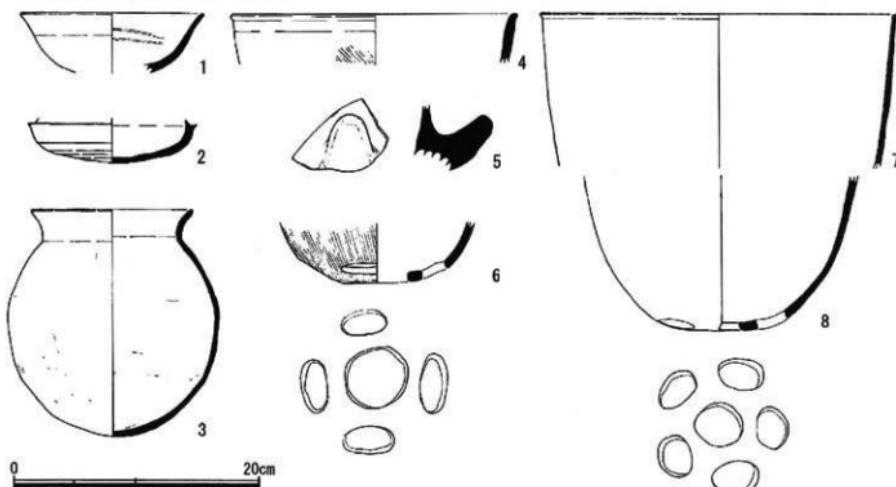
まとめ

北トレンチ・中トレンチは遺物の出土量も少なく、遺構にも顕著なものがなかったが、南トレンチではまとまった量の遺物が確認された。今回の調査によって、曙町遺跡の範囲が沖積地の西端付近にまで広がることを確認できたことになる。



1a: 黒褐色土・赤茶色・褐色土。2a: 砂透開洞口裏の黄土(水田膠土)。2a': オーリップ黄色シルト質粘土。3c: 黄褐色シルト質粘土。3e: 黄褐色シルト質粘土。3f: 3e: 酸化している。3g-h: 黄色シルト質粘土。
4a-b: 黄色シルト質粘土・上半部分。3D01: 土器窓附近。4a-c: 黄褐色シルト質粘土。3D01: 黄褐色シルト質粘土。3D01: 黄褐色シルト質粘土。古代の土器を多く含む。

fig. 263 造構面平面図・断面図



1: 3層、2: 6層、その他 : SX01 (2: 須恵器、その他 : 土器器、4~6と7~8はそれぞれ同一個体)

fig. 264 出土遺物実測図

37. 今津遺跡 第18次調査

今津遺跡は、明石川下流左岸の沖積地、標高11m前後に立地する遺跡である。当遺跡のすぐ北西側では明石川と埴谷川の合流地点があり、この地点より下流には明石川によって形成された沖積平野が広がる。当遺跡の南には弥生時代の拠点集落である新方遺跡などが存在する。今津遺跡内ではこれまで17次にわたる調査が行われており、主に弥生時代中期を中心とする集落遺跡であることが判明している。

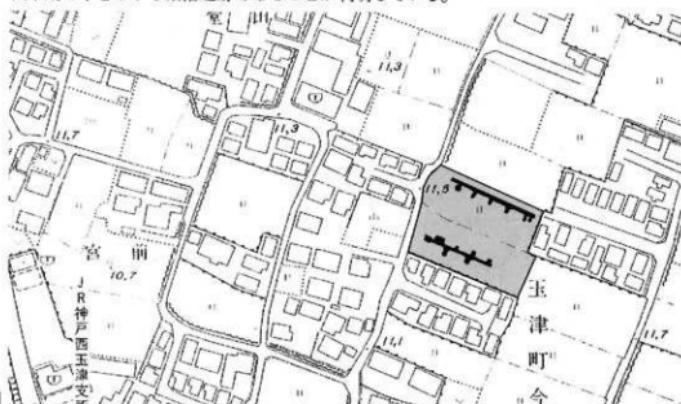


fig. 265 今津遺跡
調査位置図

調査は造成予定区域内に計画されている2本の道路下に埋設される污水本管および各戸からの引き込み管の設置工事によって遺跡が影響する部分について、幅約1mのトレンチを設定し、北側の道路部分を第1トレンチ、南側を第2トレンチとした。但し、一部マンホールが設置される箇所については幅2.5mとなっている。調査はその工事影響深度までとし、それより下層については調査をおこなっていない。

第1トレンチ

第1トレンチは後背湿地に当たるものと思われ、遺構・遺物は確認されなかった。但し、本線の南側に取り付く支線ではその南端付近で北側に落ち込む茶褐色灰色粘質砂層が確認され、第1トレンチの南側で集落域の存在する微高地となっているものと思われる。

遺物は旧耕土層から中世の須恵器・土師器の小片が出土したのみである。

第2トレンチ

第2トレンチは道路敷き約60mの内、東端の約20mは工事の影響深度が遺物包含層に達しないため調査をおこなっていない。また同じく工事の影響深度からトレンチの東半は第1遺構面までの調査となり、西端部も後述する第2遺構面の湿地ないしは流路の上層部分のみの調査となっている。

基本層序

基本層序は第1トレンチと異なり、現耕土・淡灰色砂（旧耕土）・明黄灰色シルト（旧耕土）・淡黄褐色シルト（旧耕土）・淡黄褐色シルト（旧耕土）・灰色シルト（中世耕土）・暗茶褐色シルト（弥生時代中期遺物包含層）・灰色シルト混じり粘土（弥生時代中期遺物包含層、第1遺構面ベース）・暗灰色粘土（第2遺構面ベース）となる。

第1遺構面では溝5条と落ち込みが1基確認された。SD101～SD104はいずれも幅30

~40cm深さ15~25cm程度の細く浅い溝である。断面の形状はいずれも浅いU字条を呈する。SD101はSD102に接続する。SD103とSD104は1.2mの幅を空けて、平行して南北方向に走る。

SD105は幅約3mで深さ50cm以上の溝である。工事影響レベルまでの調査であったため底までの調査はおこなっていない。断面の形状は緩やかなV字条を呈する。後述する第2造構面の湿地ないしは流路の縁辺部における最終埋没時の流路の可能性がある。

SX101は支線部分の南端で確認された落ち込みである。南に向かって緩やかに下がっているが、調査区外に広がるため、全体の形状等は不明である。

造構内からの出土遺物は弥生中期後半（畿内第IV様式）の弥生土器の小片が出土したのみである。上層の遺物包含層からも同時期の弥生土器が出土している。

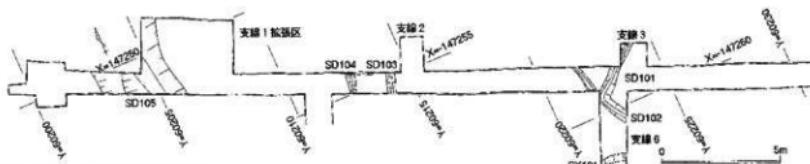


fig. 266 第1造構面平面図

第2造構面は既述したように調査区のうち、工事に影響する西半部のみ調査をおこない、溝2条と土器溜り1基、ピット1基および湿地状の落ち込みが確認された。

SD202およびSD203はいずれも幅20~30cm深さ20cm程度の細く浅い溝である。断面の形状はいずれも浅いU字条を呈する。SD203はやや凸弧を描いて北東から南西方向に走る。SX201は調査区の西端の第2トレンチ支線1で見つかった土器溜りである。1m幅の調査区内では全体の規模や性格等が明らかでないため、調査区を拡張して調査を実施した。その結果1.6m×2.3m以上、深さ約10cmの深い窪みに1.2m×2.0mの範囲で土器等が投棄された状態で検出された。出土した土器類には大型の壺・甕等が見られる。これらの土器類の他にサヌカイト製の打製石包丁と大型蛤刃石斧が出土している。出土した土器類は弥生時代中期後半（畿内第IV様式）に属する。

調査区の西端では灰色粘土を埋土とする湿地状の落ち込みが確認された。この灰色粘土は流路の最終埋土の可能性もあるが工事影響レベルまでの調査であったため下層については明らかではない。第2造構面ではSX201から弥生土器がまとまって出土しているほか、造構内からは弥生土器の小片が出土しているのみである。支線5付近から、第2造構面の遺物包含層で第1造構面のベースとなっている灰色シルト混じり粘土からも同時期の弥生土器がやや多く出土している。2面の弥生時代中期後半の造構面についても出土遺物からは時期的な差はほとんどない。



fig. 267 第2造構面平面図

38. 高津橋岡遺跡 第8次調査

高津橋岡遺跡は明石川右岸にある遺跡で、中位段丘面上に立地する遺跡である。現在周辺は県道小部明石線に沿って宅地化が進行しているが、かつては段丘面上に耕作地が拡がっており、南側は西側縁辺に明石城が立地する高位段丘を除くと海までの眺望が開けていたと想定される。一帯の標高は約25mである。

これまでの調査によって弥生時代後期・古墳時代後期の堅穴住居、平安時代～室町時代の掘立柱建物、室町時代の木棺墓、埋甕等が検出されており、各時代を通じて遺構が確認されている。

今回当該地で鉄骨造二階建の社屋建設に伴い試掘調査を実施した結果、従前の建物で既に損壊を受けている部分も存在しているが、敷地のほぼ全面に埋蔵文化財が存在することが明らかとなった。建築計画の内、掘削深度が深くて埋蔵文化財に影響を与える建物中央の基礎部分計6ヶ所について発掘調査を実施した。調査区は東から順に1～6区と命名した。

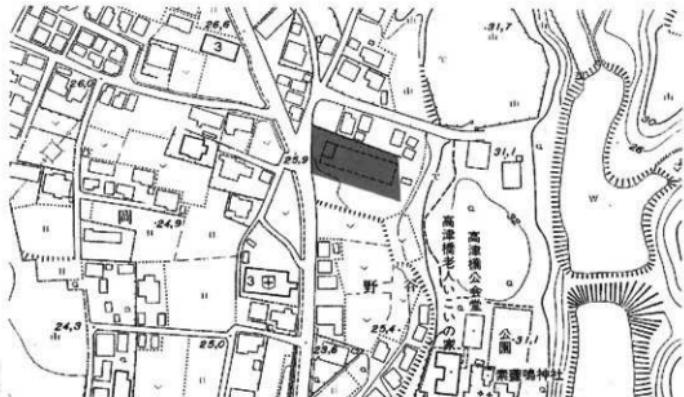


fig. 268 高津橋岡遺跡調査地位置図

基本層序は、上から順に現代の盛土、宅地化直前の耕作土、旧耕作土、遺物包含層が2層、地山と続く。遺構面は地山の上面で、調査開始前の現地表面は概ね平坦ではあるが、

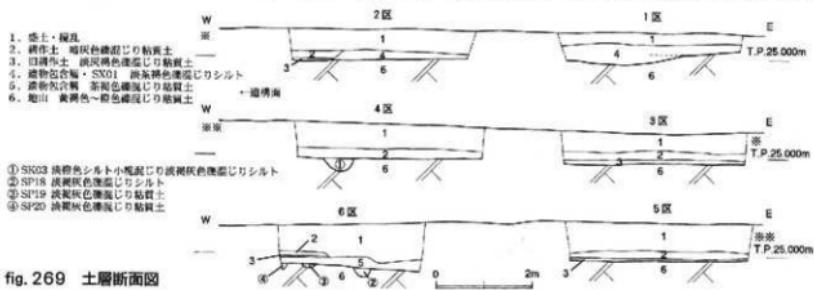


fig. 269 土層断面図

- 遺構面は西側約200mの段丘崖に向かって僅かに東から西へと傾斜していくようである。検出した遺構は土坑4基、落ち込み1基の他、ピットが22基である。
- SK01** 2区の北西隅で検出した長円形の土坑で、長径1.3m、短径70cm、深さ約30cmである。埋土は橙色シルト混じり淡灰黄色疊混じりシルトで、遺物は土師器・須恵器が出土した。
- SK02** 3区の北西隅で検出した不整形の土坑である。西側の一部分は調査区外に続いているが、長さ2.0m、幅1.2m、深さ約20cmである。埋土は淡灰黄色シルト・淡橙色シルト・疊が混和したもので、遺物は土師器・須恵器が出土した。
- SK03** 4区の北西隅で検出した長円形の土坑である。北側の一部分は調査区外に続いているが、長さ1.0m、幅40cm、深さ約30cmである。埋土は淡橙色シルト混じり淡褐色疊混じりシルトで、遺物は土師器が出土した。
- SK04** 5区の北東隅で検出した長円形の土坑である。東側の一部分は調査区外に続いているが、長さ1.8m以上、幅90cm、深さ約30cmである。埋土は淡茶褐色疊混じり粘質土で、遺物は土師器・須恵器が出土した。
- SX01** 1区の北西で検出した落ち込みである。北側と西側が調査区外に続き、南側と底面が搅乱で破壊されているため全体の規模は不明であるが、現状で東西2.4m以上、南北2.2m以上、深さ約30cmである。埋土は淡茶褐色疊混じりシルトであるが、北壁面では遺構面上の遺物包含層と峻別できなかった。しかし平面的には遺物や疊を含む量の多少や粘質の強弱では識別が可能であった。遺物は土師器・須恵器が出土した。
- ピット** ピットは合計22基検出した。比較的浅いものもあったが、中にはかなり深く、確実に柱穴になりうるものもあった。今回の発掘調査では調査範囲が限定されており、さらに搅乱によって遺構面が既に損壊を受けているため、掘立柱建物などを構成するようにまとまらなかった。

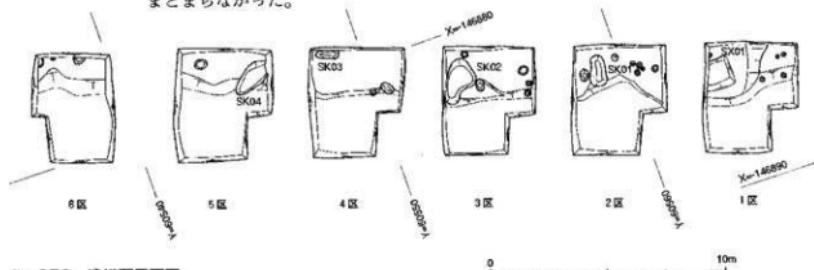


fig. 270 遺構面平面図

まとめ

奈良時代の上坑・落ち込み・ピットが確認された。調査範囲の制約と既存の搅乱が多かったため、掘立柱建物は確認できなかったが、西70mの第2次調査地点と同様に掘立柱建物が存在していた可能性が高い。当該地は高沖桟岡遺跡が立地する中位段丘面が東西方向に最も広くなる部分に相当しており、集落を形成するには格好の条件と言える。古墳時代のピットも今回確認されており、周辺での調査事例では弥生時代と古墳時代の集落も確認されていることから、当該地は各時代において集落の範囲内に含まれるものと考えられる。

39. 出合遺跡 第35次調査

出合遺跡は、明石川中流域右岸の冲積地に立地する、旧石器時代～鎌倉時代の集落遺跡である。昭和50年度に土地区画整理事業に伴って第1次調査を実施して以来、道路建設や個人住宅建設などに伴って調査を実施してきた。これまでの調査では弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代における韓式系土器の出土など、様々な時期の遺構・遺物が検出されており、出合遺跡の状況について多くの見知が蓄積されつつある。

こうした中、従来認識されていた出合遺跡の周辺地区で圃場整備事業が計画され、工事に先立ち平成15・16年度に事業計画地内で試掘調査を実施した結果、弥生時代、古墳時代及び中世の遺構・遺物が確認され、それらの結果をもとに神戸市教育委員会では出合遺跡の範囲を拡大するとともに、試掘調査により埋蔵文化財が確認された地区のうち、工事により影響を受ける部分について昨年度に引き続き、発掘調査を実施した。



fig. 271 出合遺跡第35次トレンチ配置図 (S = 1 : 5,000)

トレンチ名	面積	面数	延べ面積
8トレンチ	約67m ²	2面	約137m ²
9トレンチ	約26m ²	1面	約26m ²
10トレンチ	約247m ²	1面	約247m ²
11トレンチ	約135m ²	2面	約270m ²
12トレンチ	約160m ²	2面	約320m ²
13トレンチ	約263m ²	1面	約263m ²
14トレンチ	約100m ²	1面	約100m ²
15トレンチ	約70m ²	1面	約70m ²
16トレンチ	約43m ²	1面	約43m ²
17トレンチ	約15m ²	1面	約15m ²
18トレンチ	約170m ²	1面	約170m ²
19トレンチ	約172m ²	2面	約344m ²
平成18年度調査	約1,468m ²		約2,002m ²

調査の概要

今回の調査は、圃場整備事業によって新設される水路・パイプラインの工事で、埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について発掘調査を実施した。トレンチの番号は、昨年度の同事業で行った調査時（出合遺跡第34次調査）に付与したトレンチ番号に継続してつけたため、第8トレンチから第19トレンチまでの番号を付けている。

第8トレンチ

調査区は東西に長さ49m、幅0.5~3.5mのトレンチで、水路の新設部分にあたる。

基本層序は灰褐色系の砂質シルト層の旧耕作土と黄褐色系の砂質シルト層の旧床土が数層あり（近世以降の水田）、マンガンを含む暗灰色シルト質極細砂層が第1造構面の上層水田層を覆っている。上層水田層は暗灰色シルト質極細砂層や灰白色砂質シルト層である。そして、灰褐色系の極細砂混じりのシルト質極細砂層の下層にある、マンガンや鉄分を含んだ暗灰褐色シルトの下層水田が第2造構面となる。

SD101は、調査区の西端で検出した東西方向の溝で、検出した長さは6.0m、幅は1.5m以上、深さは95cmである。SD101の埋土は大きく分けて3層に分かれ、上層は青灰色系の砂質シルト層、中層は青灰褐色系のシルト層の厚い堆積があり、下層は小礫混じりのシルト～極細砂層となる。SD101からは12~13世紀の須恵器・土師器が出土した。SD102は、東西方向の調査区に沿うように駐畔を検出した。駐畔の幅は80cm以上のもので、南側に幅0.8~1.1mのSD102が取り付く。駐畔はその規模から大駐畔と考えられるもので、鉄分を含んだ灰白色砂質シルトの土壤である。水田土壤からの出土遺物はなく、SD102からは12~13世紀の須恵器・土師器が出土した。

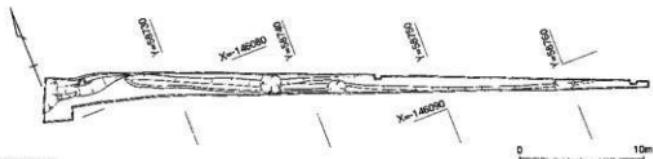


fig. 272 第1造構面平面図

第2造構面の水田層でも、第1造構面と同じように東西方向の駐畔を検出した。駐畔の幅は80~90cmのもので、調査区の中央部から西部で北方向に湾曲して延びている。第1造構面の水田と同様に、第2造構面の水田駐畔も南側に幅0.7~1.0mの溝が取り付いている。第2造構面の水田埋土や水田土壤の出土遺物には12世紀頃の須恵器・土師器がある。また、7世紀頃の須恵器の細片も同時に出土した。

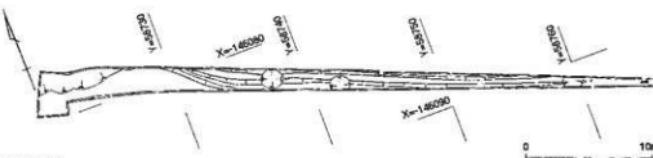


fig. 273 第2造構面平面図

第9トレンチ

第8トレンチから明石・国包線を挟んで東側に位置する東西に長い調査区で、長さ27.5m、幅0.8~1.3mのトレンチで、水路の新設部分にあたる。

基木層序は黄褐色系の砂質シルト層の旧床土層（近現代）が数層あり、暗灰褐色シル

ト質極細砂層の遺物包含層がある。その下層が茶褐色シルト質極細砂の基盤層である。今回の調査地では遺構は存在せず、北西方向へ緩やかに傾斜する地形を確認するにとどまった。遺物包含層からは弥生時代後期の土器が出土している。調査区の南東方向に弥生時代の微高地の存在が推定される。

第10トレンチ

第9トレンチの南側に位置する東西方向の長さ101m、幅2.7mのトレンチで、新設される水路部分の調査区である。

基本層序は黄褐色系の砂質シルト層の旧床土層が数層あり、その下層に灰褐色系のシルト質極細砂層があり、灰白色シルト層（鉄分・マンガン含む）・灰褐色砂質シルト層（鉄分・マンガン含む）・淡灰褐色シルト質極細砂層・灰褐色砂質シルト層（マンガン含む）の水田七塙が水田面となる。畦畔や溝といった、水田に不可欠な遺構はなかったが、上塙の観察や周辺の調査から、水田面と考えたい。水田の時期は、水田面直上から出土した遺物から12～13世紀頃であると思われる。

水田面は東から西に向かう程、その高さを増している。水田面が東西に高低差がある時には、南北方向の畦畔の存在が考えられるが、調査では畦畔の確認はできなかった。

トレンチ南壁際の側溝で、下層に水田土壌が確認されたが、畦畔状の高まりは存在しなかった。また、調査区の中央部やや西よりで約10mの幅で淡黒色シルト質細砂層の部分があり、下層に旧河道の存在する可能性がある。その付近より西半部では土壌に砂質が強くなり、西北方向に存在する微高地の縁辺部にあたるものと考えられる。

第11トレンチ

第8トレンチの南側に位置する東西方向のトレンチで、長さ72m、幅1.8mの調査区で新設される水路部分にあたる。

基本層序は灰褐色系の砂質シルトの旧耕土や黄褐色系の砂質シルトの旧床土が数層あって、暗灰褐色シルト質極細砂層・暗灰褐色砂質シルト層（マンガン含む）・黄褐色シルト質極細砂層の第1構造面の上層水田層となる。そして、直下に灰白色シルト層（鉄分含む）の第2構造面の下層水田層が存在する。

第1遺構面では6条の畦畔を検出した。いずれも南北方向のもので、畦畔の幅は1~1.5mの規模で、畦畔と畦畔の間は10.5m内外である。第2遺構面でも、第1遺構面と同様に6条の畦畔を、同じ位置で検出した。畦畔の幅は1.2~1.6mの規模で、畦畔と畦畔の間は10.5m内外である。これらの畦畔は、東端と西端の2条の畦畔が現在の水田面には存在しないが、残りの4条に関しては、その存在する位置がわずかに東にずれているが、ほぼ同じ位置に存在している。水田面は徐々に西に向かって高くなっている。水田の時期については、第1遺構面の水田も第2遺構面の水田もその水田土壤や畦畔からは12~13世紀の須恵器・土師器が出土しており、時期差は明確にはできていない。

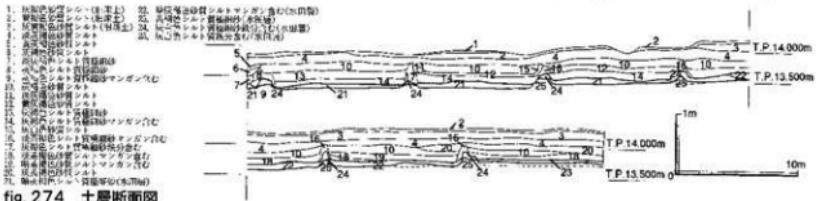


fig. 274 土層断面図

第12トレンチ

大池の東に位置し、新設水路部分の調査地である。12トレンチの調査終了後に、工事により文化財に影響を及ぼす範囲が西に広がったので、再度調査を実施し、便宜的に12トレンチ西拡張区とした。

基本層序は、現耕土、現床上を除去すると、灰褐色シルト質極細砂の旧耕土層が数層存在し、暗灰褐色シルト質極細砂（第1造構面基盤層）、暗茶褐色シルト質極細砂（第2造構面基盤層）となる。

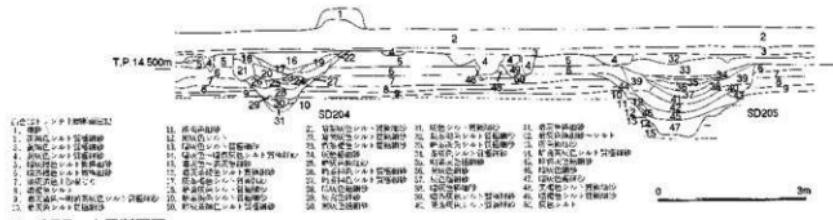


fig. 275 土層断面図

第1遺構面

第1造構面は、溝15条、上坑1基、ピット約10基を検出した。

SD204は、幅2.4m、深さ1.2mの南北方向の溝である。埋土中から弥生時代後期後半の土器が出土している。SD205は、幅3.3m、深さ1.45mの南北方向の大きな溝で、埋土中から弥生時代後期後半～庄内期の完形に近い土器が多量に出土した。土器は流されて摩滅したようなものは見当たらず、近接して存在する集落で使用されたものが、ここに廃棄されたと考えられる。その他の溝は、幅0.5～1.0m、深さ約10cmの浅い溝と、幅40～60cm、深さ約40～60cmのやや深い溝の2種類に人別できる。いずれもはっきりと時期を特定できるような遺物は出土していないが、埋土の色調から、浅い溝は中世のもの、やや深い溝は弥生時代後期後半～庄内期のものと考えられる。

ピットは、直径20~30cm、深さ20~30cmのもので、いずれも建物としては復元できなかった。なお、埋土の色調により弥生時代のものと中世のものが判別できる。

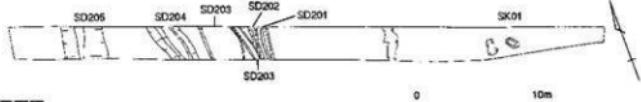


Fig. 276 第一產稱山平山圖

第2邊構面

第2道構面では、溝2条を検出した。SD301は、幅10~70cm、深さ10cmの溝で、北西から南東へ延び、北東へ蛇行している。SD302は、幅30cm、深さ10cmの南北方向の深い溝である。とともに、遺物の出土ではなく、時期については不明である。



Fig. 277 第2感情面圖

第12トレンチ西拡張区 第1造構面で溝2条とピット8基を検出した。SD101は幅1.0m、深さ30cm、SD102は幅30cm、深さ10cmの規模で、どちらの溝も南北方向に流れている。

ピットは、いずれも直徑20~30cm、深さ20~30cmの規模で、建物として復元できなかつた。なお、第1造構面の時期は、造構埋土の特徴から中世と考えられる。

第2造構面 溝1条とピット4基を検出した。SD206は幅2.6m、深さ75cmの溝で、弥生時代後期後半~庄内期のほぼ完形の土器が多数出土した。

ピットは、直徑20~30cm、深さ25~40cmの規模のピットを4基検出した。一直線に並ぶので掘立柱建物もしくは柵列の可能性が考えられる。

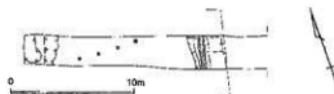


fig. 278 第2造構面平面図

第13トレンチ 大池の堤の東、東西方向に延びるパイプライン部分の延長約200mの調査区である。

IH耕土を除去すると、暗灰褐色シルト質極細砂層があり、その上面で遺構を検出した。遺構は調査区中央より西側の限られた範囲で検出し、遺構を検出しなかつた範囲については、地形が東へ下がっていく状況を確認した。検出した遺構は、溝12条、土坑1基、ピット約10基である。溝は、いずれも南北方向に流れる溝である。特に調査区中央西寄りで検出したSD01とSD10は大きな溝で、SD01は幅2.2m、深さ1.0m、SD10は幅1.6m、深さ85cmの規模である。どちらも埋土から古墳時代前期の土器が出土しており、SD10

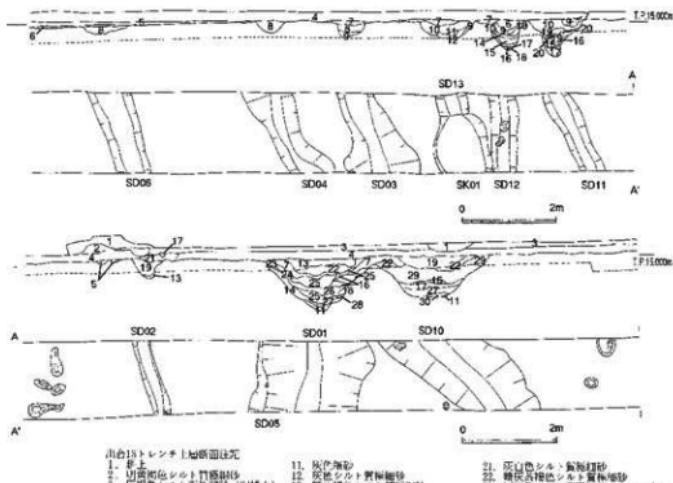


fig. 279 遺構面平面図・断面図

では溝の底付近から、ほぼ完形の小形丸底壺が出土している。また、SD11は幅50~60cm、深さ70cm、SD12は幅50~60cm、深さ50cmの規模で、小破片の土器しか出土せず、遺物から時期を明確にすることは困難であるが、埋土の色調から古墳時代前期のものと考えられる。その他の溝は幅40~80cm、深さ10~30cmの規模で、埋土の特徴から中世のものと考えられる。

土坑 (SK01) 南半部を検出したもので、北半は調査区外である。短径1.2m、長径1.2m以上、深さ35cmの楕円形の土坑で、土坑内から鎌倉時代前半の須恵器塊2点と土師器羽釜1点が出土した。

ピット いずれも径約20~30cm、深さ20~30cmのもので、調査区が狭小なため建物として復元することはできなかった。

第14トレンチ 大池の堤の東、13トレンチの西側で実施した調査区である。既存の水路が流れており、その堆積を除去すると暗灰色砂礫、暗灰色シルト混じり細砂、黄灰色砂質シルトの順に堆積しており、暗灰色シルト混じり細砂には近世以降の陶磁器、瓦を多数含んでいる。また、調査区北壁の断面を観察すると、既存の水路以前の水路断面を確認することができ、このことより近世よりこの場所は水路であり、そこにゴミとして陶磁器、瓦を廃棄したものと考えられる。なお、それ以前の遺構は存在しなかった。

第15トレンチ 新設の水路部分の調査で、上津橋の集落の南端、既存の道路と畑にまたがった調査区である。複数の旧耕土を除去し、暗灰褐色細砂上面で溝1条、流路1条を検出した。

SD01 調査区南半で検出し、幅約70cm、深さ約25cmの規模の東西方向の溝である。遺物は出土していないが、埋土の特徴から中世のものと考えられる。

SR01 調査区北半で、北から南に流れる河道状の落ち込みを検出した。工事影響深度を超えるため、発掘は実施しておらず、深さ約60cmまでしか確認していない。遺物は弥生時代から古墳時代にかけての上器が出土した。

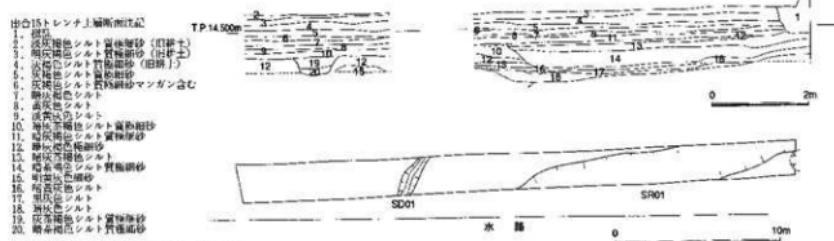


fig. 280 遺構面平面図・断面図

第16トレンチ 上津橋の集落の南端、民家と水田に挟まれた東西方向のバイオライン部分の調査区である。表土、旧耕土を除去し、暗灰褐色シルト質極細砂上面で遺構を検出した。検出した遺構は溝3条である。

SD01 幅約40cm、深さ30cmの東西方向の溝で、調査区を縦断している。埋土の特徴から中世のものと考えられる。

SD02 調査区東端で検出した東西方向に延びる溝で、北側の肩のみ検出し、南側の肩は調査

- 区外のため検出できなかった。深さは約40cmである。弥生時代後期の土器が少數出土した。
- SD03** 調査区東半部で検出した南北方向の溝で、幅約2.5m、深さ0.1~0.15mの規模である。弥生時代後期の土器が出上している。
- 第17トレンチ** 大池の堤から南に続く段丘標部の現況、畠地の調査地である。新設される水路部分の、幅約1.5m、長さ約10mの範囲について調査を実施した。調査区内には段丘上から流れ込んだ砂礫層（流土層）が3層あり、その間に灰褐色系の砂質土～シルト層が繰り返し堆積する。2層目の流土層より上層の灰色系粘質土は中世の遺物を含み、調査区東半ではこれらの層が水平に堆積する状況が認められる。中世以降に耕作地となったものと考えられる。現地表面から約1.5m下の灰色シルト層及び黄色細～粗砂、疊混じりシルト層上で溝2条と柱穴4基を検出した。
- SD01** 幅約70cm、深さ約20cmの溝である。埋土上層に細片となった土器が多く含み、下層では器形の判明する遺物が出土した。古墳時代の須恵器甕、土師器を中心とするが、平安時代後期の須恵器甕や瓦片が出土しており、当該期の遺構と考えられる。
- SD02** 幅約15cm、深さが10cmの浅い溝である。この溝の周囲には一部に焼土の堆積や被熱痕がある。
- 柱穴** 調査区西端で柱穴を4基検出した。ピット01・02は径約20cmの円形の柱穴で、いずれも灰色シルトの单一埋土であり、同時期の遺構と考えられる。ピット01は古墳時代の上層器が出土したピット04を切り込んでおり、ピット01・02の2基はそれ以降の柱穴と考えられる。ピット03については出土遺物もなく、時期は不明である。
- 調査面積が限られていたため不明な部分が多いが、段丘上からの流土に古墳時代、平安時代の遺物が比較的多く混入している。中世の遺物が混入する2層目の流土層より上層については耕作地として利用されたと考えられるが、SD01を検出した調査区の西端から3分の1あたりの位置までの堆積層はいずれも斜めに堆積しており、この部分が傾斜変換点を踏襲していたものと考えられる。

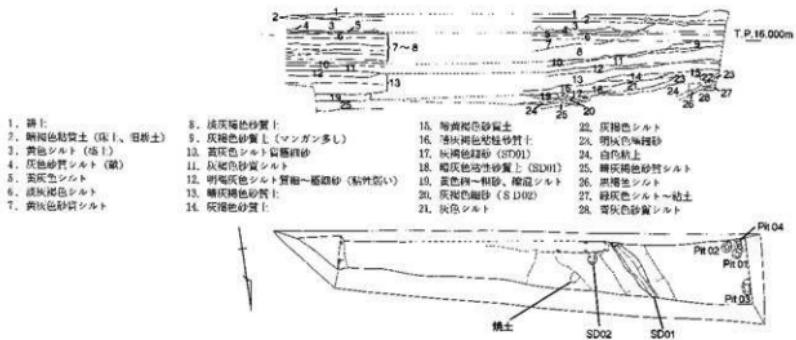


fig. 281 遺構面平面図・断面図

第18トレント 上津橋の集落の南、大池と県道明石田園線に挟まれた現況水田部に設けた幅1.5~2m、長さ約90mの調査区である。

現耕土の床土は、近世の遺物を含む旧耕土層で、その下にマンガンを多く含む灰色を呈する粘質土～シルト層の2層を確認した。いずれの層からも中世の遺物が出土しており、中世の水田層と考えられる。調査区北側から3分の1ほど位置で段落ちを形成するが、これ以外に田圃を画する畦畔などの痕跡は確認していない。水田層の下には淡灰色を呈する複数の軟弱なシルト層の堆積があり、厚さは40~70cmを測る。その下に暗灰色シルト層の薄い堆積があり、水田層と考えられる。下面は灰白色のややシルト質ではあるが、しまりの良い極細砂層の堆積となり、この面で遺構が確認された。調査区の北側で溝3条、中央部で河道の輪郭、ピット2基の遺構を検出した。

SD01 幅50cm、深さ20~30cmの溝で、調査区内での検出長は南北約3mである。埋土は砂を混じえた軟弱なシルト層が主体で、一部の層に微細な炭が混じる。遺物は出土していない。

SD02・03 幅20~40cm、深さ5cmの直交する浅い溝としたが、あまり明確ではない。埋土は暗灰色シルト層で、調査区壁面での観察からこの上の水田層に伴う畦下の溝、もしくは耕作痕の可能性が高い。調査区東壁ではこの溝周辺でのみわずかに畦畔が確認できたが、水田の平面形状などについては不明である。溝からは遺物は出土しておらず、水田層からも遺物は出土しなかった。水田層を覆う軟弱なシルト層中から、摩滅し細片となつた弥生土器と考えられる破片がわずかに出土しており、弥生時代の水田層、また下面についても弥生時代の遺構面の可能性が高いが、詳細な時期などは不明である。

河道 調査区中央で確認した幅約6mの東西方向の河道痕跡である。影響深度の関係から、全体の規模は不明であるが、検出範囲内での堆積状況から、暗灰色シルト層の水田層を挟み二時期に分けられるようである。掘削範囲内では遺物は確認していない。

ピット 河道の南側、灰白色砂層面でピット2基を検出した。径約15cm、深さ約10cmで、暗灰色シルトの單一埋土である。遺物は出土していない。周辺でも同様の極浅い円形の染み込み状の痕跡を確認しており、上層水田層に穿たれた杭のうち、比較的残りのよいものであったと考える。

第19トレント 上津橋の集落南側に広がる畠場域の南端近く、県道明石田園線の西側に位置する調査区である。現況は水田で、東と西で約0.5mの高低差がある。現在の床上層まで重機により除去した後、人力により調査を行った。東、西いずれの調査区でも影響深度内で2面の水田層を検出した。

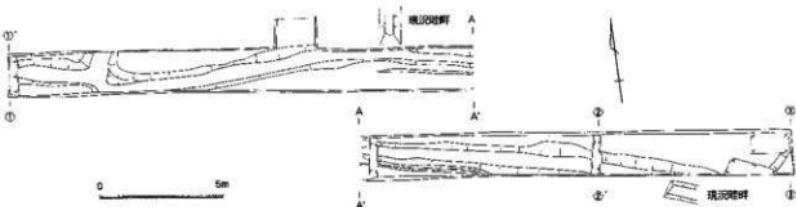


fig. 282 遺構面平面図

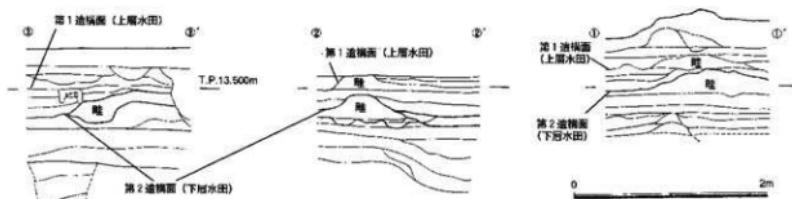


Fig. 283 土層断面図

東半

2面の水田層を検出した。耕土層に含まれるのはいずれも中世までの遺物である。現況の水田に伴う畦畔とほぼ位置と同じくして畦畔が作られている。残りのよい部分で天端幅約30cm、下端幅約60cm、高さは約20cmである。中世以降、現在までに区画に大きな変化がなかったことが分かる。また南北の畦間にには、やや高さが低く細い畦畔があり、現在でも幅の狭い区画が見られるのと同様に、より細かな区画をもっていた可能性がある。畦畔下の溝が検出されており、溝の周辺では偶蹄目類の足跡が多く観察できる箇所がある。

西半

2面の水田を検出した。1面日の水田面では現況の畦畔から50cmほど南に並行する位置で畦畔を検出し、西端では畦畔の南に沿う溝を1条検出した。溝は幅約80cm、深さ約30cmである。

2面日では畦畔は検出されなかつたが、畦下にあったと思われる2条の溝を検出した。上層と同じく西側で残りがよく、幅約0.2~0.3mの溝が交錯している。溝は凹凸が激しく、鋤の痕跡が残るものと思われる。また最も古い南側の溝は、現況の畦畔に並行しながら、西端でやや南に振っており、方向軸の異なる水田の存在が推測される。

中世以降、ほぼ現在まで付近の圃場が同じ姿を踏襲することが明らかになった。それ以前の状況は明らかでないが、やや南に振る、方向の異なる溝の存在は興味深いものである。

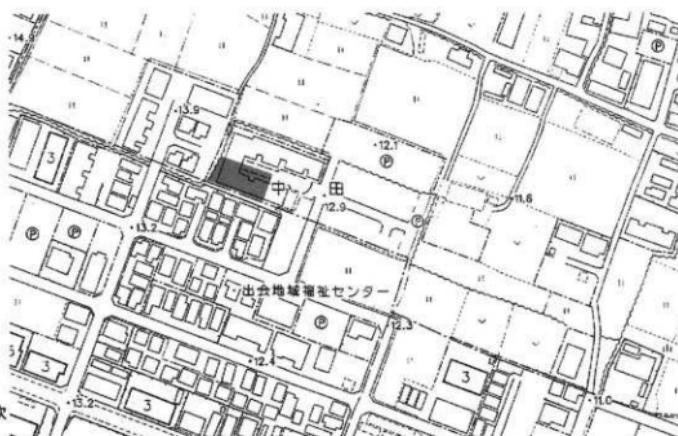
まとめ

今回の調査では、上津橋の集落の南側に接する調査区で、弥生時代後期後半～古墳時代前期、中世の多くの遺構・遺物を確認した。遺構は溝、十坑、ピットなどで、特に弥生時代後期後半～末と考えられる12トレンチSD205、12トレンチ西抜張区SD206などの規模の大きな溝から出土した十器はほとんど摩滅しておらず、投棄された状態を示すもので、すぐ近くに集落が存在するものと考えられる。周辺での既往の調査結果を合わせると、現在の上津橋の集落が微高地に立地する可能性が高い。13トレンチを例に考えてみると、トレンチ中央部の微高地に遺構が存在し、西側と東側に向かってなだらかに基盤層が落ち込んでいく状況が確認することができ、そこには遺構が存在せず、おそらくは湿地か水田であったものと考えられ、今回の調査により、土地利用の状況が明らかになったと言える。

また、8～16、19トレンチの周辺には明石川により形成された氾濫原が広がるものと考えられ、周辺は永らく水田域として利用された痕跡が明らかになった。工事影響深度の関係から、中世を越す段階の状況については明らかにし得なかったが、少なくとも中世以降、付近には今と変わらない景観が広がっていたことが明らかになった。

第36次調査

韓式系土器が多数出土した出合遺跡第32次調査の北側に位置しており、住宅用道路の下水管埋設に伴う部分においてのみ、発掘調査を実施した。



40. 玉津田中遺跡 第32次調査

玉津田中遺跡は神戸市の西部を流れる明石川の中流域左岸に位置し、昭和57年以来、数次にわたって発掘調査が実施されている。これまでの調査で、縄文時代後期～室町時代の複合遺跡であることが明らかになっている。特に、弥生時代前期～古墳時代中期の遺構・遺物が数多く確認されており、同時期の播磨地域を代表する大集落遺跡として周知されている。

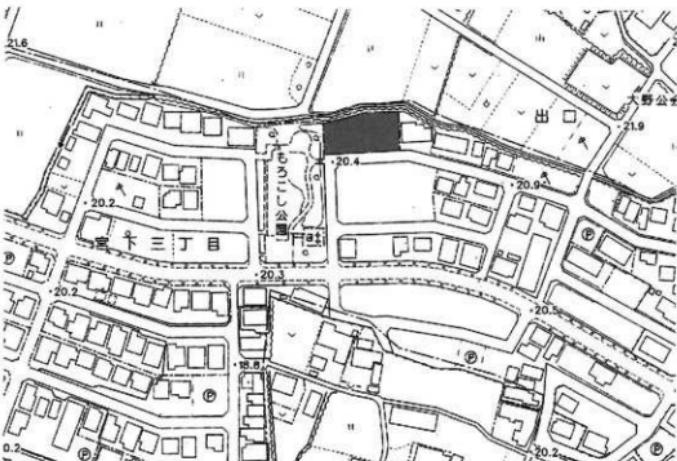


fig. 286 玉津田中遺跡 調査地位置図

調査地は遺跡の東端にある地点で、保育施設建設工事に伴い、その基礎工事により遺跡が破壊される部分についてのみ調査を実施した。その結果、弥生時代～近世の遺構・遺物が確認された。

7. 調査概要 当調査地南側に隣接する街路部分については、平成3年度において兵庫県教育委員会による調査が実施されており、自然流路（SR54001）と弥生時代後期～終末期の遺構が確認されている。今回の調査地の大半が、この自然流路（SR54001）の連続する部分にあたるものと推測される。

調査は基礎工事（杭打工事）を実施する箇所を調査区とし、便宜上、東西方向の西からA～F、南北方向の南から1～4の合計24地区を設定して、調査を進めた。

基本層序 層序は概ね上層より現代盛土、現代耕土、旧耕土、灰褐色系砂質土（遺物包含層）、自然流路埋土（濃褐色系シルトもしくは粗砂・細礫）となっており、灰褐色系砂質土（遺物包含層）〔凡そGL-130～160cm〕より下層が調査対象の層位となる。

遺構 灰褐色系砂質土（遺物包含層）下層の自然流路埋土上面が遺構面となる。遺構が確認された地区は、D-1・2、E-1～3、F-1～4で、いずれも自然流路（SR54001）の肩部、もしくは、肩部に近い箇所と推察される。確認された遺構は、溝状遺構（SD01他）、ピット（SP01他）、落ち込み状遺構（SX01～03他）などで、溝状遺構が幅約30～

遺物

40cm、深さ約7~8cmで、ピットが径約15~30cm、深さ約5~15cmを測る。

落ち込み状造構については、調査区の制約上、規模は不明である。これららの埋土に含まれる遺物から、概ね弥生時代後期後半~古墳時代初期（庄内期）の造構と考えられる。

造構内からは弥生時代後期後半~古墳時代初期（庄内期）の土器の小片が出土している。その他、自然流路埋土からは弥生時代中期後半~古墳時代初期（庄内期）、遺物包含層からは弥生時代後期後半~奈良時代後期、旧耕土からは中世~近世の遺物がそれぞれ出土しており、その大半が土器片である。時期別では弥生時代後期後半~古墳時代初期（庄内期）のものが特に多い。

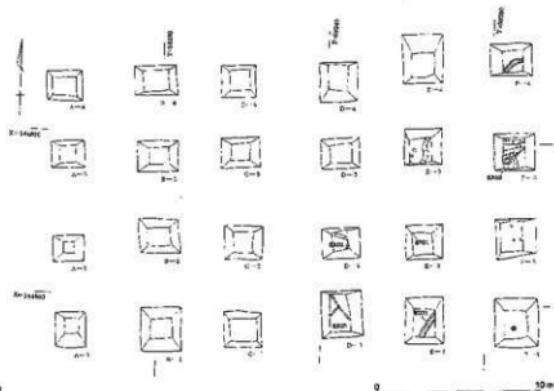


fig. 287 遺構面平面図

まとめ

今回の調査地点は遺跡の東端に位置し、過去の近接地の調査（兵庫県教育委員会・狹間6区等）において、弥生時代後期~古墳時代の造構が確認されている。今回の調査においても、ほぼ同時期にあたる弥生時代後期後半~古墳時代初期（庄内期）に属する造構が確認された。

検出造構の大半は、兵庫県教育委員会による調査で確認された自然流路（SR54001）の北側に連続する部分にあたるが、その埋土の上面にも造構が存在することが明らかになった。この自然流路の時期的上限は推測しにくいが、流路内への土砂の堆積が進み、埋没していく段階で、その中の肩部に近い比較的立地条件の良好な箇所において造構が存在するものと考えられる。

遺物の出土については、造構内からは僅少であったが、自然流路からは多くみられる。その中でも、造構が確認された地区に近接する地区における出土量が多く、集落の縁辺から自然流路へと下がっていく箇所にあたると考えられる。

今回の調査は基礎工事（杭打工事）を実施する箇所においてのみで行ったこともあるって、調査区域に制約があったことから、各造構等の規模や有機的な関係、性格などを明確にするには至らなかったが、同地域の弥生時代後期後半~古墳時代初期（庄内期）における集落様相の一端を垣間見ることができ、有意義な成果が得られた。

41. 日輪寺遺跡 第9次調査

明石川流域の平地および段丘上はほぼ全域に遺跡が広がる。日輪寺遺跡は、そのうちの明石川を左岸に、櫛谷川を右岸にするその合流点付近で、両河川によって開析される丘陵の末端上に位置する。

当遺跡はこれまでに8回発掘調査が行なわれており、40棟を超える弥生時代後期から古墳時代初期の竪穴住居が確認されている。

日輪寺にかかわると考えられる遺構としては第1次調査において寺域の北部で確認された祭紀遺構がある。鉄鋤・鉄鎌先・銅鏡などを納めた平安時代前半の土坑で、寺のいすれかの建物建立にともなう地鎮にかかわる可能性が考えられる。その後の遺構は平安時代・鎌倉時代・室町時代の掘立柱建物などが確認されている。

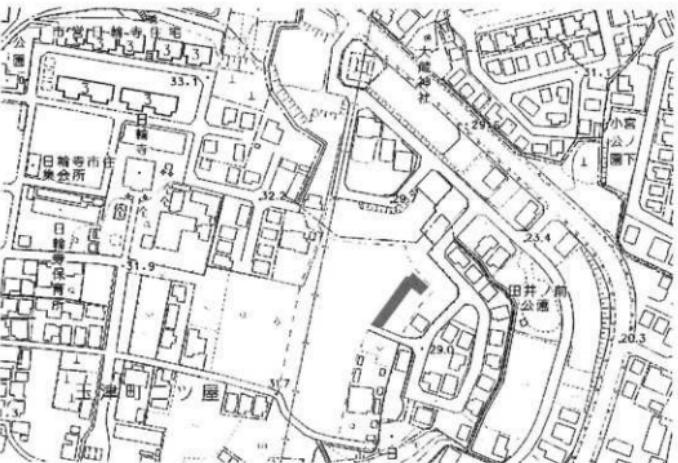


fig. 288 日輪寺遺跡
調査位置図

調査は、宅地開発に先立つもので、建設工事によって遺跡の破壊される部分約300m²について調査を行った。

調査の概要

丘陵上に所在するため後世の土砂堆積が少なく、現表土（畠耕土）を除去した段階で即地山となり、この面において掘立柱建物1棟、弥生時代後期から古墳時代初めにかけての竪穴住居5棟、土坑・柱穴等の遺構を検出した。

SH12

多角形の竪穴住居である。第4次調査で西半を調査している。おそらく六角形なるものと考えられる。径6.2m。深い部分で遺構面からの深さ約10cm、北西隅部はほとんど蟻の立ち上がりがないような状況で遺存状況が悪い。ただ土層断面を観察した南東部付近は壁から約1m幅で5cmほど床面が高くなっている、ベッド状遺構になる可能性がある。柱穴は1つ確認できたが、住居址に伴うものか判然としない。4次調査で確認できている周壁溝も確認できなかった。弥生時代末～古墳時代初めの土器が少量出土した。

SH15

方形の竪穴住居である。第4次調査で西半を調査している。南北辺5.2m。深い部分で

遺構面から床面までの深さ約40cm、壁際は4面とも幅約50cmでベッド状に床面より10cm程高くなる。弥生時代末～古墳時代初めの土器が少量出土した。

SH17 方形の竪穴住居である。第4次調査で西半を調査している。一辺約5m。深い部分で遺構面から床面までの深さ約50cm、ベッド状遺構はない。覆土に多量の礫があり、埋没していく中で多量の礫を土器とともに投棄したことが確認できる。床面を掘り込む土坑内からも完形に復元できる壺形土器が出土している。

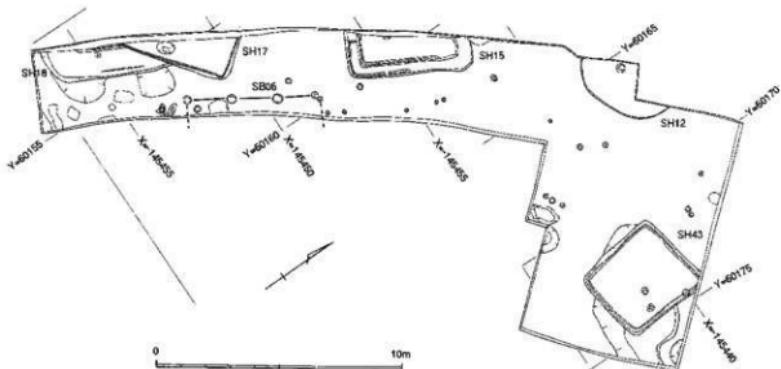
SH18と切り合い関係にあり、SH17が新しい。

SH18 方形の竪穴住居である。第4次調査で西半を調査している。一辺6m。深い部分で遺構面からの深さ約50cmを測る。SH17の床面よりもわずかに深い。壁際は4面とも幅約1mでベッド状に床面よりも約10cm高い。東辺部床面、ベッド状遺構に接するかたちで完形となる弥生時代末～古墳時代初めの壺2個体が出土した。内1個は内部上半が穴洞となっており、そこに貝が遺存しているのを現地で確認している。

SH43 方形の竪穴住居である。東西辺3.4m・南北辺3.8mを測る。深い部分で遺構面からの深さ25cmを測る。周壁溝が確認されたが、柱穴は検出できなかった。ベッド状遺構はない。土器片が少量出土した。

SB06 直線上に並ぶ柱穴4つがSH17の北東で検出されている。主軸方向はSH18・15などに近い。掘立柱建物あるいは柵列になると思われる。南北5mを測る。柱間はほぼ等間隔である。土器片が少量出土しているが、時期は特定できない。

その他遺構 土坑・柱穴を複数確認した。現地で確認した遺物はほとんどが弥生時代末から古墳時代初めのもの。遺構外から須恵器なども少量出土している。



42. 福中城跡 第3次調査

福中城は、明石川左岸の沖積地を望む、段丘先端に築造された城館である。三木別所氏の支城として赤松氏の支族である間島氏の居城であったが、天正八年（1580）に秀吉勢により落城したと伝えられる。古くは土地の区画・形状等に往時の状況が良好な状態で残されていたが、近年の開発等により当地周辺も景観が大きく変化している。

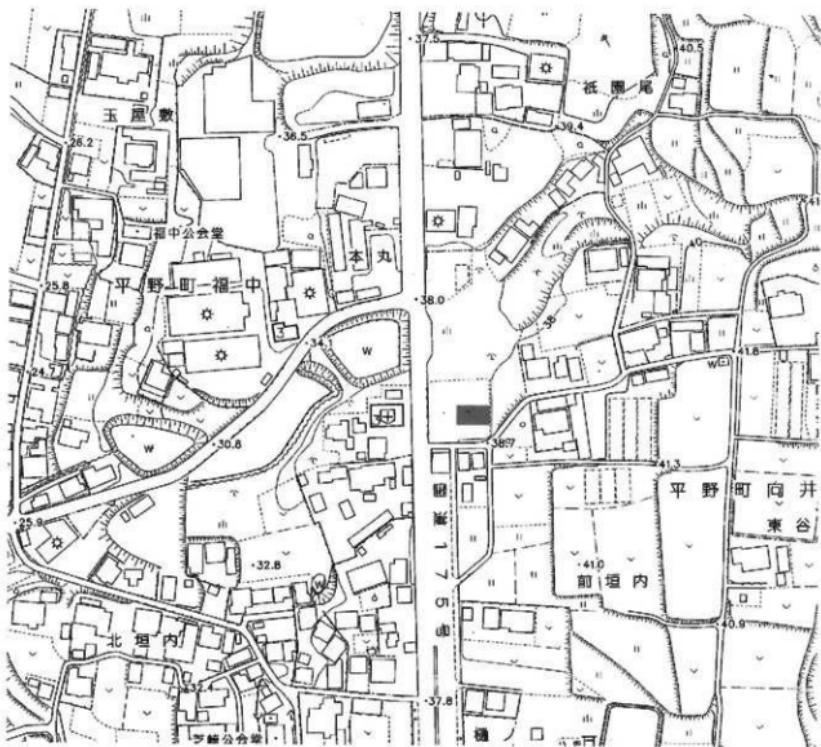


fig. 290 福中城跡調査位置図

今回の調査区の北にはこの段丘を北東から南西に開析する谷があり、その北に字名として「本丸」が存在する。その北には、西から「玉屋敷」・「後垣内」・「紙園尾」・「向井」などの字名が残り、その北にも谷地形が残る。西側の沖積地を望む城本丸の南北を画する堀として谷地形を利用するという構造が知られている。

平成13年度に行われた第1次調査では、C区で外堀・内堀、A区で掘立柱建物・溝・井戸・土坑などが検出されている。内堀と掘立柱建物の柱穴内からは15世紀～16世紀の遺物が出土しており、いずれも福中城に関連する遺構であると推定されている。今回の調査地はA区の東隣接地で、外堀の南外側に位置する。字名は「前垣内」である。

調査の概要

店舗建設工事にともない、遺跡の破壊される部分について調査を行った。その結果、溝・土坑・井戸等の遺構が検出した。

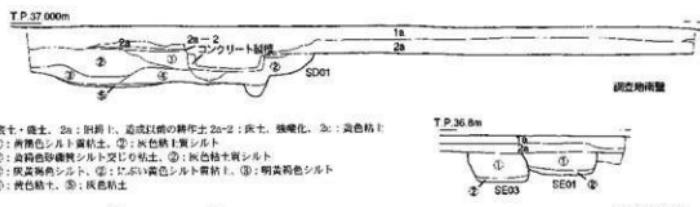


fig. 291 土層断面図

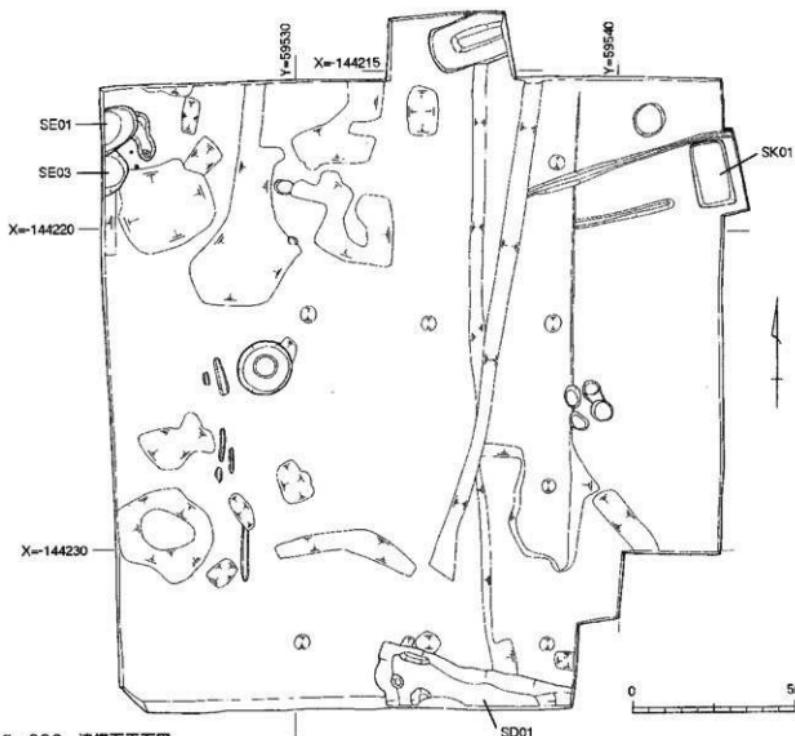


fig. 292 遺構面平面図

SD01

深さ約90cm、幅2m以上を測る箱堤状の遺構である。東西方向にのびる6mほどを検出した。江戸時代の遺物が出土しており、人為的に埋め立てられたのはこの時期に下る。

陶器土管も江戸時代のもので、同様のものが長田区福聚寺の調査において出土している。そのほか江戸時代よりも古い瓦片などが出土している。

- SD02** 二段掘りの溝ないし土坑である。長さ2.7m以上、幅1.7m、深さ65cmなどを測る。多量の土器とともに江戸時代までの瓦・陶磁器・漆塗り椀などが出土した。



fig. 293 SD02完掘状況

- SE02** 円形掘形の径1.7m、深さ2.3mの井戸である。円筒状の井戸枠は最下段のみ残るが、二段目以上は抜き取られとおり、二段目下のタガ以外は残らない。最下段の井戸枠は幅約8cm、長さ約55cmの板33枚を径約70cmの円形に組み、竹のタガ3条で締めたものである。井戸底には小円礫が詰められていた。掘形の底面にも礫交じりの粘土が充填されるが、枠の当たる部分は沈下を防ぐため、やや大ぶりの礫を円形に並べている。

井戸底付近からは中国製青花小皿、土師器のすり鉢など16世紀代の遺物が出土した。

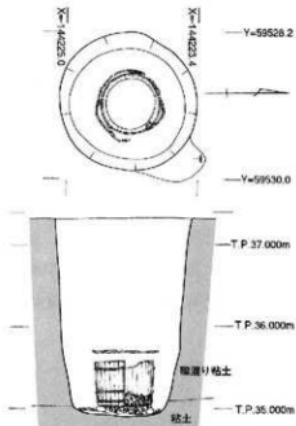


fig. 294 SE02造構面平面図・断面図



fig. 295 SE02井戸枠検出状況（上）

fig. 296 SE02最下段断面（左）

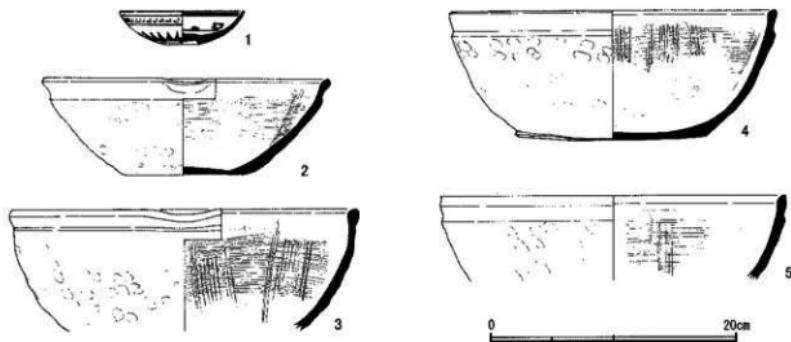


fig. 297 出土遺物実測図

SK01 2.0m×1.1mの隅円方形の土坑である。深さ約10cm。遺物は少量の土器片が出土したにとどまり、造構の時期は確定できない。

まとめ 後代の削平・擾乱もあって遺物包含層もほとんど残らず、浅い造構の多くは消滅した可能性が高い。その中で、SE02はまさに福中城が歴史舞台にあった時期の遺構であり、注目に値する。

今回検出された井戸、また1次調査A区で確認された掘立柱建物等、福中城の活動時期に重なる遺構複数が外堀の外側地点で確認されることになる。前垣内という字名を考え合わせ、この地点も福中城の垣内であることが確認されたということになるだろう。

III. 平成18年度 整理報告

1. 生田遺跡第4次調査

生田遺跡は、鯉川をはじめとした六中山系から流れ出す中小河川により形成された狭い扇状地の扇尖部分に位置する。調査地は標高差約5mを測る斜面地に立地しており、後世壇状に造成されたことで、調査区によって遺構の様相が異なっている。遺構は縄文時代後期～中世の土器を伴うものを検出し、堆積の厚い調査区では遺構面を4面検査している。調査の詳細については既刊の『生田遺跡第4次発掘調査概要』『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』をご参照されたい。今回は既刊している印刷物に掲載できなかった古墳時代後期～中世の遺物を報告する。

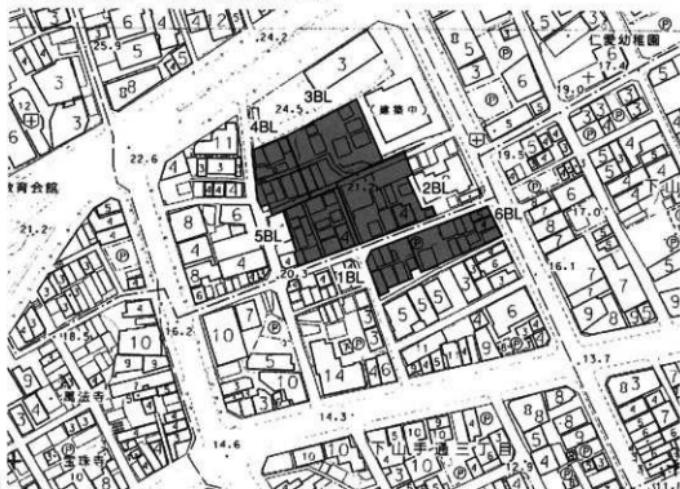


fig. 298 生田遺跡
調査地位置図

奈良時代～中世 この時期の遺構には柵列・井戸・溝・土坑・ピットがある。特に中世の井戸は4BLにおいて3基まとめて検出した。

井戸

SE4102は石組みの井戸で、出土している土器の大半は完形である。瓦器11は摩滅のため内面のヘラミガキが不明瞭である。時期は13世紀代と考えられる。素掘りの井戸SE4101から出土している土師器皿7・8は「て」の字状の口縁部をもつもので、SE4102より古く、11世紀代と考えられる。

また、3BLの井戸SE3201からは木製品がまとまって出土している。縦板隔柱横桟留のこの井戸は、土圧によって縦板が南東方向に倒れているものの、井戸構築材の残存状況はよい。隅柱58~61および横桟35~40には丸杭を使用している。隅柱の上端は欠損しているが、長いもので156.4cmを測り、5×3cmの枘穴が一段分穿たれている。縦板には板材を使用し、手斧の痕跡が下端部に多く確認できる。図化した板材は41~45は南辺、46~50は東辺、51~54は北辺、55~57は西辺から出土している。井戸内部より出土した剣物の桶62は底・身・持ち手それぞれで木材が異なっている。これは強度等の用材選択

の妥当性を示すものであると考えられる。斎弔63・64は下端を剣先状につくるタイプのもので、64は上端にも切り込みがあり、長さは21.6cmを測る。約65は先縁を半円形につくる。山由66・67の残存状況は悪いが、底面の湧水層から出土している。

出土した土器には土師器皿・甕、須恵器壺がある。須恵器壺32の広口は低くや内側に付き、端面は平坦で、口径は11.4cmと小さい。8世紀後半頃と考えられる。

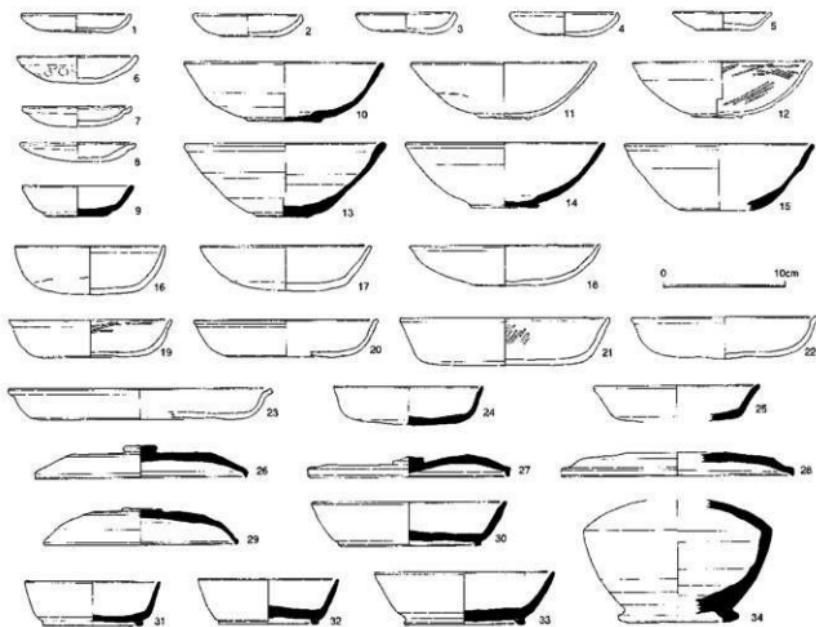
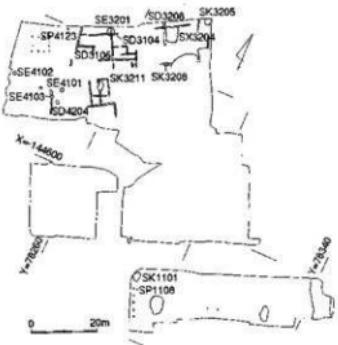


fig. 299 出土遺物実測図



1 ~ 4, 11, 12 : SE4102 5 : SK1101
 6, 9, 10 : SE4103 7, 8, 14, 15 : SE4101
 13 : SP1106
 16, 24 : SK3211 17, 19 : SP4123
 18 : SD4204 20 : SD3104 21, 29 : SK3208
 22 : SD3208
 23, 25 ~ 27, 30, 31, 34 : SK3205
 28 : SD3106 32 : SE3201 33 : SK3204

fig. 300 奈良時代～中世の主な造構

土坑

1BLの不整形な形状を呈する土坑SK1101から出土している土師器皿5は、底部に向転糸切りの痕跡が確認できる。

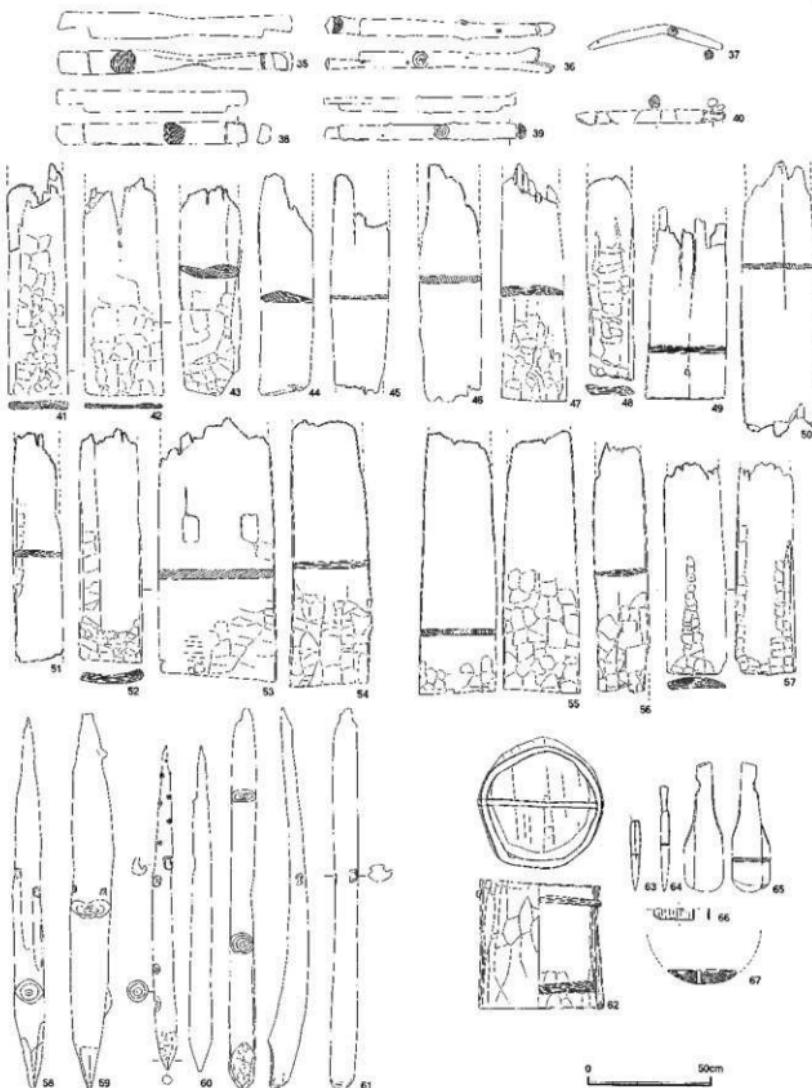


fig. 301 SE3201出土木製品



fig. 302 古墳時代後期の主な遺構

古墳時代後期

この時期の遺構には掘立柱建物・堅穴住居・溝・上坑・ピットがある。まとまって土器が出土したのはSD1203・SD3201である。

1 BLのSD1203からは須恵器壺身・壺蓋・高壺が出土しており、3 BLのSD3201からは須恵器壺身・壺蓋・壺が出土している。出土した須恵器からSD1203→SD3201と考えられる。掘立柱建物から出土した土器で同化できたのは土師器壺68のみであるが、付近の遺物包含層から出土した上器等から、その他の掘立柱建物についても、SD1203～SD3201の時期の範疇におさまる建物と考えられる。

まとめ

既刊の印刷物で報告できなかった遺物を中心で報告してきた。8世紀後半頃の土器が神戸市内でまとまって出土する例は少なく、はやくから市街地となったこの地域では削平されている可能性が推測されるが、いわゆる律令期の神戸を明らかにする資料のひとつとなると考えられる。

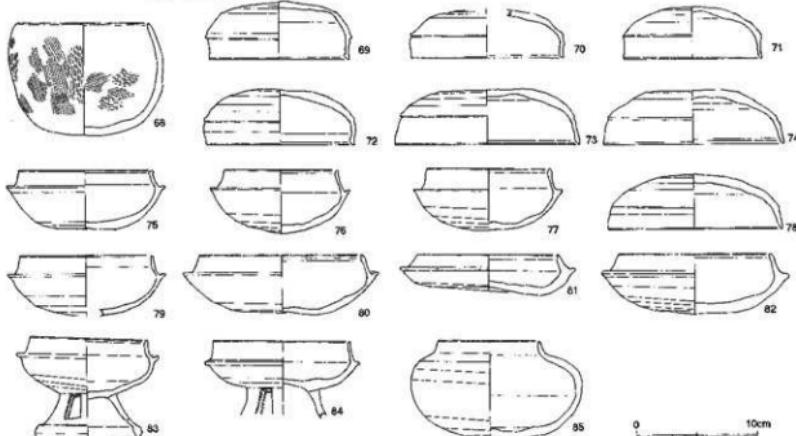


fig. 303 出土遺物実測図

68 : SD3201 69, 70, 72, 75~77, 79, 83 : SD1203 71 : SK3201
73, 74, 76, 81, 82, 85 : SD3201 80 : SP1212 84 : SD3202

出土木製品樹種同定及び石製品肉眼鑑定業務

はじめに

生出遺跡では、発掘調査により縄文時代後期から鎌倉時代初期にかけての遺構・遺物が検出されている。このうち、奈良時代後半の井戸では、井戸の構造材が残存し、井戸内からは木製品も出土している。

本報告では、弥生時代の焼失痕跡から出土した炭化材、奈良時代後半の井戸から出土した建築部材および木製品、鎌倉時代の遺構から出土した柱桿や木製品の木材利用を明らかにするための樹種同定を実施する。また、出土した石材の種類を明らかにするため、石材鑑定を実施する。

I. 木製品・炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、奈良時代後半の井戸から出土した建築部材や木製品など81点（試料番号1-84）、鎌倉時代の柱根および曲物桿板等3点（試料番号85-87）、弥生時代の焼失痕跡から出土した

パリノ・サーヴェイ株式会社

木とと考えられる炭化材4点（SB4201No.1-4）の合計91点である。このうち、炭化材4点を除く建築部材や木製品87点は3断面の切片を封入したプレバートの状態で受領した。

2. 分析方法

プレバートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。一方、炭化材は、自然乾燥させた後、木11・図目・板目の3断面について削断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）伊東（1995, 1996, 1997a, 1998, 1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本座木材認別データベースを参考にする。

II. 木製品・建築部材の樹種同定

1. 試料

試料は、奈良時代後半の井戸から出土した建築部材や木製品など81点（試料番号1-84）、鎌倉時代の柱根および曲物桿板等3点（試料番号85-87）、弥生時代の焼失痕跡から出土した

No.	採取No.	遺物名	出土位置	材料名	備考	W-N
1	64	木製品	奈良時代後半ノキ	9483		9525
2	65	板	SB3201	木製品代用材ヒノキ	9484	9525
3	66	仲	SB3201	奈良時代後半ヒノキ	9485	9527
4	67	丸丸	SB3201	芦井戸	9486	9528
5	68	丸丸	SB3201	井戸口	9487	9528
6	69	曲物曲板	SB3201	奈良時代後半ヒノキ	9488	9529
7	70	傳(多)	SB3201内芯	奈良時代後半ケヤキ	9489	9530
8	71	伝(木)	SB3201内芯	奈良時代後半ヒノキ	9489	9531
9	72	板(木)	SB3201内芯	奈良時代後半ヒノキ	9489	9532
10	73	丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9490	9534
11	74	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9491	9535
12	75	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9492	9536
13	76	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9493	9537
14	77	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9494	9538
15	78	木材	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9495	9539
16	79	木材	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9496	9540
17	80	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9497	9541
18	81	骨物骨格	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9498	9542
19	82	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9499	9543
20	83	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9500	9544
21	84	手割材	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9501	9545
22	85	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9502	9546
23	86	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9503	9547
24	87	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9504	9548
25	88	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9505	9549
26	89	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9506	9550
27	90	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9507	9551
28	91	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9508	9552
29	92	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9509	9553
30	93	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9510	9554
31	94	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9511	9555
32	95	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9512	9556
33	96	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9513	9557
34	97	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9514	9558
35	98	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9515	9559
36	99	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9516	9560
37	100	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9517	9561
38	101	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9518	9562
39	102	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9519	9563
40	103	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9520	9564
41	104	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9521	9565
42	105	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9522	9566
43	106	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9523	9567
44	107	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9524	9568
45	108	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9525	9569
46	109	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9526	9570
47	110	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9527	9571
48	111	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9528	9572
49	112	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9529	9573
50	113	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9530	9574
51	114	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9531	9575
52	115	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9532	9576
53	116	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9533	9577
54	117	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9534	9578
55	118	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9535	9579
56	119	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9536	9580
57	120	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9537	9581
58	121	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9538	9582
59	122	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9539	9583
60	123	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9540	9584
61	124	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9541	9585
62	125	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9542	9586
63	126	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9543	9587
64	127	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9544	9588
65	128	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9545	9589
66	129	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9546	9590
67	130	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9547	9591
68	131	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9548	9592
69	132	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9549	9593
70	133	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9550	9594
71	134	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9551	9595
72	135	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9552	9596
73	136	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9553	9597
74	137	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9554	9598
75	138	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9555	9599
76	139	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9556	9600
77	140	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9557	9601
78	141	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9558	9602
79	142	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9559	9603
80	143	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9560	9604
81	144	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9561	9605
82	145	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9562	9606
83	146	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9563	9607
84	147	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9564	9608
85	148	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9565	9609
86	149	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9566	9610
87	150	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9567	9611
88	151	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9568	9612
89	152	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9569	9613
90	153	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9570	9614
91	154	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9571	9615
92	155	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9572	9616
93	156	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9573	9617
94	157	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9574	9618
95	158	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9575	9619
96	159	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9576	9620
97	160	板	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9577	9621
98	161	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9578	9622
99	162	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9579	9623
100	163	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9580	9624
101	164	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9581	9625
102	165	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9582	9626
103	166	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9583	9627
104	167	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9584	9628
105	168	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9585	9629
106	169	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9586	9630
107	170	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9587	9631
108	171	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9588	9632
109	172	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9589	9633
110	173	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9590	9634
111	174	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9591	9635
112	175	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9592	9636
113	176	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9593	9637
114	177	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9594	9638
115	178	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9595	9639
116	179	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9596	9640
117	180	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9597	9641
118	181	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9598	9642
119	182	丸丸	SB3201内芯井戸口	奈良時代後半ヒノキ	9599	9643

表17 木製品・建築部材の樹種同定結果

3. 結果

樹種同定結果を表17・18に示す。建築部材および木製品は、針葉樹7種類（マツ属複雜管束面属・モミ属・ツガ属・コウヤマキ・ヒノキ・ヒノキ科・カヤ）と広葉樹3種類（コナラ属アカガシ属・ケヤキ・ウツギ属）に同定された。また、炭化材は、4点全てが広葉樹のコナラ属アカガシ属に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・マツ属複雜管束面属 (*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科 軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急やや緩やかで、晚材部の幅は広い。垂直樹脂道は晚材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には繊維状の突起が認められる。放射組織は單列、1-10細胞高。

- ・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は比較的緩やかで、晚材部の幅は広い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、じゅう状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1-4個。放射組織は單列、1-20細胞高。

- ・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急やや緩やかで、晚材部の幅は広い。樹脂細胞は晚材部に認められるが、顯著ではない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞壁は滑らかで、じゅう状末端壁が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は單列、1-10細胞高。

織は單列、1-20細胞高。

- ・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やかで、晚材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となる。放射組織は單列、1-5細胞高。

- ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やかやや急で、晚材部の幅は広い。樹脂細胞は晚材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型へトウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は單列、1-10細胞高。

- ・ヒノキ科 (*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やかやや急で、晚材部の幅は狭い。樹脂細胞は晚材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は單列、1-10細胞高。

- ・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

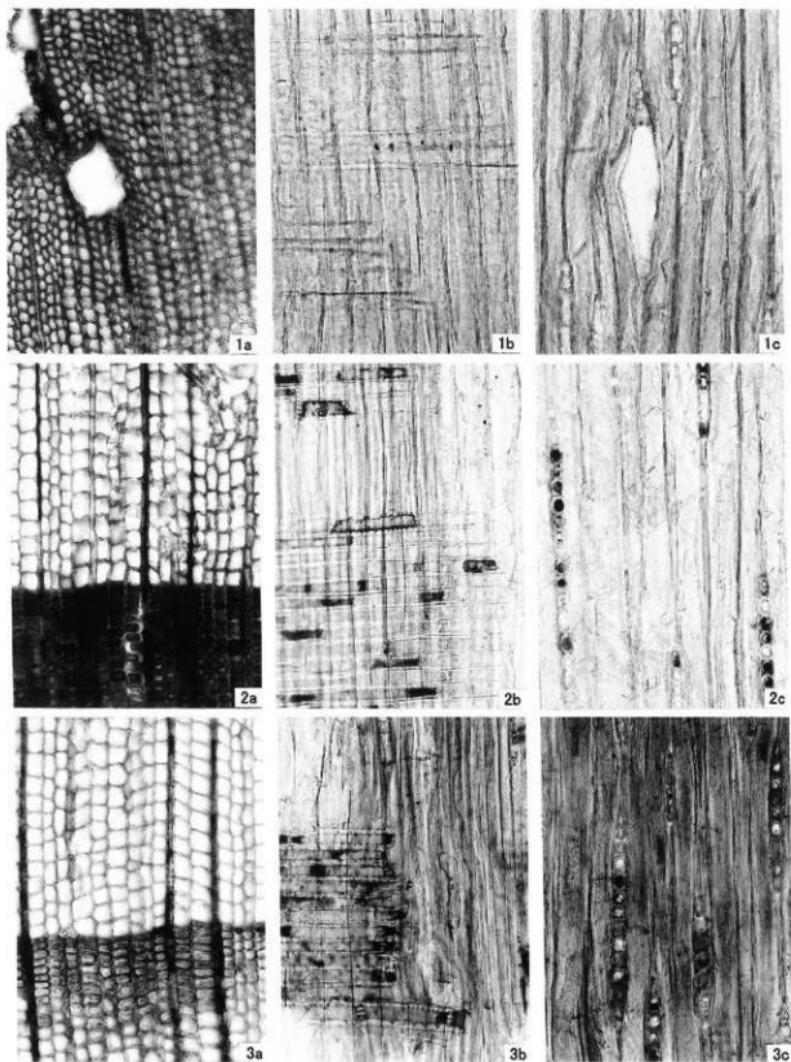
軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は広い。仮道管内壁には2本が対をなしたせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型へヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は單列、1-10細胞高。

番号	通称名	古称名	直径	時期	特徴
1	ヒバ丸太	平木	S 81201	春生	コナラ属アカガシ属
2	赤松丸太	赤木	S 84201	赤生	コナラ属アカガシ属
3	ヒバ丸太	赤木	S 84201	赤生	コナラ属アカガシ属
4	赤松丸太	赤木	S 84201	赤生	コナラ属アカガシ属

表18 炭化材の樹種同定結果

樹種	小農時代後半										現在時代			
	古木		新芽		年輪		古事記		その他の		建築部材	岩盤	植物	
	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪	年輪
マツ属複雜管束面属	3	2	10			1				5	2	2	1	1
ソガ属			11							9				
コウヤマキ		4		3						1				
ヒノキ	1				1	1		1	1	1				1
カヤ	2		12	2						2	1	1		
コナラ属アカガシ属			1				1							
ケヤキ														1
ウツギ属														
合計	6	2	4	38	6	1	1	1	1	1	1	2	3	1

表19 木製品・建築部材の器種別種類構成



1. マツ属複維管東亞属(試料No.86)

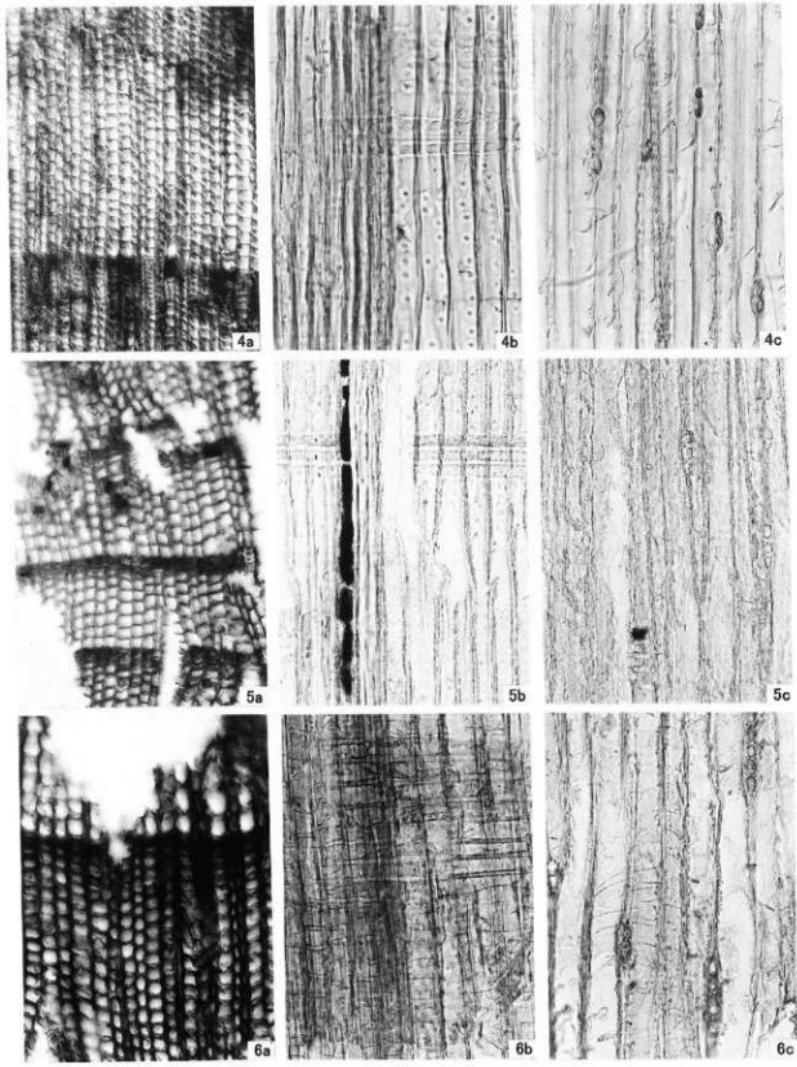
2. モミ属(試料No.20)

3. ツガ属(試料No.33)

a:木口, b:径目, c:板目

— 200 μ m:a
— 100 μ m:b,c

fig. 304 木材 (1)



4. コウヤマキ(試料No.66)

5. ヒノキ(試料No.1)

6. カヤ(試料No.21)

a:木口, b:径目, c:板目

fig. 305 木材 (2)

200 μ m a
100 μ m b,c



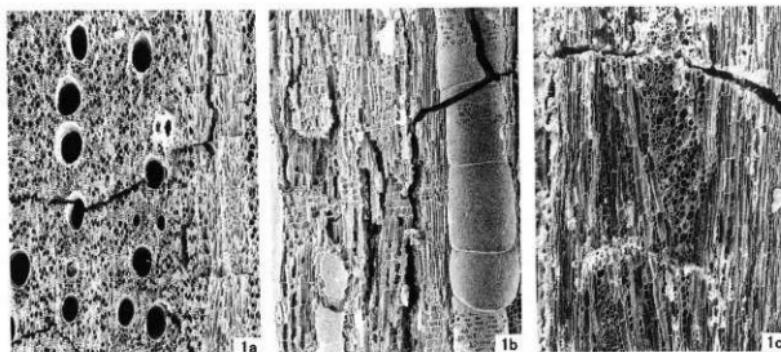
7. コナラ属アカガシ亜属(試料No.38)

8. ケヤキ(試料No.7)

9. ウツギ属(試料No.19)

a:木口, b:径目, c:板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b,c



1. コナラ属アカガシ亜属 (SB201 No.1)
a:木口, b:柾目, c:板目

■ 200 μ m
■ 200 μ mb,c

fig. 307 木材 (4)

• コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

ブナ科

放射孔材で、管状壁は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高のものと複合放射組織がある。

• ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔環部は1-2列、孔環外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向の紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-8細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縫隙部を中心した粘脂細胞が認められる。

• ツツギ属 (*Deutzia*) ユキノシタ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は隣設穿孔を有する。放射組織は異性、1-4細胞幅、4-100細胞高以上のものまである。放射組織には精細胞が認められる。

4. 考察

樹種同定を実施した木製品は、奈良時代後半と鎌倉時代とに分けられ、奈良時代後半の試料が多い。時期別・器種別の種類構成を表19に示す。これらの木製品には、合計10種類が認められたが、種類数・点数共に針葉樹材の占める割合が高く、針葉

樹材を中心とした木材利用が推定される。確認された針葉樹材は、全般的に木理が直通で割裂性が高く、加工が比較的容易であるが、カヤは針葉樹としては重硬な材質の部類に入る。また、ヒノキ、コウヤマキ、カヤは耐水性が高いが、モミ属の耐水性・保存性は高くない。広葉樹では、アカガシ亜属とケヤキが重硬で強度が高い材質を有する。ツツギ属は、小径の低木であり、強度等は高くない。

時期別に見ると、奈良時代後半の木製品は、建築部材、容器、食事具、祭祀具、その他に分類される。建築部材は、全て井戸SE3201の機架部材であり、緩板、横棟、隅材、杭、部位不明の板があり、横棟に広葉樹材のアカガシ亜属が1点認められた他は全て針葉樹材である。散も試料数が多い緩板にはモミ属、ツガ属、カヤの3種類が認められた。一方、隅柱は全てコウヤマキであり、横棟はコウヤマキ、カヤ、アカガシ亜属であり、部位によって使用樹種が異なる傾向がある。容器は、曲物（側板・底板）と桶（底・身・持ち手）がある。曲物は側板・底板共にヒノキ、桶は底板がモミ属、身がケヤキ、持ち手がアカガシ亜属であり、部位によって樹種が異なる結果となった。食事具は杓子、祭祀具は盞半について同定を行い、いずれもヒノキであった。その他では、板、丸杭、角棒、樺、半剖材、割材がある。点数の多い板では、ツガ属やモミ属が多く、他にヒノキとカヤが認められる。この結果は、井戸枠の板材と同様である。丸杭はコウヤマキ、角棒はカヤとアカガシ亜属、樺はモミ属とツツギ属、半剖材はカヤ、割材はモミ属であった。

抵津地域の樹種同定結果（中村,2001）をみると、古代の井戸部材ではモミ属が多く、他にコウヤマキ、スギ、ツバキが認められている。これは、同じく瀬戸内海に面した播磨地域の古代の井戸材にヒノキが多い結果と対象的である。今回の結果では、ヒノキが少なく、モミ属が比較的多い点ではこれまでの結果と調和的といえる。

なお、今回と同様の構造を有する平安時代後期の井戸の添付点の樹種同定を実施した、加古川市美乃利跡では、属性がヒノキとコウヤマキ、横桟がヒノキ、縦板がヒノキを主とし他にスギが約1/3混じる組成が確認され、部材によって木材選択が異なる傾向があり、その理由として各木材の材質の違いを挙げている（伊東,1997b）。今回の結果をみると、隅柱や横桟に強度・耐水性の高いコウヤマキやカヤが利用されており、美乃利跡との共通点も見られる。

容器のうち、古代の曲物については、これまでにも島内各地で樹種同定が実施されているが、地域に関わらずヒノキが多い傾向があり、抵津地域に限ると古代の曲物は全てヒノキである（中村,2001）。今回の結果も点数は少ないが、これまでの報告例と調和的である。一方、桶は、抵津地域のこれまでの調査例でもヒノキ、スギ、ケヤキが認められており、曲物に比べて使用樹種が多くなる傾向がある。

鎌倉時代では、建築部材と容器がある。建築部材はいずれも柱根であり、複数管束面倒とヒノキ科が認められた、いずれも比較的強度や耐水性が高い種類である。容器は曲物側板の1点であり、樹種はヒノキであった。この結果は、奈良時代後半の曲物側板・底板の樹種同定結果とも調和的である。木理が直通で割裂性が高いために薄い板の加工が比較的容易であることや耐水性が高いこと等が利用された背景に考えられる。

弥生時代とされる住居跡から出土した炭化材は、全て芯持丸木であり、重木が炭化・残存したと考えられている。樹種は全てアカガシ亞属であり、強度の高い木材を利用していたことが推定される。

II.石材の鑑定

1. 試料

肉眼鑑定を行った試料は右巣1点、石サジ？1点、石包丁1点、石鍬28点、石彫？10点、石綱・タキ石？1点、石越・石皿？1点、石棒1点、石棒？12点、スリ石1点、スリ石（棒）1点、スリ石？9点、スリ石・石皿？1点、タキ石5点、タキ石？37点、タキ石？削器？1点、タキ石？石皿1点、

タキ石？石棒？1点、タキ石・スリ石？3点、タキ石・石皿？1点、タキ石？1点、タキ石・石鍬？1点、タキ石・石棒？1点、石沼？1点、石皿1点、石皿？43点、台石？2点、砥石6点、砥石？1点、浮き？2点、玉2点、片岩2点、碌石1点、ケイカ木？1点、不明20点の計217試料である。重量、比重、遺物名、地区（BL）、遺構名、時期などの詳細を表20～22に示す。

2. 分析方法

野外用のルーペを用いて構成試料や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。個々の石材の正確な岩石名は、両片作製観察や全岩化学分析等を併用することにより判別ができるが、今回の鑑定では石材の組成を把握することを目的としているため、肉眼鑑定のみに留めている。肉眼鑑定は、試料写真撮影も含め、当社技術2名で平成18年9月11日に実施した。

3. 結果

肉眼鑑定の結果を表20～22に、遺物別に集計した石材組成を表24に示す。また、主要石材を円グラフ化したものを表23に示す。鏡窓の結果、深成岩類として花崗岩1点、黒雲母花崗岩7点、細粒花崗岩1点、花崗閃綠岩2点、黒雲母角閃石花崗岩6点、黒雲母角閃石花崗閃綠岩3点、細粒花崗閃綠岩1点およびはんれい岩3点、平澤成岩類としてアブライト1点、花崗閃綠斑岩3点およびヒン岩5点、火山岩類として流紋岩15点、サクロ石流紋岩1点、安山岩2点、無斑晶安山岩5点および輝石安山岩1点、火山碎屑岩類として火山疊凝灰岩4点、流紋岩質凝灰岩6点、凝灰岩（古期）12点、溶結凝灰岩2点、軽石3点および砂質凝灰岩2点、堆積岩類として砂岩（古期）22点、砂岩（新第三系）12点、凝灰質砂岩4点、頁岩（古期）9点、頁岩（新第二系）1点、珪質頁岩（古期）1点、珪質頁岩（新第二系）1点、凝灰質頁岩1点およびチャート9点、変成岩類として黒雲母片岩8点、緑色片岩8点、雲母片岩3点、石英片岩1点、下伏岩2点および粘板岩1点、変質岩類として珪化頁岩1点、菱はんれい岩1点および蛇紋岩3点、鉱物として孔雀1点、碧玉1点、ひすい1点および滑石1点、その他として珪石7点および珪化木2点が同定された。

岩石のタイプ別には、堆積岩類が41.5%と卓越し、その他には、火山碎屑岩類13.4%、深成岩類11.1%、火山岩類11.1%、変成岩類10.6%などがこれに次いで構成率が高くなっている（表24）。堆積岩類としては砂岩が、火山碎屑岩類としては凝灰岩が多く使用されている。

井号	R番号	重量(g)	比重	造物名	柱区 (EL)	標準名	時期	層位	備考	
1	271	356	2.83	石榴	3	SX2201下層	編文後期	細粒片岩		
2	64	73.5	2.38	スリ石(神)	2	SP2306	砂岩	新第三系		
3	226	17.03	2.54	石ナジ?	2	SX2201	西周後期	紫褐色質灰岩		
4	229	262.8	2.67	石棒?	2	SX2201	編文後期	泥灰片岩		
5	267	567.8	2.59	タケナキ石?	2	SP2037	在槽内鉛石	泥灰岩		
6	7	238.7	2.4	×石?	2	鹿鳴林山中	吉備~西周	綠色片岩		
7	010	226	2.94	石棒?	2	鶴見当砂質土	古墳~戰國	白雲母		
8	9	56.8	2.98	石?	2	鶴見當砂質土	古墳~戰國	綠色片岩		
9	97	88.91	2.68	タケナキ石?削面?	2	坂口田相砂質土	編文後期	砂岩		
10	9	127.7	2.5	石錐	2	鶴見當砂質土	吉備~西周	白雲母	古期	
11	227	29.57	浮き?	2	SX2201	西周後期	無品質紫岩			
12	249	122.9	2.56	石錐?	2	H2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
13	039	179.6	2.83	石錐	2	鶴見當砂質土	古墳~戰國	泥灰岩	新第二系	
14	6	234.1	2.47	タケナキ?	5	SD2301	編文後期	泥灰岩	新第二系	
15	93	151.1	2.55	タケナキ?	2	H2201	西周後期	鈣化鈣灰岩	新第二系	
16	359	253.3	2.3	スリ?	2	SX2201下層	西周後期	砂岩	新第二系	
17	132	364.5	2.42	タケナキ?	2	SD2006	西周後期	砂岩	新第二系	
18	255	914.7	2.7	タケナキ?石底?	2	SX2201下層	西周後期	砂岩	新第二系	
19	217	5658.1	2.51	石皿	2	SD2001	西周後期	黑雲母花崗岩	新第二系	
20	215	1175.2	2.5	石錐?	2	SD2001	西周後期	砂岩	新第二系	
21	169	7100	2.65	スリ?	2	鶴見當砂質土	西周後期	黑雲母花崗岩	新第二系	
22	12	53.3	浮き?	2	鶴見當砂質土	吉備~西周	鈣化鈣灰岩	新第二系		
23	344	894.1	2.37	タケナキ?心皿?	2	SX2201下層	西周後期	砂岩	新第二系	
24	183	336.2	2.58	石錐?	2	SX2201	西周後期	チャート	古期	
25	167	172	2.4	タケナキ?	2	SX2201	西周後期	砂岩	新第二系	
26	12	718.9	2.52	石錐	2	鶴見當砂質土	吉備~西周	黑雲母花崗岩	古期	
27	96	202.2	2.59	石錐?	2	坂口田相砂質土	吉備~西周	黑雲母花崗岩	新第二系	
28	92	410.3	2.57	スリ?	2	鶴見當砂質土	吉備~西周	砂岩	新第二系	
29	93	171.1	2.48	タケナキ?	2	坂口田相砂質土	吉備~西周	燧石		
30	12	586.7	2.6	石錐	2	鶴見當砂質土	吉備~西周	有蟲殻		
31	153	416.4	2.45	タケナキ?	2	SX2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
32	12	182.7	2.59	石錐?	2	坂口田相砂質土	吉備~西周	石錐	古期	
33	12	424.1	2.49	石錐	2	坂口田相砂質土	吉備~西周	砂岩	新第二系	
34	369	0.15	3	五	2	鶴見當砂質土	吉備~西周	砂岩	新第二系	
35	250	0.48	2.4	石錐	2	SX2201下層	吉備~西周	砂岩	新第二系	
36	175	3097.7	2.81	石錐	1	SD1203	古遺跡期	燧石		
37	102	228.8	2.83	石錐	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	鈣化鈣灰岩		
38	110	325.9	2.75	石錐	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
39	156	362.6	2.6	石錐	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	鈣化鈣灰岩		
40	109	317.1	2.21	石錐	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
41	108	230.5	3.25	スリ石?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	鈣化鈣灰岩		
42	108	53.7	2.79	石錐?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	鈣化鈣灰岩		
43	106	594.3	2.58	石錐?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	鈣化鈣灰岩		
44	106	319.1	2.5	石錐?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	鈣化鈣灰岩		
45	218	365.3	2.63	石錐	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	鈣化鈣灰岩		
46	111	216	2.88	スリ石?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	鈣化鈣灰岩		
47	111	650.8	2.94	スリ?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
48	111	422.2	2.99	スリ?+石底?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
49	111	469.2	2.57	石錐?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
50	136	359	2.79	タケナキ?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
51	110	226.6	2.49	石錐?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
52	111	188.8	2.97	石錐?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
53	230	3645.3	2.99	石錐	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
54	211	128.5	2.61	石錐	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
55	211	193	2.36	タケナキ?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
56	214	205.1	2.57	石錐?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
57	214	700.8	2.49	タケナキ?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
58	199	214.7	2.53	タケナキ?	1	鶴見當砂質土	先小町~西周	二云岩		
59	199	404.3	2.61	石錐?	1	SD1203	西周後期	二云岩		
60	112	243.9	2.51	石錐?石底?	1	鶴見當砂質土	生空~西周	生空		
61	191	203.4	2.42	石錐?	1	鶴見當砂質土	生空~西周	生空		
62	196	850.0	2.38	石錐	1	鶴見當砂質土	生空~西周	生空		
63	1	773.4	2.51	石錐?	1	鶴見當砂質土	生空~西周	生空		
64	113	118.2	1.81	石錐?	1	鶴見當砂質土	生空~西周	生空		
65	197	317.6	2.5	タケナキ?	1	鶴見當砂質土	生空~西周	生空		
66	193	279.1	2.6	石錐?	1	鶴見當砂質土	生空~西周	生空		
67	192	280	2.63	石錐?	1	鶴見當砂質土	生空~西周	生空		
68	6	867.0	2.31	石錐?	5	SD2001	編文後期	鈣化鈣灰岩		
69	11	297.7	2.42	タケナキ?	5	SX2201下層	編文後期	鈣化鈣灰岩		
70	5	491.8	2.37	石錐?	4	鶴見當砂質土	半?	鈣化鈣灰岩		
71	19	212.6	2.58	タケナキ?+スリ?	2	SD2201	西周後期	半?		
72	129	250.1	2.65	タケナキ?	2	SD2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
73	139	162.4	2.53	タケナキ?	2	SD2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
74	129	54.4	2.65	?	2	SD2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
75	129	188.1	2.49	?	2	SD2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
76	194	388.7	2.26	石皿?	2	SD2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
77	233	321.5	2.36	?	6	?	?	鈣化鈣灰岩		
78	182	264.3	2.65	タケナキ?	2	SD2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
79	87	59.8	2.95	石錐?	2	SD2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
80	87	391.8	2.58	タケナキ?	2	SD2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		
81	222	258.2	2.55	石錐?	2	SD2201	西周後期	鈣化鈣灰岩		

表20 石材鑑定結果 (1)

番号	試験番号	量積 (μ)	比積	種類名	出典 (E2)	測定名	時期	時代	備考
82	230	361.3	2.61	石英?	2	SKJ201	晴文後期	圓盤	古期、チャ・ミ期
83	56	106.2	2.61		2	灰褐色砂質土	調文後期	砂岩	古期
84	96	265.2	2.63	タクモ石?	2	灰褐色砂質土	調文後期	チャート	
85	547	670.8	2.63	タクモ石?	2	SKJ201下層	調文後期	砂岩	
86	199	164.2	2.6	石英?	1	SKJ102	調文後期	砂岩	古期
87	270	235.7	2.62	石英?	2	SKJ201	調文後期	チャート	古期
88	12	496.1	2.52	石英?	2	暗灰色砂質土	古竹・西文	砂岩	古期
89	12	298.5	2.54	石英?	2	暗灰色砂質土	志賀・西文	砂質頁岩	アライト
90	419	123.8	2.64	タクモ石?	2	SD201	調文後期	砂岩	新第三系
91	419	165.4	2.51	石英?	2	SD201	調文後期	砂岩	新第三系
92	119	75.9	2.58	石英?	2	SD220	調文後期	砂岩	新第三系
93	227	407.9	2.6	タクモ石?	4	ST4301	春小中層	風化斑花崗岩	
94	110	369.3	2.56	タクモ石?	5	SK301	調文後期	砂岩	石英斑岩
95	123	538.6	2.56	石英?	4	舊中層	心臓・赤牛	砂岩	新第三系
96	173	293.6	2.5	石田?	4	SK412	赤牛	砂岩	古期
97	56	169.5	2.55	石英?	3	調文・生造作圓面	調文・秀生	砂質頁岩	
98	58	21.8	2.61	タクモ石?	3	調文・秀生造作圓面	調文・秀生	風化頁岩	古風心臓
99	265	226.6	2.59	タクモ石・スリ石?	3	SD301	古風物質	砂岩	新文化遺跡
100	325	408.9	2.62	石英?	8	SD301	古風後期	綠色片岩	
101	128	598.8	2.98	石英?	4	SD4508		綠色片岩	
102	353	416.2	2.48	タクモ石・スリ石?	5	SD301	古風後期	綠色片岩	古期
103	420	491.7	2.58	白石?	2	SD201	調文後期	綠色片岩	
104	191	623.2	2.61		4	SD301	生造?	綠色片岩	
105	386	239.4	2.66	石頭?	8	SD301		綠色片岩	
106	219	1140.1	2.55	砾石?	3	SE301	東山後期	綠色片岩	
107	343	166.9	2.58	?	3	SE301	東山後期	綠色片岩	
108	218	816.9	2.39	砾石?	4	SD4301	生造後期	綠色片岩	古期
109	218	1130.0	2.7	古石?	4	SD4301	青山中層	綠色片岩	新第一系
110	185	687.5	2.63	石頭?	2	SK207	陶文後期	黑山青石瓦面の餘材	
111	192	279.9	2.58	石頭?	5	SK204	西文後期	砂岩	古期
112	192	285.6	2.48	石頭?	2	SK202	西文後期	火打燒成灰	
113	582	411.8	2.4	石頭?	2	調文後期	藍色頁岩	藍色頁岩	
114	12	189.6	2.6	石頭?	2	暗灰色砂質土	古竹・西文	藍色頁岩	古期
115	12	278.2	2.6	スリ石?	2	暗灰色砂質土	志賀・西文	藍色頁岩	新文化遺跡
116	12	150.7	2.31	タクモ石?	2	暗灰色砂質土	上原・西文	藍色頁岩	
117	229	326	2.42	石頭?	2	SD201	西文後期	砂岩	新第二系
118	338	94.6	2.58	石頭?	2	SK209	陶文後期	細粒灰岩質岩屑	
119	12	728	2.66	石頭?	2	暗灰色砂質土	古波・西文	チャート	
120	12	329.2	2.48	タクモ石?	2	WS201	占領・西文	砂岩	古期
121	12	328.5	2.48	タクモ石・石頭?	2	WS201	占領・西文	砂岩	古期
122	61	401.7	2.54	石頭?	5	SK501	調文後期	流紋岩	
123	61	308.6	2.39	石頭?	5	SK501	調文後期	砂岩	新第三系
124	61	394.2	2.39	タクモ石・石頭?	5	SK501	調文後期	砂岩	新第三系
125	61	122.9	2.39	?	5	SK501	調文後期	砂岩	新第三系
126	61	769.2	2.44	石頭?	b	SK501	調文後期	砂岩	新第二系
127	61	299	2.44	石頭?	5	SD301	西文後期	砂岩	新第二系
128	93	592	2.52	石頭?	2	火山灰質粘土	西文後期	砂岩	古期
129	211	1223.2	2.4	石頭?	2	SP201		砂岩	新第二系
130	14	249.1	2.64	タクモ石?	2	暗灰色砂質土	六門・西文	石英片岩	
131	14	361.1	2.66	タクモ石?	2	調文後期	吉澤・西文	風化角閃石片岩	ゼノリスあり
132	14	166.7	2.62	石頭?	2	暗灰色砂質土	吉澤・西文	風化角閃石片岩	風化角閃石風化帶谷
133	273	201.6	2.57	石頭?	2	SK201下層	調文後期	風化角閃石片岩	風化角閃石風化帶谷
134	255	673.1	2.48	石頭?	2	SK201下層	城山後期	砂岩	新第二系
135	255	2264.4	2.41	石頭?	2	SK201下層	城山後期	砂岩	新第二系
136	191	230.9	2.65	タクモ石?	2	SK201下層	城山後期	砂岩	新第二系
137	12	652.7	2.4	石頭?	2	SD201	西文後期	砂岩	新第二系
138	185	147.9	2.68	タクモ石?	2	SD209	西文後期	砂岩	新第二系
139	216	128.5	2.39	石頭?	2	SD209	西文後期	砂岩	新第二系
140	212	165.1	2.5	タクモ石?	2	SD209	西文後期	砂岩	新第二系
141	228	225	2.42	石頭?	2	SD209	西文後期	砂岩	新第二系
142	228	113.2	2.37	石頭?	2	SD209	西文後期	砂岩	新第二系
143	39	295.2	2.66	タクモ石?	2	SD209	西文後期	砂岩	新第二系
144	285	184.2	2.28	石頭?	2	WS201	西文後期	威灰岩	
145	227	222	2.34	タクモ石?	2	SK201	西文後期	威灰岩	
146	5	257.5	2.44	石頭?	5	SK302	西文後期	砂岩	新第三系
147	28	1391.9	2.45	石頭?	6	SK303	西文後期	微波帶變質岩	
148	167	43.83	2.56	石頭?	6	SP6314	西文後期	浮石	
149	111	691.9	2.46	石頭?	1	石頭?	古生小層・西文後期	砂岩	二岐川層
150	111	1586.2	2.62	砾石?	1	石頭?	古生小層・西文後期	砂岩	古期
151	158	459	2.51	砾石?	1	SD301	馬鹿頭角閃石花崗岩	砂岩	
152	97	131.4	2.56	タクモ石?	1	深灰・西文	威灰岩	砂岩	古期
153	107	387.2	2.36	石頭?	1	深灰・西文	威灰岩	砂岩	新第二系
154	223	497.2	2.68	タクモ石?	1	西文後期	威灰岩	砂岩	新第二系
155	213	1145.5	2.39	砾石?	1	西文後期	威灰岩	砂岩	古期
156	108	327.3	2.53	石頭?	1	砾石?	威灰岩	砂岩	古期
157	125	144.3	2.43	石頭?	1	生造・威灰岩	砂岩	古期	
158	91	57.3	2.68	タクモ石?	1	生造・威灰岩	砂岩	古期	
159	412	3.35	2.65	タクモ石?	2	SD201	西文後期	砂岩	中古引層
160	101	97.1	2.42	砾石?	1	西文後期	威灰岩	砂岩	新第二系
161	281	454.7	2.56	タクモ石?	1	西文後期	威灰岩	砂岩	新第二系
162	191	2394.2	2.46	石頭?	1	西文後期	威灰岩	砂岩	新第二系

表21 石材鑑定結果 (2)

番号	R番号	重さ(g)	記号	遺物名	地区(区)	直譯名	訳語	種類	参考
103	118	43.45	2.7		1	合脚型火石	合脚型	直期	
104	211	150.4	2.79	心臓?	1	何文透明白石上	ヒン青		
105	211	203.7	2.75	石柱?	1	何文透明白石上	ヒン青		
106	211	385.5	2.6	石柱?	1	何文透明白石上	ヒン青		
107	215	584.2	3.4	石柱?	1	何文透明白石上	ヒン青		
108	227	340.4	2.1	タキモ?	1	SH1405	龍文透明白石	新第二系	
109	199	309.8	2.45	石柱?	1	SK1402	透文透明白石	新第三系	
110	199	353.6	2.53		1	SK1402	透文透明白石	新第三系	
171	94	1540.1	2.42	石柱?	1	透文透明白石	透文透明白石	古期	
172	210	293	2.63	タキモ?	1	SK1404	透文透明白石	古期	
173	287	941.2	2.69	石柱?	6	SH6201	透文透明白石	透文透明白石	
174	26	185.8	2.46	石株	6	第G1	古墳～透文	透文透明白石	古期
175	26	210.2	2.6	タキモ?	6	第G1	古墳～透文	透文透明白石	古期
176	113	3512.3	2.62	石柱?	8	SH9211	古墳～透文	大山透明白石	
177	135	188.8	2.65	石柱?	6	第F1	古墳～透文	タキモ?	
178	183	49.4	2.62	石柱?	6	第G1	古墳～透文	タキモ?	
179	130	74.6	2.63	石柱?	6	第G1	古墳～透文	透文	古期
180	141	1058.7	2.41	石男	6	第F1	古墳～透文	透文	古期
181	95	121	2.6	タキモ?	6	SH309	透文透明白石	透文透明白石	
182	165	159.6	2.7	タキモ?	6	透明白石	透明白石	透明白石	
183	328	233	2.39	石柱?	3	SK3101	半透明白石	三葉貝殻文透明白石	
184	42	174.4	2.61	タキモ?	3	SP2255	透明白石	透明白石	新第一系
185	69	58.2	2.54	タキモ?	6	SK6201	透明白石	透明白石	
186	58	60.1	2.99	石柱?	6	SPW2111-5	透明白石	透明白石	
187	42	31.1	2.34	透文	5	SH6202	透明白石	透明白石	
188	196	112.2	2.74	石柱?	3	?	透明白石	透明白石	
189	91	1574.8	2.85	石柱?	6	SK6202	透明白石	透明白石	
190	24	100.2	2.45	タキモ?	6	透明白石	透明白石	透明白石	二段打削
191	17	126.8	2.76		6	?	透明白石	透明白石	透明白石
192	246	0.54	2.83	透物透明白石	1	透物透明白石	透物透明白石	透物透明白石	
193	95	38	2.98	片岩	6	SK6201	透明白石	透明白石	
194	18	186.2	2.87		6	SH6201	透明白石	透明白石	
195	182	124.8	2.6	石株	4	?	透明白石	透明白石	透明白石
196	96	78.3	2.68		6	SH6201	透明白石	透明白石	
197	156	255.4	2.9	心臓?	6	下輪山中	透文透明白石	透文透明白石	
198	156	74.8	2.73	石株?	6	下輪山中	透文透明白石	透文透明白石	
199	115	622.8	2.83		6	SH6202	透文透明白石	透文透明白石	
200	413	1.6	2.67		2	SK2301上回	透文透明白石	透文透明白石	透第二系
201	31	496.6	2.65	タキモ?	3	透明白石・合金合	透白～透文	砂岩	古期
202	75	57	2.68	片岩?	3	SK3208	透白?	砂岩片岩	
203	79	55.7	2.56	執刀	6	透明白石	透白～透文	砂岩	古期
204	14	176.5	2.57	タキモ?	5	SH6101	中回	砂岩	古期
205	16	159.3	2.51	心臓?	6	SH6101	中回	砂岩	古木
206	211	62.8	2.59	タキモ?	4	SP4508	透明白石	透明白石	石灰岩溶接
207	45	266.1	2.42	石柱?	6	NS362/2	古坑多割	砂岩	新第三系
208	350	8.28	2.6		1	淡流	淡流	淡流	古期
209	161	326.2	1.59	心臓?	2	SX2201	透文透明白石	東北丸山透明白石	
210	249	110.7	2.93	石柱?	1	梨形	梨形	梨形	チャートドリル
211	115	693.5	2.7	タキモ? (石柱?)	1	黒石	黒石	黒石	二段打削
212	41	41.3	2.43	(石柱?)	2	SX2202	透明白石	透明白石	古期
213	472	0.27	2.26	?	2	SP2009	透明白石	透明白石	
214	248	0.19	2.6		2	SH2019	透明白石	透明白石	
215	248	0.2	2.5		2	透明白石・透文	透明白石	透明白石	
216	914	0.93	0		2	透明白石・透文	透明白石	透明白石	
217	913	5.8			2	透明白石・透文	透明白石	透明白石	透明白石

表22 石材鑑定結果 (3)



表23 出土石器の石材組成

表24 造物別石材組成

火山砂岩類や堆積岩類の鑑定に際しては、固結度が高く、堅硬緻密な岩相を示すものを古期、軟質な岩相を示すものを新第三系として識別した。古期としたものは、先新第三系と推定される石材である。

4. 審査

(1) 地質の概要

兵庫県～京都府において古い地質にあたる中古生界は、北から舞鶴帯、超丹波帯、丹波帯および頬帶に分けられており、京都府全域に広く分布する他、兵庫県の各地にも分布する。舞鶴帯は、二疊紀～三疊紀の頁岩を主体とし、はんれい岩や角閃岩などの苦鉄質岩類を主とする夜久野複合岩類を作り、超丹波帯は三疊紀～三疊紀の千枚岩質頁岩や砂岩などからなり、舞鶴帯と丹波帯の境界地帯となっている。丹波帯は、二疊紀～ジュラ紀の地質で、頁岩、砂岩、チャートを主とするⅠ型地層群および石灰岩、玄武岩（緑色岩）を主とするⅡ型地層群から構成される。頬帶は丹波帯の堆積岩類を原岩とする変成岩類および花崗岩類から構成される。

これらの中古生界は、兵庫県東部を中心として白堊後期の有馬層群、生野層群などによって不整合に覆われている他、花崗岩類や岩脈類によって各所で貫入されている。六甲山地を構成する六甲花崗岩もこの時期のものであり、山陽型の花崗岩類に属し、黒雲母花崗岩から構成されている。有馬層群、生野層群は、流紋岩質な火山噴出灰岩、溶結凝灰岩、凝灰岩などの火山碎屑岩類から主に構成され、琵琶湖周辺に分布する湖東流紋岩類、北関東の奥山・光流紋岩類に対比される地層である。有馬層群は、神戸市北部において流紋岩質岩から構成される金剛東子層群によってドーム状に貫かれる座状を示す。

新生代の地質としては、兵庫県北部～丹後半島にかけて中新統が広く分布するほか、一田盆地周辺には植物化石を多産する神戸層群が分布する。兵庫県北部～丹後半島に分布する中新統は、東北日本のグリータフに相当する地質であり、各種の火山岩、火山碎屑岩、堆積岩類から構成される。神戸層群は、白川地域、三田盆地周辺などに分布しており、砂岩、泥岩、礫岩、凝灰岩などの岩石から構成されている。三田盆地の神戸層群は、古第三系とされている。

道峰周辺地域における第四系は、更新統の礫・砂・シルトからなる大阪層群、段丘堆積物、完新統の礫・砂からなる畠状地堆積物、および、礫・砂・シルトからなる冲积层に区分されている。

(2) 石材产地

上述した地質の概略に基づき、観察を行った石器の石材产地について検討する。岩石のタイプ別に分類し、以下に述べる。

a) 深成岩類

深成岩類としては、花崗岩、黒雲母花崗岩、細粒花崗岩、花崗閃綠岩、黒雲母角閃石花崗岩、黒雲母角閃石花崗閃綠岩、細粒花崗岩およびはんれい岩が使用されている。花崗岩、黒雲母花崗岩、細粒花崗岩、花崗閃綠岩、黒雲母角閃石花崗岩、黒雲母角閃石花崗閃綠岩、細粒花崗閃綠岩などの花崗岩類は、石鍬、スリ石？、タキ石？、石皿？などの比較的大型の器種に使用されている。これらは、六甲山地を構成する六甲花崗岩に由来する石材であることは明らかであり、在地性の石材と判断される。はんれい岩は、スリ石？および石皿に使用されている。神戸市周辺におけるはんれい岩の由来としては、京都府福知山市周辺、兵庫県養父町、兵庫県佐用郡などに分布する夜久野複合岩類および大阪府の生駒山地南部に分布する頬帶深成岩類がある。原产地試料との鏡下における比較により、産地の特定ができると考えられる。

b) 半深成岩類

半深成岩類としては、アブライト、花崗閃綠斑岩およびヒン岩が使用されている。これらは、石鍬、スリ石、タキ石、石皿？などに使用されている。これらの半深成岩類は一般に岩脈として小規模に分布することが普通であり、産地を特定することは難しいが、神戸地域においては、丹波帯、有馬層群、花崗岩類を貫いて分布するとされており（藤井・笠置, 1983）、在地性の石材と理解される。

c) 火山岩類

火山岩類としては、流紋岩、カクロ石流紋岩、安山岩、無斑晶質安山岩および輝石安山岩が使用されている。これらの火山岩類は、タキ石？、スリ石？、石鍬、磁石などに使用されている。流紋岩類の近隣の分布域としては、金剛東子山、武庫川中流域などに分布する金剛東子層がある。安山岩類の分布域としては、武庫川上流域の白堊後期の有馬層群中にその分布が知られているが、きわめて小規模であり、この地質体に由来するかどうかについては不明である。また、新第三紀以降の地質に由来する岩相を示すものも散見され、遠方からの搬入品も含まれている可能性もあるだろう。

d) 火山碎屑岩類

火山碎屑岩類としては、火山噴出灰岩、流紋岩質凝灰岩、凝

灰岩（古期）、溶結凝灰岩、砂質凝灰岩および軽石が使用されている。火山疊凝灰岩、流紋岩質凝灰岩、凝灰岩（古期）および溶結凝灰岩は石神、タキキ石、石皿などに使用されている。砂質凝灰岩は石皿に、軽石は浮きに使用されている。

火山疊凝灰岩、流紋岩質凝灰岩、凝灰岩（古期）および溶結凝灰岩は、岡結度の高い火山疊岩類であり、六甲山地の北側や、武庫川流域に広く分布する有馬層群に由来する石材と考えられる。砂質凝灰岩は、軟質な特徴を有し、後述する堆積岩類と同様に白川地域や二田盆地に分布する神戸層群に由来する石材と考えられる。軽石は、基質の火山ガラスが残存するものが多く、第四紀のテフラに由来する石材と推定される。斑晶としては、苦鉄質鉱物は少なく、石英、斜長石を含んでいる。遠藤周辺の第四系には、このような大型の軽石を含む地質は知られていないため、九州地方からの漂着砾石である可能性もあり、屈折率のデータなどからの検討を要する。

e) 堆積岩類

堆積岩類としては、砂岩（古期）、砂岩（新第三系）、凝灰質砂岩、頁岩（古期）、頁岩（新第三系）、珪質頁岩（古期）、珪質頁岩（新第二系）、凝灰質頁岩およびチャートが使用されている。砂岩は、石錐、タキキ石、石皿、砥石、シリ石などとして使用されている。頁岩、凝灰質頁岩、珪質頁岩（古期）およびチャートは、石錐、タキキ石などとして使用されている。頁岩（新第三系）は、石錐として使用されている。

砂岩類および頁岩類の大部分は、白川地域や二田盆地に分布する神戸層群に由来していると考えられる。ただし、枯板岩質な頁岩およびチャートについては、丹波帯や萬葉帶に由来する石材の可能性がある。近傍の分布地域としては、六甲山南部に丹波帯の小規模な分布が知られている。石錐に使用されている珪質頁岩は、褐色を示し、珪酸分が強く、日本海側の中新統にしばしば見られる岩相を示す石材であり、日本海側地域からの搬入品と推定される。

f) 変成岩類

変成岩類としては、黒雲母片岩、緑色片岩、雲母片岩、石英片岩、千枚岩および粘板岩が使用されている。これらの変成岩類は、主に石錐として使用されている。片岩類および千枚岩は、変成鉱物が粗粒で、再結晶作用が進んだ岩相を示し、二波川帯の変成岩類に酷似する岩相と判断される。粘板岩は、丹波帯に含まれる岩石であり、丹波帯の広く分布する京都府方面に由来する可能性が考えられる。

g) 疣状岩類

疣状岩類としては、珪化頁岩、変はんれい岩および蛇紋岩が使用されている。珪化頁岩は石錐に、変はんれい岩は石錐に、蛇紋岩は玉に使用されている。珪化頁岩は、頁岩が珪化作用を被った岩石であり、岩石内部に不均質な細脈が分布している。前述の頁岩と同様に、月波帯や萬葉帶などの地質に由来しているものと推定される。変はんれい岩は、やや片状化した岩相を示しており、萬葉帶夜久野複合岩類に含まれる変はんれい岩と類似した特徴を示しており、夜久野複合岩類の分布する京都府福知山市、兵庫県養父町、兵庫県佐用郡などの地域が産地の候補として考えられる。蛇紋岩は、夜久野複合岩類に伴う岩石であり、上の変はんれい岩と同様な地域に分布する。ただし、蛇紋岩製の装飾品は、富山県、石川県などの地域においては、新潟県の青海～白馬地域のものが有名であり、このような地域のものとの比較も重要である。

h) 鉱物

鉱物としては、玉髓、碧玉、ひすいおよび滑石が使用されている。ひすいは玉に、碧玉は綠石として使用されている。

玉髓および碧玉は、 SiO_2 を主成分とするシリカ鉱物であり、これらは珪酸分を溶かし込んだ熱水が、岩石の割れ目において水分を失うことによって固結してできるものであり、流紋岩の変質部や堆積岩中などの様々な場所に、脈状などの形状で小規模に产出する。そのため、産地の特定は難しいが、中国・四国地方においては、島根県松江市玉湯町玉造、高知県黒潮町上田の口、徳島県阿南市人出井町などがシリカ鉱物の産地として有名である。

ひすいは、蛇紋岩体中に岩脈をなして産する曹長岩に伴う鉱物である。ひすいの产地としては、新潟県の青海～白馬岳地域のものが有名であるが、兵庫県養父市人出町加深、鳥取県八頭郡若桜町角谷、長崎県長崎市一重町などにも産地が知られている。滑石は、一般に蛇紋岩類に伴って产出する鉱物であることから、蛇紋岩と同様に、夜久野複合岩類などに由来するものと推定される。兵庫県下においては、兵庫県養父市八鹿町（聖長経山・朝倉鶯山）などの産地のものが有名である。

上記の鉱物類は、きわめて微細な鉱物の集合であるため、正確な判定には、X線回折試験、蛍光X線分析等による確認が必要である。特に、碧玉、ひすいなどの緑色鉱物については、類似鉱物として変質流紋岩、変質凝灰岩、蛇紋岩、ネフライト、緑色岩など様々なものがあるため、肉眼観察以外での検証が必要である。

i) その他

その他として、珪石および珪化木が使用されている。珪石は石錠、タキ石?、石頭?として、珪化木はタキ石?として使用されている。珪石は、丹波帯のII型地層群に伴う珪石鉱床に由来する石材と推定される。珪石鉱床は緑色岩類に作って山現

し、海底火山活動によってシリカが沈殿したものと考えられている(清水,1987)。珪化木は、植物化石の多産する神戸層群に由来することは明らかであり、白川地域や三田地域より持ち込まれたものと推定される。

引用文献

- 藤田 和夫・笠間 太郎,1983,地域地質研究報告(5万分の1地図同様) 神戸地域の地質,地質調査所,115p.
- 林 昭一,1991,日本産木材 順微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997a,日本産広葉樹材の解剖学的記載III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1997b,美乃利遺跡から出土した木製品の樹種,「兵庫県文化財調査報告第165号」兵庫県加古川市美乃利遺跡 本文編-
一一級河川別府川河川改良工事に伴う発掘調査報告書-1,兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所,339-344.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 中村 弘,2001,兵庫県における樹種同定資料について,兵庫県埋蔵文化財研究紀要,創刊号,兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所,1
03-121.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東
隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修),海賀社,70p.
- 鳥地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東 隆夫・藤井
智之・佐伯 浩(日本語版監修),海賀社,122p.
- 清水 大吉郎,1987,丹波帯,「日本の地質6 近畿地方」,共立出版,25.

平成18年度の保存科学調査・作業の概要

平成18年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

遺構の保存科学

遺構の切り取り

北青木遺跡

北青木遺跡はT.P.=1.5m前後の浜堤砂堆上に展開する弥生時代の遺跡である。平成18年度の5次調査では、1基の銅鐸埋納遺構が検出され、詳細な埋納状況の検討を行なう必要が生じた。そのためには遺物・土壤が周辺環境から受けるストレスの少ない、室内での調査が望ましいと判断されたため、遺構を周囲土壤ごと切り取り運搬することになった。

遺構を切り取る範囲については、可能な限り大きく設定することが重要であった。しかし銅鐸の出土した調査区は幅が約3mと狭く、また電柱が近接していたため、切り取り周囲の作業スペース確保が困難であった。作業工程は、①切り取る範囲の周囲土壤を掘り下げ、②遺構下部土壤にトンネルを開けて木材と硬質発泡ウレタンフォーム（日清紡：エアライトフォーム）を充填し地面から切り離す。③周囲を木材で囲み、ウレタンフォームで梱包する。その後、クレーンで調査区より吊り出し、トラックに積み込んで埋蔵文化財センターに移送した。



fig. 308 遺構切り取り作業（北青木遺跡）



fig. 309 発泡ウレタンフォームによる梱包



fig. 310 吊り上げ作業



fig. 311 室内での詳細調査

埋蔵文化財センターにて埋納状況の詳細な調査を実施した。その結果、土坑埋土の差から3度にわたる埋納行為があり、銅鐸本体が第3次埋納坑に納められていたことが確認された。さらに第1次埋納坑の底からは同一個体と考えられる銅鐸の紐の破片が出上したものも、これを傍証する結果となった。調査中には、埋納の各段階の形状について3Dレーザー計測を実施し、記録保存を行なった。調査完了後、遺構はシリコーン系合成樹脂（信越：KE-12）を使用して表面および断面土層の土壤転写を行なった。これを使用し、埋納状況を再現した。



fig. 312 北青木銅鐸埋納遺構表面土壤剥ぎ取り作業



fig. 313 FRPによる裏打ち



fig. 314 土壌強化剤(OH100)散布作業

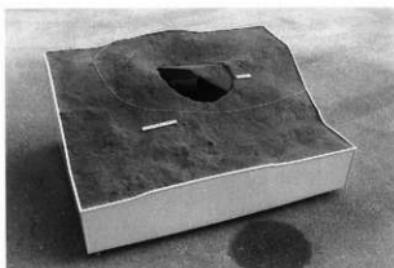


fig. 315 埋納遺構復元状況

遺物の保存科学

金属製品

北青木遺跡

北青木遺跡で出土した銅鐸について、保存科学的調査および処置を実施した。まず、表面状態について肉眼および実体顕微鏡を用いて観察した。またX線透過観察により、鋳造時の繋の分布や鉄掛など製作技法の調査、および劣化構造の調査を実施した。目視でも観察できるように、鋳造欠陥について鉄掛など補修はなされていないものと推測されたが、X線透過によってもやはり補修の痕跡は観察されなかった。また、劣化の状況は、紐や鍔など薄い部分について劣化が進行していることが判明した。

以上の結果をもとに、保存科学的な処置を施すこととなった。表面には土砂以外の付着物は確認されなかったため、基本的に土砂を取り除くのみとし、鍔は保存上有害なもののみについてクリーニングを実施した。クリーニングは筆、竹串等を用い、エタノール

洗浄を行なった。クリーニング後はベンゾトリアゾール2%アルコール溶液に浸漬し、防錆処置とした。後、アクリル系合成樹脂(バラロイド:B-72)溶液中に浸漬し強化措置とした。処置完了後は、恒温(21.5℃) 恒湿(50%RH)の収蔵庫にて保管している。

また、記録の保存および経年劣化の検証のため、3次元デジタルアーカイブの取得を実施した。計測機器には非接触型の3Dレーザー計測装置を用い、内外面の形状計測を行なっている。

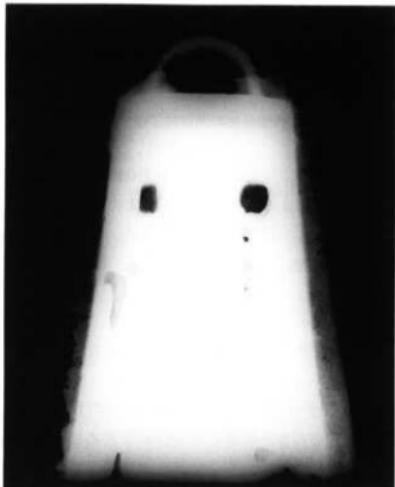


fig. 316 X線透過画像（北青木銅鐸）

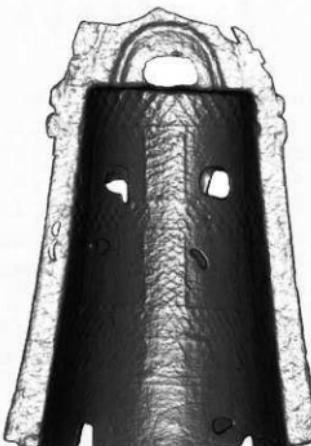


fig. 317 3Dイメージ画像（同左）

八幡神社8号墳 北区道場町塙田に所在する八幡神社古墳群では、平成17～18年にかけて八幡神社8号墳および同地域所在の前期古墳である塙田北山東古墳の2基について発掘調査が行なわれ、各種副葬品が出土した。これらのうち平成18年度の処理対象となったのは八幡神社8号墳出土の金属製品179点（鉄製品165点・銅製品他14点）である。内訳は鉄刀、鉄製馬具、釘釣、金銅装飾金具、鉄地銅板張の貝製飾金具、耳環などである。

保存科学的処置に際しては、顕微鏡による詳細な表面観察、X線透過観察等を行ない、付着物の確認や技法の推定、劣化構造の調査を実施した。その上で、表面に付着した土砂やサビを精密グラインダー等を用い、物理的に除去した。クリーニング後は劣化防止措置として脱塩・防錆処置を行なった。鉄製品については、水酸化リチウム0.07%アルコール溶液中に常圧で約3か月間浸漬して脱塩処置とし、青銅製品はベンゾトリアゾール2%アルコール溶液を減圧含浸して防錆処置とした。その後、構造強化のために、鉄製品はアクリルエマルジョン樹脂(バラロイド:NAD-10)、銅製品はバラロイドB-72をそれぞれ減圧含浸している。樹脂含浸強化後はハイバリアフィルムチューブに金属酸化防止剤(三菱ガス化学:RP剤)と共に封入し、恒温恒湿の収蔵庫にて保管している。



fig. 318 鉄製品保存処理前（八幡神社 8号墳）

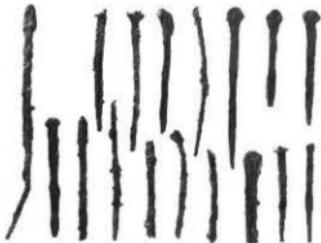


fig. 319 同左鉄製品保存処理完了後

保存科学的調査 八幡神社 8号墳出土の耳環については、独) 国立文化財機構奈良文化財研究所保存修復科学研究所のご協力を得、蛍光X線分析装置による元素分析を実施した。耳環は全部で10点出土しているが、表面観察において4類型が存在することを認め、まずはこれらの典型的なものについて定性分析を実施したので、結果を以下に記す。

〔使用機器：EDAX社製 EAGLEⅢ
測定条件：管電圧40keV 電流30μA マスク径112μm 大気圧〕

耳環1では環体の表面に金色を呈する層が認められ、これらが端部で折り込まれている様子が観察の結果認められた。蛍光X線分析法による調査の結果、環体からは銅(Cu)が、金色の層からは金(Au)と銀(Ag)が検出された。通常、鍍金には水銀(Hg)が使用されるが、ここでは検出されなかった。水銀の存在の有無を決定付けるためには測定箇所をさらに増やすことが必要であるが、今回の分析結果からは、ほぼ純銅の環体に金銀合金で製作された箔が貼られている可能性が考えられる。

耳環2についても耳環1同様に環体表面に金色を呈する層が観察された。環体からはほぼ銅のみが検出されたことから、環体は純銅から成っているものと推察される。金色の層からは金と銅が検出された。ここで検出された銅は環体に由来すると考えられる。これらの結果から、純銅の環体に金箔が貼られたものの可能性が示唆された。

耳環3は表面の遺存状態が悪いものの、環体の内側面に金色を呈する箇所が部分的に残存している。調査の結果、環体からは銅と微量のヒ素(As)が検出された。また金色を呈する箇所からは金銀および水銀が検出された。以上の結果から環体は微量のヒ素を含む銅と推察される。しかし上記2点とは異なり、環体に施された装飾部の構造が明確には観察されなかったため、金、銀および水銀を用いてどのような装飾がなされていたかについては未詳である。

耳環4については観察の結果、環体表面に金色を呈する層は確認されなかった。実体顕微鏡で白色粒子が散在することが確認できた部分については調査の結果、銅と銀が検出された。銅は環体に由来するものと考えられる。銀については、銅との強度比が僅かな差異はあるものの環体と表面の白色粒子の両方から検出された。先述のとおり、表面に明確な装飾が確認されてはいないことから、銀は環体に由来するものであるのか、あるいは僅かに残存した環体表面の装飾に由来するものであるのか、今回の調査では明らかにすることはできなかった。



fig. 320 耳環1

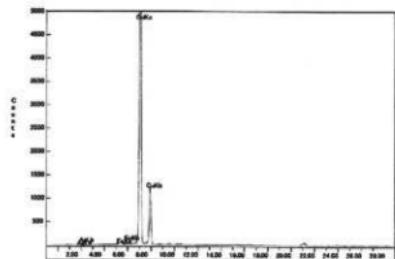


fig. 322 耳環1 環体の蛍光X線スペクトル(1-1)



fig. 321 同左 端部処理状況



fig. 324 耳環2

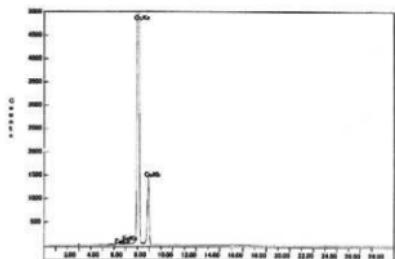


fig. 326 耳環2 環体の蛍光X線スペクトル(2-1)



fig. 325 同左 表面状況

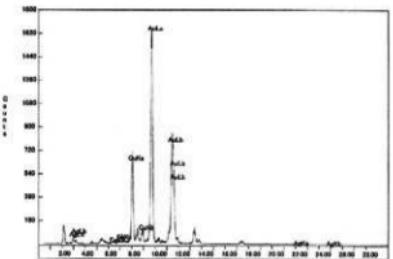


fig. 327 耳環2 環体の蛍光X線スペクトル(2-2)



fig. 328 耳環3

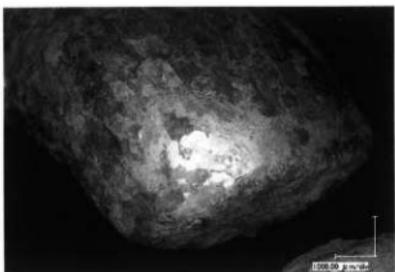


fig. 329 同左 表面残存状況

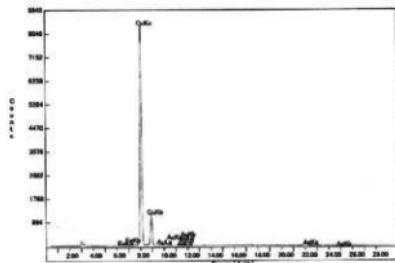


fig. 330 耳環3 環体の蛍光X線スペクトル(3-1)

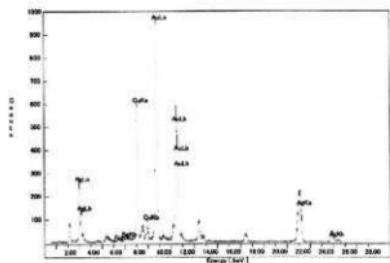


fig. 331 耳環3 金色部分の蛍光X線スペクトル(3-2)



fig. 332 耳環4

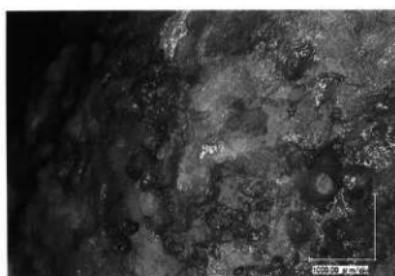


fig. 333 同左 白色粒子残存状況

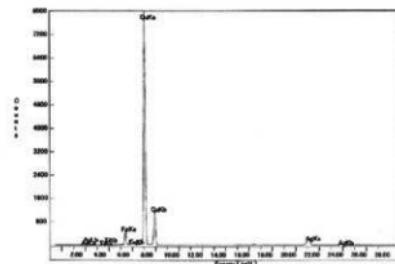


fig. 334 耳環4 環体の蛍光X線スペクトル(4-1)

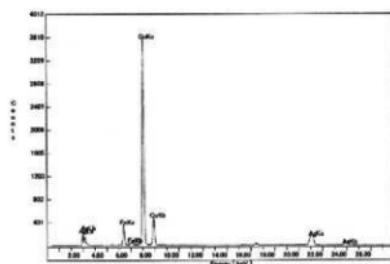


fig. 335 耳環4 白色部分の蛍光X線スペクトル(4-2)

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
岡本北	6	鉄製品	1
住吉宮町	43	鉄製品	4
御影郷古酒蔵群	4	銅錢、煙管、鉄釘	18
北青木	5	銅鐸、鉄釘	7
郡家	82	銅製品、鉄製品	4
大石東	4	銅錢	1
西郷古酒蔵群	4	銅錢、煙管、鉄製品	46
岩屋北町	2	銅錢	3
上沢	54	枕状鉄斧	1
花隈城	4	鉄製品	1
花隈城向城	1	鉱滓、鉄製品	30
兵庫津	41	鉱滓	4
兵庫津	42	銅錢、煙管、鉄鎌	157
兵庫津	43	銅錢、鉄釘、鉱滓	4
兵庫津	44	銅製龍文飾金貝、釘	102
兵庫津	試掘	鉄釘	1
楠・荒田町	38	鉄製品	2
野瀬		鉄製品	1
中	34	鉄製品	1
中	36	鉄釘	3
五番町	12	鉄釘	3
人橋町	2-2	銅錢、鉄製品	4
長田野田	3	鉱滓	2
長田野田	3-2	鉄釘、鉱滓	7
二葉町	20-1	鉄釘	8
二葉町	20-2	鉄釘	2
二葉町	20-5	刀子、鉄釘、鉱滓	7
御藏	58	鉱滓	1
御藏	59	銅製巡方、和銅開坏	10
御藏	60	鉱滓	1
御藏	61	鉄製品	1
水笠	28	銅錢、煙管、鉄釘	8
大川町	13	鉄製品	1
玉津田中	32	煙管	1
山谷	35	鉄釘、鉱滓	3
太山寺		鉄釘	1

計451点

表25. 平成18年度出土金属製品

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
深江北町遺跡	10	柱材	3
深江北町遺跡	11	板材、杭	13
上沢遺跡	54	杭、土木材	42
中	33	柱材	1
中	36	柱材	2
御藏	58	柱材	3
御藏	63	柱材	5
二葉町	20-1	井戸側、木槌、漆椀	159
人橋町	2-2	曲物、加工材	4
福中城	3	井戸側(桶)	2

計230点

表26. 平成18年度出土木製品

遺跡名	次数	鉛同位体比分析	大型植物遺体
白水瓢塚古墳	10	1点(青銅鏡)	
塙田北山東古墳	1	1点(青銅鏡)	
北青木	5	1点(銅鐸)	
西郷古酒蔵群	4		8ブロック

表27. 平成18年度自然科学分析委託

平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成21年3月 印刷

平成21年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印刷 丸昌印刷工業株式会社

神戸市長田区上池田1丁目3番38号

TEL 078(643)3900

神戸市広報印刷物登録 平成20年度 第307号 (広報印刷物規格 A-6類)